

君命、奈何ともすべからず、尙忠、乃ち、健忘、重職に堪へがたしとの旨を以て、關白、内覽の兩辭表を、捧呈すれば、越えて四日、主上、先づ、其内覽を免じ、更に、忠熙をして、これに代らしめ給ふ。

關白の更迭は、幕府の爲めには、一大打撃なり、尙忠の職に在る間は、朝廷の意見を押へて、幕府の言議を貫くと雖も、若し、其職を去るに於ては、忽ち、反對の結果を來さん。

或は、井伊掃部頭直弼の大老を罷めて、越前中將慶永を擧げらるゝこともあらん、或は、宰相家茂を、西城に留めて、一橋刑部卿慶喜を、軍職に任ぜらるゝことも、亦、之れなきを必せず。

事、此に至らば、寔に、由々しき一大事なり、京都所司代酒井若狹守忠義、傳奏より、關白辭職の報を得て、迅雷、耳を掩ふに遑あらざるの感あり、其翌五日、急使を發して、此旨を、目下、上京中途に在る間部下總守詮勝の許に報ず。詮勝、中仙道を進みて、八日、信州長久保に到り、忠義の報告に接して、亦、大に驚き、

『如何にもして、此儀を、喰ひ止めずては、叶ふべからず』

と思惟し、行く／＼、方策を案じて、終に、二策を得たり、第一策は、

『關白不快の儀、是れまで、更に、承り及ばず、急々、病氣と稱して、辭職を乞はるゝこと、甚だ不審なり、其事由を知悉せざるに於ては、何とも承答仕りがたし』と返答するに在り、第二策は、

『先將軍より、詮勝に對して、九條殿には云々、兩傳奏へは、斯々との旨を命ぜられ、尙、當將軍、及び後見職田安殿よりも、亦、夫々仰せ含めらるゝ所、之あり、他人に對しては、何等申述ぶるに由なし、因りて、當分の間、従前通り、留職せしめられたき旨を、答報すべし』と言ふに在り、諏訪驛に著するに及び、勿々、筆を走らせ、其旨を、直弼に報ず。

直弼も、亦、京報に接して、驚愕、措く所を知らず、是れ亦、飽くまでも阻止するに決意し、詮勝の第二策と同一の旨を、忠義に、訓令する所あり。

若し、此策にして、成らずんば、更に、詮勝の第一策を施すに決し、詮勝に、返翰を送りて、火中に、突入するの決意を以て、奮闘せんことを促がす。

幕府の恐慌、如何ばかりぞ。

101 間部閣老の上京(下)

水戸は、何角につけて、嫌疑の源泉なり、此度、關白の更迭も、亦、水戸の手入れの結果なりと思へば、井伊掃部頭直弼も、前中納言齊昭を、疾視し、間部下總守詮勝も、亦、之れを蛇蝎視すること、愈々甚だし。

京都の公卿、及び浪士の處置に就ては、詮勝の胸中、既に成算あれども、水戸の處分に就ては、未だ何等の方案をも有せず、唯、京都を搜索すれば、必ず、種々の手掛りを得べしと、思惟せしに過ぎず。

偶々京都所司代酒井若狹守忠義より、再度の報告に接して、『關白更迭の結果として、水老の謹慎を免じ、越印を、大老に擧げらるべしとの勅諭、相下るやの風聞あり』との事を知りて、詮勝、益々大に驚き、

『天下の大事には、替へがたし、此上は、水戸の謹慎御免と稱して、登城せしめ、有無を言はず、殿中に於て、召捕るか、或は、斬殺するの外なし』

とまで、思ひ詰めしも、這は、餘りに、穩當の處置にあらずと思ひ返し、更に、

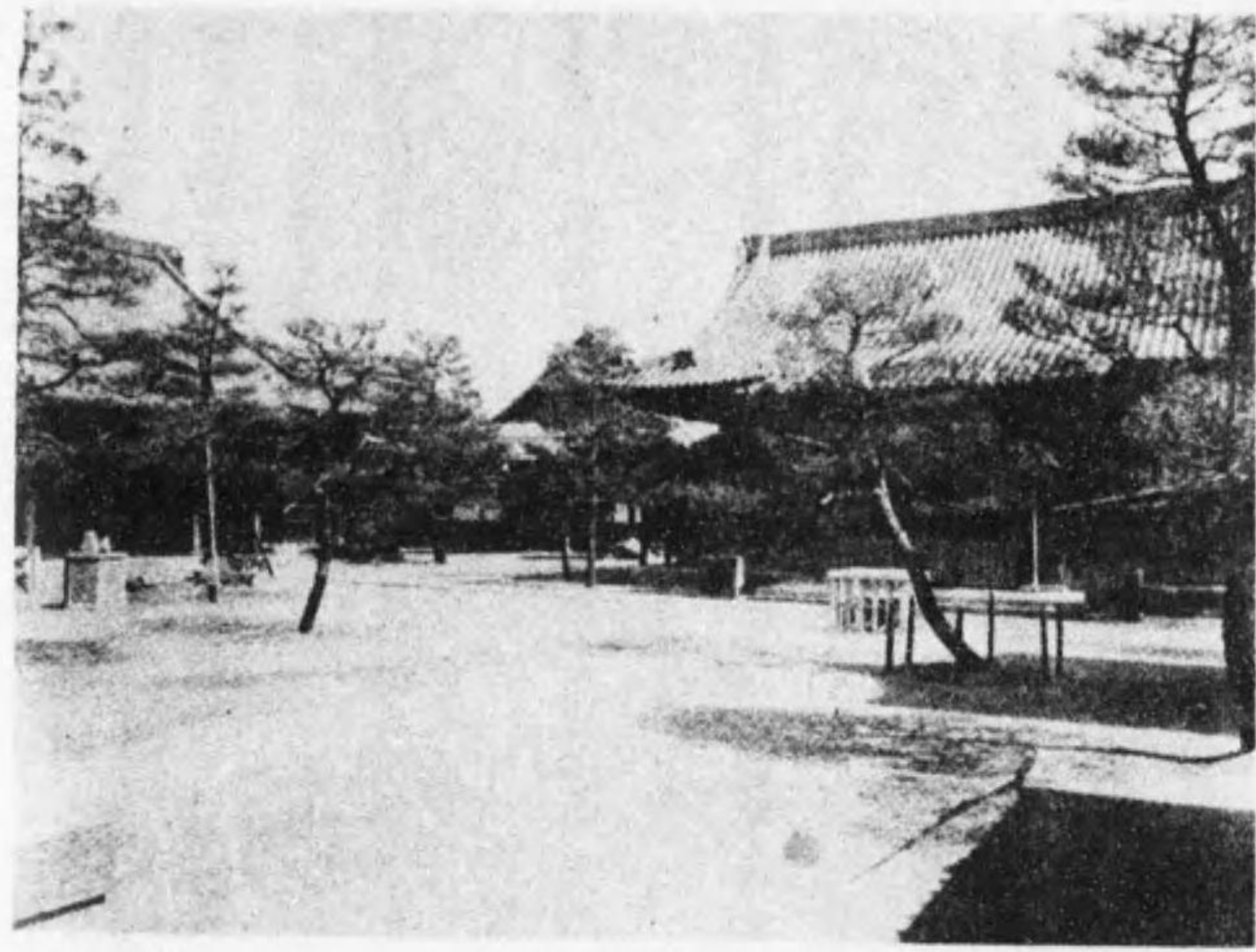
『水老は、駒込の邸に、蟄居するとは言へ、水戸の臣下、其左右に侍すればこそ、京都との交通も、自由なるなれ、寧ろ、水戸の家臣を、夙く、逐ひ卻け、公儀の吏員を以て、嚴しく、警固すれば、外間との通路、一切、斷絶せられて、復た、奈何ともする能はざるべし』

と案じ付きしも、斯かる處分を施すに就て、兎角に、未だ適當の口實を得ず、上京の途次も、兎やせん、角やせんと思案に、思案を重ねて、計らずも、一策をこそ、思ひ付きけれ、其は、前將軍家定毒弑の嫌疑を以て、典醫岡樸仙院を、詰問せんとの手段、是れなり。

先に、家定の病に罹るや、樸仙院拜診の上にて、藥を進めしに、俄然、病勢、激變して、間もなく、薨去の不幸を見るに至れり。

『櫻仙院は、豫て水戸方なりしことは、人の知るところ、或は、水老の密託に由りて、將軍家を毒害し奉つりたる妙満寺

京都市中京區寺町通二條下ル處に在り間部詮勝の旅館に充てし處



やも、知るべからず、他の御醫師にも、謀らずして、自儘に、御藥を差上げたるの一事、疑はゞ、疑はれざるにもあらす。若し、是等の廉を

以て、櫻仙院を吟味すれば、或は、意外なる事實を、發見せんも、計るべからず。此賊、白狀すれば、是れぞ、屈竟の手掛り、水老の如きは、差詰め、切腹を命ぜらるるも、然るべし』

とは、實に、詮勝の案出せるところ、十三日、美濃合渡に達したる時、自ら書翰を認めて、此旨を、直弼に申贈り、且、其末文に、

『私儀、以ての外に、丈夫に御座候、此模様にては、惡謀の者共、一呑みに仕つるべくと、勇氣十分に御座候』との數句を記す、其如何に、意氣勃々たるかを見るべし。

翌十四日、醒ヶ井驛に到りて宿す、直弼の家臣長野主膳、小川大介と變名して、來り謁し、具さに、京都の情況を報ずる所あり、詮勝の意氣、是より益々堅し。

十六日、江州大津の驛に達し、京都町奉行小笠原長門守長常を招きて、志士捕縛に關する協議を凝らし、其翌十七日、京都に入りて、妙満寺に館す。

此時、京都に於ける志士斷壓の舉は、早や、既に、斷行されつゝあり、戊午の大獄、愈々此に始まる。

1011 志士の逮捕(上)

京都の彈壓は、愈々始まれり。

先に、密勅を、水戸に降下せられてより、京都町奉行小笠原長門守長常、其經路を突留めんと欲して、百方、志士の舉動を偵ふ。

砂村六二と稱するものあり、木屋町の近藤茂左衛門方に寄寓して、頻に公卿縉紳の門に出入す。

偵吏、其振舞を怪みて、探偵の歩を進むれば、砂村六二とは、世を忍ぶ假りの名、誠は、江戸向島に住する山本貞一郎と呼べるもの、和歌を善くし、筆蹟に巧みなるを以て、水戸志士の間に、名を知られ、其密囑を受けて、上洛せるものと聞き、

『扱こそ、怪き人物なれ』

と目を付け、益々其動靜を探れば、其實兄茂左衛門の紹介に依りて、宇喜多一憲父子と、交際を結び、其斡旋を以て、尾水越の三卿を赦免せん事、越前中將慶永を以て、將軍家の後見職となさん事を、近衛、三條、二條、正親町三條の

諸家に、運動せりとの形跡あり。

『左らば、先づ、這奴を捕へん、陰謀の端緒、必ず、發見せられん』

と思へる折しも、貞一郎、圖らずも、疾を得て、客地の鬼となる、偵吏、殆ど、掌中の珠を失するの想あり。

既にして、貞一郎は、自ら毒を仰ぎて死せりとの風聞あり。

『此上は、兄の茂左衛門を召捕りて、糺明せん、必定、手掛りあるべし』

と思ひて、密に、其舉動を見張る、會々九月三日、一人の飛脚、二個の澁紙包を携へて、茂左衛門の宅より、出で來る、偵吏、早くも、目を注ぎ、飛脚を引致して、其身體を、検査すれば、果して、懷中より、一通の書狀、現はれ出づ、これぞ、茂左衛門より、貞一郎の妻子に贈るもの、所々に、隱語を挟みて、文意、明瞭せざる所ある丈け、嫌疑は、愈々深きを加ふ。

越えて五日、終に、茂左衛門をも、逮捕し、其家宅を搜索して、貞一郎の手書、數通を押収す、志士と、公卿と、交通の經路、是に由りて、漸く、判明し來る。

尋で、志士の首領、梅田源次郎より、京都所司代酒井若狹守忠義の家臣坪井孫兵衛に贈れる書翰、長野主膳の手に落つ、是れ、正しく、舊主忠義の京都に赴任するに方り、其罪を朝廷に獲て、不忠不義の名を取らんことを悲み、舊臣の情誼、黙して止むに忍びず、切に其去就を誤まらざらんことを説きたるもの、尙、外に、

『七日、主上、勅書を以て、列卿を召され候、九條左府公、鷹司右府公、近衛左府公、三條内府公、中山公、其外、議奏、傳奏御掛の諸卿、残らず、御参内の處、主上、出御にて、教慮の趣、仰出され候處、何れも、御敬伏にて、廟議一決仕り候、九條公は、兼て彦根侯と御同意にて、關東へ御内通の處、昨日、廟堂にて、一言も御出し成され候事、出來申さず候、殊に御畏縮成され候由、依つて、勅命宣旨の御使、今八日早朝、早打にて出發に候、御使は、江戸老中方の手をはなれ、尾張公、水戸公へ、宣旨を下され候、此度、何の仔細にて、尾張公、水老公、越前侯を押籠め候や、言上仕る可くとの事、勅令に違ひ、條約調印取とのへ、天下を誤り候姦者の役人共を、尾

張前中納言、當攝津守、水戸前中納言、當中納言、其外、同志の連枝、有志の諸侯へ、勅令を傳へ、速かに右の者を相除くべしとの事、尾水兩家より、天下有志の諸侯存寄りを、速に、朝廷へ、言上仕るべき旨、尾水御兩家の御父子より、申傳ふべしとの事、右三ヶ條に候、實に、古今獨歩の御英斷、恐悅奉つり候、右は、相違之なく候、今朝、栗田様より、伊丹藏人、御使にて、梅田源次郎へ、急に、知らせよとの御沙汰にて、有がたく存じ奉つり候、五六日の間に、江戸は勿論、天下不日に、大震動致すべく候、當月三四日に、尾張より、二千餘人、二手にわかれ、出發候て、中納言様を、御國へ迎へ歸り候覺悟の由、御歸國候へば、直に、御上京と申す沙汰に付、元より、當所へ、先日より、大導寺始め、歴々三四人、二百人許りにて、参り居候、御國太守公は、兼て彦根侯とは、無二の御合體に候へば、如何にも、甚だ御危き事と、恐察奉つり候、何卒、早々、深栖大夫君を始め、御一同に、御覺悟、御定め成され候様、存じ奉り候云々。

との一通あり、主膳、讀み見て、其計畫の容易ならざるに、

驚きつゝも、又、

『先づ、此者を、糺明すれば、一切の事情も、明瞭し、祕密の謀略も、暴露せん』

と思へば、宛がら、鬼首を得たらんばかりに、打ち悦ぶ。

1011 志士の逮捕(中)

今は、寛假すべきにあらず、主膳、直に源次郎を捕査せんことを、所司代酒井若狹守忠義に促がす。

時に、九條左大臣尙忠、關白の職を退きて、近衛左大臣忠熙、此れに代るに決す、忠義、

『源次郎は、近衛左府殿を始め、諸公卿、縉紳の間に、信用あり、若し、之れを逮捕して、益々京都の反抗を激成せんか、公儀の御爲め、甚だ然るべからず』

と思へば、躊躇して、敢て従はず、主膳、乃ち九月八日、伏見町奉行内藤豊後守正繩の手を以て、源次郎を逮捕し、且、其家宅の搜索を行ふ。

時に、其妻、病に罹りて、蓐中に在り、源次郎、乃ち慨然として、

妻臥病牀兒泣飢。挺身直欲掃戎夷。今朝死別與生別。唯有皇天后土知。

との一詩を、口吟しつゝ、從容、縛に就く。

此日、儒者、池内大學も、引致せられ、山本楨太郎も、亦、捕縛せられて、志士逮捕の火の手は、益々八方に擴がり、其餘炎、更に、水戸にも、移らんとするの勢あり。

今は、誠に、焦眉の急なり、復た、對岸の火災視すべき時にあらず、頼三樹三郎、薩摩の士西郷吉兵衛等、如何にもして、之れを喰ひ止めんと欲し、水戸の留守居鶴飼吉左衛門父子と、密議の結果、

『勅諭の回示、尾水越三卿の赦免の綸旨を、關東に、降されん事』

を近衛左大臣忠熙に請ふに決し、吉左衛門の子幸吉を以て、鷹司家の諸大夫小林民部權大輔に、其斡旋を求め、尙、近衛家の老女村岡を経て、忠熙に、内願する所あり。

左れども、長鞭、馬腹に及ばず、時機、急迫の今日、斯かる手段は、間緩るし、寧ろ

『好以寶刀加彼頭』

の一句を、斷行するに若かずとは、小林民部權大輔の其れとなく諷するところ、此策、固より人々の意中に在り、誰か、敢て躊躇するものぞ。

『然らば東西、呼應して、斬奸の舉を斷行し、同時に、薩摩の兵を以て、京都を守護せん』

と決定し、十七日、幸吉より、此旨を、江戸の安島帶刀の許に報ず。

近衛家老女村岡



同志の一人に、奥村俊平なるものあり、志士逮捕の事、起るに及んで、忽ち、頭へ上り、節を變じて、幕吏に、密告する所あ

り。

是に於て、志士の内情は、盡く、暴露し、源次郎、及び梁川星巖の二人、浪士の首領として、經畫せること、鶴飼吉左衛門の父子、公卿と、水戸との連鎖たること、亦、判明し來る、時に、閣老間部下總守詮勝も、既に、大津より、京都に入りて、幕吏の方針も、益々強硬となれるところ。

『左らば、先づ、彼奴等を、召捕るべし』

與力、同心の活躍、俄に加はり來り、先づ、星巖の宅に出張して、搜索を行ふ、時に、星巖は、暴瀉に罹りて、死去せしを以て、更に、其妻紅蘭を、引致し去る。

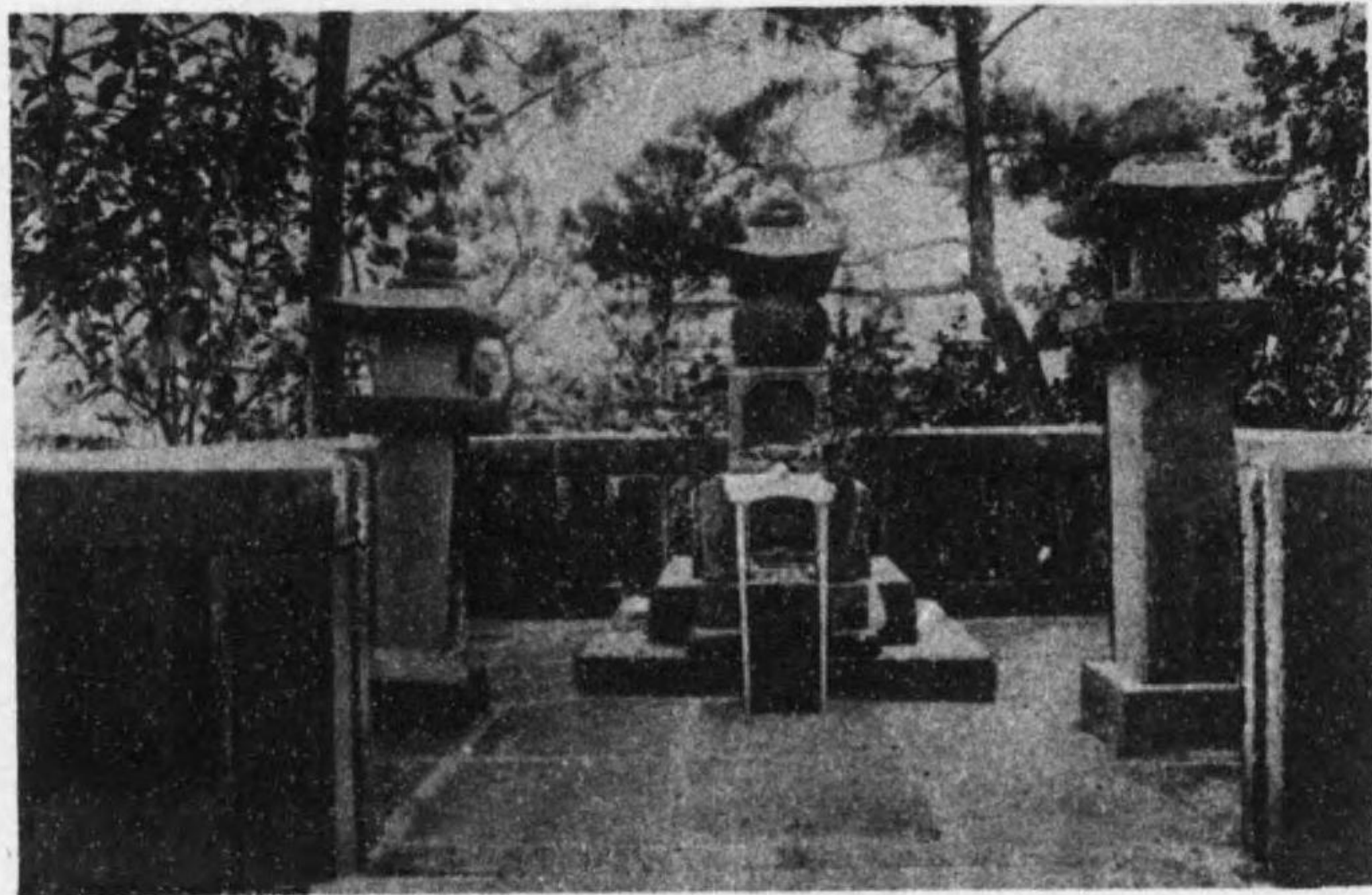
十八日には、鶴飼幸吉を召喚して、其儘、留置し、續いて、其父吉左衛門をも召喚して、獄に投ず。

翌十九日、幸吉より、安島帶刀に贈れる密書、亦、江州草津に於て、押收せられ、井伊大老の暗殺、薩兵の京都守護の密計、盡く、露顯するに至れり。

『左らば、諸大夫と言はず、浪士と言はず、片端より、召捕るべし、容赦は無用』

との命の下に、諸大夫、青侍には、青蓮院宮の伊丹藏人、

山田勘解由、有栖川宮の飯田左馬、藤井民部權大輔、鷹司月照の墓
鹿兒島市南林寺町南州寺境内に在り其投水したるは肥薩線龍ヶ水驛の沖合なり



家の小林民部權大輔、高橋兵部權大輔、金田伊織、三國大學、一條家の入江雅樂頭、若松木工頭、三條家の丹羽豊前守、森寺因幡守、森寺若狹守、富田織部、久我家の春日讃岐守、西園寺家の藤井但馬守、官人には、御倉舎人の山

科出雲守、女性には、近衛家の老女村岡、僧侶には、六物空萬、成就院信海、處士には、頼三樹三郎、宇喜多一蕙、宇喜多松庵、其他、續々逮捕せらるゝもの、二十餘名、京都の志士、一網打盡せられて、六角の獄、爲めに填闐す。西郷吉兵衛は、成就院月照と與に、京都を脱して、西走し、相抱きて、薩海に投ず、月照は死し、吉兵衛は、助かりて、大島に流さる。

一〇四 志士の逮捕(下)

京都に荒れすさみたる志士逮捕の火の手は、更に、江戸にも飛ぶ。

江戸の志士飯泉喜内、先の下田の陣營を窺ひ、又露人の滞在せし芝の圓福寺を窺へることあり、事、幕吏の聞く所となりて、九月十八日、恰も、鶴飼吉左衛門の京都に於て捕はれたると同日、喜内、亦、江戸に捕はれて、其家宅を、搜索せらる。

之れを手始めとして、山本貞一郎の妻豊女も、捕はれ、續いて、二十三日の夜には、日下部伊三次も、捕はれ、越え

て十月四日には、藤森恭助も、亦、捕はる。

志士の面々は、震駭せり、中にも、勝野豊作は、禍の我身に及ばんことを恐れて、何處にか、姿を潜む。

薩摩の士有馬新七は、西郷吉兵衛の同志にして、先に、俱に井伊大老の暗殺を密謀せるもの、此時、三條前内大臣實萬より、土州侯山内土佐守豊信に傳達すべき勅諭の寫を奉持して、來つて、江戸に入り、伊三次の逮捕せられしを聞くに及びて、憤慨の情、禁ずること能はず、

『此上は、豫ての計略を、斷行するの外あるべからず』と決意し、堀忠左衛門と謀りて、越前の士橋本左内、三岡石二郎、長州の士山縣半藏、土州の士橋詰明平等と、密會し、

『我れ、彼れを斃さずんば、彼れ、我れを倒さんとは、實にも、今日の有様ならずや、我等、若し躊躇遷延せば、天下正義の士は、盡く、奸黨の爲めに、刈除せらるべし、特に、間閣間部閣老の事Ⅱの奸謀、成就して、正義の公卿は、挫かれ、將軍の宣下、亦、降るに於ては、天下の事、復た奈何ともすること能はざるべし、此上は、天

に代りて、姦魁井伊を斃さんに若かず、十月朔日、其登城の途中を要し、前後左右より、竝び起つて、之れを撃たば、其首級を獲んこと、何の難きことあらん、此機に乗じて、大義を、天下に伸べ、義氣を、四方に鼓舞せば、我事必ず成るべし、但だ、京都には、間閣あり、若州Ⅱ酒井忠義の事Ⅱありて、之れを助くるの國、亦、有らん、速に、京都に馳せ登りて、朝廷を守護せずんば、大事、盡く、水泡に歸せん、我等は、大老を屠るべし、越前、長州の人々は、京都を護り給へ』

『先づ、京都守護の策を立て、然る後、姦魁誅除の事を行ふべし、先づ、姦魁誅除の事を行は、京都守護の策を施すに由なからん』

との議ありて、姑く、十月朔日の決行を、延期するに決す。是に於て、新七、忠左衛門の二人は、筑前侯黒田美濃守齊傳、因州侯池田相模守慶徳等を説く所あらんと欲し、各、途を異にして、西上し、左内、亦、越前の兵を發して、間

燎原の勢、何處にまでか及ぶべき。

一〇五 關白の復職

部下總守詮勝の居城越前鯖江を屠り、更に、井伊掃部頭直弼の居城彦根を火し、勢に乗じて、進んで、京都を鎮護せんとの策を畫す。

其事、未だ行はれず、十一月二十三日、左内、亦、幕吏の爲めに、捕はる。

京都の飛火、江戸の自火、一時に、竝び發するの觀あり、

彦根城

近江國犬上郡彦根町の彦根山に在り井伊氏の居城なり志士の之れを憐れんと企てしもの



江戸城(上)

既に、諸浪士を捕へ、諸大夫をも捕ふ、事、多く、公卿、縉紳に連なる、如何に、此問題を處置すべきか。京都所司代酒井若狹守忠義は、曾て、久しく、京都に在りて、諸公卿と相識る、故に、此事件の爲めに、累を諸公卿に及ぼすに忍びず、寧ろ、之れを不問に附し去り、其交換問題として、條約調印事件の勅許を得んと欲するの意あり。九月二十五日、公用人三浦七兵衛を、三條前内大臣實萬の邸に遣はして、條約調印の事情を、辯疏せしめ、更に、『近來、儒生、浮浪の徒、國家多事の秋に乗じて、民心を惑はし、國亂を醸さんことを計り、諸藩陪臣の徒、亦、口を當春の勅諭に藉りて、實は、自己の慾望を貪らんとするもの、少なからず、是れ、神州の大患にして、外夷の補助とも申すべき歟、堂上の方々にして、是れと關係ある人、亦、少からず、若し、速に、御改心あるに於ては、國家の大幸、此れに過ぎず、假令、關東より、切々、

申來ると雖も、堂上の方々に對しては、一言の尋問にも及ばずして、無事に、落著を告げんと存するにて候、然らざるに於ては、永く、關東の命を、伏せ置くべからず、止むなく、其處置に任すの外候はず』

と告げて、反省を促がさしむる所あり、續いて、自ら九條左大臣尙忠を訪うて、

『堂上の方々、速かに、前非を悔いて、不良の家臣を斥け、場合に依りては、退隱、落飾を請うて、官武一和の實を御舉げ候へ、今は、浪士の自由によりて、連坐の人名も、明白に候、此際、躊躇せられんこと、決して、得策には候はず』

と戒告する所あり、所謂、改心とは、股肱の臣を去る事、退隱する事、落飾する事、何れも、皆、喜ばしきことにあらず、諸公卿、聞いて、各々戒心する所あり。

此堂上の處分問題の外に、今一つ、關白の復職問題あり、九條左大臣尙忠の關白を罷めて、近衛左大臣忠熙の内覽たる間は、幕府は、何事をも、其意の如く、決行すること能はず、故に、是非とも、尙忠の復職を求めざるべからず。

十月二日、忠義、先づ、參内謁見して、就職の儀式を済ませ、越えて六日、關白更迭に關する閣老の奉書を傳達す、是れ九月十六日付を以て、忠義に訓令せるものにして、中に、

『九條殿、未だ御老年と申すに之なく、其上、當職御間も之なく候間、御差留遊ばされ候方、然るべきやと思召され候旨、仰出され候間、此段、程能く、傳奏衆へ、達せらるべく候』

との辭句あり、正しく、是れ關東の威を以て、聖斷を續へさんと欲するもの。

是に於て、其翌七日、鷹司右大臣輔熙、一條内大臣忠香、三條前内大臣實萬、二條大納言齊敬、徳大寺大納言公純等を、御前に召されて、其可否を、下問あらせ給ふ。

諸卿、憤慨に堪へずと雖も、恰も、大獄、新に起れる時なれば、誰とて、強硬の意見を、主張するものなく、涙を吞んで、

『關東の申すところ、無禮にこそは候へ、若し之れを拒絶すれば、有志逮捕の餘波、那邊に及ぶやも、知るべからず、

らず、臣等の罪科は、恐るゝ所に候はず、若し朝威を冒瀆せられ候ては、恐悚此上も候はず』

と言上すれば、主上、終に、此議に従はせ給ひ、其翌八日、齊敬を、尙忠の邸に、遣はして、復職を諭し給ふこと二たび、尙忠、多病、劇職に堪へずと答へて、固辭して、請けず、十二日、宸翰を賜ふに及びて、初めて、命を拜す。

關白復職問題は、決せり、堂上處分問題は、則ち如何。

一〇六 堂上の處分

堂上處分問題は、關白復職問題と與に、重大の案件なり。

關白、復職するも、所謂、陰謀派の勢力、依然たれば、復た、再び孤立の位地に立たざるべからず。

別勅降下、大老暗殺の二件は、陰謀派を壓倒するには、屈竟の材料なり、井伊掃部頭直弼、何とて、之れを閑却せん、在京の家臣長野主膳を以て、頻りに、所司代酒井若狹守忠義に促がす所あり。

閣老間部下總守詮勝は、最初こそ、君側の奸を、芟除せんとの意氣込みを以て、乗り込みつれ、京都の實情を聞くに

及びては、其意見も、漸く豹變し來り、忠義の説を、參酌して、

大老暗殺の密計は、鷹司家の諸大夫小林民部權大輔の口より出で、太閤政通、右大臣輔熙父子は、其元兇たるの疑ひあり、因りて、二人を、遠島に處して、他は、不問に附する事。

兵庫開港の事は、京都の思召に従うて、中止し、代ふるに、他港を以てする事。

との案を具へて、直弼の指揮を請ふ、直弼、見て、せゝら笑ひ、

『太閤父子處分の事は、關東の同意せざるを知つて、之れを主張し、態と、強硬の態度を、装ふに過ぎず』

と思へば、直に、筆を執りて、

『小林民部、金田伊織兩人の供述に依りて、不問に附しがたき罪跡あらば、太閤父子を、嚴刑に處せんこと、仔細なしと雖も、成る可くは、穩當の處置を取り、一橋を、西城に入れん爲めに、外夷取扱の事を批難する水府陰謀の次第だに、報聞に達して、其真相判明するに及ば、

陰謀荷擔の輩へは、夫々御咎めの道もあるべく、嚴科を以て、衆人を威服するは、穩當の處置にあらず、兵庫は、彼れの第一に相望める眼目の場所なれば、假令、他港を以て、代へんとするも、到底、承諾致すまじく、強て主張すれば、條約の破るゝまでの事なり』

との旨を答へて、二者、俱に従はず。

左れども、直弼は、唯、公卿を嚴刑に處すべからずと言ふに止まり、決して、之れを不問に附せよと言ふにはあらず、『處士、及び諸大夫は、嚴刑に處して、禍根を塞ぐべし、公卿、縉紳は、行政處分を以て、君側より、一掃すべし』との意見を持して、鷹司太閤政通父子のみならず、親王、公卿中、常に陰謀派を以て、目せるものは、此機に乗じて、盡く、掃蕩せんと欲し、主膳に命じて、頻に、忠義に迫り、終には、其位地を動かさんとするの勢を示す。

忠義、今は、默止すべからず、内藤豊後守正繩を、鷹司家に遣はし、遠島の意を仄^はかして、處決を促がす。

政通父子の驚愕、大方ならず、輔熙、先づ、病と稱して、辭職を請ひ、續いて、近衛左大臣忠熙、一條内大臣忠香、

三條前内大臣實萬等、各々表を捧げて、外國事件に參與することを辭し奉つる。

九月十八日、主上、輔熙の辭職の外は、盡く、聽許し給ひ、忠熙の内覽を免じて、更に、九條關白尙忠に命じ給ふ。

是に於て、股肱の良臣、悉く、罷めて、主上、俄に、孤立の地に陥らせ給ひぬ、爾かも、堂上の處分問題は、尙、未だ結局を告げず。

一〇七 條約調印問題

九條關白尙忠は、愈々復職せり、東使間部下總守詮勝、今や、參内すべきの時機、始めて來る。

是に於て、十月二十四日未の刻を以て、參内す、左れども、主上、御不例に坐しまして、謁を賜はらず。

詮勝、乃ち關白尙忠、及び兩傳奏廣橋大納言光成、萬里小路大納言正房に、對面して、具さに、條約調印の事情を分疏し、黃昏に及びて、漸く退出す。

條約調印の事に關しては、堀田備中守正睦の失敗に懲りて、敢て、開國の意見を奏せず、唯、

『條約調印の事は、井伊掃部頭の反對せるにも拘はらず、

六月十九日、其病氣缺勤の虛に乘じ、堀田備中守、松平伊賀守より、海防係井上信濃守、岩瀬肥後守に命じて、調印せしめ候、其根元は、水戸老卿の、關東を、非分に陥れんとするの姦計と、相見え候』

と陳べて、罪を正睦、及び松平伊賀守忠固の二人に嫁し、更に、水戸前中納言齊昭の事に關して、

『水戸老卿は、元來、夷人と内通せること故、表面、主戰を説かるゝも、愈々となれば、和議を是とし、又忽ちに、主戰を論ずる等、反覆、極まらず、夷人、爲めに、益々深入りして、終に條約を訂結するに至れるもの、全く、水戸老卿の謀策に、相違之なく、是等の次第、追々分明せる爲め、政務參與を停められたる儀に候』

と誣ひ、更に、進んで、京都の手入の事を説き、尙、『溫恭院様薨去の儀も、甚だ以て、疑はしく、殊に、當上様御儀、紀州は御住居の砌、兩三度も、御危急の儀、之あるやに候』

と述べて、齊昭に、弑逆の大罪ありげに仄^はかし、内に、此

蕭牆の禍あるに、外に、諸夷の寇を招くは、邦家の長計にあらずと言ひ做し、今日、訂約を許すも、他日、鎖港の舊法に復さんことを述べて、勅允を請ひ奉つる。

主上、叡明にして、忽ち、其眞意を、觀破あらせ給ひ、敢て、其言を信じ給はず。

翌二十五日、詔して、宰相家茂を、征夷大將軍に補せられ、一條大納言齊敬を、勅使として、關東に下させ給ふ。

詮勝、京都に於ける反對の氣焰、熾盛なるに窮して、勿々に、東歸するの心あり、其意を、閣老太田備前守資始に致す。

井伊掃部頭直弼、聞いて、憚らず、書を詮勝に與へて、其薄志弱行を責む、詮勝、是れより、心機再變して、復た強硬の態度を執る。

十一月九日、主上、宸翰を、關白尙忠に賜うて、條約調印の許すべからざる旨を告げさせ給ふや、詮勝、乃ち志士、諸大夫の調書を、天覽に供し奉つて、暗に、脅迫の勢を示す。

主上、再三、叡旨を傳へさせ給ふと雖も、詮勝、固く執つ

て、奉ぜず、主上、己むを得させ給はず、十二月三十日、詮勝を、小御所に召させ給ひ、九條關白、廣橋傳奏を以て、『蠻夷和親貿易以下の條件、皇國の瑕瑾、神州の汚穢、既に、先朝にも、甚だ靱慮を惱ませられ、仰出され候御儀も、在らせられ候、當御代より、始められ候ては、實に、皇太神宮御始、御代々に對させられ、恐多く、仰譯られなく、深く嘆き思召され候に付、日夜、靱慮を惱ませられ候御趣意は、春來、度々、仰出され候御事に候處、今般、間部下總守、酒井若狹守上京後、彼是、言上の趣は、大樹公以下、大老、老中役々にも、何れも、蠻夷に於ては、靱慮の如く相遠ざけ、御前々御國法通り、鎖國の良法に、引戻すべき御一致の儀、關召され、誠に以て、御安心の御事に候、然る上は、彌々公武合體にて、何分早く、良策を回られ、先件の通り、引戻さるべく候、止むを得ざる事情に於ては、審に、御氷解在らせられ、方今の處、御猶豫の御事に候、神宮、并に京師近海の儀は、先日、申達し候通り、全く、御傳國の神器、相重んぜられ候御事に候間、宜敷く、御勘考仰出され候事。

との勅諭を下させ給ふ、外交は、勅許あらせ給へるにあらず、條約は、裁下あらせ給へるにあらず、唯、一時の猶豫を、與へ給へるに止まりて、依然、鎖國の方針を、取らせ給ふ。

左れども、條約調印は、直弼の反對する所、時機を見て、鎖國の舊法に復すべしと、奏聞せし上は、詮勝、此勅諭に對して、何等奏上の餘地を有せず、其儘、拜受するの己むなきに至れり。

條約問題調印は、斯くして、への字なりに、一段落を告げぬ。

一〇八 志士の東送

志士の罪案を、糺弾して、公卿の關係を、窮追し、君側の姦人を、驅逐して、主上の股肱を、掃蕩すれば、京都の干渉、得て斷つべく、幕府の威嚴、得て張るべしとは、井伊掃部頭直弼の心に期するところ。

京都所司代、及び、京都、伏見兩町奉行の志士に對する審問、兎角に、緩慢なるを憤り、囚人を、江戸に移して、嚴

しく、糺明せんと欲し、早々、押送すべき旨を命ず。

是に於て、十二月四日、先づ、小林民部權大輔、金田伊織、三國大學、鶴飼吉左衛門父子等八人を、護送し、尋で、他の志士、諸大夫をも、護送し、翌安政六年正月十日までに、盡く、江戸に著す。

直弼、乃ち閣老松平和泉守乗全を以て、裁許係となし、五手掛の調に附す。

五手係の調とは、寺社奉行、勘定奉行、町奉行、大目付、目付を、裁許の掛員とし、臨時の法廷を、評定所に開くものにして、大獄を、斷ずるには、常に、此制を以てす。勘定組頭木村敬藏も、其掛りの一員なり、押收の書類、竝に尋問の調書等を、査閲して、之れを處分するの不得策なるを信じ、

『今回、逮捕せられたる諸囚人は、何れも、良主を戴きて、外患を處せんと欲するものにして、事、皆、憂國の至情より出で、毫も、利己の私欲に出づるものにあらず、處士の公卿の門に出入して、國政の上に、容喙するが如きは、固より、僭越の處爲なりと雖も、朝廷、之れ

を嘉納せらるゝ上は、強て、咎責せんこと、穩當の事にあらず、宜しく、寛典を以て、不問に附せらるべし』

との意見を陳ずれば、寺社奉行板倉周防守勝靜、勘定奉行佐々木信濃守顯發の二人も、亦、之れを然りとし、同僚列席の場所にて、

『此度の事件は、其關係する所、極めて重大なり、若し、嚴罰に處すれば、終に、天下の大事を、惹起さんも、知るべからず、特に、幼君御代始の御時なり、大抵にして、濟まさんこそ、然るべけれ』

との説を述べ、町奉行石谷因幡守穆清は、直弼の信任を得たるもの、飽までも、嚴科に處せんことを、主張すれば、大目附久貝因幡守正典も、亦、之れを賛成して、論陳する所あり、議論、二派に、岐かれて、容易に、決せず、組頭等の意見を問へば、皆、

『穩便の御計ひこそ、然るべけれ』

と述べて、寛大の處分を是とす、穆清、尙、譲らず、『陰謀の徒、少からざる今日、御幼君の御世なりとて、之れを不問に附しなば、公儀の御威權、何を以て、相立

つべきや、宜しく、嚴科に處して、禍患の根本を、斷つべし』

と主張し、直弼の邸に到りて、其旨を陳ず、直弼、聞いて、大に怒り、

『陰謀の徒を、不問に附せよとは、以ての外の心得違ひなり、水戸に聞えなば、大害の基なり、其儘に、捨て置くべきにあらず』

と告げ、正月十三日、宇津木六之丞を、乗全の邸に、遣はして、内意を示し、二月三日、勝靜、顯發の二人を罷め、敬藏を退け、松平伯耆守宗秀、池田播磨守頼方、及び吉田昇太郎を以て、此れに代ふ。

幕府の志士に對する糺彈、是れより、頓に、嚴酷を加ふ。

一〇九 公卿の處分(上)

京都の、久しく危惧せし公卿の處分問題は、愈々四人の東送と與に、忽ち、其頭を擡げ來る。

井伊掃部頭直弼は、間部下總守詮勝、酒井若狹守忠義等の、兎角に、寛大に處せんとするを見て、憚らず、

『大疵の早直りは、再發の基、一時の彌縫は、他日の禍根なり、飽までも、陰謀派を取つて押へて、京都干渉の道を、塞がんに若かず』

と決意し、其首領と目せる鷹司太閤政通、其子右大臣輔熙、近衛左大臣忠熙、一條内大臣忠香、三條前内大臣實萬以下の諸卿を、處分せんことを、忠義に命ず。

忠義、此由を、九條關白尙忠に通じ、尙忠、又其旨を、關下に奏す。

主上、政通以下の罪なくして、譴を獲んことを、憐ませ給ふこと深く、如何にもして、救解せんと思召し、尙忠を以て、其意を、忠義に諭さしめ給ふ。

聖意、畏しと雖も、幕命、更に恐ろし、忠義、是が爲めに、直弼の意に忤はんことを、憚かりて、抄々しく、命を奉ぜず、

『關東の沙汰ある上は、如何にとも、仕つりがたし、其れに先だちて、夫々、御引退あるに於ては、是非とも、寛大の御取計ひあらんやう、盡力仕つり候はん』と答へ、且、人を以て、政通父子の處決を促がす。

政通父子、今は、己むを得ず、忠熙、實萬にも、其意を通じ、正月十日を以て、俱に、辭官落飾の書を上つる。

主上、益々其心中を、憐ませ給ひ、再び救解の旨を、尙忠に諭し給ひ、尙忠、更に、其旨を、忠義に通ず。

左れども、忠義は、板挟みの位置に立ちて、自ら奈何ともすべからず、囚人の口供、事の公卿に連なるものを呈して、

引退の得策なるを奏し、詮勝よりも、亦、同一の旨を奏す。

主上、尙も、忍ばせ給はず、遷延、日一日を経る間に、閑老連署の書面は、愈々忠義の許に達せり、これぞ、青蓮院宮尊融法親王を初め奉つり、所謂、陰謀派の自決を迫れるものにして、大體の目安を、

青蓮院宮 慎み

鷹司太閤 隠居、落飾

近衛左府 辭官、落飾

鷹司右府 辭官、落飾、慎み

一條内府 三十日程出仕差止

三條前内府 落飾、慎み

二條亞相 五十日程出仕差止

近衛亞相 三十日程出仕差止

萬里小路亞相 退役、隠居

德大寺亞相 五十日程出仕差止

中山亞相 同

坊城黃門 三十日程出仕差止

正親町三條黃門 退役、辭官

久我右大將 同

裏松大藏卿 三十日程出仕差止

大原三位 隠居、落飾

となし、此旨、關白へ、内談すべき旨を命ず、二月四日、忠義、右の書を、尙忠に呈し、尙忠よりは、更に、御前に捧ぐ。

主上、益々軫念あらせ給ひ、如何にもして、其罪を宥めんと、思す折りしも、水戸へ賜はりし別勅返納の問題、又更に起る。

一一〇 公卿の處分(下)

曩に、密勅の水戸に降るや、幕府、固く制して、諸侯に同

達せしめず、其儘、留めて、中納言慶篤の許に在り。
井伊掃部頭直弼、之れを京都へ返還せしむるにあらざれば、
志士を處分するに、支障ありと思惟し、京都所司代酒井若
狹守忠義に、訓令して、勅諭撤回の事を、關白に内談せし
む。

忠義、乃ち傳奏を以て、九條關白尙忠に謀りしも、尙忠、
躊躇して、未だ奏聞せず。

忠義、更に、千種少將有文に由りて、上奏する所あり、主
上、公卿の處分寛大ならんことを、思召され、二月八日、
畏くも、左の御沙汰書を、所司代に降し給ふ。

去年八月八日、勅諭を蒙り、仰進せられ候一件は、實に
止むを得させられざる御次第も、在らせられ候て、關東、
并に水戸へも、御沙汰に、相成候事に候得共、間部下總
守上京、段々、言上にて、御分り遊ばされ、御氷解、御
安心、此上は、公武御合體、御一和在らせられ度く、思
召し候御儀に付ては、勅諭の御書付、御返上有らせられ
候様、御取計ひ之あるべく候、水戸中納言へ、下し置か
れ候同書付、是亦、早々、返上之あり候様、達せらるべ

く候、仍て、此段、仰進せられ候事。

主上、既に、幕府の請ひを允させ給ふ、幕府、果して、主
上の詔を奉ずべきや否や。

越えて八日、主上、公卿の處分に關する御見込書を、關白
尙忠に下させ給ふ、之れを幕府の目安に比すれば、概ね、
皆、數等を輕減せられ、特に、近衛左大臣忠熙に對しては、
唯、出仕御差止に止めて、隱居、落飾を免じ給はんとす。
尙忠、之れを忠義に通ずれども、忠義、閤老間部下總守詮
勝と謀りて、

『近衛殿儀は、老女村岡の口供に依るも、奸謀の徒に、
容易ならざる關係あれば、到底、寛典に處しがたし』

との旨を、答奏し奉つりて、敢て、聖旨を奉ぜず。

主上、重ねて、鷹司太閤政通父子、近衛左大臣忠熙、三條
前内大臣實萬の落飾を免じ、忠熙、輔熙の辭任を聽るすに止
め給はんと思召し、尙忠を以て、忠義に諭させ給へども、
復た幕府の意見を反覆して、敢て、聖旨を奉ぜず。

二月十七日、主上、青蓮院尊融法親王に、謹慎を命じ、一
條内大臣忠香、二條大納言齊敬、近衛大納言忠房に、十日

間の遠慮引籠、廣橋大納言光成に、五日間の遠慮引籠、萬
里小路大納言正房に、三十日間の謹慎、正親町三條中納言

實愛に、五日間の謹慎、久我右大將建通に、五日間の引籠

謹慎、大原三位實徳に、五十日間の謹慎、徳大寺大納言公

純、中山大納言忠能、坊城大納言俊克、裏松大藏卿恭光に、

進退伺を命じ給ひ、同時に、鷹司太閤政通、三條前内大臣

實萬は、隱居謹慎、近衛左大臣忠熙、鷹司右大臣輔熙は、

辭官謹慎に止め給はんとし、尙忠を以て、其旨を、忠義に

達し給へども、忠義、又々、答議を上つりて、聖旨を奉ぜ
ず。

三月二十六日、主上、更に、政通、忠熙、輔熙、實萬に對
する落飾の期を緩うせんことを、諭し給へども、忠義、即
日、答書を上つりて、是も、亦、聖旨を奉ぜず。

是に於て、主上、直に、三公の更迭を行はせ給ひ、忠熙、
輔熙の辭官を許し、一條内大臣忠香を、左大臣に、花山院
前内大臣家厚を、右大臣に、二條大納言齊敬を、内大臣に
陞し給ふ。

左れども、政通等四人に對する落飾は、尙、躊躇して、命じ

給はず、四月二十日、幕府の督促するに及びて、始めて、
落飾謹慎を命じ給ふ。

是に至りて、聖意、一として、貫くものあらず。

一一一 第二回の斷獄

敵は、本能寺に在り、志士を糺彈するの目的は、寧ろ、水
府老公の罪案を索めんとするに在り、其訊問、自から峻嚴
苛酷ならざる能はず。

獄裏の苦痛は、名狀すべからず、清水寺の寺侍近藤正愼は、
昨年の冬、京都六角の獄に於て、舌を噛んで、自殺し、日
下部伊三次は、寒氣と、拷問とに苦みて、此年十二月十七
日、江戸傳馬町の獄中に斃れ、月照の弟信海も、亦、今年
三月十七日、

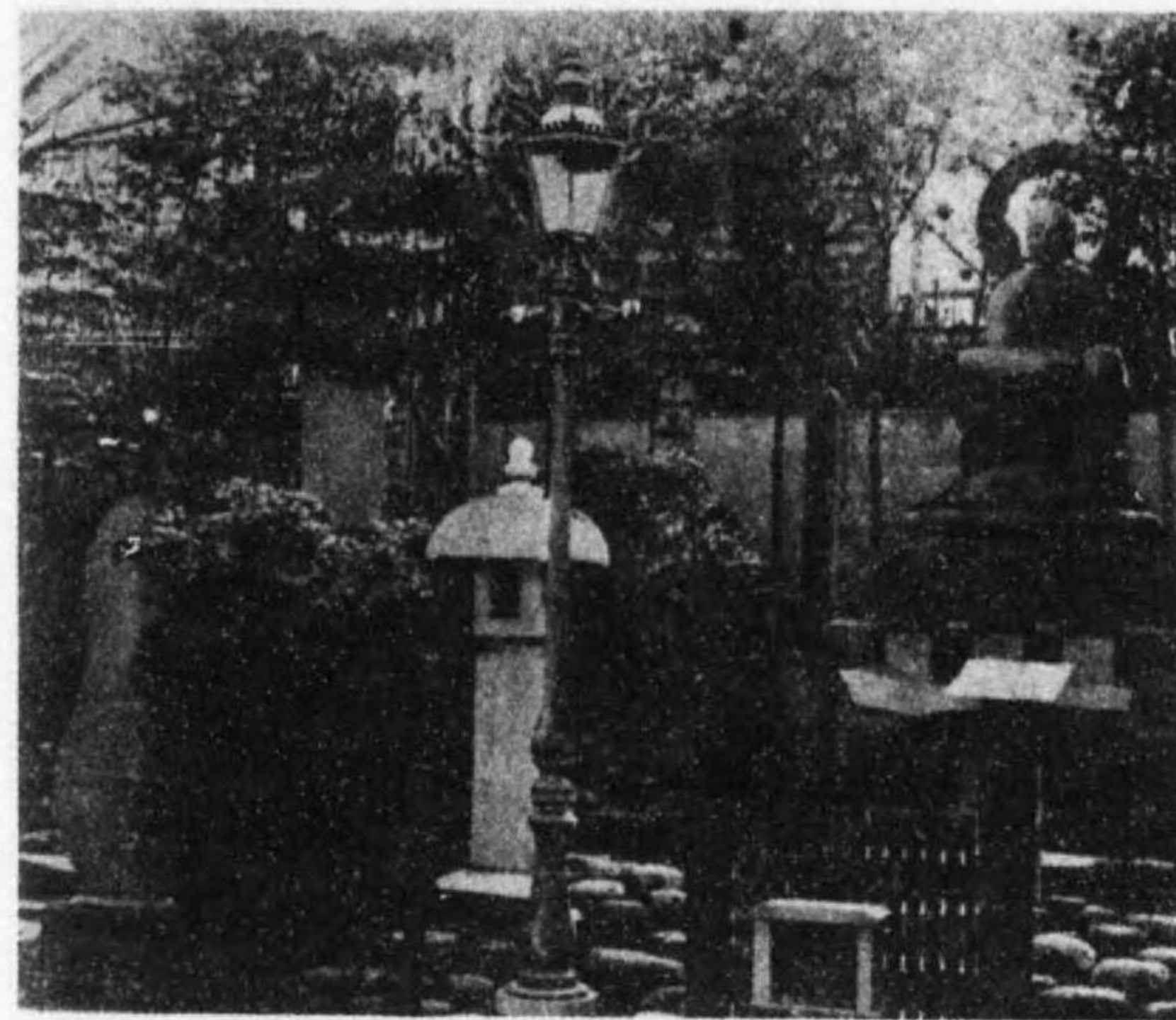
西の海あつまの空はかはれとも

心は同じ君が代のため

との辭世を残し、身を薩海に投じたる兄月照の後を慕うて、
同じ獄窓の鬼となる、囚中、其計を聞くもの、胸裡の感憤、
果して、如何ばかりぞ。

四月二十六日、幕府、水戸に命じて、其老臣安島帶刀、奥右筆頭取茅根伊豫之介、勘定奉行鮎澤伊太夫、小十人目付組頭大竹儀兵衛を、評定所に喚問し、其儘、留めて、還さず、益々尋問を行ふ。

傳馬町牢獄跡
東京市日本橋區小傳馬町に在り後年大安樂寺、祖師堂、村雲鬼子母神堂、兩大師等の敷地となる



羅織の手は、更に、中國に伸ばされ、長州藩に命じて、其藩士吉田寅次郎を、江戸に、護送せしめ、七月九日を以て、傳馬町の

小塚原の刑場
東京市荒川區千住町の小塚原は鈴ヶ森と與に江戸の刑場なり橋本左内、頼三樹三郎、吉田寅次郎等の斬首せられし處



獄に著すると與に、是れ、亦、嚴重の糾問を行ふ。八月二十三日に至りて、小林民部權大輔、池内大學等八人の口供、漸く完結す、左せる罪狀なしと雖も、亦、全く罪なきにあらず、裁許掛の面々、乃ち重きは、遠島、輕きは、追放、永蟄居に擬し、案を具へて、之れを閣老に提出す。閣老、見て、之れを可なりとし、直に、井伊掃部頭直弼に轉提す、直弼、案を取つて、熟視すること少時、頓て、

『少々、考ふる所あり、附札の上、一兩日中に、返すべし』と告げ、其儘、手元に、留め置く。

凡そ、閣老、若くは大老の意見は、大低、裁許掛の罪案よりも、一二等を、輕減するを常とす、人々、

『扱は、寛典に處せらるゝことならん、左もあるべきことなり』

と言ひ合へりしに、何ぞ圖らん、兩三日を経て、其下附せる附箋を見れば、盡く、刑に、一等を加へて、追放は、流罪となり、流罪は、死刑となり居らんとは、見るもの、聞くもの、皆、愕然たらざるはなし。

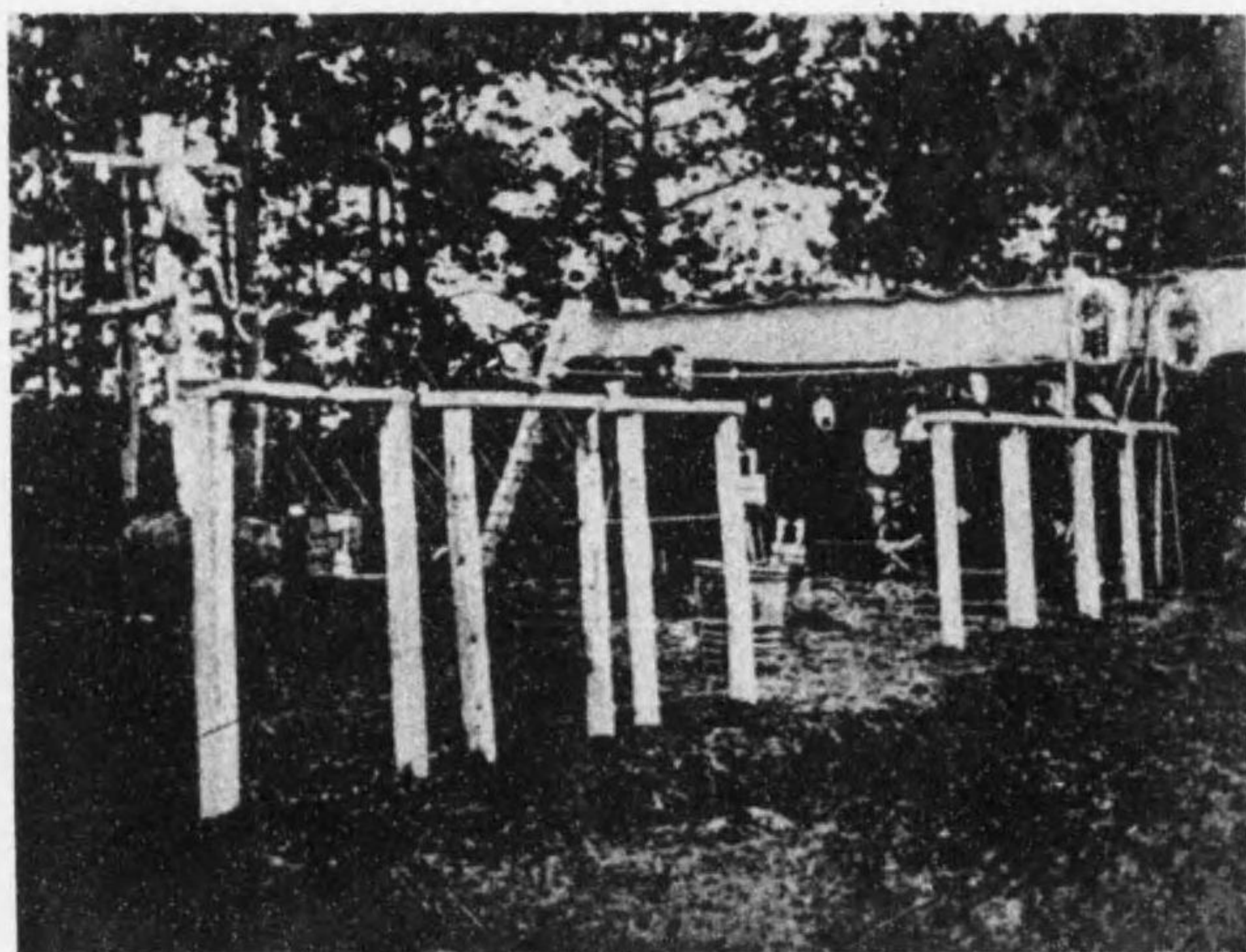
罪案は、愈々直弼の意見に由りて、定まり、二十八日を以て、宣告を行ふ、即ち左の如し。

死罪	水戸家來	安島帶刀
同	同	茅根伊豫之介
同	同	鵜飼吉左衛門
獄門	同	鵜飼幸吉
遠島	同	鮎澤伊太夫
同	鷹司家來	小林民部權大輔

江戸城(上)

追放 儒醫 池内大學
永謹 愼 近衛家老女 村岡

小塚原の梟首
此れは小塚原刑場に於ける梟首の光景



此中、鵜飼幸吉は、微賤の身を顧みず、密勅を奉じて、東下せしが故に、特に、此極刑に處せられしなり。斷獄の方針、峻嚴にして、寛假せざ

るの意なること、今は、愈々明瞭となり来る。

一二 水戸家の處分

第一次の斷獄は、主として、水戸の家臣を罰するもの、其八人の中、五人までは、盡く、水戸なるを見ても、井伊掃部頭直弼の目指するところ、一に、水府老公の上に在るを察するに足る。

果せる哉、志士處斷の餘波は、直に飛んで、老公父子の上に及び。

安島帶刀、鵜飼吉左衛門父子等の處刑せられたる八月二十七日、前中納言齊昭は、水戸表に於て永蟄居、中納言慶篤は、差控を仰付けられ、家老中山備前守信守以下の老臣、亦、差控を命ぜられ、一橋刑部卿慶喜も、亦、謹慎を仰付けらる。

此日、上使の水戸邸に臨むに先だちて、訛言、頻りに行はれ、或は、齊昭は、切腹を命ぜらるべしとの説あり、或は、紀州邸に幽せらるべしとの噂ありて、家臣の激昂、大方ならず、期せずして、小石川の本邸、并に駒込の別邸に、來

り集まるもの數百人、皆、一死を以て、老公父子を捍衛せんとす、邸中邸外の騒動、鼎の沸くに、異ならず。佐野竹之介、悲憤、禁ずる能はず、大津彦五郎、吉成恒二郎の二人と謀り、

『君、辱しめらる、時は、臣死すと言はずや、我等が死すべき時は、今なり、イデヤ、上使を兩斷して、幕府の反省を、促がさん』

と決意し、敢死の壯士三十餘人を率ゐて、門外に待つ。

酉の刻を過ぐる頃ひ、上使松平左兵衛督信發、介添成瀬隼人正正肥の二人、各々輿に乗じ、家臣を従へて、小石川の邸に來る、頓て、門前に近づかんとする時、突然として、

『暫く、御控へ候へ』

と言ひつゝ、輿前を遮ぎるものあり、是れぞ、即ち佐野竹之介、三十餘人の壯士、肩を怒らして、其後に控ゆ。

邸吏、アナヤと驚き、バラ／＼と、馳せ來りて、制せんとなす、竹之介、厲聲叱咤、一步も退かず、信發の家臣須田修介、斯くと見るより、ツカ／＼と、進み出で、

『何用ありて、控へよと申さるゝぞ』

と詰れば、竹之介、

『我等、道路の風説を、承はりて、憂懼、禁へがたし、

願はくは、上使の趣を、承はらん』

と述べ、イザと言はゞ、一齊に斬つて、掛からんとす、修介、徐かに、説諭すれども、更に、聞き入るべき色もあらず。

信發は、津山侯松平越後守齊人の孫にして、出で、上州矢田侯松平左兵衛督信任の嗣となれるもの、駿河大納言忠長の後裔として、其家格、低からず、今回、特に、選拔せられて、此任を受け、幕府の爲めに、水府の爲めに、無事に、局を結ばんとす、竹之介等の亡狀を見ても、激せず、怒らず、徐かに、輿中より、

『君家の爲めを存すれば、謹慎して、公命の下るを待つべし』

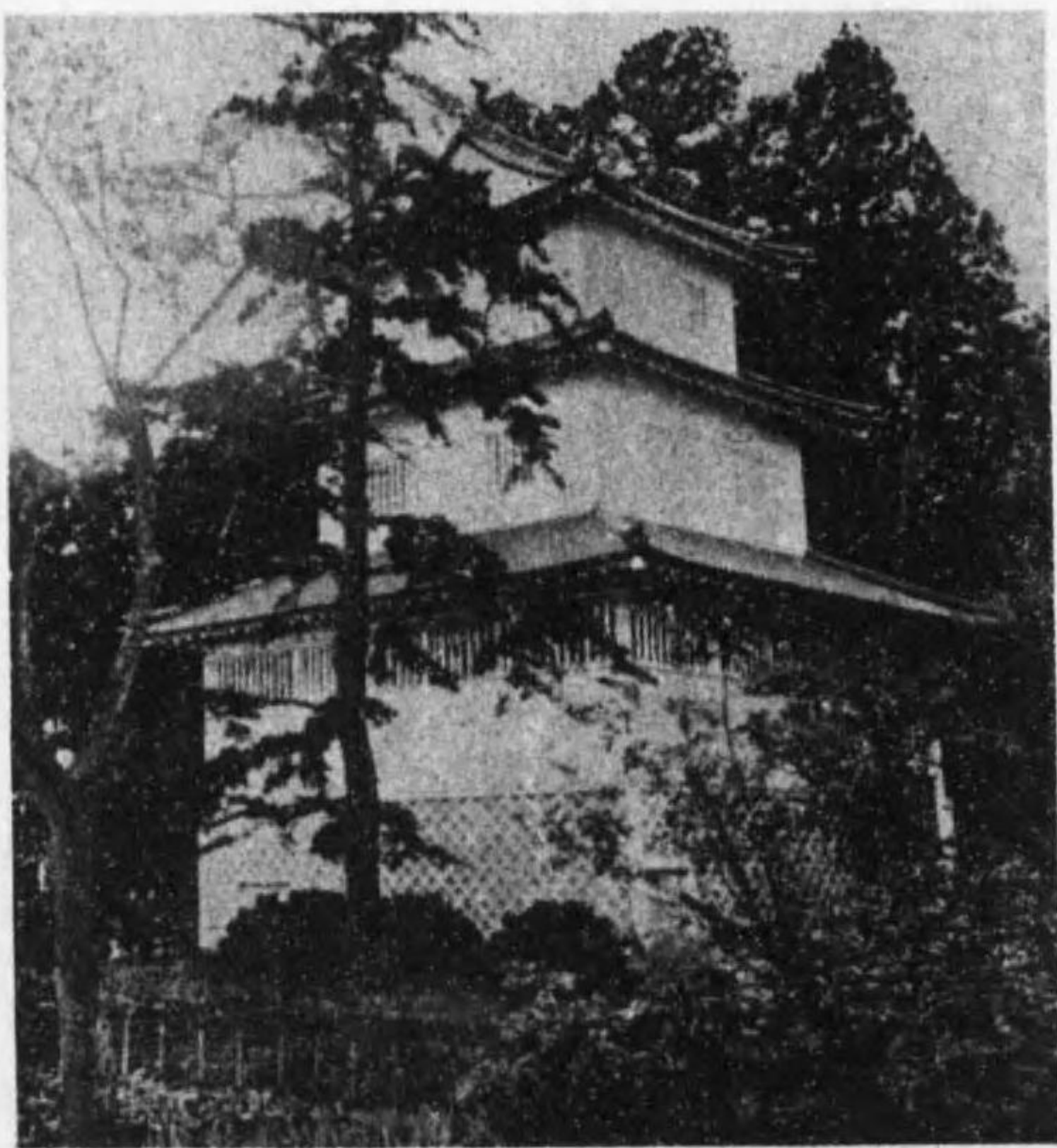
との旨を諭す、左れども、竹之介等、頑然として、肯んぜず、信發、亦、自若として、敢て動かす、危機、今や、將に發せんとす、偶々高橋多一郎、金子孫二郎、三浦賛雄の三人、主命を以て、來り諭すに及び、竹之介等、初めて、

道を開く。

信發、乃ち邸中に臨み、家老を召して、上意を達す、一は永蟄居にして、一は差控に止まり、復た風説程の重科にもあらず、是に於て、家老、命を奉じ、家臣、亦、鎮まり、越えて晦日、齊昭、早々、水戸に退く。

水戸城址

常陸國水戸市の中央に在り徳川齊昭の江戸より退去謹慎せる處



一一三 幕吏の處分

水戸家の處分と前後して、幕吏の處分せられしもの、亦、少からず、事、多くは、此れに關聯せざるはあらず。

今、此に井伊掃部頭直弼の安政五年四月二十三日、大老に就職せし以來、罷免せられしものを、列舉せん。

此年五月六日、川路左衛門尉聖謨、一橋刑部卿慶喜を儲貳となさんことを、建白せしを以て、西丸留守居に貶せられ、外國掛土岐丹波守頼旨、亦、西城迎立の事を論じたるを以て、廢立を謀るものと、誣ひられて、大番頭に貶せらる、一橋派排斥の端、此に開かる。

二十日、外國掛鶴飼民部少輔長銳、紀州派たる閣老松平伊賀守忠固、久世大和守廣周の非行を、扶かんとせし爲め、駿河町奉行に遷さる。

二十四日、町奉行跡部甲斐守良弼、一橋派たるを以て、清水家支配に轉ぜられ、石谷因幡守清穆、此れに代る、清穆は、實に直弼の腹心なり。

六月五日、京都町奉行淺野和泉守長祚、水戸の有志と、親

交あるを以て、小普請奉行に貶せられ、浦賀奉行小笠原長門守長常、此れに代る。

六月二十一日、閣老堀田備中守正睦、松平伊賀守忠固の登城を停め、越えて二十三日、其職を免ず、一は、一橋派にして、他は、直弼を排斥せんとせしに由る。

七月五日、尾張中納言慶勝、水戸前中納言齊昭、水戸中納言慶篤、越前中將慶永、推參登城の廉を以て、譴責を蒙むり、一橋刑部卿慶喜、亦、差控を命ぜらる。

七日の夜、若年寄本郷丹後守泰固は、菊の間に、側衆石川土佐守政平は、寄合に、左遷せられ、典醫岡樸仙院、亦、職俸を奪はる、俱に、一橋派たるに由る。

十一月二十五日、閣老久世大和守廣周、其職を免ぜらる、直弼と意見を異にし、久しく、病と稱して、出でず、志士の處分に關しても、寛典を望みたるに由る。

安政六年二月三日、寺社奉行板倉周防守勝靜、勘定奉行佐佐木信濃守顯發、勘定組頭木村敬藏の三人、亦、志士の寛典を、主張せしを以て、各、職を褫はる。

二月二十四日、外國奉行水井玄蕃頭尙志は、軍艦奉行に、

井上信濃守清直は、小普請奉行に轉ず、俱に、水戸黨と目

せらるゝに由る、是に至りて、阿部伊勢守正弘の拔擢せし雋才、殆ど盡く。

六月二十四日、禁裏附大久保右近將監忠寛、直弼の家臣長野主膳等の非行を擧げんとせし爲め、西城留守居に貶せらる。

七月二十三日、閣老太田備後守資始、直弼の水戸前中納言齊昭を羅織せんとするの議に、反對せし爲め、其職を免ぜらる、間部下總守詮勝も、亦、直弼と意見を異にせし爲め、此日、勝手掛を免ぜらる。

八月十一日、伏見奉行内藤豐後守正繩、京獄を斷ずること、寛大なりしを以て、其職を免ぜらる。

八月二十七日、水戸家の處分と同日、作事奉行岩瀬肥後守忠震、軍艦奉行水井玄蕃頭尙志の二人は、職俸を奪はれて、謹慎を命ぜられ、西丸留守居川路左衛門尉聖謨、亦、隱居謹慎を命ぜられ、越えて二十九日、太田備後守資始は謹慎、小普請奉行淺野備前守長祚、西丸留守居大久保右近將監忠寛の二人は、隱居謹慎を命ぜらる、俱に、水戸に黨せしと

言ふに在り。

九月五日、松平伊賀守忠固、在職中、直弼と衝突せし廉を以て、諭旨隱居を命ぜられ、駿河町奉行鶴飼民部少輔長銳、亦、水戸黨として、隱居を命ぜらる。

黜罰、譴責、睚眦の怨も、必ず、報せんとす、而かも、其處分、尙、未だ此に盡きず。

一一四 大獄の落著(上)

此間も、志士の糾弾は、絶えず、評定所に於て、行はれつつあり。

志士之首領梅田源次郎は、預けられて、小倉侯小笠原右近將監忠嘉の邸に在り、八月十三日頃より、脚氣に罹り、病臥三旬、九月十四日を以て、終に歿す、年四十四。

西園寺家の諸大夫藤井但馬守も、亦、疾に罹り、源次郎に先だつこと一日、九月十三日を以て逝く、外に、富小路家の臣山本縫殿も、亦、獄中に歿す。

第二回の宣告は、十月七日を以て行はる、即ち左の如し。

死 罪 曾我權右衛門家來 飯 泉 喜 内

同	松平越前守家來	橋本左内
同	京都儒者	三樹三郎
遠島	大學院門跡家來	六物空萬
同	松平伊豆守百姓	太宰八郎
永押込	久我家々來	春日讃岐守
同	御倉舍人	山科出雲守
同	三條家々來	森寺因幡守
中追放	同	丹羽豐前守
同	鷹司家々來	三國大學
同	三條家々來	森寺若狹守
同	青蓮宮家來	伊丹藏人
同	一條家々來	入江雅樂頭
同	信州松本町名主	近藤茂左衛門
所拂	京都畫家	宇喜田一蕙
同	同	宇喜田松庵
同	京都浪人	蒲市正
同	洛中洛外構	若林木工權頭
江戶拂	一條家々來	飯田左馬
押込	有栖川宮家來	

同	鷹司家々來	高橋兵部權大輔
同	青蓮宮家來	山田勘解由
同	三條家々來	富田織部
同	下田奉行手附出役	大沼又三郎
同	飯泉喜内伴	飯泉春堂
叱り	山本貞一郎妻	山本とよ
同	山本貞一郎娘	山本さい
同	同	山本うめ
外に手錠四人、構なし一人あり。		
十月二十七日、第三次の宣告あり、左の如し。		
死罪	毛利大膳大夫家來	吉田寅次郎
遠島	勝野豐作伴	勝野森之助
同	日下部伊三次伴	日下部裕之進
重追放	伊達遠江守家來	吉見長左衛門
永押込	松平讃岐守家來	長谷川宗左衛門
同	同	長谷川速水
中追放	江戶儒者	藤森恭助
同	水戸領百姓	黒澤とき

紀州領構	紀州領用達町人	世古格太郎
江戶拂	水戸家々來	大竹儀兵衛
押込	井上左京大夫家來	藤田忠藏
同	藤森權右衛門組下	岩本常介
同	岡部土佐守家來	寛承三
同	勝野豐作妻	勝野ちか
同	勝野豐作二男	勝野保三郎
同	勝野豐作娘	勝野こう
同	松平伊豆守家來	横山湖山
永國押込	酒井雅樂頭家來	菅野謙介
同	間部下總守家來	大郷卷藏
同	松平土佐守家來	小南五郎右衛門
同	松平修理大夫家來	大山正阿彌
同	土屋采女正家來	大久保要
同	松平豐前守家來	奥平小太郎
同	久世大和守家來	舟橋亘理
遠島	茅根伊豫之介伴	茅根熊太郎

續いて二十八日、又第四次の宣告あり、左の如し。

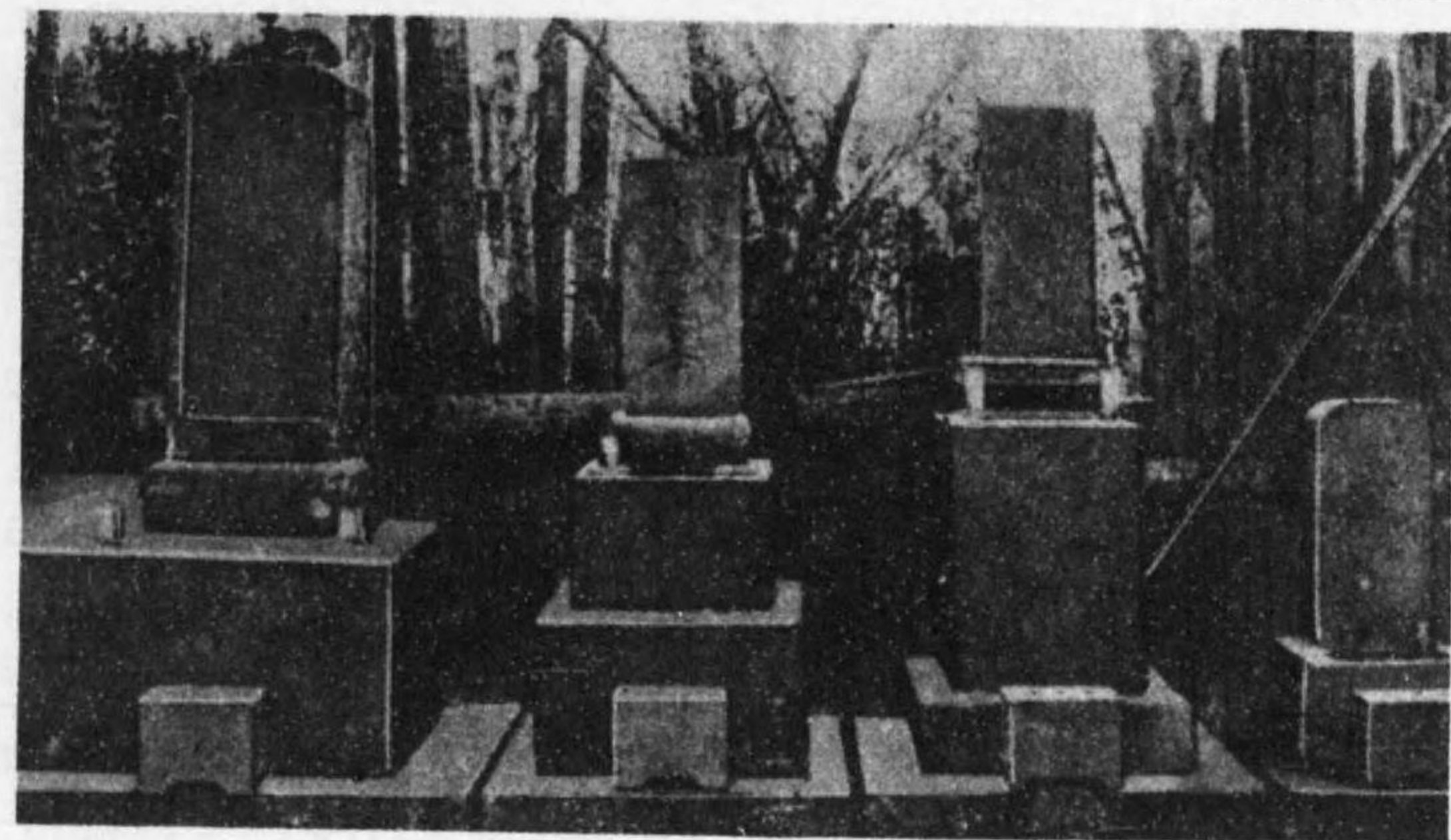
中追放 鮎澤伊太夫伴 鮎澤力之助
同 鮎澤伊太夫二男 鮎澤六藏
追放 小林民部權大輔伴 小林越前守
同 鷗飼吉左衛門二男 鷗飼喜三郎
同 同 三男 鷗飼貞五郎
同 同 四男 鷗飼傳四郎
即ち處士、諸大夫、竝に其家族の處分せられしもの、切腹一人、死罪六人、獄門一人、遠島七人、内小兒三人、重追放一人、永押込五人、國元永押込八人、中追放十人、追放五人、構二人、押込十四人、手錠四人、叱り三人、合計六十七人の多きに上る、世に稱して、安政戊午の大獄と言ふ。

一一五 大獄の落著(下)

抑、今回の疑獄に就て、處刑を受けしもの、其罪科、盡く、同一なるにはあらず。

鷗飼吉左衛門父子、安島帶刀、茅根伊豫之介、及び日下部伊三次等は、水戸に下し賜へる密勅に關するものにして、頼三樹三郎、池内大學、及び梁川星巖、梅田源次郎等は、

小塚原志士の墓
此れは小塚原に於ける勤王志士の墓なり英魂長へに皇城を護りまつらん



専ら此件に關して、京縉と、諸士との間に、周旋せしに由る。橋本左内は、密勅の件に就ては、何の干係をも有せず、只、建儲の事に關して、訊問を受くるに方り、事を曖昧模稜に附して、却て、其主越前中將慶永の、不忠不義の名を取らんことを恐れ、『建儲、及び外交の事に關

し、寡君越前守の命を承けて、京都に周旋せしは、事實なり、抑、儲君を立つるに、長と賢を以てするは、國家の利益を思ふに由る、外交の事に關して、勅裁を請ふは、天朝を重んずるに外ならず、是れ、皆、公明の心に出づ、豈、他あらんや』と述べて、包まず、隠さず、公々然、其事實を、明言せしに由る。

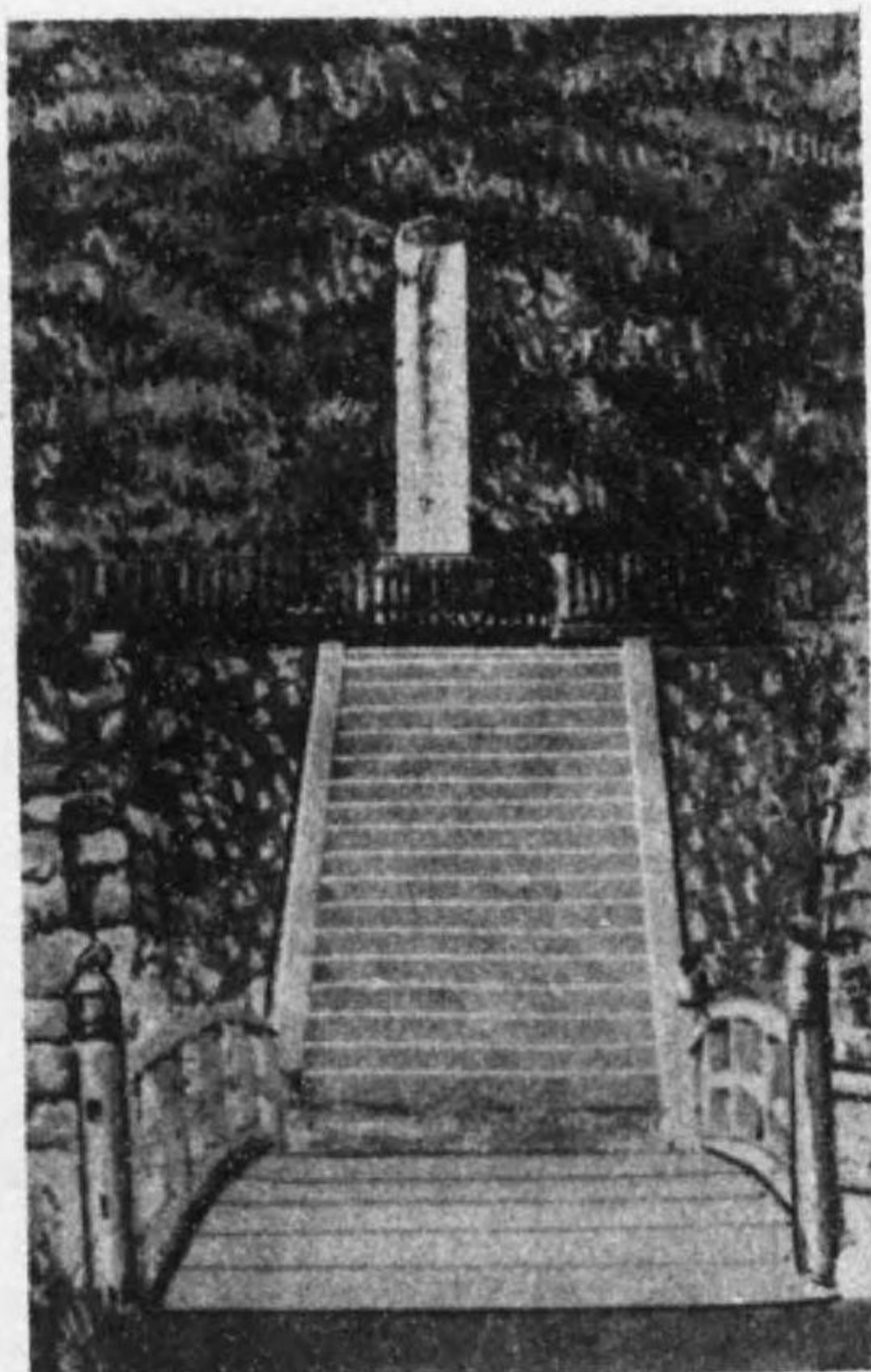
吉田寅次郎は、曾て梁川星巖に依りて、自著時義要論を、乙夜の覽に供へ奉つれることあり、爲めに、密勅に關係あるべしとの嫌疑を蒙りしと雖も、訊問の結果、其無關係なること、明白となれり、左れども、寅次郎、敢て苟免を欲せず。

『有志者一人の頸血は、萬人の志士を、醸成すべし』と決意し、間部下總守詮勝を要撃して、幕政を、一變せんと企圖せし旨を、自白せしに基づく。

其志さす所、同じからず、其企つる所、亦、異なれりと雖も、其身命を抛ちて、天下國家の爲めに盡さんと欲する忠魂義膽に至りては、即ち一なり。

橋本左内の墓

越前國福井市足羽山麓善慶寺の境内に在り題して「景岳先生之墓」と曰ふ死する年二十六

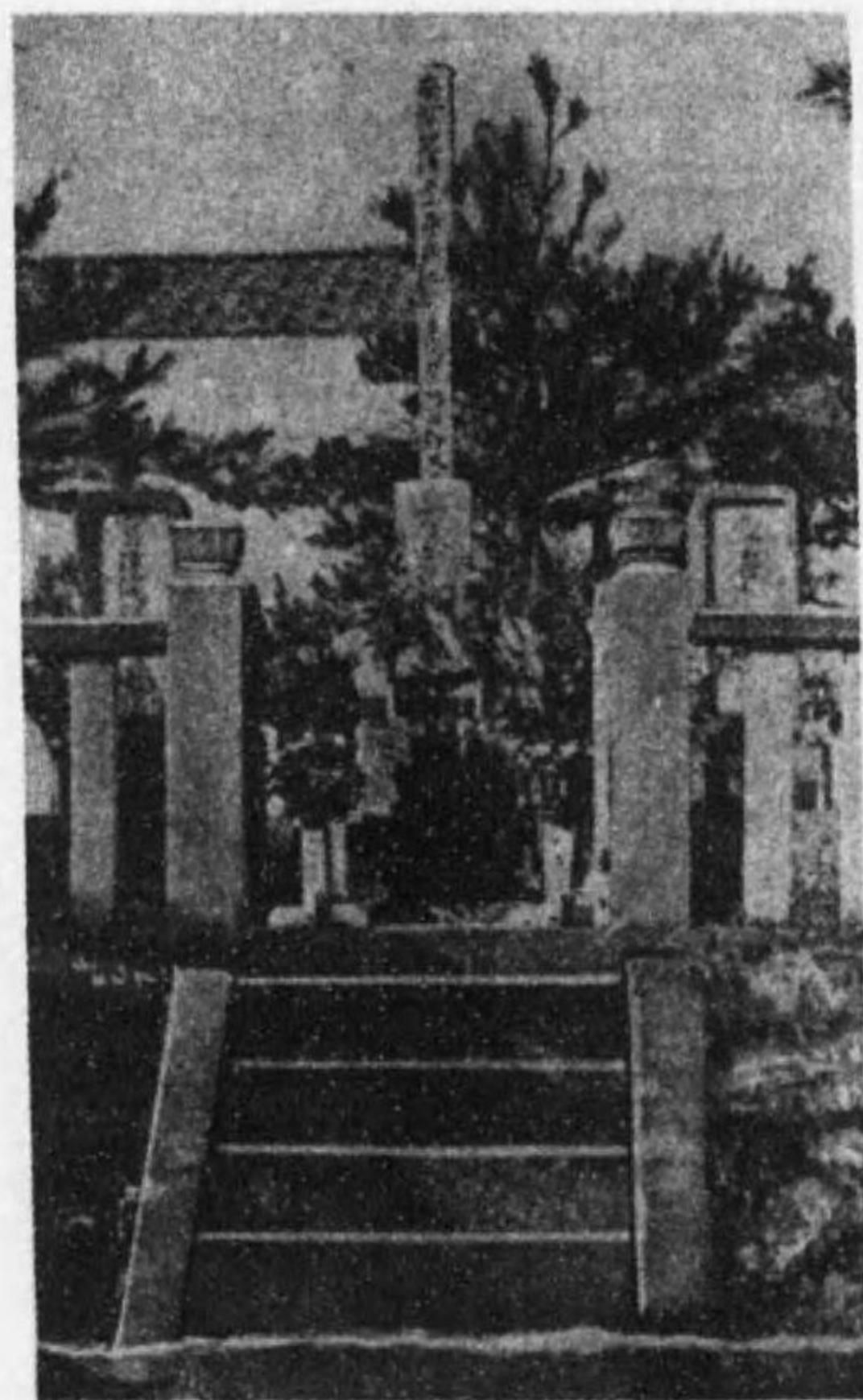


となりし本郷丹後守泰固は、隱居謹慎を命ぜられし上、祿高五千石を減ぜられ、其子石見守泰清、亦、寄合に貶せらる、側衆より、寄合となりし石河土佐守政平は、隱居を命ぜられし上、祿高七百石を減ぜられ、其子豊前守、亦、寄合に貶せらる、勘定奉行より、寄合に貶せられし佐々木信濃守顯發は、更に、貶黜せられて、小普請となる。豊信と與に、建儲問題に盡力せる伊達遠江守宗城の、獨り再讒を免かれたるもの、蓋、其養父伊豫守宗紀の、直弼と

井伊掃部頭直弼、此志士を、一網打盡して、天下の禍源亂根、爲めに一掃し盡せりと思ひきや、反動の致す所、衆怨の府まる所、却つて、幕府の衰亡、自家の禍害を、醸生し來れるこそ、是非なけれ。

此疑獄の終局と前後して、再讒を蒙むるもの數人、乃ち曩に致仕せし山内土佐守豊信は、公卿と通謀せりとの故を以て、謹慎を命ぜられ、外國掛より、大番頭となりし土岐丹波守頼旨は、隱居差控を命ぜられ、若年寄より、菊の間詰

梅田源次郎の墓
若狹國小濱町字香取の高成寺附近に在り前は海に枕み後は山を負ふ風光頗る佳



姻戚の關係あるに由る。

志士の處分も、既に終り、幕吏の譴責も、亦、全く終る、是に於てか、直弼、更に、水戸に對して、密勅を返納せしめんとす、一波、纔かに収まりて、一波、又起る。

一二六 勅書返納問題（上）

井伊掃部頭直弼、先きに、水戸に對する勅書返納の御沙汰書を、請ひ得たりと雖も、水戸藩士の激昂を恐れて、押へて、未だ命を發せず。

八月二十七日、水戸の志士を處刑し、老公父子を處分するに及びて、愈々勅書の返納方を、迫らんとす。

然るに、先に下附せられたる御沙汰書は、幕府の分と、水戸の分とを、一紙に書き込みあるを以て、之れを水戸に下すこと能はず、京都所司代酒井若狹守忠義に訓令して、御沙汰書の御書替を、請はしむ。

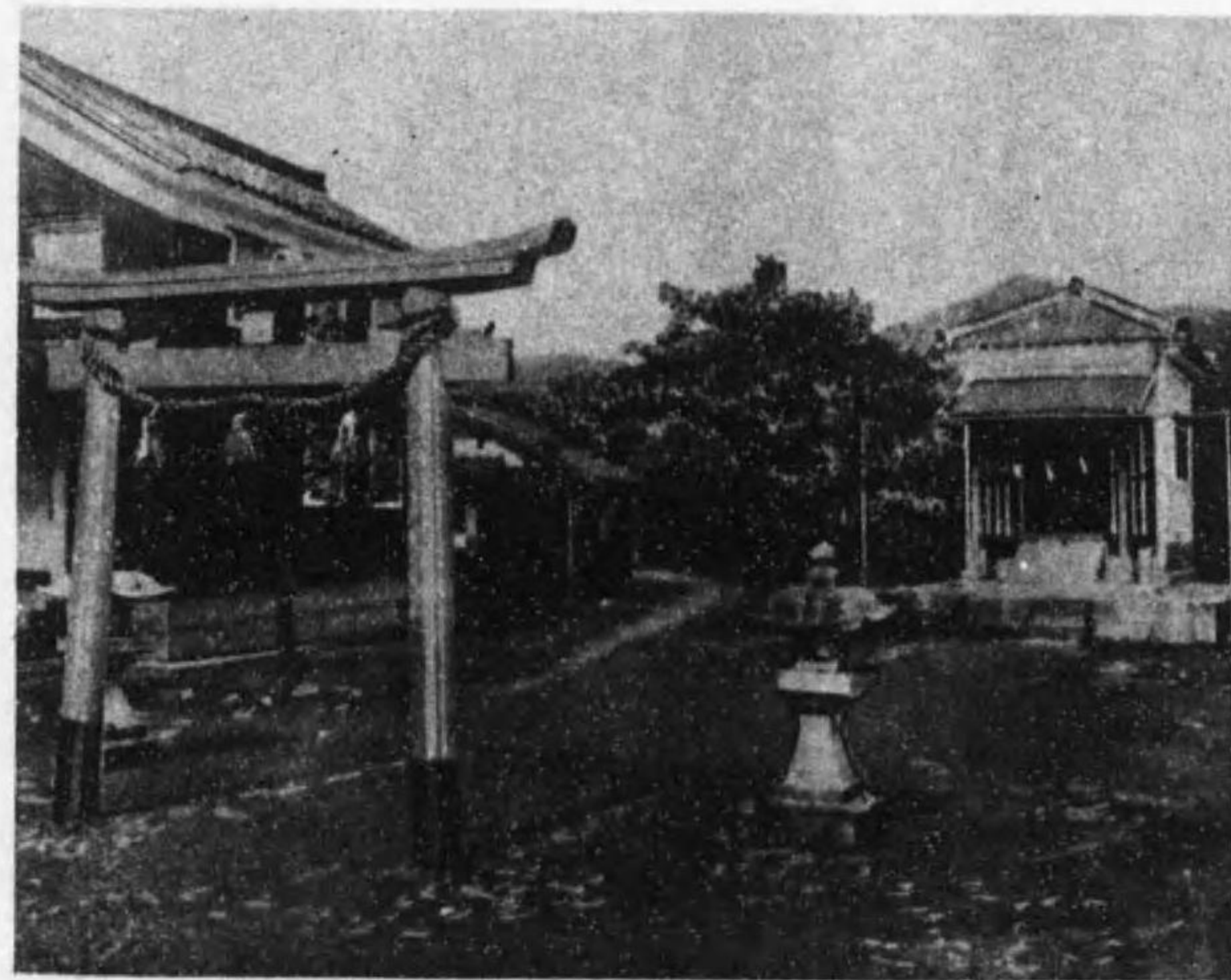
十月二十二日、忠義、其意を傳奏に通ず、越えて十一月十九日、傳奏廣橋大納言光成、關白の旨を受けて、御沙汰書を取替へ、幕府への達書と、水戸への達書とを、別々に認

めて、忠義に交附す。

頓て、御沙汰書の江戸に達するや、直弼、其御文中「實に

松陰神社

長門國阿武郡椿郷東分村に在り吉田寅次郎の靈を祀る中央の小屋は松下村塾にして左方の前面に松陰文庫あり



止むを得させられざる御次第もあらせられ云々」
との字句と
「此上は、公武御一體御和あらせられ云々」

との字句あるを見て、最初の分と、同一なるにも拘はらず、今更の如くに、異見を、挾さみ、忠義に對して、

『假令、御三家へ對しても、直に、勅諭を下さるゝこと、御掟に背く、止むを得させられざる御次第ありとも、然るべき御事にあらず、又此上は、公武御合體とありては、是までは、公武御確執の御間柄なりしとも見えて、穩かならず、宜しく、右の字句、御削除あるべきやう、傳奏に申入るべし』

との旨を訓令す、十二月七日、忠義、其意を傳奏に通じ、且、文案をも、内呈すれば、十日改めて、

幕府への御沙汰書

去年八月八日、勅諭、仰進せられ候事に候へ共、間部下總守上京、段々、言上にて、御分り遊ばせられ、御水解、御安心有らせられ候に付ては、勅諭の書付、并に添書共、御返上有らせられ候様、御取計ひ之あるべく、此段、仰進せられ候事。

水戸への御沙汰書

昨年八月八日、水戸中納言へ下し置かれ候勅諭の書付、

並に添書共、此度、返上之あり候様、仰出され候間、其段、水戸中納言へ達せらるべく候、仍つて此段、申入候事。

との二通を、交附せらる、是れぞ、即ち忠義の文案を、其儘、採用せられたるもの。

直弼、既に、思ふ儘の御沙汰書を握れり、此上は、如何なる順序を以て、勅書を返還せしむべきか、閣老中、或は、『所司代より、朝命を傳へ、水戸をして、直に京都へ、返納せしむべし』

と言ふものあり、或は、

『公儀より、朝命を傳へ、勅書を收めて、京都へ、返還すべし』

と論ずるものあり、意見、二途に分れて、容易に、決せず、此事、早くも、水戸藩士の耳に入るや、非返納派は、

『幕府、假令、朝命を強要するとも、是れ、眞の朝命にあらず、決して、勅書を返納すべからず』

と主張し、返納派中にも、

『幕府を経由せずして、物を朝廷に献上し、及び朝廷よ

り拜受するは、水藩の例格なり、勅書は、朝廷より、直に拜受せしものなれば、之れを返納するとしても、敢て公邊に差出すに及ばず、

と論ずるものあり、物議、沸騰して、人心、靜穩ならず、直弼、斯くと聞くより、

『水藩、輕輩をして、例外の勅詔を齎らし來らしめ、今に至りて、尙、此の如きの異議を立つること、奇怪なれ、若し、其喧騒を憚かりて、躊躇せば、幕威、是より地に墜ちん、宜しく、之れを公邊に收めて、水藩の勢ひを、殺ぐべし』

と決意し、若年寄安藤對島守信睦をして、其命を傳へしむ。

一二七 勅書返納問題（下）

十二月十六日、安藤對島守信睦、小石川の邸に到り、中納言慶篤に、對面して、京都の御沙汰書を示し、

『昨年八月八日付を以て、御當家に對して、勅書、并に御別書、御下賜相成りしと雖も、右は、早々、御返納あるべしとの朝命に候、速かに、公邊へ、御差出し相成り

て、然るべし』
との旨を通ず、慶篤、

『勅書は、公邊の御爲めに、下し賜はりたるもの、今に及んで、故なく、返納すべき道理あるべからず、萬一、御返納申さるべからざるに於ては、當家より、直に、京都へ、奉還致すべし』

と答へて、左右なく、命に應ぜず、信睦、

『若し、御返納なきに於ては、必ず、御違勅の罪を蒙られ候はん、能く、御思慮あるべし』

と述べて、威嚇する所あり、辨論數次、信睦、終に、要領を得ずして、引き取る、左れども、朝命は、違背すべからず、慶篤を初め、執政等、協議の結果、

『勅書を返納するに就ては、當家の名義を、立てざるべからず、それには、勅命に依りて、公邊へ、相納むべしとの證書を取つて、奉還すること、然るべし』

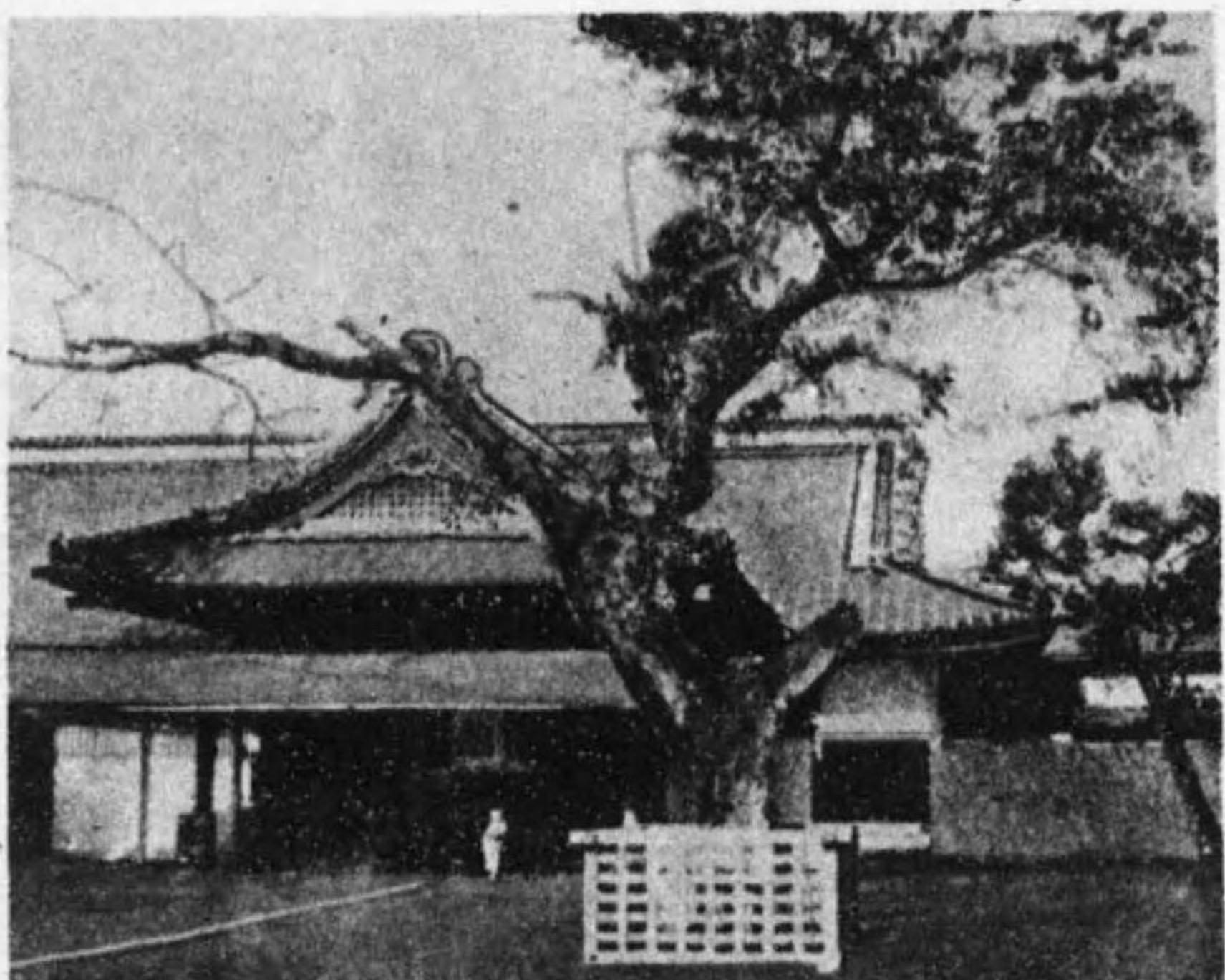
と言ふに決す、時に、勅書は、水戸に送りて、城中の祖廟に納めらる、因りて、側用人横山甚左衛門を、水戸に遣はして、持ち還らしめんとす。

間、延期の許可を受く。

明くれば、萬延元年正月三日、大介、中納言慶篤に謁して、勅書返納の不可を諫め、越えて六日、信睦の邸に到りて、

弘道館址

弘道館址は今其一部を存して私立幼稚園の保育所となる徳川齊昭の家臣を説諭せし處



再び返納の猶豫を求む。

既にして、

幕府の督促、

甚だ急なり、

正月十六日、

慶篤、執政

白井織部、

目付中山庄

左衛門、徒

目付國友忠

之助等を、

水戸に下し

て、重ねて、

勅書を、持

水戸の藩論は、俄然として、沸騰せり、久木直次郎等の一派は、専ら返納論を唱へ、金子孫二郎、高橋多一郎等は、當時、幽囚中にも拘はらず、盛んに、非返納論を唱へて、同志を鼓舞す、藩中、直次郎等を、鎮派と唱へ、孫二郎等を、激派と稱す。

激派の志士吉成恒一郎、林忠左衛門、鯉沼伊織、大關和七郎以下、水戸の城外、二里餘の長岡驛に、屯集するもの百餘人。

『今、若し、勅書を奉還せんか、當家は、累世、尊王の大義を壊り、幕府は、天下統轄の大權を失はん、我等、報國の至情として、袖手傍觀することあるべからず、宜しく、勅書の國境を出づる時、之れを奪還すべし』

と意氣捲き、大道に「大日本至誠至忠楠公の標」と大書せる木柱を建て、弓銃を備へて、江戸と、水戸との通路を、遮ぎる。

執政肥田大介は、非返納説を懷く、十二月二十六日、江戸に上り、安藤對馬守信睦の邸に到りて、人心の鎮靜するまで、暫時、勅書の返納を、猶豫せられんことを請ひ、五日

ち還らしめんとす。

長岡に屯集せる志士、大に憤慨し、旗幟を立て、篝火を焚きて、頻りに聲勢を張る。

側用人戸田銀次郎等、來りて、懇諭すれども、盡く、逐ひ返して、命を奉ぜず。

水戸に幽居せる前中納言齊昭、深く一藩の運命を憂ひ、藩士を、弘道館に召集し、手書を下して、曉諭する所あり、藩論、是れより、漸く返納説に傾く。

勅書を返納せんか、水藩の聲望、忽ち、地に墜ちん、勅書を返納せざらんか、違勅の嚴譴、必ず、頭上に落つべし、聲望をも墜さず、嚴譴をも蒙むらざるの道、唯、一あり、大老斬除の密謀、是に於てか、俄然として、歩を進む。

一一八 斬奸の經畫

大老斬除の密計は、夙に、水戸、薩摩の志士の間、經畫せられて、互に、意氣投合すれども、兎角に、時機、未だ熟せず。

水藩激派の首領金子孫二郎、高橋多一郎の、自邸に幽閉せ

られてより、同志の夜深に乗じて、密に、來談するもの、少からず、終に、二月二十日前後を以て、實行するに決す。

會、前中納言齊昭の勅書返納の事を、藩士に曉諭せし結果、鎮派の勢力、頓に、加はるや、激派の憤慨、言ふべからず、

『論言、汗の如し、一たび下れる勅書を、再び返し奉つるの道理あるべからず、事の此に至れるは、畢竟、井伊掃部、安藤對馬等、二三奸吏の私心に出づるもの、決して、朝廷の本旨にあらず、若し、勅書を、奸吏の手に附せんか、君家副將軍の名義は、是が爲に、汚辱せられん、假令、主命と雖も、從ひ奉つるべきにあらず』と唱へて、大に爲す所あらんと欲す。

二月十二日、執政杉浦羔二郎、登城の途中に於て、銃撃せられしも、幸ひにして、中らず、越えて十四日の夜、側用人久木直次郎、亦、退城の途中に、要撃せられて、微傷を受く、二人は、俱に鎮派の首領なり、藩廳に於ては、

『此度の暴舉は、勅書返納に反對する者共の致すところ、必定、金子、高橋等の指圖に、相違なからん』

と思惟し、孫二郎、多一郎の二人を、評定所に召して、捕

縛せんとす。

二人、同志の密告に依りて、早くも、之れを知り、十八日の夜を以て、各、自邸を、脱出し、孫二郎は、斬奸實行の爲めに、江戸に赴き、多一郎は、舉兵密議の爲めに、大阪に向ふ。

長岡に、屯集せる志士等、二人の危急を聞きて、之れを救出せんと欲し、林忠左衛門以下、十八九人、此夜、密かに、水戸に、馳せ向ふ。

紺屋町に到る頃、執政島居瀨兵衛等、五隊の鎮撫兵を率ゐて、長岡に向ふに遭ふ、忠左衛門等、此れと衝突して、奮闘し、双方、互に、死傷あり。

藩廳、益々兵を發して、志士を鎮壓せんとす、長岡の志士、力、敵せずして、散じ去る。

幕府、多一郎等の脱走せるを聞きて、警戒する所あり、若し、他領に出づる時は、速かに、捕縛すべき旨を命ず。

左れども、事、既に晩し、此命令の出でたる時には、孫二郎以下、既に來りて、江戸に居るもの、二十餘人。

孫二郎は、神田佐久間町岡田屋きん方に投じ、他の志士は、

思ひく、諸所の旅亭、又は妓樓に潛む。

既にして、孫二郎は、三田の薩州藩邸内有村雄介の宅に移る、斬奸の密謀は、是より、愈々歩を進めり、三月朔日に至りて、

『明後三日は、上巳の嘉節なれば、井伊大老は、必ず、御祝儀として、登城せん、宜しく櫻田門外に於て、要撃すべし』

と決し、孫二郎、自ら筆を執つて、其條々を記す。

志士の意氣、俄かに振ふこと百倍、大老の首級、既に、我手に在るの想ひあり。

一一九 櫻田門の活劇(一)

此處は、櫻田門の外。

繽紛たる風雪を衝きて、三々伍々、此處に來り集まる武士、二十人ばかり。

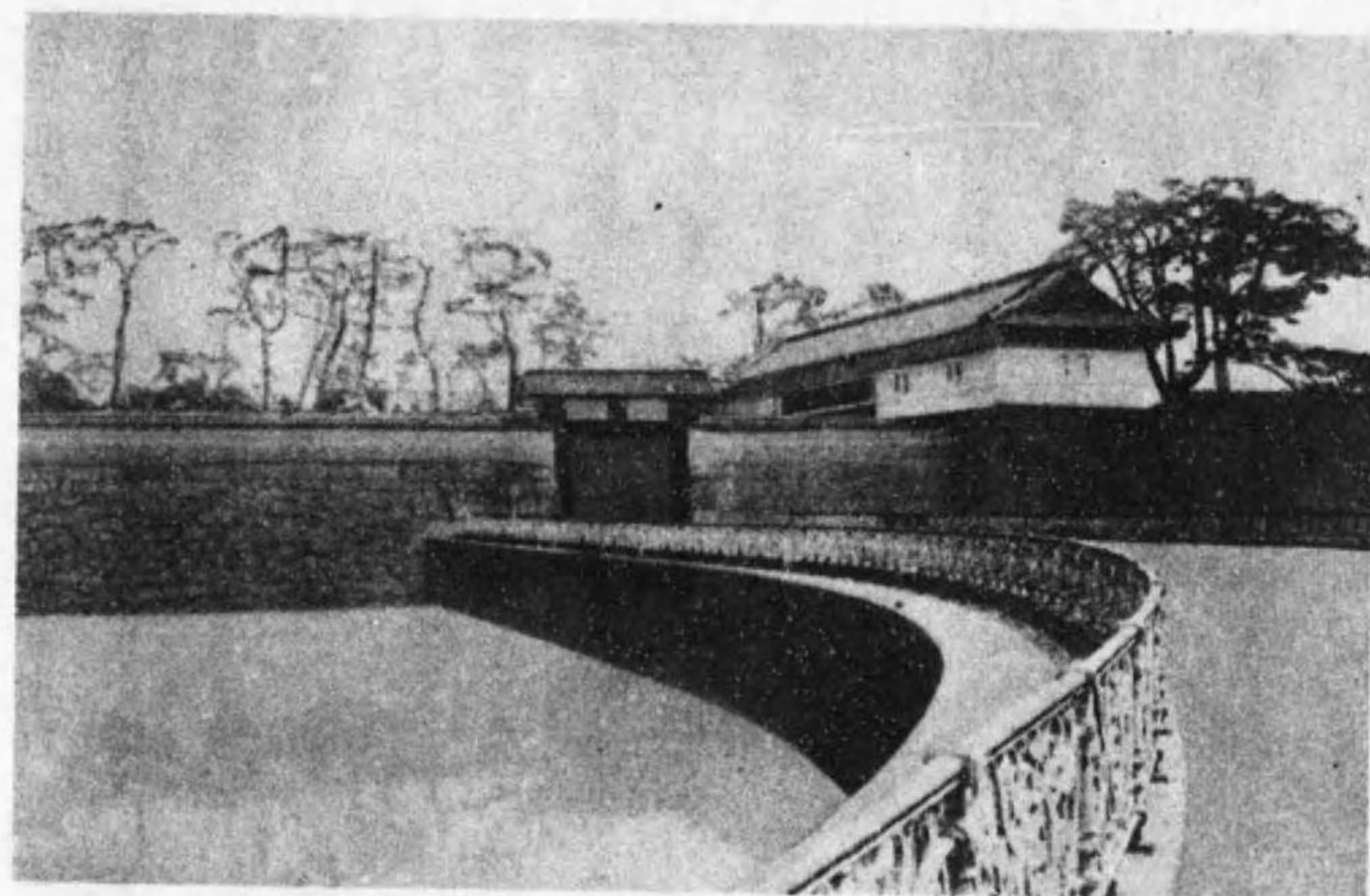
路傍の露店に息ひて、濁酒を傾くるもあり、餅を摘むもあり、同勢らしくもあり、らしくもあらず。

武士は、雪を賞づる狀にてもなく、其眼は、兎角に、赤門

の方に、向き勝ちなれども、

櫻田門

櫻田門は江戸城の南門にして外櫻田、日比谷、霞ヶ関、虎門等に出づるの口なり井伊直弼の邸は此門外に在り



『今日は、上巳の嘉節なり、定めて、諸侯登城の光景を見んとて來れる人達ならん』

と思へば、誰一人、怪しむものもなく、訝かるものもなし。櫻田門の正面は、杵築侯松平大隅守の邸にして、往來に沿うて、

長屋あり、其西手なる皂角河岸に、赤門あり、これぞ、井伊掃部頭直弼の邸。

頓て、辰の刻の太鼓、撃々として、城中より、響き渡れば、参賀の諸侯、之れを合圖に、何れも、登城を急ぐ。武士の中には、武鑑を繰りて、諸侯の道具と、見較ぶるもあり。

上杉彈正大弼齊憲の行列も過ぎ、尾張攝津守義比の行列も、過ぎ去れる頃ひ、彼方の赤門の扉、忽ち、左右に開く。

『扱は、井伊大老の登城ぞ』

と思ふ間もあらせず、五六十人の同勢、主人の駕籠を擁して、早や、門外に、現はれ出づ、何れも、頭には、笠を戴き、身には、赤合羽を纏ひ、刀の柄には、油紙、羅紗などの袋を掛けて、濕氣の侵すを防ぐ。

直弼の行列は、降り積れる雪を、踏みしだきて、次第々々に、進み來る。

露店の武士は、其れと見るより、一人起ち、二人起ちて、何時しか、盡く、立ち出づ。

八九人は、濠端に沿うて、右手より進み、他の八九人は、

松平邸の塀に沿うて、左手より進む、合羽を著るもあり、著さるもあり、傘を翳すもあり、翳さぬもあり。

降り杳る雪の中にも、下にくとの聲は、聞えて、直弼の行列は、益々近づき來る。

頓て、松平邸の地下水のあたりに來るや、忽ち、一人あり、辻番所の傍より、突と、躍り出で、

『御願ひの候』

と言ひつゝ、訴狀を捧げんとす。

直弼の供頭日下部三郎右衛門、供目付澤村軍六の二人、斯くと見るより、ツカ／＼と、進み近づきて、

『何事なるぞ』

と問ひ掛くる折しも、サツと、笠を捨て、羽織を脱ぎさま、スラリと、一刀を抜くより早く、イキナリ、三郎右衛門に、斬り付く、白鉢巻に、襷十字の打扮、見るからに、凜々し。

『素破や、曲者ぞ』

と驚く途端、一聲の銃聲、高く響くと齊しく、左右の武士、亦、一齊に、合羽を脱ぎ捨て、太刀を抜き連れて、勢ひ鋭く、襲ひ掛かる。

活劇は、此に始まり、これぞ、水戸の志士關鐵之介、齋藤監物、稻田重藏、山口辰之助、鯉淵要人、廣岡子之次郎、黒澤忠三郎、佐野竹之助、蓮田市五郎、森五六郎、大關和七郎、森山繁之介、杉山彌一郎、岡部三十郎、廣木松之介、増子金八、海後瑤瑤之介、薩摩の志士有村次左衛門の十有八人。

IIIO 櫻田門の活劇(二)

抑々此十八士は、各々一身を擲つて、時の大老を除かんと欲するもの、前夜は、品川の青樓相模屋に會して、最後の訣宴を開き、今朝、芝の愛宕山に勢揃ひして、此處に來る、滿地の風雪、天も、亦、此舉を助くるに似たり、諸士、皆、快を叫ぶ。

既にして、敵人、門を出で、諸士、地を蹴つて起つ、右より進めるは、關鐵之介を、先頭として、佐野竹之介、大關和七郎、廣岡子之次郎、森山繁之介、海後瑤瑤之介、稻田重藏の面々、左より進めるは、黒澤忠三郎、有村次左衛門、山口辰之介、増子金八、杉山彌一郎、鯉淵要人、蓮田市五

郎、廣木松之介の面々にして、岡部三十郎は、斥候の任に當り、齋藤監物は、戦列の外に在り。

訴狀を捧ぐる振りして、眞先に、奥前を斫りしは、森五六郎、一發、奥中に放てるは、黒澤忠三郎、これを機として、左右齊しく、奮ひ進み、一手の志士は、早や、奥前の槍を、奪はんとす。

直弼の従者は、皆、柄袋の爲めに、妨げられて、急に、刀を抜くこと能はず、五六郎、此隙に乗じて、一聲、ヤツと、日下部三郎右衛門の前額に、斬り付け、續いて、澤村軍六を、大袈裟に斬り下ぐ。

鮮血、見る／＼、雪を染めて、殺氣、忽ち、天に迸しる。接戦は、早や、右にも起り、左にも起り、前にも、後にも起りて、各々雪を蹴りつゝ、奮ひ戦ふ、劍尖、相觸るゝところ、憂々、鳴つて、聲あり。

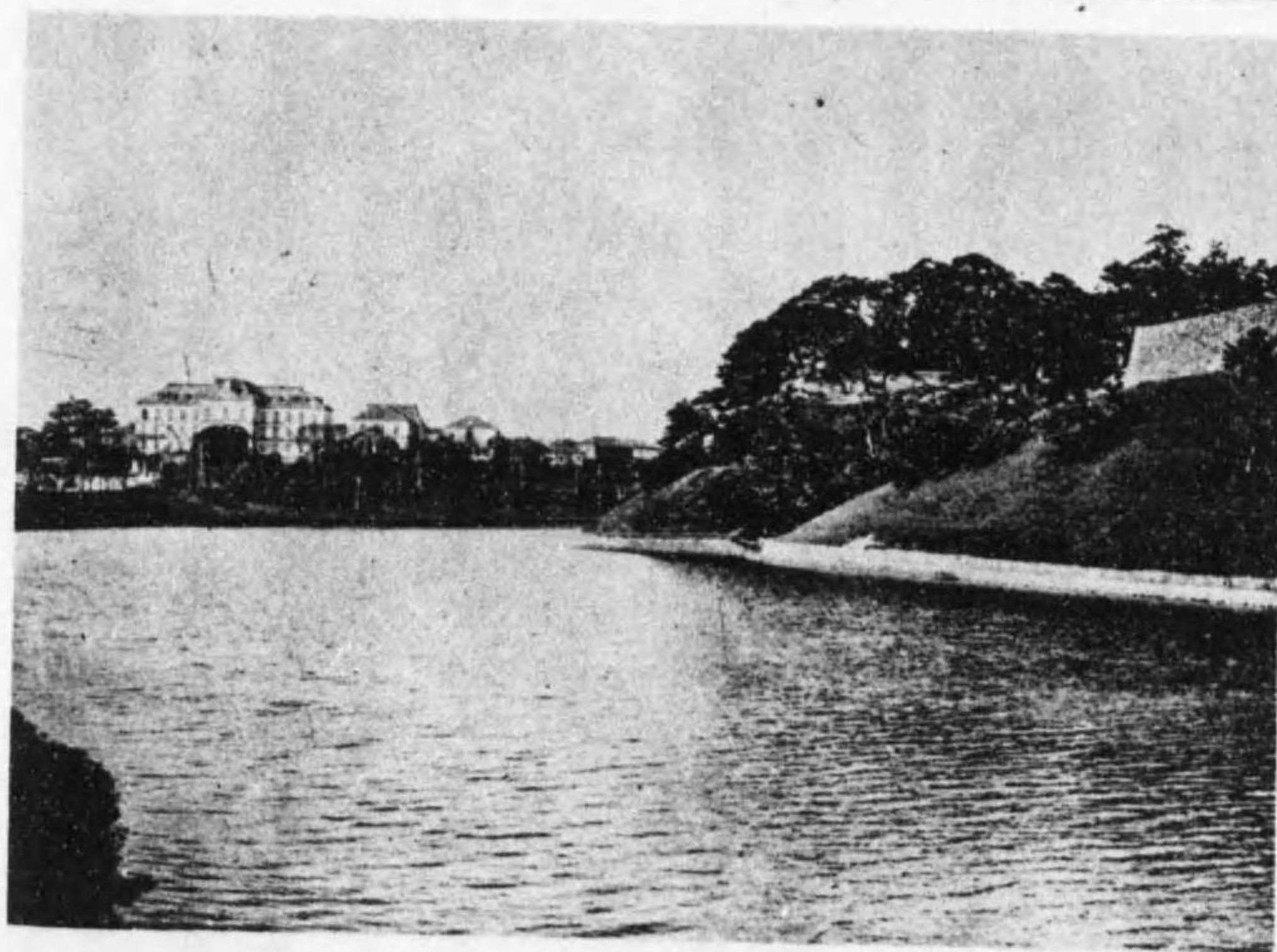
監物、此有様を見て、心血、爲めに湧き、亦、刀を揮うて、斬り入る。

直弼の従者は、動搖せり、槍持も逃げ、足輕も逃げ、武士の中にも、逃げ隠るゝものあり、勇士の面々は、彼方、此

方に、別れ戦ひて、直弼の奥側、人、漸く疎なり。

外櫻田

此は櫻田門外の外櫻田にして左方の建物は參謀本部なり井伊直弼の邸は此處に在りしもの



重藏、子之次郎、嵯峨之介、竹之介の面々、それと見るより、驚き、地に、駕籠を目掛けて、馳せ來る。直弼の供目付川西忠左衛門、兩刀を揮うて、防ぎ戦ふ、

鋒尖鋭利、重藏をも傷つけ、子之次郎をも傷つく。

左れども、怨み重なる志士の鋒尖、更に鋭く、左右より、斬り込み／＼、難なく、忠左衛門を斬り倒す。

奥丁は、既に逃げ失せて、唯、駕籠のみ、主と奥に、地上に在り。

重藏、猛然として、馳せ寄り、イキナリ、太刀を執つて、ズブリと、奥中に、突き込む。

嵯峨之介、亦、馳せ來りて、奥中を刺すこと、二たび。

竹之介も、亦、飛び來りて、同じく、奥中を、刺し貫く。

次左衛門、猿臂を伸ばして、グイと、直弼を、引摺り出だす、數創、身に在り、左しも剛氣の直弼も、身體、既に弱りて、氣息、亦、奄々たり。

首を取るは、次左衛門の任なり、一刀、其襟を斫り、再刀、其首を落し、劍尖に突き刺して、一聲高く、

『井伊掃部頭を、討ち取つたり』

と叫ぶ、其聲、松平邸へまでも、響き渡る。

本望は、既に達せり、左れども、戦ひは、未だ止まず、雪は、尙も、降りまさる。

一一一 櫻田門の活劇(三)

敵首、既に、我手に落つ、諸士の悦び、如何ばかりぞ。

次左衛門、先づ、凱歌を奏して、日比谷門の方に向へば、子之次郎も、亦、是れと俱に、引き揚ぐ。

直弼の家臣小河原秀之丞、重傷を負うて、雪中に倒る、忽ち、

『井伊掃部頭を、討ち取つたり』

と呼はる聲を聞きて、ガバと、刎ね起く、前方を見れば、一首級を、刀尖に、突き刺して、立ち去るものあり、これぞ、紛ふ方なき主君の首。

秀之丞の怒氣、忽ち、心頭より迸る、憤然一聲、

『主人の敵、逃がさじ』

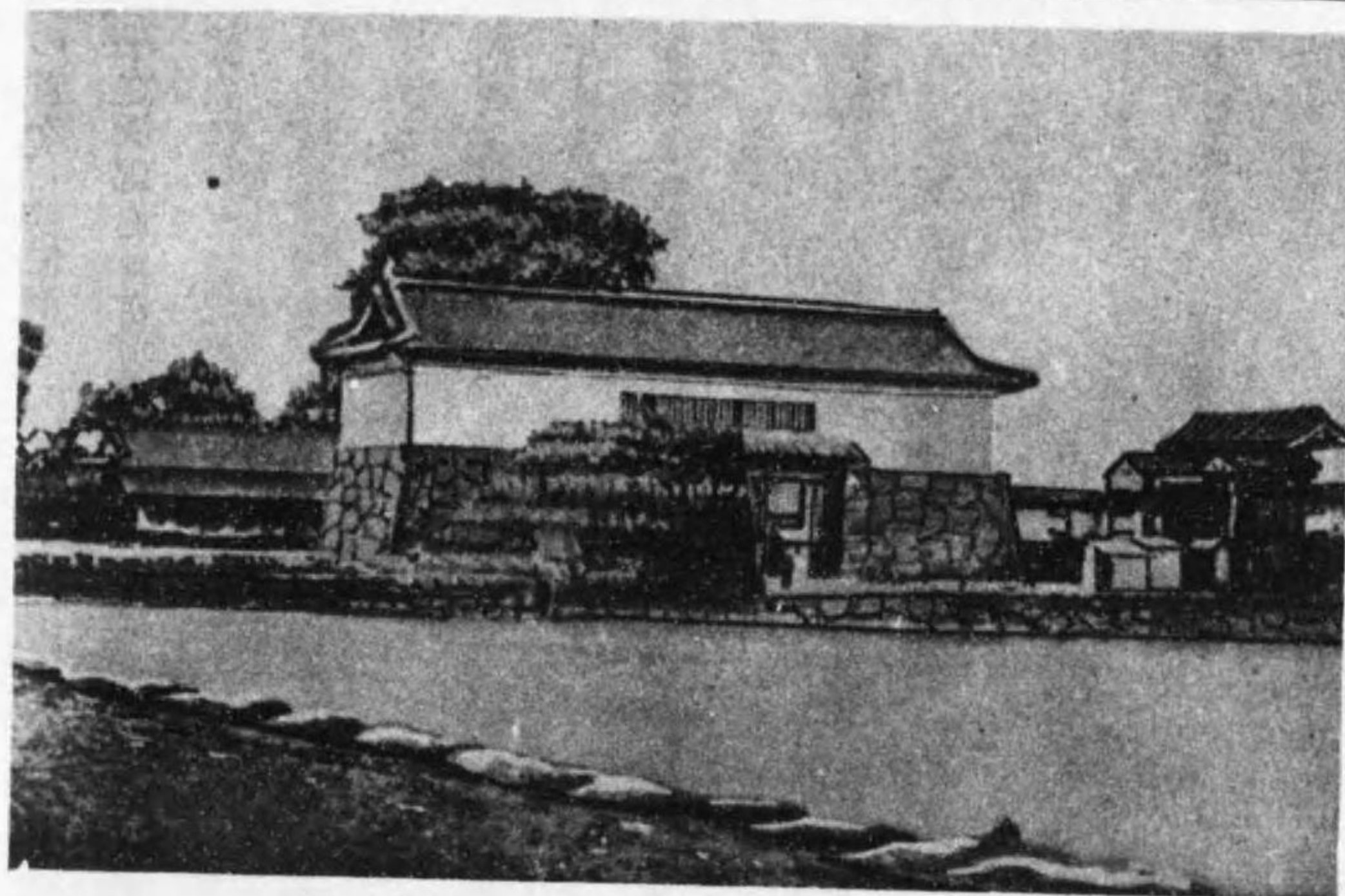
と言ひさま、痛手を忘れて、スタ／＼と、逐ひ掛け、長州侯毛利大膳大夫慶親の邸邊に到つて、追ひ付き、聲をも掛けず、イキナリ、次左衛門の頭部を、目掛けて、ハッシと、斬り付く。

次左衛門のアツと叫べる聲に驚き、子之次郎、屹度、背後

を振り返り、己れと言ひさま、サツと、刀を揮へば、秀之

日比谷門

日比谷門は江戸丸ノ内の日比谷に在り浪士の此門より出で、逃走せしもの此れは其頃の日比谷門なり



丞、又も、
バタリと、
地上に倒る。
此間に、辰
之介、要人、
五六郎、彌
一郎、繁之
介、瑤璣之
介の面々、
二人を逐ひ
越して、日
比谷門を出
で、北に折
れて、馬場
先門の前を
過ぐ。
和七郎、亦、

逐ひ付き来り、俱に進んで、林大學頭俤の邸前に到る。

辰之介、重傷を負うて、歩行すること能はず、終に、路傍に於て、自殺し、要人も、亦、同じ所にて、自盡す。

和七郎、五六郎、繁之介、彌一郎の四人は、瑤璣之介に、先だちて進み、和田倉門前なる閑老脇坂中務大輔安宅の邸前を過ぎ、肥後侯細川越中守齊護の邸に到りて、自訴す。

監物、市五郎、忠三郎、竹之介等も、亦、續いて去り、八重州河岸に到れば、辰之介と、要人との自殺するあり、諸士、愴然として、過ぎ去り、後見職田安中納言慶頼の邸に、自訴せんとし、尙も、進んで、田安門の方に向ふ。

監物の傷、重くして、歩すること能はず、乃ち俱に、脇坂中務大輔安宅の邸に、訴へ出づ。

瑤璣之介は、獨り後れて進む、偶々次左衛門、子之次郎の逐ひ来るあり、其重傷にして、歩行に艱むを見るより、先づ、去つて、姿を没す。

次左衛門、子之次郎の二人は、辰の口を過ぎて、一ツ橋の方に向ふ、若年寄遠藤但馬守胤統の邸邊に到れば、次左衛門、後頭部の傷、烈しくして、歩行すること能はず、直弼

の首を、傍に置きて、屠腹す。

子之次郎も、亦、重傷に堪へず、姫路侯酒井雅樂頭忠顯の邸前に於て、自刃す。

其他、鐵之助も去り、三十郎、松之介、金八の面々も、亦去る。

獨り重藏のみは、奮闘、最も力め、終に、重傷を負うて、現場に斃る。

直弼の從者、即死するもの四人、深手、浅手を負ふもの、十七人。

戦闘、既に終りて、死屍、途に横はる、看來れば、櫻田門外、血、櫻の如し。

一三三 櫻田門の活劇(四)

井伊邸は、目と鼻との間に、在れども、未だ此變事を、耳にせず。

會々一人の仲間、宙を飛んで、馳せ歸り、息も絶えくに、急を報ずれば、居合はす面々、それと言ひさま、手にく、鐵砲、槍、棍棒などを携へて、バラくと、駈け出づる

もの、五六十人。

馳せて、門外に出づれば、ハタと、主人の駕籠の歸り来るに逢ふ。

「殿は、御無事に在はしますか」

と問へば、否などの答へ、諸士、赫と怒りて、其儘、現場へと、馳せ付く。

人は居れども、皆、見物の者ばかり、當の敵は、影さへ見えず、淋漓たる鮮血、四邊に満ちて、吹き来る風も、腥し。

斯かる所へ、上下著けたる一士、馳せ来りて、制止すれば、何れも、悄々として、其儘、引き還る、井伊邸よりは、釣臺を昇き来りて、死者を運び、傷者を扶け歸る、散亂せる腕の、拾ひ取られしもの、總て四本。

後に、赤合羽を著たる旅人體の死骸、唯一つ、空しく、雪中に横はる、是れぞ、志士の一人稲田重藏。

頓て、是れも、井伊邸に運ばれて、其家臣が怨みの刃を受く。

主人は、歸り来れども、首はあらず、井伊家の當惑、言ふばかりなし、折柄、若年寄遠藤但馬守胤統の邸前に於て、

自殺せるものあり、其側に、餘分の首、一個ありしと、聞くより、

『これぞ、正しく、殿の御首、疾く、受け取り来よ』と薙めきつ、三浦清記、横川又太郎の二人、馳せて、其場に到れば、首は、早や、胤統の邸に、運ばれて、其處にはあらず。

二人、眞逆に、主人の首とも言ひ難く、家臣加田九郎太の首と稱して、引渡しを求む。

左れども、遠藤邸にては、公邊へ、届け出での後なれば、私には計ひがたく、檢視を受けて後、始めて、引渡す。

主人の首級、事なく、歸り來れば、藩醫岡島玄達、胴に縫ひ合せて、棺中に納む。

左れども、公邊の内命に依りて、秘して、喪を發せず、直弼の名を以て、差出せる届書の文面、左の如し。

今朝、登城掛け外櫻田御門外松平大隅守門前より、上杉彈正大弼辻番所迄の間にて、狼藉者、鐵砲打掛け、凡そ二十人餘り、拔連れ、鶴を目掛け、切込候に付、供方の者共、防戦致し、狼藉者一人、討留め、其餘、手疵、深

手等負はせ候に付、悉く、逃去申候、拙者儀、捕押方、指揮致候處、怪我致候に付、一と先、歸宅致候、尤も、供方、手負死人、別紙の通に御座候、此段、御届申達候、以上。

三月三日

井伊掃部頭

(別紙)

深手	日下部 三郎右衛門
手疵	片桐 權之丞
即死	河西 忠左衛門
同	澤村 軍六
手疵	櫻井 猪三郎
同	小河原 秀之丞
同	柏原 德之進
即死	加田 九郎太
同	永田 太郎兵衛
手疵	草刈 歟五郎
同	松居 貞之進
同	荻原 吉次郎

言ふべからず。

『主君、既に、討たれ給ひし上は、頓て、御改易とならんこと、疑ふべからず、主にも、扶持にも、離るゝ我等、思ふ存分、當の敵の水戸を討つて、故主の怨みを、霽らし参らせん』

とは、一同の心、期せずして、一致せるところ。

領邑世田ヶ谷を初めとして、上野の天明、下野の佐野等の農民、亦、變を聞きて、陸續、馳せ來るもの、五六百人、邸中の混雜、名狀すべからず。

井伊家の處分は、幕府の最も苦慮せるところ。

『掃部頭は、擁立の功ありて、水戸は、一門の親あり、井伊を潰さば、其家臣、必ず、水戸を仇とせん、若し、干戈を執つて、相戦ふに及ば、爲めに、此兩家を滅ぼすのみならず、延いては、天下の大亂を、惹起さん、知るべからず、寧ろ、彌縫の策を取らん、若かず』と言ふに決す、直弼の横死を秘して、負傷の體となせしも、全く、此方針より出でしに外ならず。

其翌四日、井伊家の家老岡本半介、取次頭取柏原隼人の二

右の内、小河原秀之丞は、翌四日、越石源次郎、岩崎德之進は、六日を以て、死す、井伊家家臣の死するもの、總て七人。

井伊家の始末

幕府の祖法、諸侯、及び麾下の士の不覺悟にして、横死せるものは、皆、其祿を沒收し、其家名を斷絶す。

井伊掃部頭直弼の身首、處を異にするや、其家臣の憤恨、

人、閣老内藤紀伊守信親の邸に到り、一書を捧げて、犯人を引渡されんことを請ふ、願旨、固より、許可すべきにあらず、即日、附箋の上、却下せしと雖も、其儘、捨て置き

ては、衆心、一層、動搖せんこと、疑ふべくもあらず。此日申の刻、御小納戸頭取鹽谷豊後守を、上使として、井伊邸に遣はし、病氣御身舞として、朝鮮人參十五斤を賜ひ、一方、水戸中納言慶篤に對して、其登城を停む。

五日、内藤紀伊守信親、特に、井伊家の公用人宇津木六之丞を召して、

『跡々の儀は、厚き思召も在らせられ候儀に付、末々に至るまでも、一同、安心罷り在るべし』

との旨を諭し、七日には、又若年寄酒井左京亮忠毗、側御用取次藥師寺筑前守元眞の二人を、上使として、氷砂糖一壺、鮮魚一折を賜ひ、且つ、犯人は、國法を以て、處分すべき旨を、諭す。

左れども、在國家臣の激昂、尙、止まず、憤然として、出府するもの、少からず。

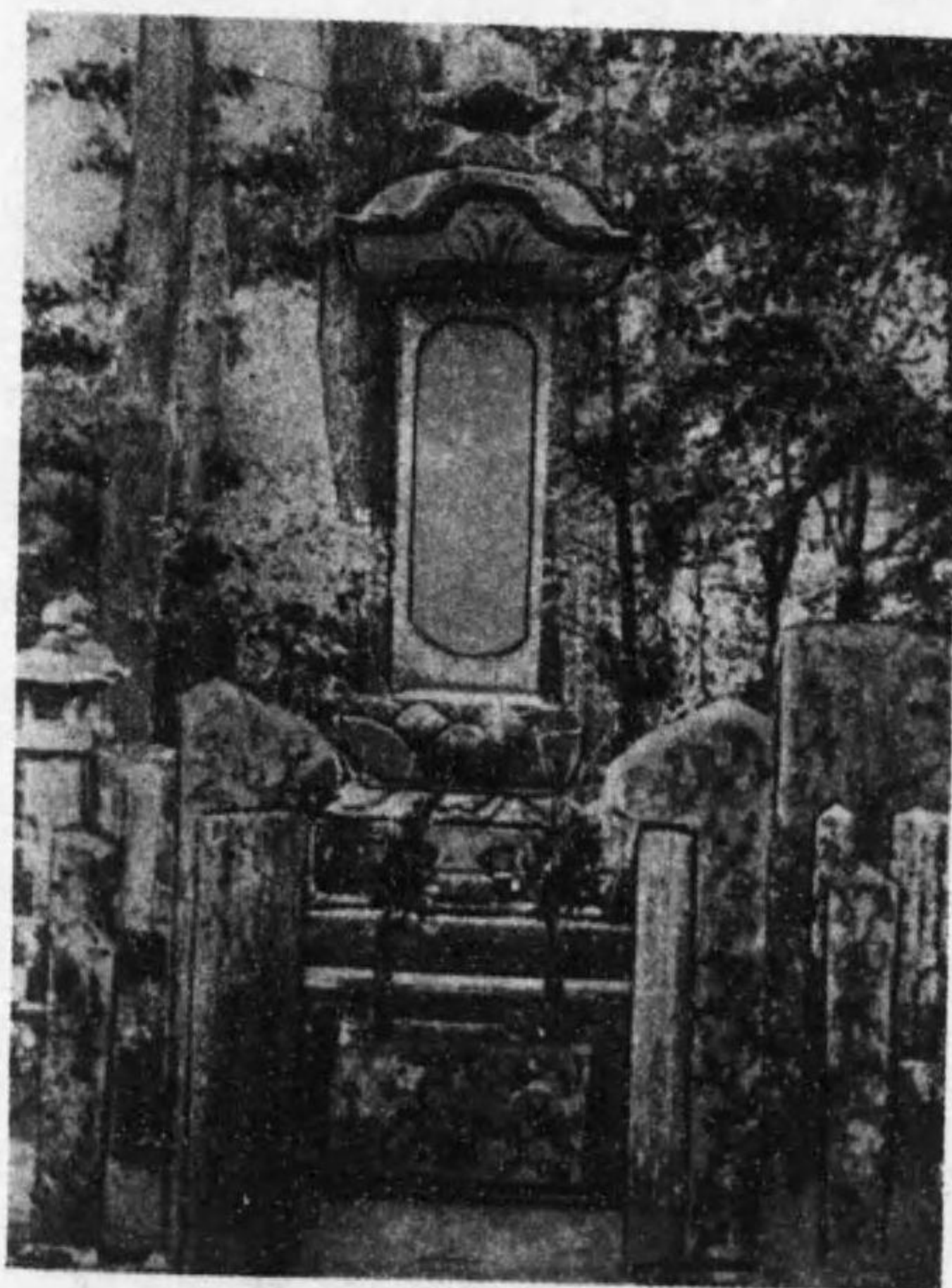
幕府、百方、慰撫に力むれども、直弼の、白晝、其死屍を、

大道に横たへたるは、世人の、皆、知了する所、流石に、永く、不問に附し去りがたく、三月晦日、終に、御役御免の台命を傳へて、大老の職を免ず。

在職の儘、卒去の取計ひあるべしとこそ、思ひ居たれ、是れは、又一同の意外に出づるところ、彦根の家老木俣清左衛門は、之を聞きて、憤慨止まず、閏三月七日付を以て、

井伊直弼の墓

東京市世田谷區世田谷町豪徳寺に在り



當三月三日、登城掛けの節、掃部頭儀、外櫻田御門程近にて、浪士輩に、切害に及ばれ候節、降雪、咫尺を辨せずとは、申しながら、供方の者、追防不行届の仕合せ、

僅かばかりの浪士共、假令、如何様の浪籍に及び候とも、即時に、壓捕勿論の儀に候處、其儀に及ばず、僅か一兩人討留め、其餘、取逃し候段、當家の恥辱、誠に以て、申譯之なく、恐入り奉り候、其上、前文御届、掃部頭名前にて、申上げ奉り候段、不吟味千萬、恐入り奉り候。

との書を呈して、正當の沙汰あらんことを、請ふに至る。左れども、幕府、固より、採用せず、此月二十一日、重ねて、味噌漬鯛を賜うて、慰問す。

越えて晦日、井伊家に於ては、愈々直弼の喪を發し、四月九日、世田ヶ谷豪徳寺に葬むる、其遺領は、滞りなく、嗣子愛磨に賜はりて、井伊家の跡始末は、一先づ、此に其局を結べり。

二四 志士の處分(上)

櫻田の變事ありし翌四日、幕府、閣老松平和泉守乘全、寺

社奉行松平伯耆守宗秀、勘定奉行山口丹波守直信、町奉行池田播磨守頼方、同石谷因幡守穆清等を、評定所の掛りとして、此事件を、裁斷せしむ。

細川家へ自訴せし大關和七郎、森五六郎、杉山彌一郎、森山繁之介の四人は、其儘、同家へ預けられ、尙、脇坂家へ自訴せし佐野竹之介、黒澤忠三郎、蓮田市五郎、齋藤監物の四人も、亦、改めて、細川家へ預けらる。

竹之介は、肩先、左腋、其他に、大小四創を蒙りて、脇坂邸に死せしも、其儘、他の三士と與に、細川家に送らる。細川家の待遇は、最も懇切を極む、猶、元祿年間の赤穂義士に於けるが如し。

評定所に於ては、五日より、翌月に掛けて、諸士を、訊問すること、八九回。

事、水戸前中納言齊昭の意に出づるを疑ひ、其手掛りを得んと欲して、嚴訊、勸説、頗る力む。

左れども、諸士は、一々、非認して、其口に乘らず、皆、『我等は、自訴狀、及び別紙、素懷痛憤書に掲ぐる如く、唯天下の爲めに、斬奸の舉に出でしのみ、何ぞ、他人の

指喉密囑を受けんや』

と斷言し、意氣、昂然として、屈せず。

三月八日、監物、創を疾んで、細川の邸に歿す。

翌九日、和七郎以下六人、富山侯前田大藏大輔利聲、外四家に、分預せられ、四月二十一日、更に、足利侯戸田七之助忠行、外四家に、預け換へらる。

七月十二日、忠三郎、亦、疾んで、攝州三田侯九鬼長門守隆義の邸に逝く。

後に残れるは、大關和七郎、森五六郎、杉山彌一郎、蓮田市五郎、森山繁之介の五人、訊問、疾くに終結せるも、同志の未だ、縛に就かざる者あるを以て、尙、宣告を下すに及ばず。

他の同志の消息は、如何。

高橋多一郎、其子莊左衛門の二人は、中仙道を経て、三月六日、大阪に赴き、薩摩の兵、來り著するを待つて、義舉を、京攝の間に擧げんと欲す。

然るに、薩摩の藩情一變して、復た一兵の來り會するあらず。多一郎、志望、蹉跎して、痛恨、已まず、尙、同志金子孫

二郎の來るを待つて、後圖を議せんとす、計らざりき、孫二郎、亦、逮捕せられんとは。

孫二郎は、櫻田の事件に、加はらず、京攝の義舉に加はらんと欲して、三月三日、有村雄介と與に、三田の薩邸を發し、品川鮫洲の料亭川崎屋に於て、櫻田の消息を待つ。

隨行の一員佐藤鐵三郎、親しく、其實況を目睹し、馳せ歸りて、首尾よく、本望を達せし旨を報ず。

孫二郎、大に悦び、雄介、鐵三郎の二人と與に、西上の途に就く。

九日、伊勢の四日市に著す、會々薩摩の藩吏、追跡し來りて、雄介を捕へ、併せて、孫二郎、鐵三郎の二人をも捕ふ。土山驛に到りて、孫二郎、鐵三郎の縛を解きしも、尙、兩刀を、還附せず。

二人、乃ち藩吏と與に、西行し、十一日、伏見に著して、薩藩の邸に入る。

幕吏の警戒、嚴重にして、身を置くに所なし、孫二郎、暫く、難を西國に避けんとす、十五日、其未だ發せざるに先だちて、伏見奉行所の手に、捕はる。

一二五 志士の處分(下)

高橋多一郎父子、大阪に在り、金子孫二郎の捕に就くを聞くや、

『今は、事、復た成すべからず、加ふるに、幕府の探索も、亦、嚴密なり、暫く、身を潜めて、時機を待つに、若かず』

と決し、密に、泉州に往きて、河内の志士田中楠之助に頼ること數日、又大阪に還りて、生國魂神社の祠官島男也の家に匿る。

既にして、幕府の物色、益々急なり、三月二十三日、雨を冒して、住吉に避けんとす。

大阪町奉行所の捕吏十數人、既に來つて、門外に在り。

多一郎父子、悠々、其前を濶歩して、口繩坂を下り、又引返して、源正寺坂を過ぎ、秋の坊北隣の茶亭、春日屋に入りて、傘を借り、草鞋を求む。

捕吏、亦、追跡し來れども、水戸藩士の勇悍に、聞き怖ぢして、敢て、進み迫らず、附近の男子、十五歳以上のもの

を、狩り集めて、其四方を圍む。

多一郎、終に、逃がるべからざるを察し、イキナリ、短刀を抜きて、腹に、突き立つ、亭主、大に驚きて、

『ヤレ待ち給へ、此處で死なれては、迷惑至極に候』と止むれば、多一郎、

『實にも、申す通りなり、然らば』

とて、突と、立ち上り、其子莊左衛門と與に、此處を去つて、天王寺の北門に入る。

捕吏、復た追尾し來り、四方の門を鎖して、其逸出を拒ぐ。多一郎父子、大黒堂東隣の寺侍小河欣司兵衛の宅に到りて、主人に對面し、

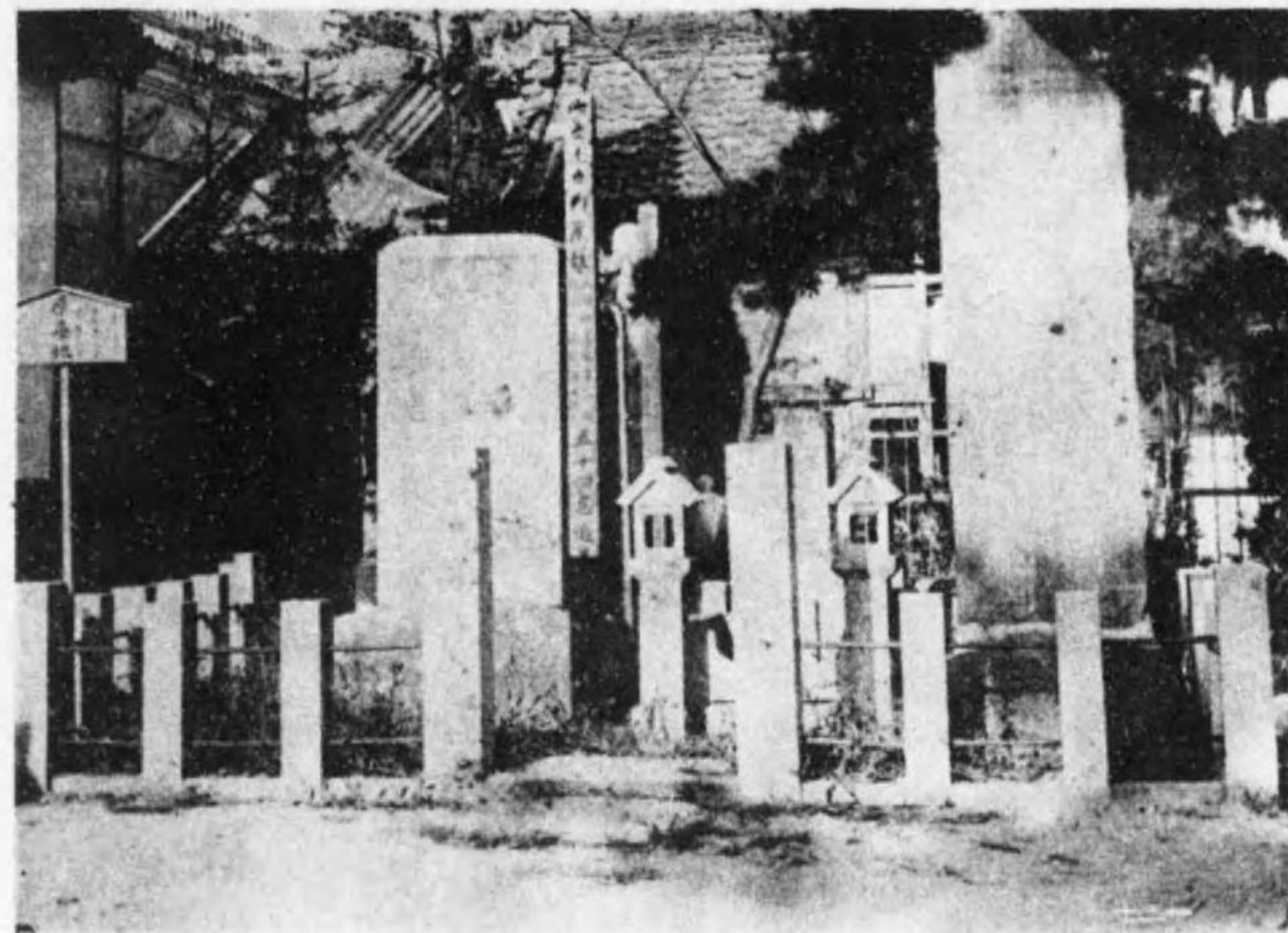
『御人品を、見込みて、御頼み申したき一事の候、我等は、元と、水戸の藩士にして、櫻田の義舉を、企てたるもの、捕方に圍まれて、遁がるゝに由なく、此處にて、自殺仕つらんと存するなり、武門の好誼、此儀、許され候へ』

と頼めば、欣司兵衛、義氣あり、快よく、諾して、父子を、一室に延く。

多一郎、腹部の血を、指に染めて、何事かを、障子に書せんとす、血液、指に含まず、乃ち筆硯を請うて、懷中せる

高橋父子の墓

高橋多一郎及び其子庄左衛門の墓は常陸國水戸城西の常磐原に在り後年歸葬を許されて此處に葬る



半紙に、辭世の詩歌を認め、

『これに

金子の候、

死後は、

當寺へ、

我等父子

の石碑を、

建立せら

れたく、

若し、又

伴、見苦

しき死を

仕つらば、

御介錯の

程こそ、願はしう候へ』

と頼み置き、從容として、屠腹す。

莊左衛門、時に、年、纔に十九、欣司兵衛、其弱年にして、死するを惜み、切に、押し止むれども、聞き入れず、亦、辭世の和歌を口吟みて、自殺す。

西町奉行所の同心浦上光五郎、東町奉行所の同心平山新太郎の二人、父子の死體を、受取りて歸る。

伏見奉行所に捕へられたる金子孫二郎、佐藤鐵三郎の二人は、爾後、鞫問せらるゝこと再三、閏三月五日、幕府の命に依りて、江戸に送られ、孫二郎は、白杵侯稻葉伊豫守觀通、鐵三郎は、一の關侯田村磐次郎通顯の邸に、預けらる。此年七月二十六日、孫二郎は、大關和七郎、森五六郎、杉山彌一郎、蓮田市五郎、森山繁之介の五人と與に、死刑に處せられ、鐵三郎は、其罪を赦さる。

又現場より、逃走したる關鐵之介は、岡部三十郎、及び二三の同志と與に、姿を變じて、大阪に赴き、京攝の義舉、蹉跎せしを聞きて、失望し、單身、因州に、薩摩に、赴きしも、皆、容れられず、一旦、故郷に歸り、去つて、越後

雲母温泉に潜伏中、捕吏の爲めに、捕へられ、文久二年五月十一日、江戸に於て、斬に處せらる。

三十郎は、大阪より、江戸に還り、吉原に、潜伏中、捕縛せられ、大關和七郎等と同時に、斬せらる。

廣木松之介は、現場より、板橋に通れ、中仙道を経て、京都に入り、更に、越前、能登を経て、越後に赴く、尋で、此地を去り、各所を経て、相州鎌倉に赴き、大町の日蓮宗上行寺に入りて、僧となる、文久二年三月三日の夜、他の同志の刑死せるを想ひて、獨り、生を偷むに忍びず、竟に、屠腹して死す。

増子金八、海後瑤璣之介の二人は、現場を脱して、諸所に潜伏し、王政復古の世變に逢ひて、刑を免かる。

當時、世人、多くは、直弼の死を、快として、諸士の舉を壯とし、稱へて、人は武士、花は櫻田と謠ふに至る。

上行寺に、廣木松之介の石碑を建立したるは、實に我等の一言に基づく。

今より二十五六年前、圖らずも、知人の宅に於て、上行寺の住職野中郭雄と會す、其時、我等、

『上行寺は、櫻田烈士の一人廣木松之介の自刃したる遺蹟なり、其墓もあらんに、何とて、大なる石碑など建てて、表彰せられぬぞ』

と言へば、郭雄、指を丸くして、ニユツと突き出しつゝ、

『此れが要りまする』

と答ふ、我等、

『其は無論なり、有志者に謀り見給へ、其位の金員は、立ちどころに集まらん』

と激勵すれば、郭雄、唯一言、

『へい』

と答へしばかり、一向、氣の無さうなる態度なりき。

其後、數ヶ月を経たる頃、途中に於て、ハタと、郭雄に行き逢ふ、彼れ、

『何時やら、お話のあつた廣木の墓は、見當りたれば、其事蹟をも、取り調べ、早速、建碑の事を、上村大將に謀りしに、其れは好い事なり、是非遣り給へ、石碑の文字は、我れ揮毫すべしと申さる、建てますよ、いよいよ』

と語りて、顔色、欣々如たり、定めて、有志者の賛助をも得たるものならん。

其後、又途中にて、行き逢へるに、郭雄、

『有りがたう、お蔭さまにて、建碑も、愈々出来上り候』

と述べ、丁寧に、叩頭して、過ぎ去る。

此れにて、鎌倉の史蹟、又一つ殖ゆ。

一二六 大老歿後の幕閣

井伊大老歿後の幕閣は、松平和泉守乗全、久世大和守廣周、内藤紀伊守信親、脇坂中務大輔安宅、安藤對馬守信睦の五人を以て、組織せられ、復た、別に、大老を置かず。

信睦は、安政六年十二月二十四日、閣老間部下總守詮勝の罷められたる後を承け、廣周は、直弼の歿後、萬延元年閏三月朔日を以て、再び閣員に列せしもの。

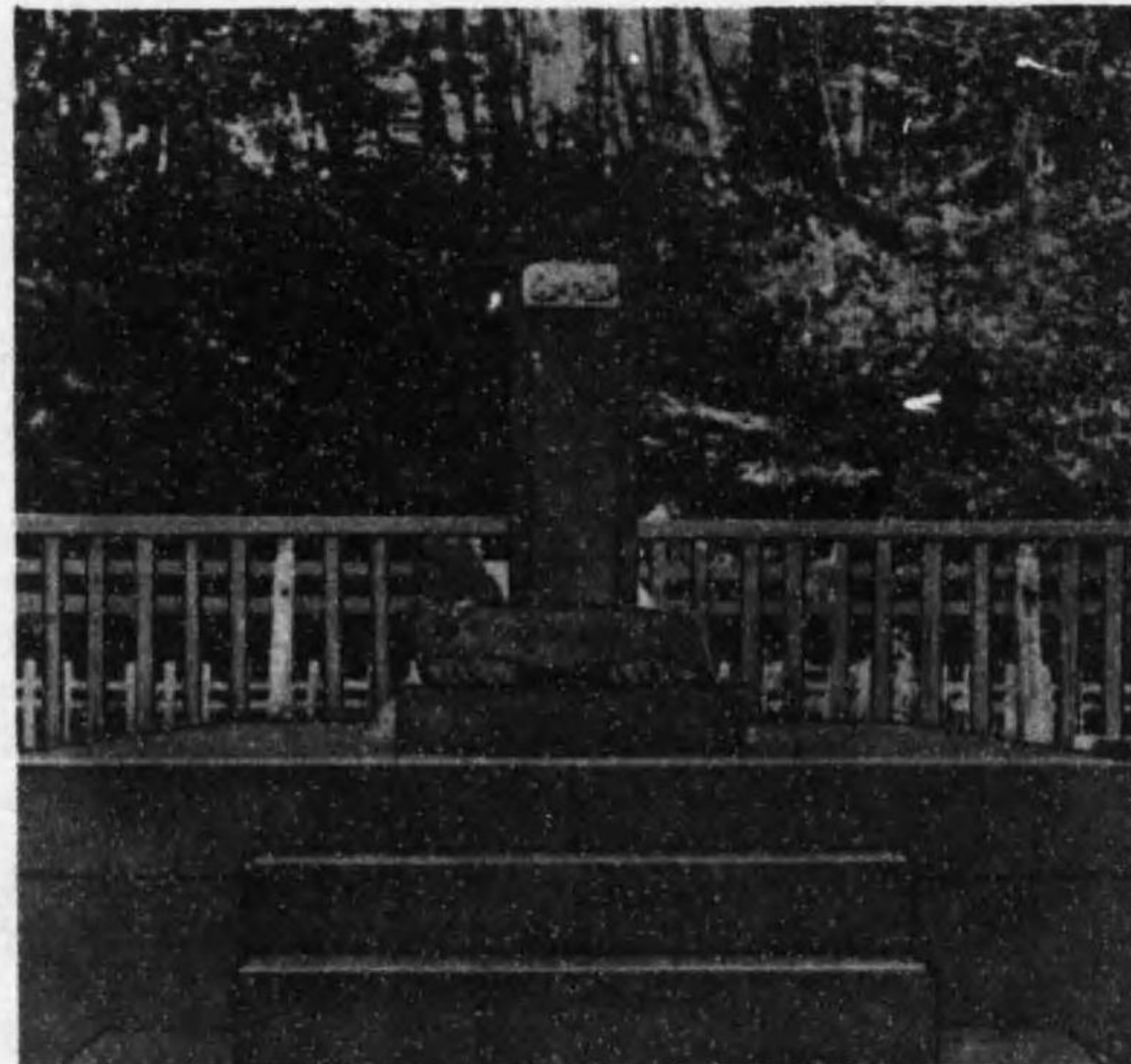
幕府有爲の諸吏は、概ね、直弼の在職中に、免黜せられ、現に、其職に在るものは、碌々、爲すに足るものあるなし。獨り、信睦、最も材幹あり、後進の士なりと雖も、幕府の

實權は、寧ろ、其手に在り、諸般の政策、多くは、直弼の方針を踏襲して、改めず。

安石、出でずんば、蒼生を奈何、時事、益々非にして、天下、皆、安石の出づるを望むの時に方り、一時、世に、安

徳川齊昭の墓

徳川齊昭の墓は常陸國水戸市の瑞龍山に在り此處は水戸藩侯累世墳墓の在る處



石視せられたる水戸前中納言齊昭、此年八月十五日、胸痛、再發して、猝かに薨ず、享年六十一、

私に、烈公と諡す。

幕府、其喪を發するに先だちて、其永蟄居を免し、尋で、尾張前中納言慶勝、一橋刑部卿慶喜の謹慎を解く。

齊昭、一意、尊攘の説を唱へて、天下に呼號すること多年、志士、皆、瞻仰すること、泰斗の如し、晩年、攘夷の實行すべからざるを、覺知せりと雖も、騎虎の勢、之れを制するに由なく、徹頭徹尾、其主義を以て、進行するの止むなきに至り、爲めに、最も井伊大老の敵視する所となりて、終に、兩雄並び立たざるの勢を、馴致す。

然れども、其宗家を重んずるの心、深きは、他人の遠く及ばざるところ、飽までも、其支持を力めんとす。

然るに、井伊大老の政策、上下の嫉視する所となり、民心、寢やく、幕府に離叛するの時に際し、直弼は、志士の鋒刃に斃れて、幕府の威望、益々地に墜ち、尋で、齊昭、亦、二豎の兇手に倒れて、幕府の支柱、忽ち、碎くるの觀あり。齊昭、薨じて後、水戸の志士は、益々奮起せり。

『尊攘の大義は、先君の遺志なり、之れを繼紹し、之れを實行せざるものは、先君の敵なり、天下の敵なり』

と揚言して、盛んに、同志を糾合し、或は、横濱を襲撃せんことを企て、或は、攘夷の先鋒たらんことを請ふに至る。

左れども、盛名ある齊昭、既に薨じて、復た之れを羈束し、之れを牽制するものなく、時勢は、滔々として、尊攘の説に傾むくこと、猶、洪河の堤を決して、横流するが如く、江戸も、京都も、

『方今の世、攘夷を唱へざるものは、人にして、人にあらず』

と言ふの形勢となり來れる折りしも、端なく、皇妹降嫁の問題、起りて、又も、世論の沸騰を、促がし來る。

一二七 和宮の降嫁

抑々皇妹の降嫁は、井伊掃部頭直弼の遺策なり。

『今や、處士横議を逞しうして、頻に、京都を動かさんとす、季孫の憂は、顚輿にあらずして、蕭牆の内に在り、幕府の禍、亦、攘夷にあらずして、公武睽離の上に存す、尊攘の徒、若し、縉紳の輩を動かして、公武を離間せば、幕府は、終に、存立を失ふに至らん、今日の要務は、公

武の合體を計るに在り、公武の合體を計るは、皇妹の降嫁を請ひて、朝幕の親縁を結ぶより、善きはなし、此事成就せば、義に於ては、君臣なりと雖も、親に於ては、舅婚なり、攘夷の命も、自から弛ばん、干涉の煩も、自から絶たれん、幕府の爲めに計るに、此れに優れる良策あるべからず』

とは、實に、直弼の畫策せるところ、曩に、九條關白尙忠に、其意を通ぜしも、未だ其實行を見るに及ばずして、難に遭ふ。

閑老久世大和守廣周、安藤對馬守信睦の二人、直弼の歿後、尊攘論の氣焰、益々熾盛を加ふるを見て、憂慮に堪へず、

『實にも、今日の形勢は、皇妹の降嫁を、請ひ奉つりて、公武の親和を計り、東西の形勢を、一變するの外はあらず、掃部頭の考慮、其理に當れり』

と決し、京都所司代酒井若狹守忠義を以て、九條關白尙忠に請ひ、尙忠、更に、其旨を奏し奉つる。

皇妹、御名は親子、和宮と稱し奉つる、弘化三年五月十日の誕生にましく、御年、正に十五、既に、有栖川熾仁親

王と、御婚姻の御約束あり。

主上、此婚約を破るを好ませ給はず、皇妹、亦、遠く關東に下るを、望ませ給はず。

幕府、此由を聞きて、心を痛め、上臈姉小路局は、橋本大納言實久の妹にして、皇妹の御生母觀行院の叔母に當るを幸ひ、旨を含めて、周旋せしむ。

尙忠の家臣島田左近、亦、忠義の旨を受けて、九條、久我、高倉、千種、富小路の諸卿を、勸説し、尙、寵妃衛門内侍、少將内侍を以て、内廷に、運動する所あり、其勢力、漸く加はる。

有志の士、早くも、此事を、漏れ聞きて、大に憤慨し、

『大樹の皇妹に尙せんとするは、僭上なり、至尊を瀆し奉つるものなり、特に、此事、一たび成らば、名を公武の合體に假りて、勅諭の奉行を、憚るに至らん、攘夷の事、行ふべからず、尊王の實、擧がるべからず』

との旨を以て、縉紳公卿の間に、勸説し、諸卿、多くは、之れを容れて、異議を唱ふ。

岩倉侍從具視は、夙に、公武一和の主義を、懷くもの、獨

り、

『皇妹降嫁の御事は、其例あり、正徳五年九月二十五日、

靈元天皇第十七の皇女八十宮を以て、有章院殿に、御許嫁あらせ給ひたることは、世の人の知れるところ、未だ御入興に及ばずして、大樹の薨去に逢ひしと雖も、既に、此先蹤ある上は、皇妹の降嫁を以て、至尊を瀆し奉つるものとは謂ふべからず、抑々朝幕の隣離は、國家の不利にして、民人の不幸なり、宜しく、公武の一和を、計らざるべからず、皇妹の降嫁は、公武の楔子なり、其一和を致すの道、之れより善きはなし』

との意見を懷き、寵妃衛門内侍に依りて、密に、主上に、内奏し奉つる、内侍は、實に、具視の妹なり。

千種少將有文も、亦、皇妹降嫁の得策なるを説く。

此事、主上の御心に染まらずと雖も、天下の爲めを、思召されては、一概にも、排斥せさせ給はず、尙忠を召して、

『和宮は、既に、有栖川家に、内約ありて、他に許すべきものにあらず、唯、此事、天下泰平の基とあらば、敢て、彼の約を變じて、此願ひを許すまじきものにもあら

ず、其れに就けても、先づ、關東の決心を、聞き定め置くべき要あり、抑々和宮の降嫁を許す時は、凡そ幾年を

期して、攘夷の實を擧ぐべきぞ』

と問はせ給ひ、尙忠、其趣を、所司代に傳ふ、幕府は、毛頭、攘夷を實行すべき心あらず、唯、此結婚に依りて、攘夷の責任を免かれ、京都の干涉をも、免かれんと欲するに外ならず、左れども、此場合、若し、否々と言はゞ、此事、成就すべくもあらず、乃ち所司代を以て、

『今より七八年、乃至十年の間には、必ず、武備を整へ、海防を修めて、攘夷を仕つり候はん』

との旨を答へ奉つる、主上、今はとて、許させ給はんとす、皇妹、聞召されて、亦、

『天下の御爲めには、換へがたし、吾妻へ下り候べし』と宣はせて、勅命に従はせ給ふ。

皇妹降嫁の事、愈々決す、萬延元年十一月朔日、幕府、三家、及び在府諸侯の總登城を命じ、信睦を以て、

『當今の御妹和宮御方、御縁組御弘め、之れを仰出さる、御下向の次第は、來春たるべく、以來は、和宮様と稱し

奉つるべく候』

との旨を達し、廣周、及び若年寄遠藤但馬守胤統を以て、御縁組御用係とす。

當時、内外多事の秋なるにも拘はらず、幕府、力めて、供張を豊かにし、贈遺を厚くし、京都所司代酒井若狹守忠義の手を経て、金一萬五千兩を、諸公卿に頒つ。

文久元年十月十五日、和宮、京都御發興、十一月十五日、江戸に著して、清水家へ入らせられ、十二月十一日、更に、御本丸に移らせ給ふ、文久二年二月十一日、黃道吉日を撰びて、御婚儀を、行はせ給ひ、將軍家茂の御臺所に、据わらせ給ふ、後、靜寛院と申させ給へるは、此御方なり。

越えて十八日、家茂、祝宴を、城中に設けて、大に諸侯を饗し、俱に、能狂言を観る、歡喜の聲、城中に響き渡る。三月十七日、京都所司代に命じて、九條關白尙忠以下十一人、女官五人に、祿を加へ、銀を與へ、皇妹降嫁の事に、斡旋したる勞に酬ゆ。

大禮、既に終る、將軍、直に上洛して、聖恩を謝し奉つるべきの御約束ありと雖も、家茂、敢て、上京せず、是に於

てか、

『これ天朝を欺罔し、皇室を輕侮するもの、其儀、輕からず』

との論、出で、公卿は、憤慨し、志士は、切齒し、終には、

『皇妹の降嫁は、廢帝の奸策に出づ、安藤對馬守は、密に、國學者塙次郎に、古例調査を命じたり』

との誣説さへ起り、甲傳へ、乙和して、之れを信するもの、漸く多く、公武合體の實、未だ舉らず、朝幕睽離の端、先づ開く。

二二八 坂下門の兇變(上)

櫻田門の活劇ありて後、未だ三年ならず、又も、坂下門の兇變あり。

是より先き、萬延元年八月、閣老安藤對馬守信睦、外國事務に專任せられて、銳意、事に當る。

會々普魯西の使節、來りて、通商を請ふ、我れ、既に、英米諸國に許す、勢ひ、普國にも、許さるべからず、信睦、

乃ち外國奉行堀織部正利熙、村垣淡路守範正をして、會商せしむ。

既にして、草案、全く成る、中に、普國、及び獨逸聯邦の名あり、信睦、其關係を知らず、外人の爲めに、欺かれたりと思惟し、衆中に於て、痛く、利熙を叱責す。

利熙、其然らざるを辯明すれども、信睦、容れず、利熙、自ら安んぜず、十一月五日、終に、屠腹して死す。

信睦、自ら事に當り、百方辯難、使節をして、聯邦の名を削らしめ、十八日を以て、調印を行ふ。

條約の破棄、未だ行はれずして、訂約、又新に成る、志士、聞いて、憤慨、止まず。

會々西陲に、一椿事あり、文久二年二月三日、露國軍艦、突如として、對州淺海灣に、入り來り、艦體を修繕すると稱して、碇泊し、或は、大砲を發射し、或は、海底を測量し、或は、關吏を捕殺し、或は、民家を抄掠する等、頗る亡狀を極む、其意、對州を占領せんと欲するもの、如し。幕府、大に驚き、外國奉行小栗豐後守、目付溝口八十五郎を遣はして、應接せしめしと雖も、要領を得ず、露艦の滯

泊、七閱月の長きに及ぶ。

偶々露國艦長の箱館に來るに會ふ、奉行村垣淡路守、此れに對して、談判する所あり、八月二十五日を以て、初めて、對州を去る。

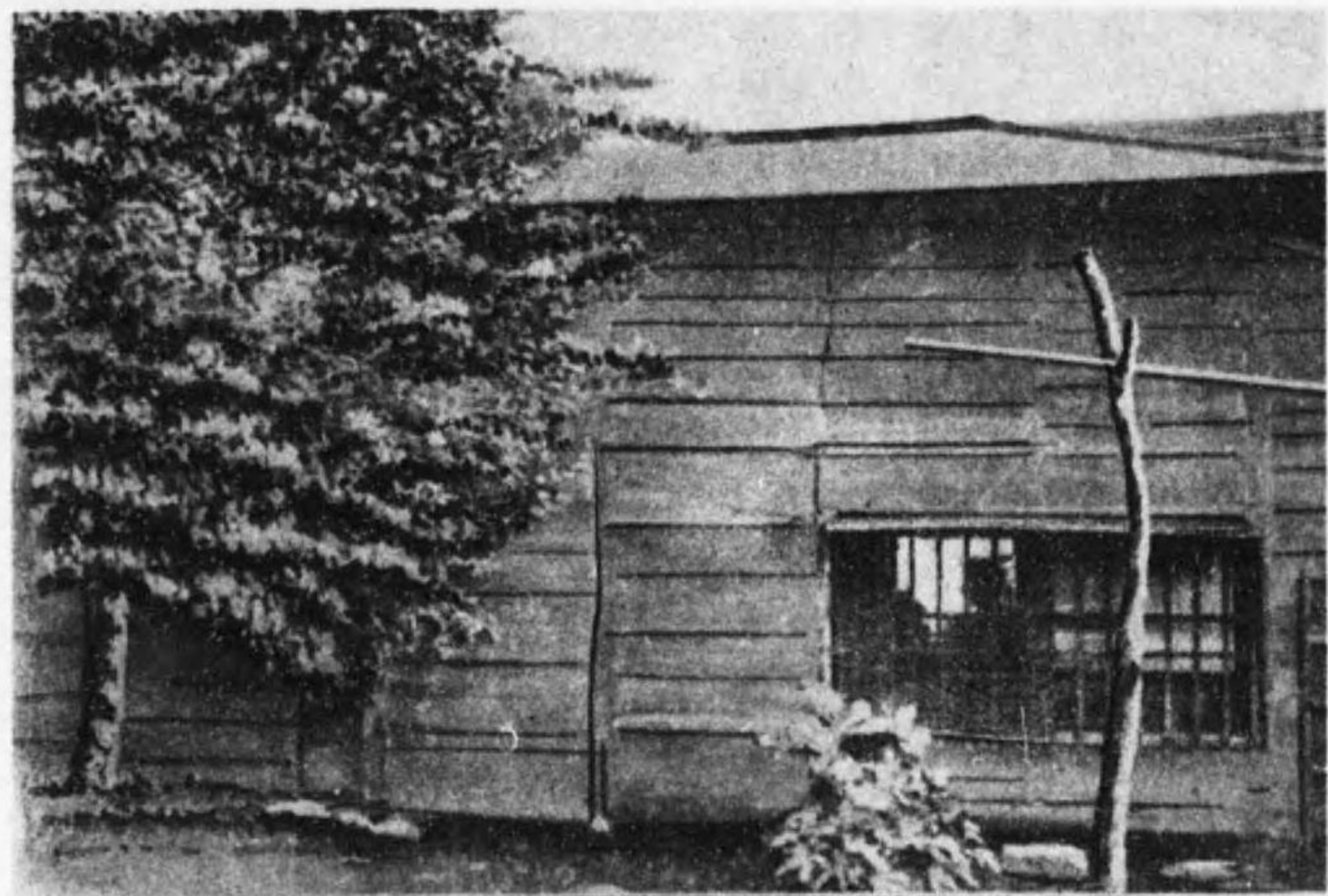
志士、外人の陸梁、此の如くなるを見て、亦、罪を幕府の因循に歸す。

此年七月四日、幕府、又英國船に對して、日本海の測量を許し、同月十一日、英國公使館を、品川御殿山に建築すべき事を許し、十一月朔日、勘定奉行兼外國奉行竹内下野守、外國奉行兼神奈川奉行松平石見守等を、外國に差遣す。

攘夷の氣焰、益々熱烈を加ふるに反して、外交の局面、著著、歩武を進む、是に於てか、志士の外人を敵視するの心、愈々深きを加ふ。

先づ、安政六年六月には、横濱に於て、露國の海軍士官三人を、暗殺せしものあり、萬延元年正月には、高輪東禪寺なる英國公使館に於て、其使丁傳吉を殺害せしものあり、此年十二月には、赤羽根に於て、米國公使館書記官ヒュースケンを、暗殺せしものあり。

特に、文久元年五月二十八日の夜には、水戸の浪士有賀半彌、前木新八郎、榊鉞三郎、渡邊剛藏、山崎權之助以下十人、英國公使を、東禪寺に、襲撃するに至る。



外國人に對する危害、頻々として起り、動もすれば、輒ち事端を醸さんとす、

信睦、其局に當りて、憂念、措く能はず、『老中を殺し、將軍家を弑して、内亂を醸すとも、外國人を殺して、外難を招くこと丈けは、止めたし』と嘆息せしに、何ぞ計らん、其身、亦、忽ちに、坂下門外の危害に、逢はんとは。

二二九 坂下門の兇變(中)

水戸の藩士平山兵介、夙に、慷慨にして、氣節あり、信睦の外夷に親み、條約を結べるを見て、憤懣し、

『井伊、死すと雖も、安藤、尙、在り、櫻田の一舉に、續くものあらずんば、外患、終に止む時なけん』

と思ひ極めて、江戸より、水戸に歸り來り、密に、同志の友小田彦二郎に向ひて、

『今や、安藤對馬守、勢ひを得て、朝旨を蔑如し、公論を無視して、顧みず、一の井伊死して、一の掃部頭、復た出づるの觀あり、金子、高橋等の義舉も、何の効なきにあらずや、我等は、豫てより、國家の爲めに、一命を抛たんと欲するもの、對馬守の頭を斬つて、天下の害を

除かんは、如何に』

と謀れば、彦二郎、言下に、之れを贊して、同志を募る、同藩の士川邊佐治衛門、黒澤五郎、高畑房次郎も、亦、奮うて、此舉に與みず。

會々下野の人兒島強介、事を以て、水戸に來る、彦二郎、又此れに密謀を示せば、強介、大に喜び、

『これ我が望む所なり、歸りて、同志に謀るべし』

と答へ、彦二郎と俱に、宇都宮に歸りて、菊池介司に謀る、介司、亦、直に、同意し、横田藤太郎、及び越後の人川本杜太郎も、亦、同じく、贊加す。

下野の人河野顯三は、堀織部正利熙の臣なり、亦、聞いて、此舉に加はる。

介司の姉婿大橋順藏、夙に、志士の推尊する所となる、介司密に、此事を告ぐれば、順藏、千金の子は、堂に睡らずとの語を引きて、輕舉を戒しむ。

文久二年正月、宇都宮藩士岡田晉吾等、一橋刑部卿慶喜を擁して、事を舉げんと欲す、順藏、其事に坐して、幕吏に、捕へらる。

兵介、此事を聞きて、大に驚き、同志の士に向ひて、『訥庵先生、既に捕はる、我等の密計も、頓て、顯はれん、今は、片時も、猶豫すべからず、疾く、實行せん』と語れば、皆、勇んで、之れを贊し、終に、正月十五日、上巳の賀儀として、登城するの途中に、要撃するに決す。時に、介司は、順藏と同一の罪を以て、捕へられ、強介は、病に臥して、家に在り、藤太郎は、若年なるを以て、故郷下野眞岡に還へして、此舉に加へず。

挺身決死、櫻田の活劇を、再演せんと欲するもの、纔に

實 名 變 名

平 山 兵 介	細 谷 忠 齋
小 田 彦 二 郎	朝 田 義 助
川 邊 佐 治 衛 門	内 田 萬 之 助
黒 澤 五 郎	吉 野 政 助
高 畑 房 次 郎	相 田 千 之 助
河 野 顯 三	三 島 三 郎
川 本 杜 太 郎	豐 原 邦 之 助

の七人のみ、壯士の膽、皆、斗の如し。

既にして、豫期せる正月十五日は、愈々來れり、七士、各々斬奸趣意書と題する一封の書を、懷中し、早朝より、坂下門の外に到りて、信睦の來るを待つ。
蕭々の風は、易水に似たるも、復た、腸を斷たん壯士もあらず。

一三〇 坂下門の兇變(下)

頓て、登城の時刻來る。
信睦、馬場先門内の官邸を出て、坂下門に向ふ、駕籠の前後を、警衛するもの、五六十人。
待ち設けたる兵介、彦二郎、五郎、房次郎、杜太郎、顯三の六人、其近づくを見て、躍り出で、一聲、小銃を放つと齊しく、矢庭に、駕籠を、目蒐けて、突進す。
從者、大に驚き騒ぎ、各々刀を抜きて、防ぎ戦ふ。
兵介等、奮撃突戦、一、以て十に當る。
信睦、逸早く、駕籠を出て、坂下門に、遁げ入らんとす。それと見たる兵介、飛鳥の如くに、追ひ縋り、サツと、刀を揮うて、信睦の背部を斫る。



草履取の小者一人、背後より、馳せ來り、傘杖を以て、防ぎ戦ふ。
信睦、此隙に、坂下門内に、馳せ入る、杜太郎、亦、追ひ
坂下門
此れは江戸城の坂下門にして安藤信睦の浪士の爲めに襲撃せられて逃げ込みし處二重橋の北に在り

撃たんとすれども、及ばず、
流星光底、終に長蛇を逸す。
信睦の從者、六人を、圍み撃ち、忽ちにして、斬殺し盡す。
信睦の家臣原田莊兵衛、小藥平次郎、松本鍊次郎、高澤幸之丞以下、負傷するもの、

總て十人。

佐治衛門、獨り、小一町ばかり、離れて、路上の賈人と、談じつ、信睦の出づるを待つ、偶々銃聲を聞きて、驚き見れば、坂下門外の活劇、既に始まる、

『残念、後れたり』

と叫んで、現場に、馳せ付くれば、敵は、既に、遁れて、味方、盡く、討たる、佐治衛門、頓足すれども、及ばず、
『今は、此處にて、討死せんも、甲斐なし、切めて、斬奸趣意書を、然るべき人に渡して、死せんにかかじ』
と思惟し、櫻田門より出で、長州侯毛利大膳大夫慶親の邸に、馳せ入り、

『桂小五郎殿は、在はさずや、急に、御意得たし』

と申入る、時に、小五郎、他出して、在らず、奥平數馬、出で、來意を問ふ、佐治衛門、

『某は、水戸の藩士なり、今朝、安藤對馬守殿を、討たんとして、期に後れたり、一味のものは、皆、討死せしに、某、獨り、生きて、世にあるべきにあらず、速かに、自殺せんとは存ぜしが、若し、宿意を達し得ずんば、生



前死後の無念、此上あるべからず、小五郎殿は、世に優ぐれたる豪傑とこそ承はれ、我等の爲めに、後事を計ひ
長州の舊邸
此れは江戸の日比谷に在りし長州の舊邸なり明治の初年周防國山口に移して長州藩廳となし廢藩置縣後更に山口縣廳となる

給はらば、一期の幸ひ、此れに過ぎず
と言ひつゝ、
斬奸趣意書を、懷中より、取り出だして渡

す、兎角する内、小五郎、歸り來りて、具さに、仔細を聴き、

『此事、某一人にて、取計ふべきにあらず、上役に告げて、其指揮を請ふべし、暫し、待ち給へ、必ず、自殺せらるべからず』

と諭し、其儘、馳せて、執政の許に赴く、佐治衛門、從容として、數馬と談ず、頓て、其座を立ちし隙を窺ひ、

『捨生欲發滿胸憤、取義要抽一片忠』

との一聯を遺して、潔よく、自刃す、慶親、其義氣に感じて、死屍を、埋葬せんことを、請ひしも、幕府、敢て許さず。

幕府、大に其黨與を、搜索して、兒島強介をも捕へ、横田藤太郎をも捕ふ。

信睦、頬と、背部とに、三創を被り、鮮血、衣を爩して、賀儀を述ぶること能はず、退きて、創を自邸に療す。

此一舉、其目的を達せざりしと雖も、爲めに、攘夷の志氣を、鼓舞せしこと數倍、天下の形勢、是より、益々穩かならず。

一三一 長藩の幹旋(上)

公武合體の事は、幕府の望む所にして、其行ふ所は、盡く、朝幕確執の種とならざるはなし、此形勢を見て、袖手すること能はず、自ら起つて、公武の一和を、圖らんとせしものこそあれ、長州侯毛利大膳大夫慶親、即ち是れなり。

慶親の臣に、永井雅樂なるものあり、其識見、時流の外に超越す、志士の、妄に攘夷の激論を唱ふるを慨し、慶親に對して、意見を呈す、其大要、

『今や、開鎖の論、紛々たりと雖も、是れ、固と、枝葉の説のみ、根本の論にあらず、根本の論とは何ぞ、國體を立てんこと、是れなり。』

國體を立てんと欲せば、宜しく、朝幕、其主旨を一にすべし、公武、其意志を異にすることあるべからず。

凡そ、攻守は、一にして、二にあらず、攻むるの力あるにあざれば、守ること能はず、守るの力あるにあざれば、攻むること能はず。

開鎖の事、亦、然り、鎖すこと能はざれば、開くべから

ず、開くこと能はざれば、鎖すべからず。

日本の國力を充實して、開鎖、俱に、時の宜しきに従うて、實行すべき國勢に達せずんば、鎖も、眞の鎖にあらず、開も、眞の開にあらず。

然るに、公武の間、互に確執し、上下の見、俱に、一和せんずんば、決して、我が國力を、強大ならしむること能はず。

此禍根を顧みずして、徒に、開鎖の論に、區々たるは、是れ、其本を捨て、其末に趨るの業のみ。

字内の大勢は、駸々として、止まらず、日本、亦、速かに、國論を一定して、此氣運に後れざらんことを要す。朝廷は、鎖攘の説を捨てさせ給ひ、幕府は、尊王の實を表せられ、相頼り、相助けて、俱に、國力の伸張を、計らんこと、寔に、今日の急務なり。

冀くば、公武の間に、周旋して、其一和を、計り給はんことを』

と言ふに在り、慶親、此議を是とし、文久元年六月、雅樂に、内意を含めて、京都に遣はし、縉紳の間に、周旋せし

む。

雅樂、直に、京都に上り、正親町三條大納言實愛に謁して、胸中の所蘊を披瀝し、且、一篇の意見書を呈す。

實愛、熟讀再三、大に其卓見に感じ、密に、乙夜の覽に供へ奉つる、雅樂、聞いて、大に悦び、歸りて、此旨を復命すれば、慶親、

『然らば、公武合體の事、必ずしも、行はれざるにあらず、我れ、出府して、公邊に勸むる所あるべし』

其年十月十三日を以て、不時に出府し、十二月八日、一篇の建白書を草して、幕府に捧ぐ。

爾來、數十日を経れども、幕府、何の報ずる所もあらず、慶親、

『我れ、國家の御爲めを存すればこそ、赤心を吐露したるなれ、然るに、其儘に、捨て置かるゝこと、其意を得ず、此上は、親しく、老中に、面陳せん』

と思ひ込み、文久二年二月五日を以て登城し、至急閣老に對面せんことを求む。

一三三 長藩の幹旋(中)

閣老久世大和守廣周、其意に應じて、對面すれば、慶親、肅然として、容を正し、

『慶親、不肖を顧みず、曩に、一片の建白書を捧げて、滿胸の卑見を陳じ候、定めて、御披見あられ候はん。熟々天下の形勢を觀察するに、其變遷の甚だしき、實に、今日の如きは候はず、若し、一大果斷を以て、舊來の弊習を釐革し、國論を一定して、開國の國是を立て給はずんば、國家解體して、復た收拾すべからざるの窮境に陥り候べし。』

これを最近の例に求め候はんに、安藤對馬守殿、曩に、井伊掃部頭殿の後を承けて、外政の局に當られ、其事横、却つて、掃部頭殿よりも甚だしく、爲めに、天下の人心、漸く徳川家を離れんとするの勢ひ、之れあり、鍋島閑叟の内願を経て、退隠したるも、幕府の政務、紊亂して、挽回すべからざるを察し、退いて、自家の富強を経営せんと存するに外ならず、其他の大藩、又各々自國に據ら

んとするの形勢あるもの、亦、皆、政務の宜しきを得ざるに由るものに候。

又和宮様の御降嫁に就ては、關東御著聲後、大樹公、直に御上洛ありて、天恩を謝し奉つらるべき御約束あり、然るに、今日に至るまで、尙、未だ御上洛の仰出されも候はず、是れ天朝を欺罔し、皇室を輕侮するの御振舞として、當今の御逆鱗、堂上方の憤慨、一方ならずと承はり候。

此の如きは、朝廷の不信を招き、民心の離叛を來して、毛利慶親(後改敬親)



上下の信望に背き候もの、徳川家の危急、今日に迫れりと申すも、過言に候まじ。速かに、國

論を定め給へ、速かに國體を立て給へ、斯くして、公武の一和を力め給はゞ、天下の治平を致さんこと、何の疑ふ所か候はん、是れ、誠に一大急務に候はずや』

と陳言すれば、廣周、愕然として驚き、其革新の方針を問ふ、慶親、屹と、其顔を見詰めて、

『今日の時局を拯ふの道は、唯、人を得るに在り、越前春嶽殿を擧げて、大老とし、一橋刑部卿殿を以て、御補佐とし、其他、川路、佐々木を始め、有爲の士を選んで、要所々に用ひ給はゞ、弊政釐革の道は、自から立ち候はん』

と答ふれば、廣周、

『此事、一人にて、承はりがたし、同列一同へ、申聞けられたし』

と述べて、内藤紀伊守信親、本多美濃守忠民を招く。慶親、更に、前説を反覆すれども、誰とて、可否を答ふるものなし、慶親、憤然として、

『幕府、若し、舊習を一洗して、朝廷を尊奉し、人民を慰撫し給はずんば、慶親、亦、天皇の勅命を奉じて、事

を處置するの外は候はず、此儀、曾て薩摩、肥前とも談ぜし事の候』

と憚かる色もなく、陳述すれば、廣周、事の容易ならざるに驚きて、

『如何にも、今日は、姑息苟安の時に非ず、何れ評議の上、相當の處置を執り申さん』

との旨を答ふ、慶親、

『若し、京都の形勢に、御疑念も候はゞ、某の家來永井雅樂と申すものを召されて、御尋ねあるべし、此者、能く京都の事情に、通じ居り候』

と述べ、其家臣永井雅樂を推舉して、退出す。

一三三 長藩の幹旋(下)

幕府も、今は、漸く警醒せんとす、廣周、他の閣老とも謀り、永井雅樂を召して、其意見を叩くに決し、直ちに、召命を長州藩に傳ふ。

長州藩、雅樂の身分輕きを以て、俄かに、其格式を、家老の次席、若年寄に進めて、登城せしむ。

閣老、乃ち雅樂を延見して、其意見を問ふ、雅樂、口ずかり、滔々、其所蘊を論陳すれば、閣老、皆、之れを是とし、京都に上りて、周旋せんことを命ず。

是に於て、雅樂、目付淺野伊賀守一學と與に、三月八日、江戸を發して、京都に著し、正親町三條大納言實愛、中山大納言忠能、岩倉中將具視等の諸卿を、歴訪して、

『今日の急務は、公武の一和を計りて、國是を定め、宇内の大勢を察して、政策を施し、武備の充實を行うて、國威を張るに在り、鎖港の論、攘夷の説の如きは、姑く、之れを後日に譲りて可なり』

と論陳し、蘇張の辯を揮うて、京都の意見を續へさんことを力め、其書面を徴せらるゝに及び、曩に、實愛に呈せし意見書を改刪して、之れを捧ぐ、滔々數萬言、筆端、舌あるに似たり。

當時、攘夷の徒、四方より、京都に來り集まるもの、少からず、長州に於ても、久坂義助、寺島忠三郎、其他、松陰門下の志士は、藩論の佐幕に傾くを慨し、藩地を脱して、京都に來り、雅樂の遊説するを聞きて、憤懣し、

『永井雅樂は、久世閣老の用人杉山一太夫と、友とし善し、其開國論を唱へ、公武合體論を説くは、全く、久世閣老の内囑に由るものなること、疑ふべからず、若し、其説に従はゞ、正しく、幕府の術中に陥るものなり』と説きて、専ら其排斥に力む、諸藩の志士、亦、力を協はせて、奔走すれば、雅樂の運動も、容易に其効を奏せず。斯かる折柄、薩州侯島津修理大夫茂久の父和泉守久光の士卒を率ゐて、上洛するあり、諸藩志士の、久光を擁して、事を舉げんとするもの、陸續、來り集まりて、京都は、忽ち、鎖攘論の淵藪と、化し去る。

雅樂、其形勢の一變せるを見て、事の爲すべからざるを察し、手を收めて、空しく、江戸に還る。

長州藩の幹旋、功を奏せず、薩州藩の活動、尋で始まる。

一三四 薩藩の活動(上)

薩州藩の意嚮も、亦、公武の間に、奔走して、其一和を計るに在り。

安政五年七月十五日、薩摩守齊彬の、疾んで薨ぜんとする

や、其弟久光を、枕頭に招きて、

『我れ、至尊の内囑を蒙り、又幕府の姻戚に連なる、鞠躬盡瘁、王家を輔け奉つり、幕府を安んじて、皇威の振興を計り、征夷の大道を立てんと欲すること久し、然るに、時、未だ到らずして、身、先づ歿すること、遺憾なれ、我が嗣子は、卿の嫡子なり、卿、宜しく之れを輔けて、我が志を紹ぐべし』

との旨を告ぐ、久光、涙を攪つて、命を受け、慨然として、天下を匡濟するの志あり。

西郷吉兵衛、有馬新七等、夙に、諸藩の志士と、交はりて、清川八郎



此れと事を與にせんと欲す、井伊大老斬除の陰謀の如き、實に薩州志士の勸説に基づく所多

し。

然るに、側役小松帶刀、勘定方小頭大久保市藏等は、志士個々の行動を排し、舉藩奉公の主義を執りて、持重して動かず、藩情、爲めに一變す。

出羽の志士清川八郎と言ふものあり、夙に、勤王の志を懷く、文久元年、江戸に於て、人を殺し、追捕急なるを以て、避けて、京都に入る。

中山大納言忠能の家士田中河内介、沈毅にして、果斷あり、八郎、此れと謀り、青蓮院宮の令旨を受くると稱して、諸藩の志士を糾合し、勤王の義旗を翻へして、討幕の壯舉を行はんと欲し、此年十一月十五日、同志安積五郎、伊牟田尚平の二人と與に、忠能の子中將忠愛、及び河内介の書を携へて、熊本に入り、先づ松村大成を訪うて、其同意を得、尋で肥後の轟武兵衛、筑後の眞木和泉守、筑前の平野次郎、豊後の小河彌右衛門、其他の同志を得、皆、九州の錚々たるもの。

是に於て、八郎等、相謀り、薩州侯を擁して、盟主と爲さんと欲し、平野次郎は、曾て西郷吉兵衛、僧月照に従うて、

薩摩に入りし縁故あり、伊牟田尚平は、薩藩の門閥肝付氏の家臣なりしを以て、特に、二人を選びて、薩摩に遣はす。二人、薩境に入るや、關吏、怪みて、之れを拘へ、且、其書類をも押收す。

二人、明かに、其來意を語れば、待遇、頓に改まり、小松帶刀、大久保市藏、有馬新七、柴山愛次郎等の志士、交々來りて、其所思を叩く。

當主修理大夫茂久の父和泉守久光、浪士の激論を喜ばず、藩吏を以て、

『遠來の勞は、多謝に餘りありと雖も、其求めらるゝ所は、深慮を要すべきものありて、勿卒の間に、決しがたし、久しく、淹留あらんこと、却つて、民心を疑はしむるの虞あり、宜しく、速かに、出境せらるべし』

との旨を告げ、旅費として、金十兩づゝを贈る、二人、乃ち薩州を去つて、空しく、肥後に還り來る。

左れども、薩州志士の、藩論の持重を悦ばざるもの、是に至りて、俄然として起ち、天下の志士と與に、事を行はんとす。

公武合體の意見、盛んなるの時、勤王倒幕の萌芽、忽ち、此に生ず。

一三五 薩藩の活動(中)

島津、近衛の兩家、世々、姻戚の關係あり、久光、又支族島津兵庫の女直子を養ひて、近衛前左大臣忠熙の子大納言忠房に嫁せんとす、使者往返の間、時勢挽回の密詔、計らずも、中山家の手を経て、傳へらる。

久光、感激已まず、文久元年十一月、田中尚之助を遣はして、近日上洛すべき旨を、忠房に報じ、十二月、重ねて、大久保市藏を遣はして、

『久光、三州の兵を率ゐて、上洛し、勅命を奉じて、幕政を釐革すべし』

との旨を通ず、忠房、其父の幕譴を得たるに懲りて、躊躇し、書を裁して、其上京を止む、久光、見て、大息已まず、『我國開關以來、未だ會て今日の如き大難に遭逢せしこと、之れあらず、朝廷は、外情に通ぜずして、攘夷を容易なりとし、幕府は、國情を省みずして、外人に親狎す、

上下、否塞して、志士、類に跋扈し、終に、天下の大亂

を、醸成せんとす、先君の遺志を奉ずるの時、今を捨てて、何れの時ぞや、我れ、一身を抛ちて、天下に殉すべし』

と決意し、文久二年三月十六日、江戸田町の藩邸再築の用務に託し、側役小松帶刀以下、麾下の兵千餘人を率ゐて、鹿兒島を發す。

諸國の志士、久光の上洛するを聞きて、之れを擁して、事を舉げんと欲し、四方より、京攝の間に、來り集まるもの數百人、物情恟々、復た戊午大獄前の比にあらず。

京都所司代酒井若狹守忠義、之れを憂ひ、一書を、議奏、傳奏に贈りて、官家は、諸藩に直接せらるゝことあるべからず、八月八日の覆轍を踏まるゝことあるべからず、浮浪の徒、輦下に、事を起さば、直に兵力を以て、鎮壓すべく、決して、憂虞驚動せらるゝことあるべからずとの旨を告ぐ。久光、陸路を経て、豊前に向ふ、肥筑の志士、書を寄せて、意見を陳ぶるもの、少からず、久光、其暴舉、事を誤まらんことを知りて、省せず、令を下して、堅く、志士と通謀

するを禁ず。

小倉より、自國の汽船天祐丸に搭じて發し、四月六日、播州室津に入る、諸藩の志士十二人、久光の旅館に來りて、

『我等は、皇國誠忠の者に候、此度、夷狄誅伐の御思召あるやに承はる、願はくば、我等をも、陣列に加へられ候へ』

と請ふ、久光、其無根なるを諭して、許さず、先發の臣西郷吉兵衛の、志士に通ずるを聞きて、其命令に違ふを怒り、村田新八と與に、本國に、送り還へす。

四月八日、進んで、兵庫に著し、十日、大阪に入る、諸藩の志士、又も久光を要して、幕府の失政を痛罵し、

『幕府の存立は、國家の大害なり、宜しく、大阪、二條、彦根の三城を拔きて、根據とし、大に天下に號令して、海内を掃清し、外夷を殲滅すべし』

との旨を説く、語氣激烈、容れずんば、暴行をも、敢てせんとするの勢あり。

久光、其暴發せんことを虞れ、姑く、其請ひを聞きて、之れを藩邸に收め、奈良原喜左衛門、海江田武次の二人を以

て、

『我れ、先づ、京都に入りて、形勢を察せん、我が一報を得ざる間は、必ず、入京すべからず』

との命を傳ふれば、志士、已むを得ずして、之れを諾す。十三日、久光、従士の一半を留めて、志士鎮撫の任に充て、他の一半を率ゐて、大阪を發し、即日、伏見に著して、其藩邸に入る、會々、

『島津和泉、兵士、及び浪士を率ゐて、京都に入り、所司代を襲撃すべし』

との流言あり、京中の人心、爲に戰兢たり。

一三六 薩藩の活動(下)

京都の形勢は、稍々變化せり、曩に、久光の上京を止めたる近衛大納言忠房、十四日、特に、使者を、伏見の薩邸に遣はして、

『所司代酒井若狹守より、公卿の武家に面接するを止めたるも、泉州にして、構はれざれば、中山、正親町三條の二人と同席にて、面會すべし』

との旨を通ずれば、久光、大に悦び、

『關東の嫌疑の如きは、敢て恐るゝ所に候はず、明後十六日を以て、參候候はん』

との旨を答へて、使者を還へす。

十六日、久光、従兵を率ゐて、上洛し、錦小路の藩邸に入りて、小憩せる後、先づ、所司代酒井若狹守忠義を、其邸に訪ふ。

忠義、戒心あり、病痾と稱して、接見せず、久光、乃ち轉じて、近衛家に向ふ。

當時、九門内は、銃器の携帯を禁ぜらるゝにも關せず、薩兵、皆、武裝して進み、境町御門より、公家御門を、通過して、近衛家の邸に入る、幕吏、怖れて、敢て近づかず。

近衛家には、中山大納言忠能、正親町三條大納言實愛、岩倉中將具視の三卿、來り待つあり、忠房、乃ち此れと與に、久光を延見す、久光、

『今回、某の出府候もの、表面こそ、修理大夫參觀御猶豫の御禮、竝に江戸藩邸再築の指揮の爲めなりと申せ、内實は、公武の御合體、皇威の御振興、及び幕政の御改

革を、建白せんと存するに外ならず、去る安政戊午以來、

幕府、勅諭を奉ぜずして、擅に外國の條約を結び、剩さへ、正義の親王、公卿を始め、一橋、尾張、水戸、越前の一門を幽閉し、其他、有志の諸侯を禁錮し、士庶を流斬する等、其逆政、少なしとせず、人心、爲めに、離叛し、處士、爲めに、激昂し、或は大老を刺し、或は外人を屠るに至り候ひぬ、幕府、之れを憂ひて、其取締を嚴にすれば、彼等、愈々憤激して、終に、容易ならざる大事を企て、皇國の騷亂、眼前に差迫り候、某、其勤王の主旨に反し、外夷の術中に陥いるを虞れて、専ら鎮撫に、腐心せる所に候』

と述べて、志士の陰謀を語り、且、今日に處するの方策として、

一、久世閣老の上京を命ぜらるべき事。

一、栗田口宮、鷹司太閤、近衛左府、鷹司右府の謹慎を解かるべき事。

一、關東に於て、一橋、尾張、越前、土佐、宇和島の謹慎を解かるべき事。

一、九條關白、并に酒井所司代の退去を命ぜらるべき事。

一、關東に於て、安藤對馬守の退役を命ぜらるべき事。

一、一橋刑部卿を御後見、越前中將を大老に任ぜらるべき事。

き事。

等の數項を建言す、忠能、實愛、直に入つて、此旨を奏聞すれば、靛感、斜ならず、

浪士共蜂起、不穩の企之あり候處、島津和泉、取押へ置き候趣、靛感思召し候、別て、御膝元に於て、容易ならざる儀、發起するに於ては、實に宸襟を悩まされ候事に候間、和泉、當地滞在、鎮撫之あり候様、思召し候事。

との命を下して、輦下を守護せしめ給ふ、久光、深く感激して、専ら志士を鎮撫せんとす。

志士、其行動に慊らず、終に寺田屋の事變を、激發するに至る。

一三七 寺田屋の事變(一)

大阪に待てる諸藩の志士は、中山家の家臣田中河内介、其子蹇磨介を始めとして、出羽の清川八郎、江戸の安積五郎、

土州の吉村寅太郎、宮地宜藏、大石團藏、長州の久坂義助、周布政之助、堀眞五郎、品川彌二郎、入江九助、來原良藏、中谷正亮、土屋矢之助、筑前の平野次郎、久留米の大鳥居敬太、川上三郎、眞木和泉守、肥後の松村大成、森武兵衛、川上彦齋、宮部鼎藏、松田重助、山田十郎、佐土原の富田猛次郎、池上隼之助、豊後岡の小河彌右衛門、越後の本間精一郎、備前の藤本津之助、及び薩藩の有馬新七、田中謙助、柴山愛次郎、橋口壯助、橋口傳藏、弟子丸龍助、西田直五郎、森山新五左衛門、山本四郎、柴山龍五郎、西郷新吾、三島彌兵衛、大山彌助、伊集院直右衛門、美玉三平、伊牟田尚平以下二十人、皆、頸を延べて、久光の一報を待つ。

會、筑前侯黒田美濃守齊漣、出府の報あり、同藩の志士平野次郎、斯くと聞くより、薩藩の志士伊牟田尚平と與に、播州に馳せ下り、四月十五日、齊漣を、大藏谷に要して、説くに、志士の盟主たらんことを以てす。

齊漣、其渦中に投ずるを欲せず、疾と稱して、急に引き還さんとす、次郎、重ねて、

『君、若し、今回の義舉に加はりて、勤王の倡首となり給はゞ、天下無比の忠臣と稱へられ給はん、御所勞と稱して、空しく、引き還し給はんこそ、口惜しう候へ、抑々眞の御所勞なるか、ならざるかは、幕府、直に之れを察し候はん、彼れ、若し罰を加へんとし、君、此れに服し給はず、終に、干戈を動かすに至り候はんか、其名、正しからず、其事、順ならず、争かて、勝利を得られ候べきや、若かず、早く勤王の御志を決して、一藩の人心を、鼓舞し給はんには、今や、天下の民心、盡く、幕府を離る、君、若し、蹶然、大事を挙げ給はゞ、靡然として、此れに従ふこと、響の聲を應ずるが如くに候はん、某、君の御爲めに計るに、先づ、使者を、熊本、岡の二藩に遣はして、勧め給はゞ、熊本には、長岡監物あり、岡には、中川土佐、小川彌右衛門あり、是れ、皆、勤王無二の志士なれば、皆、一議もなく、同意仕つらん、三藩、聯合して、事を起さば、久留米、柳河を始めとして、山陽、南海の諸藩も、亦、響應すべく、君、其衆を合はせて、旗を京都に進め給はゞ、大業、手に唾して、成り

候はん、君、之れを容れ給はゞ、某、不肖と雖も、直に

京都に馳せ上り、縉紳列卿に就て、綸旨を申し下し候べし、藩祖龍光公の御遺訓に、草履片足、下駄片足にても、

早きが好しと申させ給へるは、正しく、今日の事にこそ候へ、君、疾く、御志を決し給へ、千載一遇の好機を、失し給はゞ、臍を噬むとも、及び候はず』

と説き勧む、齊漣、益々心に驚き、

『此者、他所に到らんには、如何なる椿事を、惹起さんも、測るべからず』

と思惟し、何氣なく、扈從を命じて、藩地に引還す、大阪の志士、聞いて、望みを失ふ。

會々京都より、消息あり、久光の建議せるところ、公武合體の意見なりと聞きて、益々憤慨措かず、

『今は、濃州も、頼むに足らず、泉州も、亦、頼むに足らず、此上は、我等一同、武裝して、京都に押し上り、九條關白、酒井所司代を襲撃して、勤王の大義を唱へん、諸侯なしとて、何程の事かあらん』

との議、早くも、土州の吉村寅太郎、長州の久坂義助、薩

州の有馬新七、岡藩の小川彌右衛門等の間に成る。

一三八 寺田屋の事變(二)

志士、愈々二十一日を以て、大事を起さんとし、出羽の志士清川八郎、他の同志に先だちて、京都に入る。

長藩の志士久坂義助、亦、此機に乗じて、藩論を一定せんと欲し、品川彌二郎、入江九一等と與に、京都に入り、長藩の家老浦輟負、及び藩邸留守役戸九郎兵衛に説く所あり、二人、異議なく、之れを賛す。

久光、志士の暴發を止めんと欲し、奈良原喜左衛門、大久保市藏、海江田武次等を、大阪に下して、懇諭を加ふると再三。

志士、久光の意見、公武の合體に在り、其建策、亦、回天の偉業にあらざるを慨して、頑として、肯んぜず、各々密に準備を調ふ。

佐土原の志士富田猛次郎、池上隼之助の二人、旅舎の宿泊料を、拂はんと欲するも、囊中空々、一物なし、乃ち藩邸の留守居に就て、金を借らんことを請ふ、留守居、

『彼等は、浮浪の徒と、大事を起さんと企つるもの、必定、其資金に充てんと欲するものならん』

と思へば、固く拒んで、聴かず、急使を飛ばして、宗藩薩摩の留守居に報ず、留守居、大に驚きて、警戒を加へ、横目役に命じて、其虚實を探らしむ。

薩藩の同志有馬新七、橋口壯介等、之れを知りて、事の破れんことを憂ひ、二十日の夜、土州の志士吉村寅太郎等と謀りて、一時、中止するに決し、二十一日の拂曉、土州の志士宮地宜藏を、京師に遣はして、此旨を、久坂義助に通ず、義助、

『弊藩に於ては、部署、既に定まりて、諸君の來るを待てり、家老浦毅負は、兵を率ゐて、禁關を護り、我れは、所司代の邸を襲ひ、他の同志は、臨機決行の筈なり、然るに、若し、數日を遷延せば、士氣、頓に挫けて、復た奈何ともすべからず、是非共、明夜を以て、出發あるべし』

と強ひて、固く中止を肯んぜず、宜藏、之れを是とし、復た輕駕を飛ばして、歸り來れども、其大阪に達せしは、二

十二日の朝なり、諸士、

『如何に準備を急げばとて、到底、今夜は、出發すべからず、宜しく、二十三日を以て、出發することゝなすべし』

と決し、重ねて、秋月の志士海賀宮門を、京都に遣はして、義助に告ぐ。

是に於て、再び準備を調へ、吉村寅太郎、及び岡藩の志士廣瀬友之丞は、長藩出入の船宿に就て、三十石の淀船二隻を、繰せしむ。

二十三日午後、諸士、各々此れに分乗して、淀川を溯る、江流、聲、清くして、堤柳、風、綠なるところ、杜鵑聲々、啼いて、頭上を過ぐ、寅太郎、

目をさます初音や雲井ほととぎす

と口吟すれば、同舟の士、皆、手を拍つて、喝采す。

既にして、二士の堤上を過ぐるものあり、之れを諦視すれば、奈良原喜左衛門、海江田武次なり、薩藩の志士田中謙助、

『是れ、我等を諭さん爲めならん、若かず、其息の根を

止めんには』

と矢庭に、十匁銃を執つて、狙撃せんとす。

火繩なくして、火を點じがたく、腰間の手拭を劈きて、火繩に代ふ、随つて、火を點ずれば、随つて消ゆ、謙助、終に焦れて、思ひ止まる。

此夜、伏見に達し、新七、壯介等は、上陸して、寺田屋に投じ、寅太郎等は、少しく、延著して、尙、舟中に在り。大事、未だ發せず、陰謀、早くも、露はる。

一三九 寺田屋の事變(三)

薩藩の士永田佐一郎、一旦、此舉に加はりしも、其非を悔いて、自殺す。

高崎左太郎は、始めより、此れに與みせず、佐一郎の自殺せるを見て、其事の迫れるを知り、諸士の出發せる後、俄に、早駕を飛ばして、京都に馳せ向ふ。

同志の一人藤井良節、亦、變し、是又早駕を急ぎつゝ、京都に赴く。

淀を過ぐる時、新七、壯介等の船を泊して、茶亭に憩ふに

逢ふ、左太郎、良節の二人、諸士を給きて、虎口を遁がれ、

京都の藩邸に、馳せ著きて、其密計を訴ふ。

會々大阪町奉行より、飛報あり、久光、大に驚きて、急ぎ奈良原喜八郎、大山格之助、森岡善助、鈴木勇右衛門、江夏仲左衛門、道島五郎兵衛、山口金之進、鈴木昌之助の八人を召し、

『我れ、浪士鎮撫の勅諭を蒙るに、我が家臣中より、暴徒を出だしては、朝廷へ對し奉つて、申譯けの道なし、彼等は、伏見の船宿寺田屋に、集まるべしと聞く、疾く、馳せ向ひて、諭し聞かせよ、若し、我が命を用ゐざれば、討ち果すとも、苦しからず』

と命ず、八士は、何れも、武藝の達人、

『委細、畏り奉つる』

と答へも敢へず、バラ／＼と、藩邸を、馳せ出づ。

喜八郎、五郎兵衛、忠左衛門、善助の四人は、本街道を、馳せ下り、格之助、勇右衛門、金之進、昌之助の四人は、竹田街道より、馳せ赴く、上床源助も、亦、途中より加はる。

喜八郎等、先づ伏見に達し、一同の寺田屋に在るを知つて、同家に、馳せ到る。

折りしも、寺田屋には、有馬新七、柴山愛次郎、橋口壯介、橋口傳藏、田中謙助、弟子丸龍助、西田直五郎、森山新五、左衛門を始めとして、大山彌助、西郷新吾、永山彌一郎、三島彌兵衛、美玉三平、伊集院直右衛門、木藤市助、是枝龍助、田中河内介等の面々、既に來りて、樓上の三室に、陣取り、酒を傾くるあり、飯を食するあり、辨當を詰めるあり、鉢巻を締むるあり、出陣の準備、おさくゝ怠りなし。新七、愛次郎、壯介、謙助、傳藏等は、頭を鳩めて、部署を定め、新



七、手づから、筆を執つて、著到の姓名を認む、衆、直右衛門を顧みて、

『一人にては、抄取るまじ、些と手傳へ』

と言へば、直右衛門、亦、筆を執つて、氏名を記すこと三四人、忽ち、表より、バタ／＼と、馳せ來るものあり、

『有馬新七、此家に在らん、至急、面會致したし』

と言ふ聲、手に取る如く、樓上に聞ゆ、傳藏、それと察して、聲を勵まし、

『有馬は、此處には居らず、左言ふは、誰々なるぞ』

と叫べば、

『ナニ、居らぬものか』

と言ひさま、トン／＼と、階子を駆け登れるは、仲右衛門、善助の二人、新七等の環坐せるを見て、

『ソレ見よ、其處に居るにあらずや、用談あり、下まで、降り呉れよ』

と言へば、愛次郎、

『面會とあらば、行かん』

と言ひつゝ、小刀の儘にて、樓下に降る、新七、壯介、謙助の三人も、亦、刀を帶して、相踵いで、階子を降る。

一四〇 寺田屋の事變（四）

樓下には、喜八郎、五郎兵衛の二人あり、新七等、ツカツカと、其前に到りて、

『用談とは、何事ぞ』

と問へば、喜八郎、

『泉州公より、申し談ぜらるべき儀あり、早々、京都の藩邸に、参られよ』

と告ぐ、新七、

『我々は、獅子王院宮の令旨を奉じて、宮の御殿に参らんと存ずる所なり、君の御用とあらば、其後の事に致さん』

と答へて、從はず、喜八郎、

『君命に従はざれば、切腹せしむべきぞ』

と迫れば、新七、冷然として、

『我等は、勤王の大義を行はんと存ずるもの、君命と雖も、奉ぜざる所あり』

と答へて、取合はず、折柄、竹田街道の格之助等、五人、

亦、馳せ來りて、其左右に突つ立ち、何れも、肩を怒らし、結果如何にと待つ、喜八郎、重ねて、

『我等は、上意討ちの仰せを受けて來りしぞ、若し、不承知ならば、討ち果さん』

と言ひ放てば、謙助、憤然として、

『我等の意は、既に決せり、君命なりとも、從ふべからず』

と叫ぶ、氣早の五郎兵衛、一聲高く、

『上意』

と言ひさま、ハツシと、謙助の眉間に、斬り付くれば、眼珠、飛び出で、噓と、其場に倒る、それと見たる金之進、亦、一刀スラリと抜きて、愛次郎に、斬り付く。

新七、怒つて、五郎兵衛に、斬つて掛かれれば、壯介、亦、喜八郎に、斬つて掛かる。

双方、大黒柱を挟んで、闘ふこと五六合、新七の太刀、忽ち、ボツキと折る。

今は、差添を抜くの邊あらず、新七、イキナリ、五郎兵衛に、躍り掛かりて、捻ぢ合ひ、終に俱に亂刃の下に斃る。

壯介、亦、奮闘し、肩より、乳まで、斬り下げられて、壇と倒る、幸五郎を見て、

『水をく』

と叫び、其與ふる水を、グツと呑み干し、

『これも、天下の爲めなり、死すとも、恨みなし、後事は、君等に頼むぞ』

と言ひ終りて、息絶ゆ。

森山新五左衛門、厠に行かんとして、降り來り、此體を見るより、小刀を抜きて、奮闘し、亦、數創を負うて倒る。橋口傳藏、樓上に在り、階下の騒擾を聞きて、蹶起して、馳せ下る。

格之助、大刀を翳して、階下に待ち構へ、其下るを見て、サツと足を拂ふ。

傳藏、屈せず、刀を揮うて、勇右衛門の耳を、殺ぎ落し、其身も、亦、昌之助の爲めに、殺さる。

弟子丸龍助、續いて、階子を馳せ降る、格之助、復た大刀を揮うて、腰を斫る、龍助、事ともせず、多勢を、相手に戦うて、亦、斬り殺さる。

西田直五郎、亦、續いて、馳せ降らんとす、源助、槍を以て、下より仰ぎ突く、直五郎、コロ／＼と、轉がり落ち、尙も、奮闘して死す。

美玉三平、樓下の騒擾を聞きて、伏見奉行の捕手なりと思ひ、

『素破や、捕手の向ひたるぞ、各々持場を固めて、防戦せよ』

と呼ばれば、大山彌助、西郷新吾、永山彌一郎、三島彌兵衛、木藤市助、是枝龍助の面々、皆、憤然として、刀を執つて、起ち、柴山龍五郎、先づ階子を馳せ下る。

一四一 寺田屋の事變(五)

諸士、一齊に降り來らば、衆寡の勢、敵すべからず、喜八郎、下より、

『龍五郎、君命ぢや、鎮めて呉れ』

と叫べば、龍五郎、

『左言ふは、喜八どんか、扱は、奉行の捕手にはあらざるぞ、一同、鎮まれ』

と言ひつゝ、樓上に引き還へす。

喜八郎も、亦、無刀の儘、登り來りて、君命を傳ふれば、既に血を見て、殺氣立てる面々、或は、

『鎮使を屠り盡さん』

と叫ぶもあり、或は、

『潔よく、自殺せん』

と力むもあり、衆論紛々、鼎の沸くに異ならず、田中河内介、

『泉州公は、我等を欺く人にはあらざるべし、兎も角も、其命に従はん』

と説きて、衆を鎮め、喜八郎等に従うて、京都の薩邸に到れば、有無を言はさず、其長屋に幽囚せらる。

此争闘の爲めに、鎮使には、道島五郎兵衛、即死し、喜八郎は、輕傷を蒙り、其他は、皆、重傷を受く。

志士には、有馬新七、柴山愛次郎、橋口壯介、橋口傳藏、弟子丸龍助、西田直五郎の六人は、即死し、田中謙助、森山新五左衛門の二人は、一旦、死して、復た蘇す、因りて、伏見の薩邸に拘せらる。

寺田屋は、疊は破れ、建具は損じて、屋内の流血、杵を漂はさんばかり。

吉田寅太郎等の乗船は、少しく後れて、伏見に著し、二十四日の拂曉を以て、花々しく、出陣せんとす。

薩藩の士本田彌右衛門、馳せ來りて、寺田屋の變を告げ、且、

『和泉に於ても、斯くなる上は、同意候はん、兎も角も、藩邸に、参らるべし』

と欺きて、一同を伴ひ歸り、是れも、亦、邸中に幽す。

是に於て、志士舉兵の計畫、全く破る。

二十四日、謙助、新五左衛門の二人に對し、君命違背の罪を以て、死を賜ふ。

謙助、先づ鮮血を洗ひ、遙かに、皇城に向ひて、再拜し、

『微臣、王事に執掌せしも、事、未だ成らずして、死するこそ、遺憾に候へ』

と述べ、更に、藩城の方を、再拜して、屠腹す、野津七左衛門、之れを介錯す。

新五左衛門も、亦、同じく、鮮血を洗ひ、皇城、及び藩城

の方を、拜遙して、自刃すれば、仁禮平助、其首を打ち落す。

二十九日、勅命を以て、諸士を、其藩々に、引き渡す。田中河内介、其子璫磨介、千葉郁太郎、中村主計、青木頼母は、引き渡すべき所なきを以て、薩摩に送る、秋月の志士海賀宮門、亦、薩藩を慕うて、俱に送られんことを請ふ、發するに臨み、藩吏、密に、護送の吏に向ひて、

『河内介等こそ、此度の主謀なれ、今又本藩に送らば、如何なる大事を企てんも、測られず、途中に於て、殺すに若かず』。

と命ず、乃ち陸路、大阪に下り、更に、船に乗せて、本國に送る、五月七日、日向細島に著せる時、不意に、河内介等六人を殺して、其死骸を、海中に投ず。長藩は、藩論を以て、義舉を起さんとし、薩藩は、君命を以て、志士を鎮壓す、志士、皆、薩藩の反覆を、切齒せざるはなし、異日、薩長の反目、此に基づく。

一四二 所司代の警戒

曩に、島津和泉守久光の伏見に著してより、京都所司代酒井若狹守忠義の狼狽、言はん方なし。

偶々其翌四月十五日の夜半、一發の烽火、爆然として、伏見の天に輝く、千本松原の火見櫓に在るもの、之れを望み見て、倉皇、馳せて、所司代の邸に報ず、忠義、聞いて、愕然として驚き、

『島津和泉、昨日、大阪より來つて、伏見に在り、必定、人數を率ゐて、攻め上ると覺えたり、疾く、防戦の用意せよや』

と命ずれば、士卒、素破やと、慌てふためき、何れも、小具足をよろひ、陣羽織を著し、大砲、小銃を竝べ、槍、長刀を携へて、嚴しく諸門を守る。

左れども、此處は、要害の地にあらず、敵兵、來り攻むれば、一日をも、支ふべからず、忠義、更に、

『早鐘を打ち鳴らさば、直に屋敷を焼き拂ひ、二條城に入りて、防戦すべし』

と命ずれば、家臣の面々、妻子を、西六條、賀茂のあたりに、立ち退かしむる等、其騒動、大方ならず。

近隣の町民、亦、此光景を見聞して、大に驚き怖れ、負擔奔竄するもの、踵を接す。

此烽火は、何の故たるを知らず、或は、伏見稻荷神事の花火なりと言ひ、或は、妖狐の所爲なりとも言ひ合へれど、豫て、伏見、京都、山崎三ヶ所の關吏、急變あれば、互に狼烟を揚げて、報ずるの約あり、伏見の關吏、薩藩の士の粗暴なるより、之を狼藉と思ひ誤まりて、合圖の狼烟を揚げしものならんと云ふ。

其翌十六日、久光、兵を率ゐて、上洛し、忠義を、其邸に訪へども、疾と稱して、敢て對面せず。

忠義、密に人を遣はして、東洞院錦小路の薩邸を、窺はしむれば、玄關には、轡の紋打つたる幕を張り、士卒、或は、刀を拭ふもあり、或は、小銃を練習するもありて、其光景、何となく、物々し。

特に、白米四五千俵を、運びたりとの説もあり、軍用金三十萬兩を、上せたりとの噂もあれば、忠義、益々警戒に警

戒を加へて、少しも、油斷せず、本國若狹より、武器を取り寄せ、兵士を徴し上すもの數百人。

爾來、夜なく、士卒を派遣して、二條城の附近を、警衛し、且、

『何時燒き拂ふやも、測りがたし、前以て、心得置くべし』

と觸れ示せば、近傍の市民、老幼家財を携へて、四方に散ず。

薩邸、之れを聞きて、警戒を加へ、邸内に、鐵砲三十挺を列し、火繩に、火を點じて、萬一に備ふ。

忠義、又此容子を聞き傳へて、更に、數層の警戒を加ふ。

四月二十五日、彦根侯井伊掃部頭直憲の京都留守居、忠義の邸に候す、忠義、腹巻、小手の上に、黒紋付、麻上下を著して、延見す、對談の間、襟のあたり、袖の邊より、金光ちらちらと閃く、留守居、見て怪しみ、

『何事の候て、斯様に、御用心あらせられ候や』

と問へば、忠義、それと心付きて、忽ち、ハツと赤面し、『イヤ、ナニ、其元の入來まで、訓練致し居りし故、斯

くの仕合せ』

と言ひつゝ、急に襟を繕ひ、兩手を袖に隠す、其狀、當年の淨海入道も、斯くやと思はるゝばかり。

所司代の狼狽より、市民の恐慌を惹起せしも、終に何事もあらず、忠義の評判、日を逐うて、益々惡し、家老酒井豊後、憂嘆止まず、

『此頃の騒動は、君侯の御指揮にあらず、皆、我が不行届の致す所に外ならず』

と稱し、責を一身に負うて、自刃す、人々、聞いて、其志を憐む。

一四三 薩長の守護

島津和泉守久光の兵を率ゐて、入京せしより、藩邸、俄かに、狹隘を告げて、一同を收容するに由なく、急に、假小屋を建つれども、尙、足らず。

近隣の民家を借りて、下宿に充てんとすれども、市民、其亂暴を恐れて、敢て、此れに應ずるものあらず、

『此上は、四隣の賣家を搜して、買入るゝの外なし』

と決し、價を倍して、買取らんとす。

東洞院錦小路下る處に、日野徳兵衛と言ふものあり、生計、困難なるを以て、其家を賣る、薩吏、時價五十貫目なるを、特に、九十貫目にて、買取り、且、永代出入を許して、二人扶持を給す。

薩邸の東隣に、桶屋あり、亦、其家を賣る、薩吏、時價八十金なるを、四百八十金にて、買取り、且、永代五人扶持を給す。

先きに、下宿の請求に應ぜざりしもの、之れを聞きて、俄かに、承諾の旨を通ずれば、薩吏、朝夕は、湯漬、晝は、一汁一菜として、士分の下宿料は、二朱、下僕は、一朱と定め、且、薪炭米油を、惜氣もなく給す、下宿の士卒、亦、謹慎にして、毫も、粗暴の振舞なし。

薩吏、勉めて、恩を市民に賣る、市民、之れを徳として、

『薩州様の在はすからは、今に、世も直り、夷も攘ひ、諸式も、必ず、下落すべし』

と唱へ、都鄙の諸民、亦、

『薩州様の爲めには、一命を捨つるも、惜しからず』

とまで稱して、久光を仰ぐこと、宛がら、救世主の如し。

長藩の志士、久坂義助、堀眞五郎、入江九一、山縣小輔、野村和助等、其主大膳大夫慶親の世子長門守定廣の歸國、近きに在るを機として、京都に迎へ入れ、久光と與に、王事に勤めしめんと欲し、中山大納言忠能、正親町三條大納言實愛、岩倉中將具視、大原三位重徳等に就て、

『薩州、既に、浮浪鎮撫の命を蒙る、我藩、何ぞ薩州の下に立ち候べき、願はくば、寡君大膳大夫にも、同一の恩命を下し給へ』

と請うて、止まず、此事、聖聽に達すれば、主上、

『之れを許せば、或は、薩州の意を損ぜん、許さずんば、必ず、長人の心を失ふべし、此事、如何になすべき』

と思ひ煩はせ給ふ、具視、密に、此趣を、久光に漏らせば、『何條、仔細候はん、某、固より、私意を存して、功名を争ふの念なし、唯、亡兄の遺命に依つて、國運の挽回を計らんと存ずるのみ、更に、宸襟を惱ませ給ふことあ

るべからず』

と答ふ、主上、聞召されて、始めて、御心を安んぜさせ給ふ。

定廣、四月十三日を以て、江戸を發し、二十八日を以て、伏見に著す、朝廷、直に、入京を命ぜられ、五月朔日、

『乃祖元就以來、勤王の志、淺からず、此度、早速、上京の段、勅慮、少からず思召さる、依ては、滯京、王城を守護仕つるべきやう、仰出さる』

との旨を傳へ給へば、定廣、乃ち、河原町二條下る處の藩邸に留まり、本國より、入京せる兵士七百人を以て、京師を守る。

是れ、亦、邸内、狹隘なるを以て、河原町より、塗師屋町の民家三十戸ばかりを借りて、宿泊所に充つ、市民、又、

『京師は、薩州様、長州様の御警衛にて、皆、枕を高くして、眠らるべし』

と稱へ、薩長の兵士、續々、入京すれども、米價も、騰貴せず、民心も、亦、靜穩にして、各々其業に安んず。

薩長の二藩、既に、朝命を以て、王城を守る、其勢威、頓

に振ひて、所司代は、有れども、無きが如し、是れ、徳川幕府の窺まりてより、未だ曾て有らざる所。市民の、二藩に謳歌するを聞きて、誰れか、天津橋上杜鵑を聴くの感なからんや。

一四四 幕政の改革

坂下門の變ありてより、幕府の聲望、益々善からず。

閣老久世大和守廣周、幕政を改革して、民望を收めんと欲するの意あり、四月十一日、當時、世上攻撃の燒點となれる安藤對馬守信睦を罷めて、安政戊午の大獄に反對せる備中松山侯板倉周防守勝靜、及び山形侯水野和泉守忠精を擧げて、老中となし、且、外國事務取扱を命ず。

初めは、小侍なり、優柔なりと批難されしにも似ず、二人の外人に對する態度、極めて、嚴正にして、秋毫も、假借せず、外人の面會を求むるあれば、勝靜、

『外人應接の事は、外國奉行に委任しあり、宜しく、此れに面會して、事を辨ぜらるべし、老中たるものは、大事にあらずんば、直接、應對すべきにあらず』

と答へて、從來の閣老の如くに、一々、延見せず。

從來、外人を延見する時は、其都度、金千兩を獻ずるを例とす、二人、固く、之れを卻けて、受けず、外人、即ち二千兩を獻ずれば、二人、

『金子は、一毛の微と雖も、受くべからず、何程、差出すとも、無用なり』

と諭して、納めず、自ら持すること、嚴格を極む。

又是れまで、閣老と、外人と、應接する時は、双方、相對坐するを例とす、二人は、疊七枚を隔て、其間に、大目付、目付、外國奉行を、列坐せしむ、外人、其先例に違ふを咎むれば、勝靜、

『鎌倉時代とか、足利時代とか、當家となりても、五十年とか、百年とかの仕來りならば、之れを先例とも申さん、近來の取扱を稱して、先例なりと、申すべきにあらず』

と答へて、敢て改めず、外人、

『兎に角、先前の御老中の御取扱と異なること、然るべからず、速かに、復舊せらるべし』

と迫れば、勝靜、

『先役には、先役の存意あり、我等には、我等の所存あり、役名こそ、同じけれ、人も異なり、性も異なる、何とて、同一の了簡を持つべきや、席違ひにて、不承知とあらば、勝手に、引取られよ、我等の好める應接にはあらず』

と答へて、採り上げず、外人の提出する抗議は、是れも、相成らず、其れも、相成らずと答へて、皆、盡く斥く、外人、大に怒り、

『斯る御取扱は、和親條約の趣旨に反す、若し、聞き入れられずんば、唯、軍艦を派遣するの一事あるのみ』と述べて、威嚇す、勝靜、忽ち、居丈高となりて、

『和親に背くとや、和親に背くの振舞は、其方共にこそあれ、此方には、唯の一つも、之れあらず、抑々和親とは、相和し、相親みて、交際するの謂にあらずや、然るに、其方共は、矢鱈に、日本の絹物を、買占めて、飢寒に苦むをも、意とせず、唯、己れの私腹を肥さんことをのみ、計るにあらずや、是れ、果して、和親の所爲か』

と叱すれば、外人、黙して、復た言はず、是れより、深く二人を畏敬す。

世人、聞いて、其雄斷を稱讃せざるはなく、相門、相を出だす時まで、評するに至る、勝靜は、松平越中守定信の孫、忠精は、水野越前守忠邦の子なればなり。

廣周、此機に乗じて、益々政務を刷新せんとす、會々上京の命、下るに及んで、意氣、頓に沮み、終に、其位地を保つ能はざるに至る。

一四五 關白の更任

近衛邸に於ける島津和泉守久光の建議、朝廷の嘉納する所となり、其翌四月十七日、京都所司代酒井若狹守忠義の手を経て、閣老久世大和守廣周の上京を命ぜられ、併せて、青蓮院宮を始め、鷹司太閤熙通父子、近衛前左大臣忠熙等の謹慎を、解くべき旨を命ぜらる、閣老の面々、

『一々、京都の御差圖を待つて、實行せば、關東の威光、忽ち、地に墜ちん、若かず、早く、自ら決行せんには』と決し、四月十一日、尾張前中納言慶勝、一橋刑部卿慶喜、

越前侯松平日向守直廉の養父春嶽、及び土州侯山内土佐守豊範の父容堂の謹慎を、解きて、其旨を、京都に報じ、且、久世閣老の上京、及び青蓮宮以下の赦免は、朝旨を遵奉すべき旨を答ふ。

井伊大老逝きて後は、幕府の意氣、頓に挫けて、復た當年の氣焰なし。

二十九日、幕府の答奏、京都に達したれば、其翌晦日、青蓮院宮尊融法親王、鷹司太閤熙通、近衛前左大臣忠熙、鷹司前右大臣輔熙に對して、

『自今、參内以下、萬事、平生の通り心得られ、遠慮に及ばず』
三條實美



及ばず』
との旨を達せられ、再び、青天白日の身となり。井伊大老の所謂、陰謀

派、再び朝に立つ、左なきだに、衆怨の府となれる九條關白尙忠、今は、益々其職に安んぜず、五月朔日、方今、重大の事件切迫の時勢、其任に堪へずとの旨を奏して、關白、内覽、氏長者、隨身兵仗等を辭す、三條中納言實美、之れを聞きて、密に、一書を上つり、

『島津和泉、上京言上の次第、委曲の儀は、存ぜず候へども、勤王の志は、感賞仕り候、建策の事件、觀念に適はせられ候はゞ、何卒、英邁の聖斷を以て、御採擇遊ばされ、御疑念なく、御信任在らせられ、條々、迅速に、仰出され候はゞ、國內一致、人心協和の場にも、至るべく、宸襟を安んぜられ候様、相成るべくと存じ候』

と述べて、久光の建策、採納を勧め奉つり、尙、
『當今、朝廷の御急務は、賢良の人を以て、執柄輔弼と遊ばされ候儀、緊要に存じ候、當殿下、御辭表にも相成候由、承り候、何卒、非常の御處置を以て、先規舊格に拘はらず、速に、叡慮を以て、聞し食され、他的大臣を以て、當職に補せられ候はゞ、國內人心も、協和に相成るべくと存じ奉つり候』

と述べて、尙忠の辭表裁可の儀をも、勧め奉つる。

朝廷、乃ち尙忠の辭職を許し、近衛前左大臣忠熙を以て、關白となさんと思召し、内慮を、關東に下させ給ふ。

關白の進退は、正しく、幕威の消長を卜すべきもの、其關する所、尠少ならず。

一四六 久世閣老の逡巡

朝廷、閣老久世大和守廣周の上京を命ぜらるゝや、幕府、辭すること能はず、五月八日、將軍家茂、特に、廣周を、座所に召して、

『京都より、仰せ遣はされ候品も、之あり候に付、上京仰付けらる』

との旨を命じ、更に、御用部屋に於て、閣老内藤紀伊守信親を以て、

『此度、上京仰付けられ、急速の出立に付、彼是、物入多の段、聞召され、別段の思召を以て、御内帑金五千兩、拜借仰付けらるゝ旨、仰出され候』

との旨を傳へて、内帑金五千兩を貸與し、尋で、同様の恩

命の下ること兩度、都合一萬五千兩を、貸與せらる。

先年 堀田備中守正睦の苦き經驗を嘗めてより以來、上洛は、兎角に、閣老の欲せざるところ、其家臣、杉山一太夫を召して、

『此事、如何になすべきか』

と問へば、一太夫、亦、可否を即答すること能はず、

『天下の御大事に候、尙、勘考の上、言上仕つり候はん』と答へて退き、日向飫肥の儒者安井仲平の意見を聞きて後、再び廣周に謁し、

『此度の儀は、皇國の御大事に候、死を決して、御上京遊ばされんこそ、然るべう候へ、從來、御違勅を始めとして、公邊の御處置、宜しからざる事共、少からず、是等は、其責を、御一身に負はせ給ひて、井伊、安藤の諸侯に譲らせらるゝことあるべからず、先づ、大津に御到着の上、飛脚を、京都へ立て、唯今まで、關東に於て、御違勅等の儀、之れありて、上洛すべき様も候はねど、御召しに依りて、是れまで、罷り上り候との旨を、申入れさせ給ひ、其御沙汰に隨ひて、兎角の御進退あらせ給

へ、萬一、何の御沙汰も候はずば、同所に於て、切腹遊ばさるゝより外は候はず、兎角、此度の御上京は、死地に入つて、生路を求むるの道に候』

と答ふれば、廣周、此れに従ひて、愈々上京するに決す。是に於て、五月十五日、御暇乞として、登營謁見し、羽織、金二十枚、時服十枚、及び馬を賜はる、乃ち不日、大目付大久保右近將監忠寛、目付淺野伊賀守一學等を隨へて、中仙道より、上京せんとす。

會々此日申の刻、京都より、急報あり、廣周上京の上は、一、井伊大老の在職中、廢帝の評議ありしとの事、其事實如何。

一、和宮御降嫁當初の思召に違ふの事實あるは如何。等、三ヶ條の難問出づべき由を知りて、大に驚き怖れ、俄に、病と稱して、出仕せず、先發の家臣の、武州桶川に到れるを召還し、藩地總州關宿より、召寄せし家臣をも、盡く、遣り還へす。

一四七 勅使の下向(上)

閣老久世大和守廣周、一たび、上洛の命を奉ずと雖も、旬日を経て、尙、未だ、足を擧げず、島津和泉守久光、荏苒として、時日を空過するの間、志士の、或は、暴發するあらんかを虞れ、近衛家に依りて、

『便々として、老中の上京を待たせ給ふの間、萬一、變故の生ずることあらば、由々しき天下の一大事に候はん、宜しく、久世大和守の上京を、差止め給ひ、公卿中、然るべき御方を、勅使として、關東へ下し給ふべし、久光、亦、供奉して、俱に下り、死力を盡して、勅旨を奉行せしめ候べし』

との旨を奏す、主上、偏に、久光に信賴せさせ給ひて、其遠く輦下を離るゝを好ませ給はず、爲めに、事、未だ遽かに決せず、久光、重ねて、

『幕府をして、朝旨を奉行せしめんこと、今日に在り、若し、空しく、此機を逸せば、將來、復た奈何ともすべからず、宜しく、速かに、勅使を下し給ふべく、某にも、

亦、下向を命じ給ふべし』

と請うて、止まず、是に於て、五月八日の夕刻、俄かに、一條左大臣忠香、二條内大臣實敬、近衛前左大臣忠熙、鷹司前右大臣輔熙以下、議奏、傳奏を召して、諮詢させ給ひ、終に、大原三位重徳を、勅使として、關東に、下すに決す。

翌九日、重徳を、宮中に召されて、特に、從二位に敘し、左兵衛督に任じ、黄金十五枚を賜ひ、同時に、久光に對して、勅使警衛として、下向すべき旨を命ぜらる。

主上、又勅書を、群臣に下して、幕府に賜ふべき勅旨を、諮問あらせ給ふ、中に、

第一 大樹、大小名を率ゐて、上洛し、國家を治め、夷戎を攘はんことを、議すべき事。

第二 豐太閣の故典に依り、沿海の五大藩を、五大老として、國政を諮決する事。

第三 一橋刑部卿を、大樹の輔佐とし、越前中將を、大老職に任ずる事。

の三策あり、第一項は、長州藩士桂小五郎の建議を、採用

せられ、第二項は、朝議に出で、第三項は、久光の建議に基づく。

第二項の五大藩とは、九州の島津、中國の毛利、四國の山内、北陸の前田、東北の伊達を指すものにして、朝廷の深意、之れを以て、幕府の威權を、殺がんと欲するに在り。幕府、此朝旨を、奉ずれば好し、若し、奉ぜざる時は如何、薩の力のみにては、制すること能はず、薩長の二力のみにては、尙、制すること能はず、乃ち五大藩の衆力を以て、之れを制せんと欲すること、亦、其深意の奥の深意なり。時に、九條關白尙忠、辭表を捧げて、自邸に在り、群臣、復た誰か異議を挟まん、事、忽ちにして決す。

重徳、五月十六日を以て、發程せんと欲し、一日、尙忠を、其邸に訪ふ、尙忠、心に勅使の東下を欲せず、

『關東へ、參向の儀は、篤と、思慮せんこそ、然るべけれ』

と注意すれば、剛氣の重徳、

『既に、勅旨を蒙り、且、御請け仕つる、今となりて、辭退せんこと、思ひも寄らず、萬一の事あるとも、其は、

豫ねての覺悟に候』

と言ひつゝ、懷劍を、抜き放ちて示す、尙忠、其志の奪ふべからざるを知りて、復た言はず。

赤心忠與義。臨事不避難。一旦若得罪。終令國家安。

とは、實に、重徳の此際に賦して、其懷を述べたるもの、決意、石より堅し。

一四八 勅使の下向(下)

勅使發向の期日、既に迫る、會々公卿中に、異議あり、

『一旦、久世大和守を、召させ給ひながら、故なく、之れを差止め給はんこと、如何候べきか、勅使下向の事は、先づ以て、大和守上京の上にて、定め給ふべし』

との旨を唱ふ、朝廷、志士の暴發を憂ふる折柄、此議、忽ち、勢力を得て、勅使出發の期、俄かに延ぶ。

久光は、廣周の上京後、京都の形勢、一變せんことを虞れて、飽までも、之を止めんと欲し、復た近衛家に依りて、『若し、大和守の上京を、差止め給はんこと、御六づかしく思さば、宜しく、此度の勅使に、仰せ含められ、途

中、行き逢へる所にて、其旨を御達しあるべし、某、亦、好きに計らひ候はん』

と奏せしも、其は、餘りに、穩かならずとして、許可せられず、十八日、久光、重ねて、

『大和守上洛の期、何時とも、存ぜられざるに、空しく、之れを待たんこと、然るべしとも存ぜず、某の家臣は、概ね、木強の野人に候、荏苒滯留の間、如何なる振舞を爲さんも、測るべからず、左れども、若し、強て、召し留め給はんとの御儀に候はゞ、藩邸、手狹にして、取締向、行届きがたし、宜しく、知恩院を、御貸渡しあらせ給ふべし』

との旨を請ふ、是に於て、朝議、愈々勅使差遣に、一決し、議奏中山大納言忠能、正親町三條大納言實愛、飛鳥井侍從雅典、久世三位通熙、傳奏野宮宰相定功の連署を以て、御沙汰を賜ひ、且、

一橋刑部卿、越前前中將等の儀、御箇條書の通、仰出され候處、去る十五日、大樹年頃に付、田安大納言後見願の通、差許し、越前前中將國政に關係すべき様、申付け

られ候由、言上之あり、就ては、後見の儀は、強ては、仰出され兼ね候へ共、何分、内外容易ならざる形勢に候間、深く御案痛遊ばされ、一橋を以て、登用せられ候方、

然るべく思召候、但し、名目の處は、輔弼たるべき歟、越前大老職の事、家門たるの間、流例の邊には、差支ふべく候へ共、先件、非常の處置を以て、申付けらるべく思召候、但し、是以て、差支へ候はゞ、政事總裁職と稱し候ても、然るべく思召候、但し、越前前中將儀、思召の通、相成候上は、方今、内外危迫の時節に付、今年、秋中、上京之あり、國是の議論、聞召され度候、且、同人、彌々上京の節は、引續き、三郎にも上京あるべく候、其邊、相含み、周旋あるべき様にと、思召候事。

との御別紙を、下し賜ふ、三郎とは、此度、朝廷より、久光に下し賜へるところ、蓋、和泉と稱しては、關東下向の後、關老水野和泉守忠精に對して、差障りあるに由る、三郎とは、島津家嫡統の通稱なり。

勅使差遣の事は、既に決す、然れども、其出發の期は、尙、未だ定まらず。

二十日の午後に至りて、急に、治定せられ、愈々二十二日を以て、發程するに決す。

二十一日、主上、特に、重徳を、御前に、召させられて、『朕、國家の爲に、日夜、憂に堪えず、而て、幕吏、苟くも、安からん事を偷む、依て、方今、汝を關東に下し普く、朕が固有の志を、宇内に知らしめんと欲す、願くは、汝、朕が腹心となつて、怠る事ある事勿れ、且、營中廟論の日、萬一、幕吏、曲直をあやまり、島津と、爭論に及ばんも、測りがたし、然らば、汝、大道をもつて、是非をさとし、天下の一大事をあやましむる事なかれ、今日の事、朕、一に、汝にゆだね、汝、つとめて、神々の震怒を慰めよ』

との優詔を賜はり、久光に對しては、議奏を以て、御沙汰を賜ひ、又近衛家を以て、

『久世大和守と、行逢はゞ、穩便に致し、總て、途中は質素たるべし』

との旨を傳へて、其行動を、戒め給ふ。

二十二日、大原勅使、愈々京都を發して、江戸に向ふ、久

光、兵數百人を率ゐて、此れに従ふ。

一四九 江戸の形勢

幕府、今は、漸く警醒す、四月二十五日、尾張前中納言慶勝、一橋刑部卿慶喜、越前前中將春嶽等の謹慎を解きて後、五月三日には、會津侯松平肥後守容保を召して、大政に參與せしめ、七日には、春嶽を召して、同じく、政務に、關與せしめ、九日には、素餐の評ありし田安大納言慶頼の願に依りて、後見職を免ずる等、其行ふ所、著々、朝旨に合するものあり。

五月二十二日には、將軍家茂、諸閣老、及び松平容保を、座所に召して、

近來、御政事向、姑息に流れ、諸事、虚飾を取繕ひ候より、士風、日に、輕薄を増し、御當家の御家風を取失ひ、以ての外の儀、殊に、外國御交際上は、別して、御兵備、充實に之なく候ては、相成らず、就ては、時宜に應じ、御變革取行はれ、簡易の御制度、質直の士風に、復古致し、御武威、相輝き候様、遊ばされ度候間、一統、厚く

相心得、忠勤を勵むべく候。

との訓令を下す、閣老等、台旨を畏みて退き、諸有司を、松の溜に召して、水野和泉守忠精より、

唯今、上意の趣、誠に恐入り、難有き御儀に候、何れも、厚く相心得、思召行届き候様、一途に心掛け、身命を抛つて、忠勤を抽んでらるべく、猶、追々、仰出され候品も、之あるべく候間、心得違ひ之なき様、致さるべく候、以上。

との演說書を示して、激勵する所あり。

其翌二十三日、播州龍野侯脇坂中務大輔安宅、再び閣老に列し、越えて、二十六日、内藤紀伊守信親、閣老を免ぜらる。

幕府の方針は、此更迭の爲めに、變ぜず、六月朔日には、更に、將軍家の上洛を、發表するに至れり。

抑々將軍家茂上洛の事は、和宮御降嫁の際の御内約にも由り、長州侯毛利大膳大夫の建白にも基づけりと雖も、其裏面には、別に、一の魂膽あり。

當時、幕府に於ては、今度、勅使の齎すべき三ヶ條の使

命の内、一ヶ條は、是非とも、幕府をして、奉行せしめら

るべき意志なりと聞くより、寄り／＼、其内の執れを奉行すべきを議る。

衆論、將軍家の上洛をも欲せず、五大老の新設をも欲せず、止むなくんば、一橋、越前任用の一項を奉行せんとするの議に傾く。

井伊大老の殘黨久員因幡守正典、淺野伊賀守一學、藥師寺筑前守元眞、小笠原長門守長常、松平式部少輔近韶、早川庄次郎、及び田安家の用人上野山六郎右衛門の面々、之れを聞きて、安んぜず、一夕、正典の邸に會して、密議を凝らし、

『一橋殿、越前殿にして、御登用相成るに於ては、我等は、盡く、排斥せられんこと、必定なり、寧ろ、將軍家御上洛の一事を、奉行して、他の二ヶ條を、拒むに若かず』

と決し、頻りに、大奥に向つて、運動する所あり、扱こそ、閣老の躊躇するにも關せず、此事、早くも、決定せしなれ。此日、閣老の連署を以て、京都所司代酒井若狹守忠義に對

して、

一筆啓達せしめ候、近年の内、御上洛遊ばさるべき旨、思召され候旨、仰出され候、尤も、御頃合の儀は、追て、仰遣はさるべく候へ共、此段、觀聞に達し置き候様、傳奏衆へ、申入れらるべく候、恐々謹言。

との奉書を贈り、三家に對しても、其旨を通じ、尙、旗本の士、布衣以上の者、一役、一人づゝを、芙蓉の間に召し、近年の内、御上洛遊ばさるべく思召す、御治定の儀は、追て、仰出され候、此段、先づ、御内意申達すべき旨、仰出され候事。

と達し、又一萬石以上の諸侯を、黒木書院に召して、家茂、親しく、

近年、容易ならざる時勢に付、今度、政事向、格別、變革せしめ候間、何れも、國家の爲め、厚く相心得、心付き候儀は、申聞け候までも之なく、尙、年寄共へ、申談すべく候。

と訓諭し、安宅、更に、之れを敷衍して、

『昇平、殆ど三百年、綱紀、漸く弛び、武備、漸く廢れ

たる近時、圖らずも、外國の事起りて、朝廷、深く教慮を惱まざる、こと、誠に恐懼に堪へず、公武の間、固より、隔意なしと雖も、亦、自から疏通を缺くことなしとせず、故に、將軍家、近日、御上洛、百事、親しく、御奏聞あらせ給はんとす、但だ、此事、寛永以後の廢典に屬して、準備、急速に、調ひがたし、閣老、暫く、御猶豫を請ひ奉りしと雖も、舊例、古格に拘はらず、諸事、簡易を主とせよと仰出され、其準備、出來次第に、御發途あらせ給ふべし、公武合體、上下一和、舊來の弊風を洗滌し、武威を振張して、皇國を、世界第一の強國となし、上は、宸襟を安んじ奉り、下は、民心を綏撫し給はんとす、各々此旨を體して、忌憚なく、存慮を、吐露せらるべし』

との旨を諭せば、諸侯、何れも、皆、唯々として退く。

此日、忠義の京都所司代を免じ、大阪城代松平伯耆守宗秀を以て、其後任とす。

二日、閣老久世大和守廣周の願に依りて、其職を免じ、安宅、代りて、閣老の首席となる。

勅使の來ること、今より、數日の後に在り、上下、皆、目を注ぐ。

一五〇 勅使の登營（上）

勅使大原左衛門督重徳、五月二十二日を以て、京都を發す、薩藩の士吉井中助、野津七左衛門以下十人、特に、警衛として、勅使に屬す。

初め、長藩の志士入江九一、杉山松助、山縣小輔、堀眞五郎、大賀幾助等、勅使に隨行して、大に謀る所あらんとす、薩士從屬の事、決するに及んで、之れを止む、此一事、亦、薩長反目の因となる。

近江より、伊勢路に入り、二十五日、桑名に著す、島津三郎久光、勅使の旅館に抵りて、著府後の處置を議す。

大井の流を渡り、函根の嶮を踰えて、六月六日、品川に著し、將さに明朝を以て、江戸に入らんとす。

高輪東禪寺は、外人の館舍たり、勅使通過の際、外人の來るに會はゞ、容赦なく、斬り捨てんとす、外國奉行、聞きて、大に驚き、其翌七日、東禪寺に抵りて、切に、外人の

外出を止む。

談判、纔かに終れば、館前、早や、既に、警蹕の聲起る。

此日午後、勅使、品川を發す、前驅四五人、先づ進み、一櫃、此れに次ぐ、覆ふに桐章の油圓を以てし「勅使御用」と書せる官符を建て、衛士六七人、之れを護る、次は、兩掛にして、荷符に「大原殿」と記す、次は、金の桐章の挾箱、次は、長太刀、次は、衛士十人ばかり、次は、勅使、烏帽子、狩衣にて、朱塗の輿中に、端坐す、年齡六十二、容貌端正、威風堂々たり、衛士三十人、其左右に従ふ、次は、陣笠、旅服の武士十人ばかり、槍、鎧櫃、此れに適ふ、次は、駕籠五挺にして、醫師等、此れに乗る、未の刻過ぎ、數寄屋門より、辰の口の傳奏屋敷に入る。

御馳走役分部若狹守光貞、出で迎へ、將軍家茂、特に、閣老板倉周防守勝靜を遣はして、遠來の勞を慰す。

久光、亦、此日、江戸に著し、高輪の別邸に入る、其行装、大諸侯の參觀の如し、藩士の禮装して、郊迎するもの、數百人。

久光の京都を發するや、長州侯毛利大膳大夫慶親と與に、

配慮すべしとの命あり、然るに、慶親、其前日を以て、道中仙道に取りて、上京す、久光、聞いて、甚だ憚らず、薩長の反目、亦、一因を加ふ。

八日辰の刻、久光、越前前中將春嶽を、靈岸島の邸に訪ふ、勅使の齎らせる聖策三ヶ條の内、其第三項、一橋、越前兩侯登用の事は、久光の建築する所にして、朝廷、亦、是非とも、此一項を奉、行せしむべきの内諭あり、久光、乃ち春嶽に面して、京都の情形を語り、天下の大勢を論じて、大に國政に盡力し、民心を一新せんことを勸めて歸る。

時に、江戸に於ては、種々の流言浮説あり、聖策第二項の五大老新設の事は、朝議に出づるものとも知らず、

『豐臣太閤の時、五大老を置きしも、東照公の威權、獨り盛んにして、終に、天下を掌握し給ふ、今回、薩州の五大老を置かんと欲するもの、亦、已れ權威を振うて、終に天下を併吞せんと欲する野心に外ならず』

と唱ふるものあり、有司、亦、狐疑して、不安の色あり、春嶽、之れを聞きて、幕府の爲めに、疑はれんことを虞れ、病と稱して、敢て登營せず、

久光、乃ち一書を、春嶽に贈りて、天下の大事を、傍觀するの不可なるを説き、大に國家の爲めに、盡瘁せんことを、苦勸す。

十日、大原勅使、始めて登營す、薩藩の士吉井中助、野津七左衛門以下、萬一の變を慮かりて、皆、隨ふ。

對顔の間は、白木書院なり、將軍家茂、閣老板倉周防守勝靜の先導に依りて、上段に著す。

勅使、先づ、朝廷より、進ぜらるゝ御品の目錄を捧げて、御口上を述べ、更めて、自己の挨拶を述べれば、家茂、太刀、及び紗綾五卷を賜ひ、終りて、起つて、次の室の敷居際に立ち、重徳の雜掌堀内典膳、喜多川大膳に、謁を賜ふ。是に於て、勅使、上段に進みて、嚴かに、勅詔を傳へ、速かに、聖策三ヶ條を、奉行すべき旨を告げ、終りて、退出す、坐作進退、尋常にあらず。

此日、春嶽、及び松平肥後守容保、亦、登營し、勅使の退出後、白木書院の下段に於て、閣老と評定すること數刻、其談ずる所、蓋、勅詔に對して、如何なる處置に、出づべきかに在り。

一五一 勅使の登營(中)

勅使の任は、幕府をして、勅詔を奉行せしむるに在り。

十三日未の刻、大原左衛門督重徳、重ねて、登營し、閣老脇坂中務大輔安宅、板倉周防守勝靜の二人に、對面して、勅意の在る所を、反覆、陳説し、

『此上は、宜しく、速かに、朝旨を遵奉して、叡慮を安んじ奉つるべく、就中、聖策三ヶ條の内、第三項は、必ず、奉行あるべし』

との旨を説く、幕府にては、初め、重徳の大原家相續以前、落魄の一書生として、諸方を遍歴し、江戸に出で、同心の株を買ひ、暫く、其職を勤めしことあるを知るを以て、

『大原殿ならば、更に、心配なし』

と高を括り居たるに、其議論、堂々として、侮りがたき風あり、何れも、始めて、其議論家なるを知る。

當時、幕府に於ては、將軍家上洛の一事は、既決の問題にして、敢て、遵奉し得ざるにあらざるも、第二項の五大老新設の事は、如何にもして、奉行しがたく、第三項の一橋、

越前兩侯登用の件は、

『將軍家、御年頃とならせられし故を以て、田安大納言殿の御後見職を、解かせられたる今日、再び一橋殿を御後見職となさんことは、如何にも、朝令暮改の嫌ひあり、越前殿は、既に、大政に參與せられ居れば、此一事は、仔細なしと雖も、御家門の方を以て、大老職とするは、舊例に背くを奈何』

との異論ありて、容易に、決定せず、左しも、議論家の重徳も、何の要領を得ずして退く。

其翌十四日、島津三郎久光、別に、自ら安宅の邸を訪ひ、天下の大勢を論じて、速かに、勅命を奉行せらるべしとの旨を陳ず、安宅、

『一々、御尤もにこそ存ずれ、何れ、篤と、評議致さん』と答ふるのみにて、敢て、煮え切らず、久光、其因循姑息、終に、實行せざらんことを虞れ、越えて十六日、更に、一書を贈りて、

『此頃、朝廷、久世氏を召させられしも、御請け、遲滞に及び、止むを得ずして、勅使を差下し給ひ、公武一和、

國內一致の策を、計らせ給ふ、一橋、越前兩侯を、後見、大老に登庸すべしとの御趣旨も、其天下人心の歸嚮する所なるが爲に候、然るに、區々の名目に拘泥して、躊躇遷延せられなば、或は恐る、優柔不斷の議を招き給はんことを。

幕議、遲延の間、人心、疑惑を生じ、巷間、流言を傳へて、浪士、亦、蜂起するに及ば、國家、紛亂して、國威、挽回の期あるべしとも存ぜず。

田安君の解職後、更に、一橋君を後見職となさんは、如何との御懸念は、其理なきにあらずと雖も、今は、天下多事の秋にして、特に、勅使御差遣の上の勅命に候、快よく、奉行せられんこそ、公武一和の道なれ、人心歸服の策なれ、國家治平の基、此に候。

越前君は、御家門にして、大老職に任ずるを得ずんば、宜しく、政治總裁職として、大老同様の權限を與へらるべし、亦、人心一和、國內靜謐の道に候』

との旨を説き、更に、

『毛利大膳大夫は、將軍家の御上洛を、勸め奉つると雖

も、是れ、敢て、急事にあらず、寧ろ、越前を起たして、上洛せしむるに若かず』

と論じて、毛利大膳大夫の召還を勧む。

公武合體の事は、薩長、俱に、同見に出づるも、其實行の手段として、長は、將軍の上洛を、第一とし、薩は、之れを第二に置く、是れ、其意見の分るゝところ。

一五二 勅使の登營（下）

勅使、二たび、登營すれども、局面、尙、未だ展開せず。十七日、重徳、使を馳せて、久光を招き、明日登營の件に關して、協議する所あり、密談、夜に入る。

十八日、勅使、三たび、登營し、安宅、勝靜の二人に、對面して、復たも、速かに、勅命を遵奉すべき旨を促がす。左れども、慶喜を以て、後見職となすの件は、種々に、陳謝して、應ぜず、此日も、亦、要領を得ず。

二十五日、安宅、勝靜の二人、傳奏屋敷に到り、勅使に、對面して、又も、前日の事を談ず。

二十七日、二人、重ねて、傳奏屋敷に到り、勅命に關して、

百万、論辯する所あり、兎も、角も、二十九日を以て、決答するに決す。

幕府、幸ひに、奉行すれば好し、若し、辭を熟考に藉りて、確答せずんば、天威、爲めに、地を掃はん、久光、深く、心を苦め、屢々、侍臣を、傳奏屋敷に遣はして、謀議を凝らす、重徳、亦、堅く、決する所あり、二十九日、

『我れ、大切の御使を承はりて、關東に下り、一も、勅旨を、貫徹せずんば、復た何の顔ありてか、人に對せん、今日の登營は、特に、大事なり、確たる返答を得ずんば、復た生きて、歸館せじ』

と思ひ極め、重要な書類を、燒棄し、雜掌堀内典膳を召して、後事を託し、午の刻過ぐる頃、薩藩の士吉井中助、野津七左衛門以下を隨へて登營す、威儀、特に儼然たり。

丈夫、一たび、死を決すれば、復た何をか怖れん、重徳、黒木書院に於て、又々、安宅、勝靜の二人、及び松平肥後守容保等に對面して、論談し、飽くまでも、彼れを、説破せざれば、止まざらんとす。

談局、未だ結ばず、既に、黄昏に及ぶ、幕府、二汁七菜の

料理を以て、饗應せんとせしも、重徳、辭して、受けず。

引續きて、尙も、反覆辯論すること多時、安宅等、終に聖策第三項を、奉行する旨を答へ、七月朔日を以て、奉答するに決して、始めて、局を終る。

七月朔日は、幕府奉答の日なり、溜問詰諸侯、譜代諸侯、高家、奏者番、及び其嫡子の面々、皆、登城す。

此日已の上刻、勅使、五たび、登營し、白木書院に於て、將軍家茂に對顔す。

家茂、親しく、勅命を奉じて、徳川慶喜を、後見職、松平春嶽を、政治總裁職となすべき旨を答へ、起ちて、次の室の數居際に到り、列座の諸侯に、謁を賜うて、奥に入り、勅使には、酒饌を饗す、暴風一過、天空復蒼々たるの觀あり。

越えて六日、家茂、特に、安宅を使者として、慶喜の許に、遣はし、

徳川刑部卿殿

右思召を以て、再相續仰出され、一橋領十萬石、之を進ぜらる。

との旨を傳ふ、慶喜、直に、登營して、恩を謝すれば、家茂、特に、座所に召し、

今度、勅慮を以て、仰遣はされ候に付、後見、之を仰付けらる。

との上意を賜ひ、越えて九日、越前々中將春嶽を、座所に召して、同じく、

勅慮を以て、仰遣はされ候に付、御政事總裁職、之れを仰付けらる。

との上意を賜ふ、此の如きの辭令は、實に、古來、未だ曾てあらざるところ。

京都の干涉、是に於てか、始めて、行はれ、幕府の權威、是れより、將さに衰頹せんとす。

一五三 傳奏屋敷の談判

勅使大原左衛門督重徳、既に、使命を達したりと雖も、尙、留まりて、江戸に在り、十七日を期して、一橋刑部卿慶喜、越前前中將春嶽の二人を招く。

二人、乃ち閤老脇坂中務大輔安宅、板倉周防守勝靜と與に、

往訪するに決す。

期に至り、慶喜、將に駕を命じて、門を出でんとす、會重德より、使者あり、所勞の故を以て、來訪を辭す。

二十日は、重德の登營すべき日なり、又、

『今日は、登城仕つらず』

との旨を通じ、且、

『是れまで、段々、申入れたる處、更に、御違奉之れなく候間、早速、歸京、言上致すべく候』

との意を致す、慶喜、其何の故たるを解せず、二十二日、執事を、傳奏屋敷に遣はして、春嶽と連署の書面を贈り、

『勅諭の趣は、公邊に於ても、疾くに、御違奉に相成り候へること、今更、申すまでも候はず、其餘の事は、我等、駈と承知仕つらず、定めて、御自分の御了簡、御申入れの事にても候はんか、其仔細、伺ひたし』

と質問すれば、重德、

『然らば、明日、御面談申さん、是れへ、御入りあるべし』

と答ふ、慶喜、重ねて、

『傳奏屋敷は、勅使の御馳走所にて、談判所には候はず、政務に關する事ならば、御登城の上に仕つらん』

との旨を通ずれば、重德、

『當屋敷にても、苦しからず、但し、御兩所のみ、御入りあるべし、閣老方の列席は、相成らず』

と答ふ、是に於て、慶喜、春嶽の二人、二十三日を以て、傳奏屋敷に到り、重德に對面して、

『公邊に於ては、既に、勅諭の趣を、奉行仕つり候はずや、何事を指して、未だ違奉せずと仰せられ候や』

と質せば、重德、

『酒井若狹守は、所司代を差免されたるに、今以て、京都を引拂はざるは如何、後任者松平伯耆守は、其人物、然るべからざるに、今に轉除せられざるは如何、特に、御兩所御就職の上からは、大號令をも出さるべきに、今に、何たる事なきは如何、斯かる有様にては、何の益ともあらず、此儀、速かに、歸京の上、言上せんと存ずるなり』

と答ふ、慶喜、

『若狹守に對しては、既に、引拂ひの儀を達しあり、今頃、早や、引拂ひ居り候べし、所司代の後任に就ては、

差向き、他に適任の人物ととも、見當らず、自然、御心當りも候や』

と問へば、重德、默然たること少し、頓て、

『イヤ、差當り、我等にも、心當りあらず』

と答ふ、慶喜、重ねて、

『然らば、尙又、御存寄をも伺ひ候はん、大號令の事に至りては、何を申すも、天下の大事に候、左様に、容易に出來べき事には候はず、若し、容易に出來候はんには、何も遙るゝ、勅使の御下向にも及び候まじ』

と答ふれば、重德、語、塞がりて、復た言はず、用談、是れにて終れば、重德、

『島津三郎、御目通り仕つらせても、然るべきや』

と問ふ、慶喜、

『御用談、相濟む上からは、何人の罷り出づるも、苦しからず、尙更、議論の儀ならば、何なりとも承はりて、天下の公論正議を盡し候はん』

と答ふれば、島津三郎久光、頓て、出で來りて、下段に坐す、慶喜、

『苦しからず、是れへ』

と聲を掛くれど、久光、謙退して、席を進めず、徐かに、色代して後、世態の變遷、政事の得失を、談ずれども、亦、多くを語らず。

是れより、閑談少時にして、二人俱に、辭し去る。

一五四 長州侯の入京(上)

島津三郎久光の關東に於て、疏旋せるの間、毛利大膳大夫慶親は、京都に於て、活動するの機を得たり。

慶親は、豫てより、永井雅樂の意見を容れて、公武合體の爲めに、力を盡し、此見地を以て、京都にも、上書し、幕府にも、建言し、近日に至りては、更に、將軍の上洛を勸めて、朝幕の意志を、疎通せんことを計る。

將軍家茂、深く、其誠意を嘉みし、六月朔日、例に依りて登城するや、先づ、諸侯に謁を賜ひたる後、特に、慶親を、座所に召し、茵を下りて、慰懃に、謝意を述べ、

松平大膳大夫

昨年来、申聞けらるゝ趣、満足致候、尙、此先、氣付の筋、之あるに於ては、遠慮なく、申聞けらるべし。との書付を賜ふ、此破格の待遇を蒙る慶親の感謝、言ふばかりなし。

尋で、越前前中將春嶽の詰所に招かれて、俱に、天下の事を談じ、其意見、益々融和するに至る。

會々中山大納言忠能より、家老浦輒負を召して、與へたる書付、江戸に達す、中に、永井雅樂の建白に關して、

右建白中、朝廷の御處置、聊か諄詞に似寄り候儀も、之あり、御残念に在らせられ候へ共、是等は、主人、上京の上、委細に、御辯解在らせらるべく候。

との一節あり、慶親、大に驚きて、急に、旅装を調へ、歸路は、中仙道を取るの例に依り、六月六日を以て、倉皇、江戸を發す、其前日、特に、藩士に對し、

當今、内憂外患切迫に付、我等存意の趣、昨年以來、幕府へ申立候處、今般、右建白の旨趣、御取用ひ相成り、過る朔日、登城の節、我等誠意の程、御満足思召さるゝ

旨、御直に、仰出され、猶、速に御上洛、萬事、御誠實

の思召、御直に、仰上げられ、從來の弊風、御一洗、御武威御振張、皇國を、世界第一等の強國と成され候御偉業を、立てさせられたしとの思召の旨、委細、別紙御書付の通り、仰出され、誠に以て、難有き御事に候、我等、

建白の旨趣も、全く、右仰出されの外に出で候儀は、之なく候間、此往、御上洛の上、公武の御間、御合一に成

らせられ、御偉業の基本、相立ち候はゞ、國是、御確定に、相成るべく、就ては、我等國政も、幕府へ建白の旨趣に基き、上下一心に相成り、群議を取捨し、誠實に、

取行ひ、偷安忌戰の俗情を、一洗し、武備、彌々充實せしめ、開鎖和戰は、國是御確定の旨に従ひ、上、宸襟を安んじ奉り、御偉業の裨補とも相成候様致度候條、此旨、厚く相心得べきもの也。

との書面を發して、其方針を示す、一意、公武の爲めに、盡さんとするを見るべし。

然るに、勅使着府の前日を以て、途を異にして、出發せるの一事は、痛く、久光の感觸を害したるのみならず、京都

一五五 長州侯の入京(中)

當時、朝廷の意見は、鎖國攘夷に在りて、幕府の意見は、開國通商に在り。

薩長二藩は、俱に、公武合體を計ると雖も、長は、専ら開國佐幕を唱へ、薩は、單に尊王佐幕を唱へて、開鎖は、内政整頓の後に、決せんとはす。

左れば、朝廷に於ては、偏に、薩州に信頼せらるゝに反して、長州に嫌焉たる所あるは、固より其處。

特に、過激の公卿、諸藩の處士の、薩州の尊王佐幕をさへ手緩るしとして、勤王倒幕を主張するものに至りては、慶親の勅使出府前に、出發せしを、非として、違勅に問はん

と、意氣捲くものさへあり。

左なきだに、永井雅樂の開國論を喜ばざる長藩の諸士は、世子長門守定廣を擁して、尊王攘夷の説を鼓舞す、是に至りて、愈々藩論を一定せざるべからざるの必要を感じ、七月六日、家老浦輒負、毛利伊勢、毛利筑前以下、一座に會同して、密議を凝らし、將來、薩州と協力して、公武の間

に於ても、亦、意外の嫌疑を蒙れり、中にも、曇華院の家司結城筑後守秀伴、村井修理少進正禮の二人は、連署の意見書を、上つりて、

『勅使東下に就ては、島津三郎と與に、周旋すべき内勅を拜しながら、其著府をも待たず、多人數を率ゐて、上京するは、不審に候。』

公武合體に就て、周旋する所、亦、三郎と、表裏同じからず、單に、關東の威光のみを主張して、朝廷を顧みず、從前の幕議を助けて、御國體を定めんと欲し、内勅を奉じて、周旋せず、閣老と謀りて、上京せること、全く、朝廷を蔑如するの振舞に候。

謗辭辯解の爲めに上京すると言ふは、信ずべからず、大樹の上洛を、口實として、叡慮を動かし奉つらんと圖るやも、測るべからず、勅使歸京奏聞の上までは、何事も、其意見を御採用あるべからず候』

との旨を陳ず、朝廷、亦、多少の疑ひなきにあらず。慶親、既に、京都に入れども、其形勢の非なるを見て、病と稱して、出でず。

に、幹旋するに決す。

是に於て、周布政之助、中村九郎兵衛、桂小五郎の三士は、薩藩の士藤井良節を介して、本田彌右衛門と懇談する所あり、表面のみは、兎も、角も、相融和す。

是れより以來、政之助、九郎兵衛、小五郎の三士、四方應接の衝に當り、縉紳公卿の間に、奔走して、頻りに、慶親の他志なきを辯ず。

諸卿、其意志を諒して、慶親の嫌疑、漸く霽る、乃ち七月八日を以て、密に、

大膳大夫儀、上著後、今以て、所勞にて、引籠り居候處、所勞、一通りにも、之なく、内實は、心中恐縮罷在候次第之あり、旅中より、家老一人指越し、過る二日、申上げ候趣に付、何とか、御沙汰も在らせらるべきや、最前、御書取を以て、仰聞けられ置候通り、御懸念御辯解罷成候は、難有き仕合に存じ奉り候、右御辯解一條、相済み候上を以て、先般、勅使御東下に付、大膳大夫へ、御内沙汰の旨を、早速、御請け申上げ、丹誠を抽んで候様仕度く存じ奉り候。

との書面、及び

先般長門守へ、大膳大夫深意に隨ひ、周旋仕候様にと、仰聞けられ候節、暫く、御猶豫願ひ置かれ、大膳大夫へ、申越し候處、重大の事件、各地懸隔、意味齟齬仕候ては、相濟まず候に付、一先づ、御斷り仕候様、大膳大夫より、申越し候に付、其段、申上置候、然る處、此度、父子一同、轡下に罷在り、尤も、長門守は、追て關東へ、罷下り候筈に候へ共、其内、申談じ、周旋仕度く、此段、聞召し置下さるべく候。

との書面を、正親町三條大納言實愛の許に呈して、其内意を伺ひ、越えて十二日、家老毛利筑前より、改めて、此二通の書面を、傳奏に呈す。

其翌十三日、更に、毛利伊勢を、實愛の邸に遣はして、曩に、永井雅樂の呈したる建白書を申請ひ、書中、勝辭に似たる廉に對して、辯解の書を呈す。

朝廷、始めて、氷解せられ、十六日、慶親を、學習院に召し、中山大納言忠能、正親町三條大納言實愛、坊城大納言俊克、野宮宰相定功の四人、列座の上にて、延見す。

あり、其要旨は、

一、聖策第一條の大樹上洛の事は、勅使の著府に先だちて、彼れより、言上あり、第三條の後見職、政事總裁職は、幕府、之れを奉行するに決す。

一、此二事を遵奉する上は、第二條の五大老設置の件は、之れを見合はす。

一、大膳大夫は、大樹よりも、依頼を受くるもの、宜しく、公武を調和して、教旨を貫徹せんことを、力むべし。

と言ふに在り、尋で、二十七日、議奏、傳奏を以て、慶親父子の内、一人は、滯京し、一人は、出府すべきの命あり、因りて、其翌二十八日、慶親は、滯在し、定廣の出府すべき旨を、答へ奉つる。

八月二日、定廣を、學習院に召されて、議奏、傳奏より、戊午以來、官武降黜幽閉の輩、追々、再出に相成候處、地下の輩に於ては、今以て、其儘の分も、之あり候間、早々、赦免之あるべき様、思召候、三條入道内府儀は、忠魂を慰めさせられ、右大臣を贈られ候に付ては、水戸

慶親、先づ、天機を伺ひ奉つり、其れより、其建言の教聞に達したる御禮、嫡子長門守定廣に對して、御内命を賜はりたる御禮、并に御懸念御氷解の御禮を、述べれば、

永井雅樂申出で候書取の内、謗詞似寄の儀一件、委細、演説に及び候通りの教慮に在らせられ、右思召の御旨趣、伺取方相違の段は、元より、御遠察御氷解の御事にて、御遺念在らせられず候間、以來とても、懸念なき様との御沙汰あらせられ候事。

との書面、并に勅使を以て、關東へ下されたる教慮、貫徹するやう周旋すべき旨の書面、長門守も、亦、周旋すべき旨の書面、都合三通を、下附せられて、慶親の身上を掩へる疑雲、此に、全く霽る。

一五六 長州侯の入京(下)

慶親、今は、活動すべきの機に達したり、是時に際して、緊要なるは、先づ、朝意の在る所を、知るに在り。

慶親、乃ち曩に、幕府に下し賜へる三ヶ條の聖策に對して、四ヶ條の伺書を呈し、二十三日、附箋を以て、一々、指令

前中納言に於ても、出格の儀を以て、大納言を贈られ度く、思召候、且、往年來、長岡驛等に於て、横死候者共始め、其餘、安島帶刀、鵜飼吉左衛門以下、諸國の士、關東に於て、死罪、且、牢死致候者、又は、流罪幽閉等にて、死亡候者、或は、櫻田、東禪寺、又は坂下一件、其餘、國事に死を遂げ候輩、近くは、伏見一舉等にて、死失致候者共も、靈魂招集、禮を以て收葬、子孫をして、祭祀せしめ候様、遊ばされ度く、尤も、現存の者共は、夫々、舊の如く、相復し候様との敎慮に在らせられ候間、存亡に拘はらず、是等に預り候輩は、姓名は勿論、其向向取調べ、洩れざる様、早々、申上ぐべく候、其上、前條の趣、御處置在らせられ度く、思召候事。

との勅諭、并に

水戸前中納言、國家の爲めに、忠節盡力、卓越の段、深く敎慮に付、大納言を贈られ候儀、尙又、當中納言も、其遺志を繼ぎ、國家の爲に、丹誠を抽んずべきの段、幕府より、申渡され候様、遊ばされ度く、思召候事。

との別紙を、下し賜ひ、關東に下りて、周旋せんことを、

命ぜらる。

慶親、是に於て、又々、朝旨を拜承し置くべき必要を感じ、此日、

一、下田條約は、御不本意ながら、御許容あらせらるべきも、假條約は、破却せらるべき敎諭に候まじきや。
一、右の條約に關與せる有司は、御處置あるべき敎旨に候まじきや。

一、水戸、尾張は勿論、正義を以て、罪禍に陥れる諸浪士に對して、赦令を下さるべき敎慮に候まじきや。

一、假條約破却に決せば、舉國決戰の覺悟あるべきこと、勿論にして、固く防禦の處置、相整ふべき朝旨に候まじきや。

等の件々を、伺ひ出づ、前に、公武合體論なりし慶親、今は、純然たる尊王攘夷論となり、前に父子不一致なりし長藩、今は、舉藩同一の方針を執つて、進むに決す、是れ、有司には、周布政之助、中村九郎兵衛、桂小五郎、志士には、久坂義助、寺島忠三郎、入江九一等の周旋、最も與つて力ありしなり。

諸藩の志士、是れより、心を長藩に屬するに至る。

一五七 堀次郎の幕譚

幕府の勅旨を奉じて、一橋、越前の二侯を、登用するや、島津三郎久光、

『今こそ、我が意見を建言すべき時節、到來しつれ』

と思惟し、七月七日、一篇の建白書を、閣老板倉周防守勝靜の許に呈して、六月朔日に於ける政事變革の台旨を贊し、且、

是まで、御威光とか申し候て、善惡の御構なく、御壓服の御手段は、恐れながら、近來の御弊政にて、彌々人氣激發の基と存じ奉り候間、右等の御氣味、御一洗、寛永以往の御政事に復させられ、公武御合體の大基本、立てさせられ候上、義理上より生じ候眞實の御威光、在らせられ度く、偏に懇願奉り候。

との旨を勸説す、久光は、諸侯にあらず、唯、薩州侯の一族に過ぎざるに、其言論、自から威力あり、公武の間に、周旋して、言、聽かれ、策、行はるゝもの、亦、以て誇負

するに足るものあらん。

然れども、諸閣老は、心に久光を憚らず、特に、七月二十三日、大原勅使の一橋、越前の二侯を、傳奏屋敷に招きたる際、閣老の列席を拒みて、久光の參會を許せるの一事は、著るしく、其感情を害し、脇坂中務大輔安宅の如きは、

『斯くては、老中の職に在るも、何の甲斐なし』

と憤り、終に、斷然、處決せんとまで、意氣捲くに至る。

當時、久光の參謀として、其樞機に參與せるものは、留守居役堀次郎なり、世上、往々、

『薩州、今回の經畫は、盡く、次郎の建策に出づ、其奸謀、長州の水井雅樂にも過ぐ』

と稱する程なれば、閣老の久光を憚らざるものは、轉じて、次郎を憎み、之れを斥けて、久光の羽翼を殺がんと欲す。

薩藩にも、次郎を忌むものあり、密に、其罪狀を、幕府に報ず。

閣老、奇貨、居くべしとなし、八月三日、大目付を、薩州の藩廷に、遣はして、

松平修理大夫家來

元小納戸留守居役

堀 次 郎

右は、京師に於て、浪人を騒ぎ立てさせ、其外、公邊に對して、不屈の所業之あり、屹度、御沙汰も之あるべき處、格別の譚を以て、修理大夫手限り、嚴重取計ひ申付くべく、之を仰渡さる。

との書付を交附す、久光、其理由を伺ひ出づれば、五ヶ條の罪狀を示す。

久光、今は、争ふこと能はず、即日、本國に下すべき旨を答ふ。

越えて五日、薩州の家老島津登、安宅の邸に到る、安宅、次郎の、尙、薩邸に在るを知りて、

一昨日、國元へ、差遣はせる趣を、申聞けながら、今以て、其儘に、致し居る由、彌々遅々するに於ては、次郎を呼出して、吟味を遂ぐべし、其旨、屹度、相心得、早早、取計ふべし。

との嚴命を、下したれば、其翌六日、次郎、姓名を、牧野奎介と變じて、江戸を發す、當時、

『若し、三郎にして、承知せざる時は、如何すべきや』とは、闇老の密に痛心せるところ、其承諾するに及んで、始めて、意を安んず。

世人、此内情を知らず、皆、脇坂闇老の雄斷を稱す。

一五八 濱御殿の饗宴

勅使大原左衛門督重徳の著府以來、既に、二ヶ月を過ぐ、幕府の施設、見るべきものなきも、施政の革新、期すべきものなきにあらず、島津三郎久光、亦、堀次郎の事ありてより、漸く歸京の心動く、重徳、乃ち不日を以て、出發するに決し、八月三日、一橋刑部卿慶喜に、

黒髪を三たび握りしふる事を

日々に新たに思ひ出よ君

との和歌を贈りて、吐哺握髮、國政に精勵せんことを勧め、越えて九日、首途の式を行ふ。

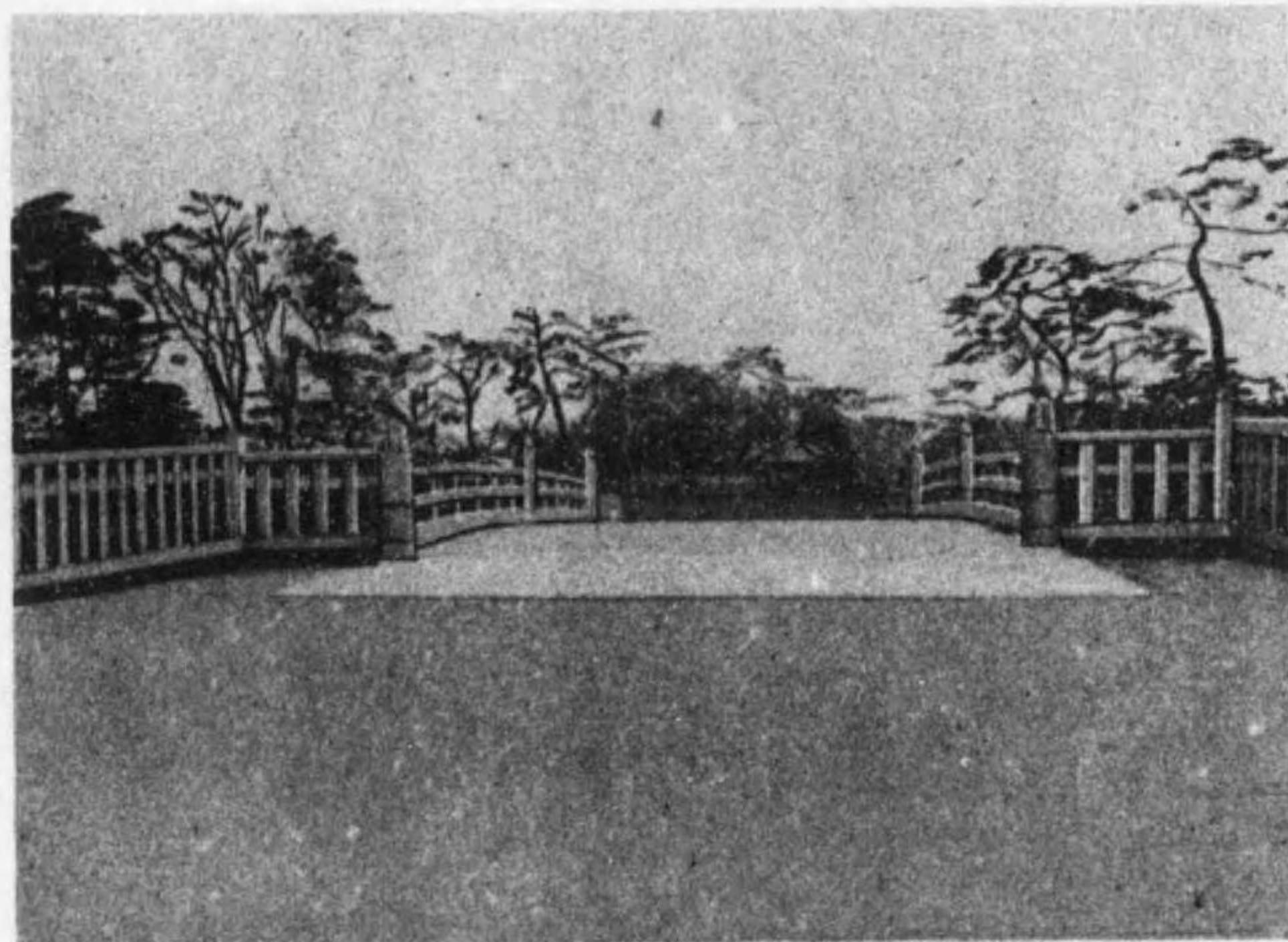
此月十六日、幕府、特に、重徳を濱御殿に招きて、慰勞の宴を開き、越前前中將春嶽、林大學頭煒以下の諸員、來りて、接伴の勞を執る。

重徳、春嶽を別室に招き、首を鳩めて、密に、正名除奸、

尊王攘夷の大道を説き、且、今秋を期して、必ず、上京せ

濱御殿

濱御殿は東京市京橋區に在り今の濱離宮是れなり幕府の大原勅使を饗應せし處



んことを勧め、反覆談論、已の刻より、申の刻に至る、他の接伴員以下、氣は倦み、腹は空きて、空しく、欠伸を噛み、むること、幾十回。密談、漸

く終れば、杯盤、漸く出づ、時は、中秋後一日、昨日の雲は、名残もなく、霽れて、今日の天は、又なく澄みまさる。西窓に、夕日を送りて、東欄に、夜月を迎ふ、浩蕩の水は、清輝を疊みて、激瀾の浪は、金綾を織る、秋宵の一刻、亦、千金よりも優る。

賓主、酒を把つて、傾くれば、春は、自から觥底より湧く、

重徳、快然として、先づ、

打寄する池のさなみ千代數に

治まる御代を祝ふ今日哉

との一首を詠じて、昭代を祝し、更に、

高殿の餌にかゝりし魚ならで

直ぐなる針に得たる君かな

との一首を賦して、春嶽の登用を祝し、尋で、

竹芝の濱の景色も詠めよと

けふ十六夜の月の宮人

との一首を、口吟めば、春嶽、亦、

武藏野の尾花が波もかきわけて

我はくまなき十六夜の月

と謠ひて、此れに和す、興趣、油然として、復た秋氣の天地に満つるを知らず、酒間、時事を談ずるものあれば、重徳、

『先づ、先づ』

と制して、巧みに、和頭を轉ずるところ、流石に、漂零多年、酸いも、甘いも、噛み分けたるものならでは、出来がたき輕妙、曩日、談判の席上、揚足取りの名人として、

『大原殿との應接は、夷人との談判よりも、六づかし』と評せられし勅使其人とは、殆ど、別人の觀あり、煒は、ベルリ饗應の席上、儼然として、儀容を崩さざりし人、此體を見て、密に、

『其舉動、暫間の如し、勅使の振舞とも見えず』

と評して、苦笑するに至る、左れども、禮に始まりて、敢て、亂に終らず、和氣洋々の間に、宴を撤す。

十八日、重徳、告別として、登城し、將軍家茂に、對顔し、愈々二十一日を以て、久光と與に、出發せんとす。

時に、毛利長門守定廣、京都より、來りて、品川の旅館に在り、使者を以て、明日參候すべき旨を、通じ來る。

一五九 長州世子の出府

長州の世子毛利長門守定廣、八月三日、勅書を奉じて、伏見を發し、途を東海道に取りて、江戸に下る。

大膳大夫慶親、世子の壯年にして、重任を受くるを慮り、従前の諸臣の外、更に、兒玉總兵衛、兼重讓藏、小川市右衛門、山田亦介、桂小五郎等をして、隨從せしめ、尙、書を在府の清末侯毛利讃岐守元純に贈りて、世子を輔佐せんことを囑す、元純は、長州の支藩なり。

會々、勅使大原左衛門督重徳、及び島津三郎久光の二十一日を以て、江戸を發するを聞き、程を兼ね、行を急ぎ、十八日を以て、品川に著し、直に、使者を、辰の口の傳奏屋敷、并に高輪の藩邸に遣はして、明日訪問すべき旨を報ず。

然るに、重徳、故障ありと稱して、其來訪を拒む、桂小五郎、特に、重徳に謁して、請ふ所あれども、尙、許さず。

久光、亦、此夜、大久保市藏に命じ、書を定廣の家臣來島又兵衛に、贈らしめて、

明日、一橋公の御屋敷に參候候様、俄かに、御沙汰之あ

り、長門守殿と、御面會の儀は、御斷り成され候。

との旨を通ず、定廣、是非共、其出發前に、一會見を遂げんと欲し、重ねて、使者を遣はして、明朝、一橋邸訪問前に、往訪すべき旨を通ず。

十九日の朝に至りて、薩邸の使者、定廣の品川の旅館に來り、

最早、一橋殿の邸に參候候、今日の御來訪は、御無用に候。

との旨を通ずれば、定廣、止むを得ず、其訪問を見合はせ、申の刻を以て、櫻田の本邸に入る。

然るにても、勅使と曰ひ、久光と曰ひ、何故に、定廣の訪問を拒みたるぞ、長藩の諸士、

『三郎殿に於ては、其出府の前日、大殿の中仙道より、御上京ありしを、立腹せられしとも承はれば、或は、其等の事を、根に持たるゝにてもあらんか、勅使に於ては、何の御不興ありて、御對面相成らざる儀ぞ』

と思惟して、密に、其事情を探れば、意外なる理由の、其間に伏在するあり、定廣の奉持せる勅書中に、

『近くは、伏見一舉等にて、死失を致し候者共、靈魂招集、禮を以て收葬云々』

との一節あり、久光は、浪士鎮撫の勅命を、蒙むりたればこそ、其藩士の、浪士に通謀せるものを、伏見寺田屋に於て、討取りたるなれ、是が爲めには、朝廷よりも、幕府よりも、褒賞をさへ、受け居れるに、今更、其殺害せられたるものを、忠誠の士として、禮葬せられんか、之れを殺害せしめたるものは、却て、措置を失したるの妄舉とならん、左なきだに、堀次郎の事ありて、聊か鼻梁を拉がれたる久光、更に、藩士禮葬の事ありては、一層、其面目を失せんこと、言ふまでもなし。

久光の不平、全く、此點に在ることは、薩藩の士藤井良節の桂小五郎に語るところ、及び中山忠左衛門の口氣に徴して、疑ふべくもあらず。

久光の來訪を拒めるは、此點に在り、重徳の對面を避くるも、亦、久光に同情するに在り。

一六〇 勅書の改削

勅使も、會はず、薩州も、亦、逢はず、此れに對して、如何に處すべきかは、長州の苦慮するところ。

長州の苦慮も、苦慮なれども、更に、此れよりも、苦慮せるは、勅使大原左衛門督重徳其人なり。

『薩州の不平も、然ることながら、此儘、捨て置きては、長州も、亦、憤激せん、薩長は、朝廷の股肱なるに、互に、反目嫉視するに至らば、朝廷の御大事なり、我れの京都出發に臨みて、岩倉侍從の「薩長は、國家の柱石なり」とは言へ、恰も、兩虎の相對するが如し、一旦、感情を損する時は、互に、爪牙を磨ぐに至らん、兩藩、早や、既に、反目の兆あり、關東下向の後は、心して、能く、調停せられよ」と言ひしは、此處なり、恐れ多きことは言へ、國家の大事には、換へがたし、勅諭中、伏見の一節を、除かんに若かじ』

と思ひ極め、十九日、桂小五郎を招きて、

『此度、京都より、勅諭御取換へ相成るべき旨、御沙汰

あり、前の勅諭を差し出さるべし』

との旨を告ぐ、小五郎、

『寡君大膳大夫、其爲めに京都に候、若し、勅諭を御取換へあるに於ては、先づ、大膳大夫より、長門守に申越すべき順序に候はん、唯、勅使にのみ、御沙汰ありて、大膳大夫に、御沙汰なきは、其意を得ず』

との旨を答へ、還りて、其旨を報ず、定廣、諸臣を、面前に召して、凝議、深更に及ぶ、諸士、

『若し、勅使の專斷を以て、勅諭を改削せらるゝ様の事ありては、御當家の御落度のみならず、恐れながら、朝廷の御威光にも、拘はり候はん、御病氣を仰立てられて、暫時、御引籠あらせられ、其間に、京都へ、聞き合はせ給はんこそ、然るべけれ』

と言ふもの多し、左れども、志士赦免の事に就ては、幕府に於ても、密に、調査せりとの説あり、

『若し、此方より、勅諭を、御差出し相成らざる以前、幕府に於て、其内の一事にても、實行する時は、折角、御盡力の効、薄きに似たり、伏見の事は、唯、勅諭の一

節に止まりて、大體には、何の動きも候はず、御當家の御落度とならざるやう、勅使に於て、御請合ひ相成らば、速かに、御請けありて、然るべし』

と言ふに決し、二十日朝、小幡彦七を、傳奏屋敷に、遣はして、其旨を申せば、重徳、

『其儀、道理なり、重徳、屹と、請合ひ申さん』

と答ふ、彦七、乃ち還り來りて、其由を報ず。

是に於て、此日辰の刻過ぎ、定廣、自ら傳奏屋敷に到りて、重徳に對面し、前の勅書を還して、更に、別の勅書を受け、一旦、藩邸に歸りて後、復た久光を、高輪の別邸に訪ふ。

久光、今は、心、漸く釋けて、出で、對面す、左れども、其器度にあらざればとて、細大の事を談ぜず。

此問題は、是れにて、解決せり、左れども、薩長の反目、依然として、釋けず、重徳、亦、是が爲めに、痛く、尊攘黨の排斥を受けるに至りしこそ、是非なけれ。

一六一 島津久光の意見

島津三郎久光の歸期、決定するや、一橋刑部卿慶喜、其意

見を聽かんと欲して、特に、久光を招く。

十九日、久光、一橋邸に到れば、越前前中將春嶽、先づ在り、慶喜、座を與へて、

『此間、傳奏屋敷に於て、對面の節は、委曲、意見を叩くを得ざりしこそ、遺憾なれ、出發、不日に在りと承はれば、重ねて、對面の機を得がたし、今日は、平生の存慮、残さず、申聞けらるべし』

と會釋すれば、久光、慇懃に、禮を施して、

『公邊に於て、勅命御奉行の上からは、越前殿御上京、國是の存する所を、仰上げらるゝ様との御内命に候、此程より、屢、言上仕つると雖も、未だ御氷解あらせられざるに似たり、此儀は、公武御合體の上に取りて、肝要の儀に候、是非に、御請けあるべし』

と述べ、手控書を以て、二十三項の意見を提起す、即ち

一、越前殿上洛、閣老一人、同伴の事。

一、一橋、越前兩侯、御登庸の上は、閣中、一和あるべき事。

き事。

一、大赦の勅命を、奉行せらるべき事。

- 一、京都所司代を、更任せられたき事。
- 一、公武の間、名義の不相當なるものを、變革せられたき事。

將軍御一代に、一度、御上洛の事。

諸書付類認め振りの事。

勅使御會釋向、其他の事。

- 一、和宮様御會釋向を、手厚くする事。

- 一、和宮様御心願の御事あるに付、來春には、是非、御上洛あらせられたき事。

- 一、朝廷御續料十萬石程、御増加の事。

公卿中、忠誠の方は、少しづつ、同斷。

- 一、水戸前黃門殿贈官、仰出されたき事。

- 一、故掃部頭罪科、屹と、御糺しの事。

- 一、酒若隱居慎みの事。

間部も同斷、隨從の面々も同斷。

- 一、安對は、今一際、重く、仰付られたく、隨從の面々も、屹と、御答めの事。

但、御讓位云々の御事、實事の様、承知に付、右

の通り。

- 一、九條家も、隱居慎み、仰出されたき事。

隨從の公卿家臣も、武家に准ず。

- 一、外夷御處置は、御内政大概御治定の上ならでは、宜しからざる事。

- 一、諸侯の參觀、從前の通りにては、海防全備致しがたきに付、遠近に應じて、年數差別之ありたき事。

此儀、相成りがたき時は、妻子國許へ、引取りたき事。

- 一、諸手傳等、入費相掛り候儀は、以來、御廢止の事。

但、天朝の御修履等は、別段の事。

- 一、海防の儀は、諸侯一統へ、年限を定めて、全備せしめ、不行届のものは、嚴科に處せられたき事。

但、參觀の件、改正の上にての事。

- 一、大坂、兵庫、堺等、警備の事。

- 一、京師警衛は、大藩四五頭へ、仰付られ、是迄の彦根等は、御免の事。

- 一、老中の宅に於て、外國人應接は、無用の事。

十萬石以上三十萬石以下の外藩四人、譜代四人に、外政を委ぬる事。

- 一、外夷の御處置、定まるまでは、成る可く、登城御見合せの事。

江戸滯留の儀も、同斷。

- 一、近衛關白、永く在職之なきに付、後任は、鷹司前右府へ、仰出されたき事。

の件々にして、多くは、幕府の是認する所となる、壬戌の改革、概ね、此れに基づく。

久光、諸事全く済みて、愈々歸途に就く、圖らざりき、其途中、忽ち、一變事を醸出せんとは。

一六二 生麥の椿事(上)

八月二十一日、島津三郎久光、江戸を發して、東海道より、京都に向ふ。

其前一日、神奈川奉行より、在横濱の各國領事に對して、『明日、島津三郎、當所を通行すべし、薩州の武士は、手荒に候、必ず、遊歩せらるべからず』

との旨を通じ、尙、横濱の門番に對して、夷人の出門を、禁すべき旨を命ず。

此日は、日曜の休暇なり、英國の商人ミスチン、マーシャルなるもの、其妻の妹、及び綿商クラークと與に、川崎大師に、遊樂せんと欲し、密に、舟に乗じて、横濱の關外に忍び出で、此處より、馬を驅つて、川崎に向ふ。

マーシャルの妻の妹、先頭に在り、マーシャル、此れに次ぎ、クラーク、亦、其後より續く、進んで、生麥に到れば、四五十人の武士、路傍に跪坐す、久光、既に、此處に來り、輿を小休所に寄せて、小憩せるなり。

英人、日本の風習を知らず、其儘、久光の行列を切つて、進まんとす。

一人の武士、突と起ちて、眞先に進める婦人の馬を止む。マーシャル、其間に乗り越えて進む、忽ち、輿中より、大喝一聲、

『斬つて仕舞へ』

と呼ばれば、四五人の武士、バラバラと、取り巻き、中の一人、サツと、刀を抜きさま、マーシャルの肩より、腰に

浴せ掛け、唯、一刀の下に、馬上より、斬つて落す。

今一人、クラークに、斬り付けて、肩より腕に、重傷を負はせ、尙も、其足を斬り、馬をも傷つく。

マイシャルの妻の妹、驚いて、逃げんとする時、忽ち、鬢より、額に掛けて、一刀を受け、續いて、後の腰にも、一刀を受く、左れども、傷、皆、浅し、一散に、馬を驅つて、横濱に、馳せ歸る途中、落馬するもの、二たび。

時に、英國の軍艦七隻、來りて、横濱に泊す、此報を聞くに齊しく、憤然として、上陸するもの二百人、各、小銃を携へて、久光を逐ふ。

馳せて、神奈川に到れば、久光の行列、臺の下を過ぎて、程ヶ谷に向ふ。

英兵、銃撃せんとすれども、領事、固く制して、許さず、久光、程ヶ谷に達し、英兵の追撃するを聞きて、一戦せんと欲し、輿を停めて、待つこと少時、其來らざるを見て、又發し、此夜、戸塚に宿す。

英人の憤激は、極度に達せり、婦人の、久光の輿中より、指揮せりと證言するを聞きて、

江戸を砲撃すべし』

と意氣捲くもあり、殺氣、早や、一座に滿つ、領事、之れを制し、

『江戸を砲撃せんことは、今日に限るべからず、急を上海に報ずれば、他の軍艦、亦、十日にして、達すべし、其來るを待つて、開戦せんも、晩しとすべからず、先づ、兎も、角も、日本政府に嚴談し、其回答如何を待ちて、和戦を決するを、至當とす』と説きて、百万、之れが鎮撫に力む。

一六三 生麥の椿事(下)

生麥の變事あるや、神奈川奉行、大に驚きて、其事實を、調査せんと欲し、直に、部下の吏員を、久光の旅館に派して、糺す所あり、久光、從者をして、

『主人三郎、今日、生麥村に、差掛りたる時、夷人三騎、神奈川の方より、馳せ來り、邦制を諳んぜざるにや、妄りに、行列を侵して、主人の駕籠に、近づかんとせり、折柄、我藩を浪人せし足輕岡野新助と申すもの、舊主の

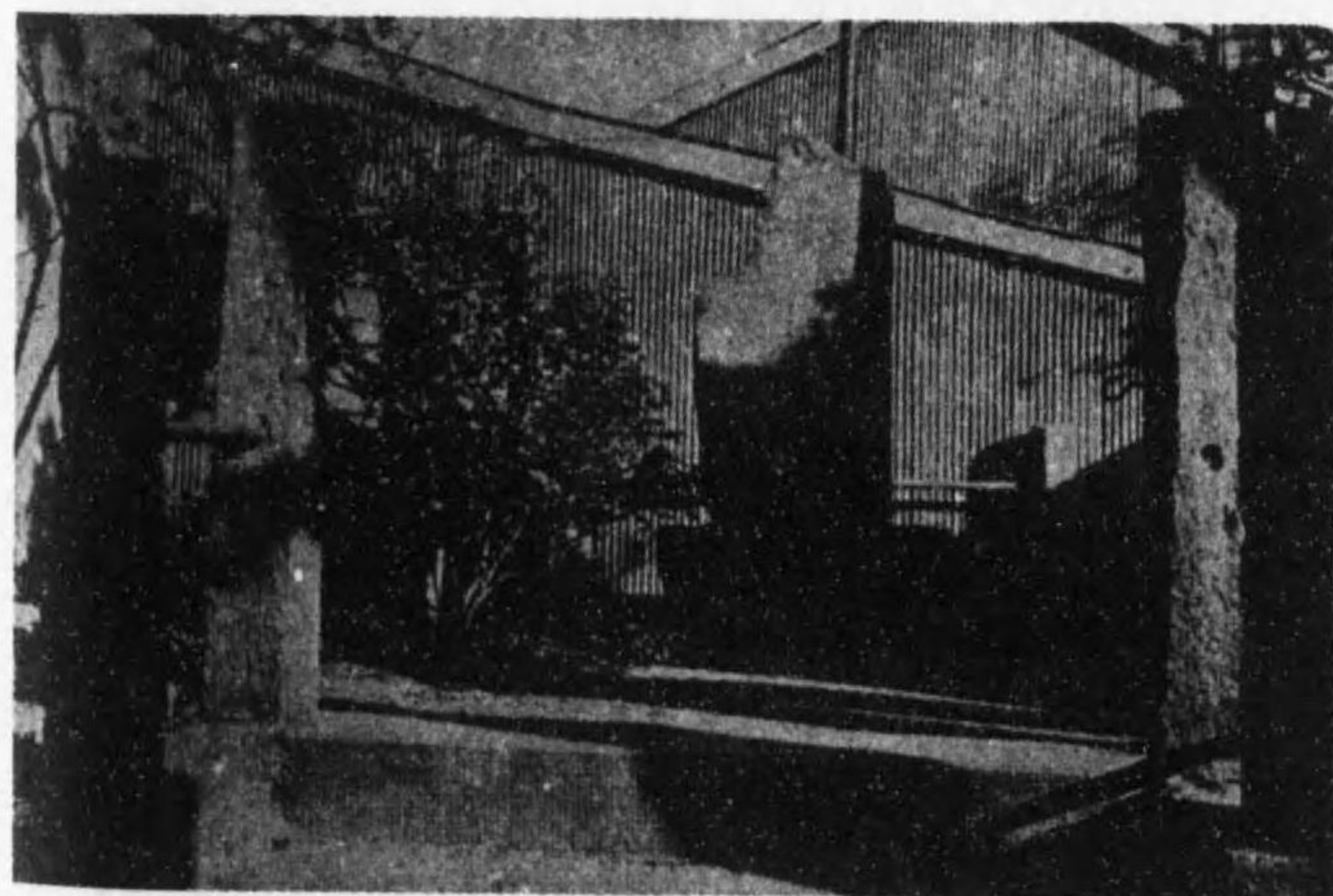
『然らば、其責任は、久光に在り、宜しく、久光を出さんことを迫るべし』

と憤ほるものあり。

『先づ、琉球を取りて、薩摩を討たん』

と論ずるものあり。

『軍艦の此地に在るこそ、幸ひなれ、宜しく、進んで、



生麥記念碑
武藏國橋本郡生見尾村大字生麥は今横濱市に屬す英國人遭難の地に碑を建て、之れを標す

行列を、拜まんとて、窃かに、此處に参り合はせ、此有様を見るより、憤怒に堪へず、矢庭に、躍り掛かりて、一騎を斬り倒し、他の二騎に、深手を負はせて、其儘、何れへか、姿を竊まし、其所在、相知れ申さず』と答へしめ、尙、使者を、江戸に發して、幕府に報ず。勅使大原左衛門督重徳は、久光より後くるゝこと一日、八月二十二日、江戸を發して、品川に着す。會、生麥の變報あり、流言浮説、頻りに、起りて、其真相を知るに苦しむ、特に、

『横濱の英人は、昨日の復讐として、勅使を、要撃せんとす』

との噂さへあれば、重徳、萬一の變を、慮かりて、其儘、品川に留まる。

薩州の藩吏、兵士を遣はして、勅使を、護衛せしめんとす、重徳、辭して、許さず。

長州の世子毛利長門守定廣も、亦、其翌二十三日、特に、家臣小幡彦七を、品川の旅館に、遣はして、勅使を、存問せしめ、尙、波多野金吾をして、壯士二十四人を率ゐて、

勅使を、警衛せしむ、重徳、其好意を謝し、且、

『貴藩の警衛を、受けんことは、幕府への聞えもあり、又薩州の護衛を、断りし次第もあれば、旁々辭謝せざるを得ず』

と告げて、之れを辭す、金吾、強て請ふこと能はず、鎌倉に於ける先公の墓に、詣づると稱して、其儘、品川に留まる。

永井主水正尚志、重徳の中仙道より、歸京せんことを勸む、會々久光より、使者を以て、告ぐる所あり、矢張り、東海道を経て、歸京するに決す。

二十四日拂曉、重徳、品川を發す、金吾、壯士を率ゐて、鯨洲の路傍に候し、勅使の儀衛を、隔つること、十餘間の後方より進み、神奈川、程ヶ谷、戸塚を経て、藤澤に達し、勅使と同じ旅館に入る。

重徳、特に、清酒二樽、肴料三百疋を、贈りて、其勞を慰す。

二十五日、重徳、藤澤を發す、金吾、前途、復た憂ひなきを以て、路傍に、蹲踞して、其行を送り、即日、江戸に引

還す。

久光、箱根に留まること一二日、勅使と、接觸を保ちつゝ、五十三驛を通過し、閏八月八日を以て、大津より、伏見の藩邸に入らんとす、會々近衛關白忠熙の使者、來りて、入京を促がすあり、久光、乃ち直に、京都に入り、忠熙の邸に到りて、關東の事情を報ず。

生麥の事變は、英人の最も憤慨する所、遂に、國際上の斷判となり、鹿兒島の砲撃となるに至る。

一六四 土州侯の入京

是の時に方り、薩長の二藩、京師を護る、土州侯山内土佐守豊範の、兵を率ゐて、伏見に到るや、亦、同じく、守護を命ぜらる。

是より先き、土佐の藩論、二派に岐かる、士格以上のものは、佐幕論を持し、士分以下の壯年、及び郷士は、勤王論を執る。

勤王黨の巨魁武市半平太、江戸に在るの日、長州の志士桂小五郎、久坂義助、高杉晋作、薩州の志士岩下佐治右衛門、

樺山三圓等と、交を結ぶ。

文久元年の秋、皇妹降嫁の事、勅許せらるゝや、志士、聞いて、大に憤激し、

『是れ、幕府の強請せし結果のみ、朝廷の御志にはあらず、宜しく、皇妹の御輿を、東海道薩埴峠に奪ひて、朝廷に還へし奉つるべし』

と意氣捲く、半平太、之れを不可として、

『幕府の心術、憎むべしと雖も、朝議、既に、之れを許し給ふ、今に於て、暴舉を事とせば、却て、禍を招かん、寧ろ、各々、本國に歸りて、藩論を一定し、藩主を奉じて、京都に上り、正々堂々、嚴しく、幕府に迫りて、尊攘の實功を、顯はさんに若かず』

と説けば、衆、皆、此れに従ひ、明年の春を期して、大に、京都に、會合するに決す。

是に於て、半平太、九月四日を以て、江戸を發し、土佐に歸り來りて、同志を糾合す、一日、參政吉田元吉を、帶屋町の邸に、訪ひて、薩長二藩の志士と、盟約せしことを告げて、

『薩長の二藩、將に勤王の義旗を擧げんとす、我藩、争かて、其下風に立つべきや、急に使者を、二藩に遣はして、同盟せられ候へ、此千載一遇の好機を、失せば、山内家末代の瑕瑾に候はん』

と説く、元吉は、佐幕黨の首領なり、之れを聞きて、冷笑しつゝ、

『扱は、浪人共に、愚弄せられしよな、折角、頼みとせる公卿の如きは、何れも、皆、長袖涅齒の徒、何の役にか、立ち得べき、特に、御當家の幕府に於ける、固より、島津、毛利の二家と、同じからず、何ぞ、妄りに、此れと事を俱にすべけんや、況して、二家の藩情とても、十分に信ずる能はざる今日をや』

と答へて、敢て、取り合はず、半平太、奈何ともすべからず、窃に、東西の郷士と謀り、又元吉の政策を喜ばざる守舊黨と結びて、時機を待つ。

文久二年三月十六日、島津和泉守久光の兵を率ゐて、藩地を發するや、半平太、聞きて、奮起し、

『扱こそ、薩州は、愈々大事を擧ぐるに決しつれ、我藩、

争でか、因循、機を失すべき、大事を誤まるものは、吉田參政なり、若かず、之れを除きて、藩論を、一變せんには、

と決意し、寄りく、同志の士と謀る、那須信吾、大石圓藏、安岡嘉助の三士、奮うて、荆軻の任に當り、四月八日の夜、元吉の下城するを窺ひ、帶屋町に、要撃して、之れを僵す。

勤王黨の勢焰、俄然として、揚がり、藩情、爲めに、一變す、大目付小南五郎右衛門等、土佐守豐範を奉じて、入京するに決し、六月二十八日、土佐を發し、七月十二日、大阪に著す、會、豐範、麻疹に罹り、靜養數日、二十四日を以て、伏見に著す。

傳奏坊城大納言俊克、豐範の家老山内下總を召して、京都を守護すべき旨の勅命を傳ふ、豐範、乃ち兵を率ゐて、京都に入り、妙心寺内大通院に館す。

薩長土の三藩、既に、王城を守護す、京都の威勢、是れより、頓に振ふ。

諸藩の志士、勢を得て、跋扈跳梁し、或は、公卿を脅かし、

或は、偵吏を屠り、又或は、富豪を劫掠する等、横暴、至らざるなく、所司代、町奉行は、有れども、無きが如く、京都の秩序、爲めに、解體せんとす。

幕府、是に於てか、新に、京都守護職を設け、會津侯松平肥後守容保を起たして、其任に充つるに至る。

一六五 守護職の設置(一)

物、窮まれば、又通じ、勢、縮まれば、又伸ぶ、幕府、政を失して、民心、東より西に嚮ひ、朝廷、時を得て、政柄、下より上に復せんとす、時局、刻一刻より旋轉し、大勢、瞬一瞬より變化し來る。

時は、文久二年、諸國志士の功名を念ひ、野心を蓄ふるもの、西より、東より、陸續、京都に、來り集まり、縉紳の間を、歴訪して、過激の思想を、注入し、同志の徒を、糾合して、勤王の志氣を鼓舞す、處士の横議、今や、其極に達す。

朝廷、禍亂の不測に、生ぜんことを虞れ、特に、薩長土の三藩に命じて、京都を守護せしめ給ふ、所司代の威令、復

た行はれず、町奉行の職權、亦、施すべからず。

幕府、今は、空しく、古制を墨守すべからず、後見職一橋刑部卿慶喜、閣老板倉周防守勝靜、水野和泉守忠精等、此れに對する方策を議す。

『方今、諸藩の、京都に群集するもの、少からず、就中、薩長土の三藩、各、兵士を率ゐて、京都を守護し、其勢、關東を壓せんとす、浮浪過激の徒、縉紳公卿の間に、出入して、暴論を唱へ、妄舉を企て、所司代、町奉行の力、之れを制すること能はず、京都の秩序も、是が爲めに、破壊せられ、關東の威嚴も、是が爲めに、失墜せんとす、之れを救ふの術たる、所司代の上に、京都守護職を置き、一には、皇城を守護し、二には、洛中を警衛するより善きはなし、是れ、關東の威嚴を保つ所以にして、朝廷を尊奉する所以の實、亦、此に在り』

とは一同の意見、期せずして、一致するところ。

『然らば、何人を以て、守護職に任すべきか、外藩は、用ふべからず、譜代、亦、用ふるに足らず、必ずや、親藩にして、且、雄藩ならざるべからず、此資格を有する

もの、差當り、越前と、會津の外ありとも覺えず、然るに、越前は、既に、政事總裁職たり、固より、京都守護職たるべからず、其守護職たらんものは、會津を措きて、其人あるべからず、會津は、士卒、勇武にして、兵備、整頓し、特に、肥後守は、親藩中に、重望あり、將軍家の御信任も、亦、淺からず、宜しく、肥後守を薦めて、守護職となすべし』

と言ふの意見、亦、一致し、其旨を、政事總裁職松平前中將春嶽に謀れば、春嶽、亦、直に、賛成の意を表し、將軍家茂の内意を伺うて、内部の議、全く決す。

七月二十八日、春嶽、先づ、會津侯松平肥後守容保の家老横山主税を召して、具さに、京都の形勢を談じ、且、

『今日、公武の御爲めに計るに、京都守護職を置くより、急なるはなく、京都守護職たらんもの、肥後守殿の右に出づるはあらず、公邊の御爲め、京都の御爲め、是非に御受けあるやう、呉れくも、肥州に、申聞け候へ、此儀、速かに御請けあらば、お上の御満足、我等の大慶、此上もあらず』

と反覆、懇談し、情義、兼ね到る、主税、

『御懇命の趣、罷り歸りて、篤と、肥後守に、申聞け候はん』

と答へて、越前邸を辭し、急ぎ、和田倉門内の藩邸に、還り来る。

一六六 守護職の設置(二)

抑、松平肥後守容保は、信州高遠城主保科彈正忠直の裔なり、正直の子正光、肥後守と稱す、子なし、徳川將軍秀忠の季子幸松を養うて、嗣となす、之れを肥後守正之とす、寛文十三年、封を出羽國最上に移され、二十萬石を領す、二十年、更に、陸奥國會津に移されて、二十三萬石を領し、外に、南山五萬五千石の地を預かり、之れを處置すること、封土の如し。

正之より、八傳して、容敬に至る、亦、肥後守と稱す、子なし、尾張の支藩美濃國高須城主松平攝津守義建の第六子銈之允を養うて、嗣となし、配するに、其女を以てす、之れを容保とす、實に、尾張前中納言慶勝、攝津守義比の弟

にして、桑名侯松平越中守定敬の兄なり。

萬延元年三月三日、大老井伊掃部頭直弼の難に遭ふや、將軍家茂、大に水戸藩士の兇暴を怒り、急に、溜間詰の諸侯を召して、諮詢する所あらんとす。

容保、時に、國に在り、三月下旬、召しに應じて、江戸に出づれば、幕議、既に、尾張、紀伊の二藩に命じて、水戸の罪を問ふに決す、容保、聞きて、大に驚き、閣老久世大

松平容保



和守廣周、安藤對馬守信睦等に面して、其不可を諫め、『水戸は、三家の一にして、朝廷の信頼せらるる所、列

藩の屬望する所に候、若し、兵力を以て、此れに臨まば、

終に、天下の亂階たらんも、亦、測るべからず、特に、今回の事たる、彼の藩臣の脱藩せるもの、所爲に係り、制馭、緩慢の責は、免かるゝ能はずと雖も、水藩、自から手を下せるものとは、同年にして、語るべからず、宜しく、其事實を精査して、適當の處置を施さるべし、輕舉、事を誤まらば、臍を嚙むとも、及ぶべからず、能く能く、思慮せられ候へ』

と説けども、閣老等、憚らず。

『先きには、勅書の奉還を拒み、今は、天下の大老を斃す、其兇暴の罪、恕すべきにあらず、且、台慮、既に決して、今更、之れを讎へさんに由なし、貴殿、之れを不下とせられなば、宜しく、自身に、言上せらるべし』と答へて、聽かず、容保、今は、俱に、爭ふも、効なきを知り、復た言ふところなくして退く。

既にして、將軍家茂、親しく、容保を召して、其意見を問ふ。

容保、容を正して、懇々、水戸問罪の不可なるを、縷陳す

れば、家茂、大に悟りて、終に、其議を罷む。

容保、是れより、宗家と、水藩の融和を計らんと欲し、自ら水戸に抵りて、武田修理、原市之進に、面諭する所あり、二人、亦、切に、救解を請ひ、終に、勅書を返納して、恭順の意を表す。

將軍、是れより、容保を信任し、閣老、亦、之を推重し、文久二年五月三日、特に、命じて、政事に、參與せしむ。爾來恪勤精勵、閣老を輔けて、國政を刷振せんとす、是に至りて、更に、京都守護職の命あり。

受けざらんか、祖訓を奈何、受けんか、時艱を奈何、出處、苟くもしがたく、進退、亦、輕んずべからず。

一六七 守護職の設置(三)

時に、容保、時疫に罹りて、幕中に在り、主税の還り報ずるを聞き、枕を支へて、沈思すること多時、

『大君の義、一心大切に、忠勤を存すべし、列國の例を以て、自から處すべからず、若し、二心を懷かば、則ち我が子孫にあらず、面々、決して、従ふべからずとは、

土津靈神の御家訓に、明記せらるゝところ、苟くも、大君の御爲め、宗家の御爲めとあらば、一死と雖も、尙、且つ、辭すべからず、何ぞ、時局艱難の故を以て、此台命を辭すべきや、然れども、縋つて考ふるに、我れ、才淺く、學薄くして、年齒、尙、而立に達せず、加ふるに、封邑、遠く東北に僻在して、家臣、亦、上國の風習に、通曉せず、台命の重きを思ひ、祖訓の厚きを思ひて、強て、此大任に膺り、萬一、過誤失措を醸さば、吾に、一身の恥のみならず、延いて、宗家の累を貽さんこと、必せり、斯くては、萬死、尙、其罪を償ふに足らず、若かず、初めより、固辭せんには』

誠懇の心厚き容保、身家の爲めに、宗家の爲めに、斷然辭退するの得策なるを想ひ、重臣を、春嶽の邸に遣はして、固く、其内命を辭す。

會津を除きては、他に、其人なしとは、幕府の、初めより、覺悟せるところ、其辭退するに會ひて、當惑、言ふばかりなし、

『好しく、此上は、何處までも、説き勸むべし』

と決し、八月七日、春嶽、手書を、容保に贈りて、

御家老横山主税、呼出し、申聞け候儀、如何御聞取下され候や、別て、方今、京師の方、頻りに、風説も相聞え、不穩の様子、殊に、薩州屋敷も、何時、暴發の患も、料り難く、其上、傳奏より、三郎高位任敍の儀も申越し、刑部殿始め、一同深く、此節、憂痛至極に御座候、夫に付ても、京師御手薄にては、何分、相成り難く、是非、御受け成されず候ては、公武御合體に至り兼ね申すべくと存じ奉り候、當今（此二三）日の仕合せ故、何卒何卒、一旦御受けさへ相成り候へば、其上の御内願筋等は、小生盡力申度く、是非々々御都合相成候様、取計ひ申度く、存じ奉り候、昨今、此の如きの儀故、一旦の御受けは、速かに、成下され度く、偏に以て、懇願奉り候、則ち今日も、召させられ候て、御尋ねも在らせられ、上にも、殊の外の御心配に御座候、私、御役前に取り候ても、早々御出勤の上、一旦、御受けに相成候へば、大原への申譯も、相立ち、第一、御尊奉筋に取り、最上の御都合に御座候、機會失すべからず、速かに、御英斷成下され

候様、願ひ奉り候、御國元の御都合も、在らせらるべく候へ共、夫迄、相待ち候ては、則ち足下の御受け、遲滞に及び候ては、上の御尊奉筋に、關係致し、容易ならざる儀、右の處、御汲察下さるべく候、早々、主税始め

御談じ、御返答下さるべく候。

と説き勸め、尙、紙尾に、

土津公以來の御家柄と申し、旁々今の艱難を、御亮察下され、只今、御受けに相成候へば、將軍家、京都を重んぜさせらるゝの御信義も、相立ち、私共に於ても、難有く存じ奉り候、激切の儀、申上候は、甚だ恐入候へ共、公方様が、御いとう敷く、姑息の様に候へ共、御心配の御様子、見上げ候へば、落涙の外之なく、存じ奉り候、台徳院様の御血脈の公方様、土津様御末胤の貴兄に候へば、御情に於ては、御同様と存じ奉り候、徳川氏信不信の相分れ、公武合體の有無は、貴兄の御受け斷不斷に在り、小生、泣いて申上候も、方今、台徳院様、土津公在らせられ候はゞ、必ず、御受けに御成申すべくと存じ奉り候、末世には候へ共、御同情と存じ奉り候、以上。

と記して、宛名を「會津明公玉机下」と認む、情意惻愍、筆下、滴々、涙下るを覺ゆ。

一六八 守護職の設置（四）

容保、書を得て、未だ答へず、此日の午後に至りて、重ねて、春嶽よりの書翰來る、即ち、

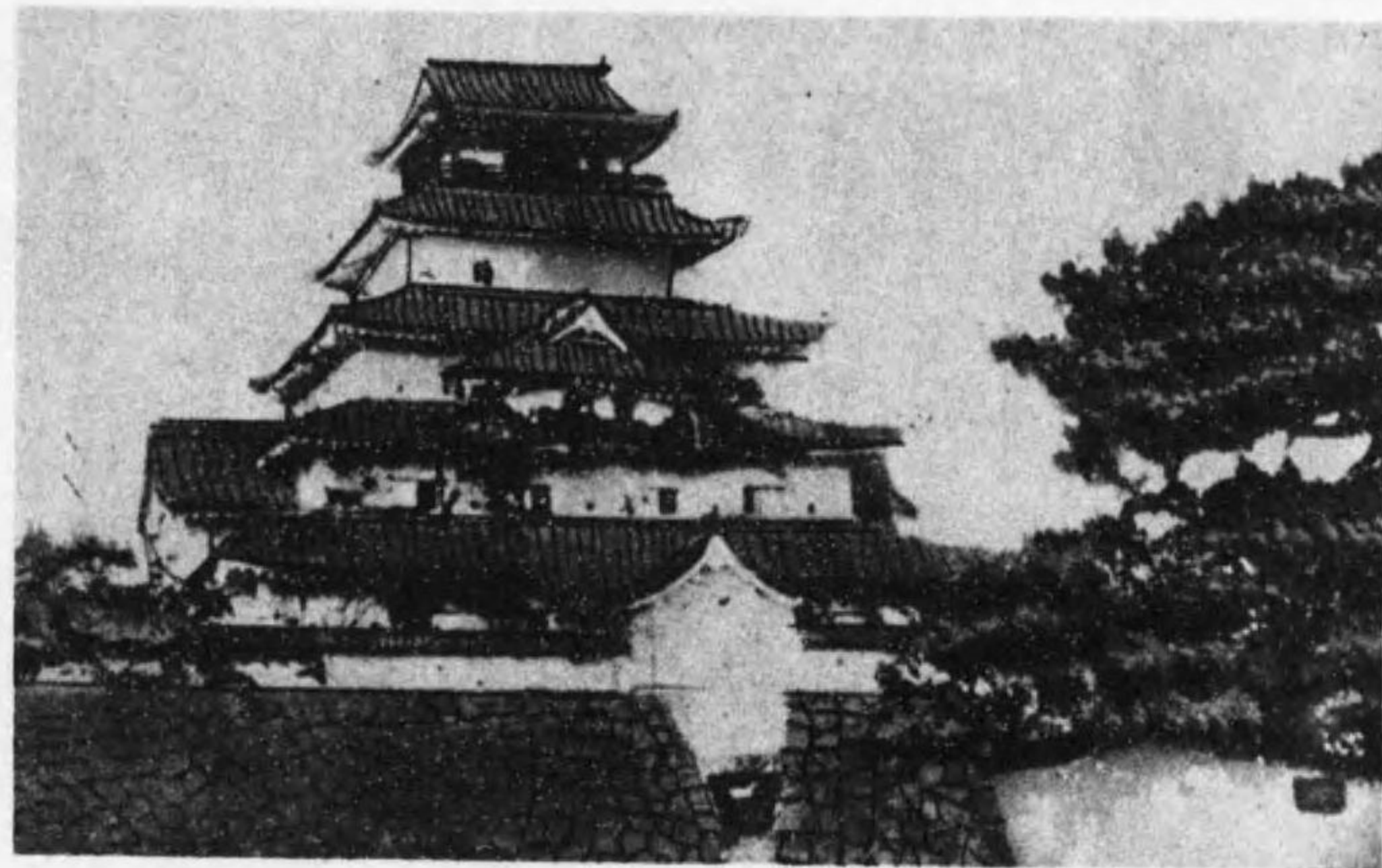
然れば、今朝申上げ候儀、如何御聞取下され候や、何分關心の次第、日々、京師の事に付ては、一同、焦慮罷在候、今日も、御前へ罷出候處、段々の御尋も之あり、御受け、御待兼ね遊ばされ候御様子に在らせられ候、夫に付、今夕、退出より、登館仕り、御病牀へ罷出で、御談判致し度く候。

とありて、此日、退出掛けに、其病牀を訪はんとするなり。閣老の、自ら諸侯の邸に就て、事を謀るは、徳川幕府の始まりてより以來、未だ曾て其例を聞かざるところ、容保、

『是れ、偏にお上の思召より、出でしことならん』
と思へば、感激の心、自から、胸裏に、湧かざる能はず。既にして、春嶽、駕を枉げて、和田倉門内の會津藩邸に來

會津城

會津城は岩代國北會津郡若松に在り若松城と稱し黒川城又は鶴城とも曰ふ松平氏累世の居城なり。今は若松市となる。



る、容保、病を強めて、對面すれば、春嶽、先づ、時勢の危急を説き、將軍の憂慮を語り、且、『此難局に當りて、類勢を挽回し、台慮を奉安すべきもの、吾兄の外に、其人あるべしとも覺へず、一意、大君の御爲めに盡すは、

土津公の御志にして、挺身、宗家の御爲めに盡すに、又吾兄の宿志に候はん、速かに、御受けあらんこと、嘗に、春嶽の喜びのみならず、誠に、お上の御喜びに候』

一にも、大君の御爲め、二にも、宗家の御爲めなりと説きて、勸告、已まず、忠誠無比の容保、坐ろに、感涙の滂沱たるを覺えず、頓て、春嶽の辭し去りて後、翻然として、

『此上は、一身一家をも、犠牲に供して、偏に、台慮を安め奉つらん』

と決意し、急使を、會津に遣はして、諸老臣の意見を徴す。容保の實父松平攝津守義建、其就職を喜ばず、容保、聞きて、

行くも憂し行かぬもつらし如何にせん

君と親を思ふころを

との一首の和歌を、贈れば、義建、其志に感じて、

親の名はよし立てずとも君のため

いさを顯はせ九重のうち

との返歌を、寄せ来る、容保、感奮して、其心、愈々決す。江戸の急使、七十餘里の路程を、唯、十八時にして、會津

に達す、家老西郷頼母、田中土佐の二人、他の諸家臣と議して、就職を、不可とするの意見を決し、即時に、輕輿を飛ばして、江戸に登り、容保に謁して、具さに、意見を陳ず。

頼母は、君家の一門として、門地、勢望、並び高し、諄々として、幕府の情形、天下の形勢を論じて、公武合體の、竟に行ふべからざるを説き、

『今の時、此難局に當るは、薪を負うて、火を救ふに等しく、勞、多くして、功なきのみならず、却て、其身を焼くに終り候はんのみ』

と陳べ、更に、元弘の昔、六波羅の兩探題北條越後守仲時、北條左近將監時益の例を引きて、其不可なるを極諫す、言辭凱切、聲涙、與に下る。

北條仲時、時益の二人、六波羅を守る、足利尊氏の王師に屬して、來り攻むるに及び、兵敗れて、鎌倉に走る、時益は、流矢に中りて死し、仲時は、番場嶺に到り、勢ひ窮まつて、自殺す。

一六九 守護職の設置(五)

頼母の言ふところ、固より、君を思ふの至情に出づ、容保、江戸家老横山主税、留守居堀七太夫等を召して、頼母の意見を、説き示し、

『頼母の申すところは、實に、余の存せしところ、此儀を思へばこそ、再三、固辭致せしなれ、然るに、台命、頻りに下りて、信任、極めて厚く、臣子の情誼、寔に、辭すべからざるものあり、特に、余の辭退するを見て、一身の安を計るの心に、出づるとなすもの、亦、之れありと聞く、宗家と、存亡を與にすべきは、我が祖訓の存するところ、加ふるに、數代の隆恩、山より高し、一死、報効を圖るも、尙、足らずと存ずるところ、何ぞ、一家の利害を以て、宗家の安危を、度外視せんや、唯、余の不才なる、萬一の過誤より、延いて、累を宗家に及ぼさんことを虞るゝに、外ならず、區々の人言、顧みるに足らずと雖も、私の爲めに、公を忘るゝものと、評せらるるに至りては、亦、深く決するところなかるべからず、

然るにても、君臣一致して、心力を盡すにあらずんば、此大任を全うするを得ざるや、論なし、受くべくんば、即ち受けん、辭すべくんば、即ち辭せん、汝等、能く、熟圖して、余の進退を決せよ』

と説き諭す、眼中、唯、宗家あるのみ、主税、感激已まず、
『義の重きところ、復た利害を論ずべきには候はず、宜しく、台旨を奉じて、國家の爲めに、盡させ給ふべし、君臣、俱に、京都を以て、死所と仕り候はん』

と斷言すれば、堀七太夫、田中土佐の二人、亦、此議を賛す、頼母、亦、容保の至誠に感じて、止めんと欲するも、止むること能はず、

『扱も、潔よき思召かな、此上は、君の御心に任せ給へ、臣、復た何をか申さん』

と言ひつゝ、ハラ／＼と、涙を垂る、容保、亦、

『我れ、天下の事に當らば、復た、藩地の政を、視ること能はず、汝、他の老臣と謀りて、能く士民を綏撫し、余をして、後顧の憂ひなからしめよ』

と諭して、同じく、涙を垂る、臣は、君の義に泣き、君は、

臣の誠に泣く。

容保、就任の事、愈々決し、疾病も、亦、尋で癒ゆ、春嶽大に喜びて、將軍家茂に、言上すれば、是れも、亦、始めて、意を安んず。

閏八月朔日、容保、召されて、御前に出づ、家茂、手づから、

松平肥後守

京都守護職仰付けらる。

との辭令を授け、同時に、正四位下に敘し、更に、別席に於て、

今度、守護職仰付けられ候に付ては、在京仰付けらる、近々、御暇下さるゝにて之あるべく候。

との書付を交附し、十一日、閣老より、

京都守護職、仰付けられ候に付、御役地五萬石下され、

出格の思召を以て、金三萬兩拜借、之を仰付けらる。

との旨を達し、京都所司代を以て、京都守護職の新設、并に容保の任命せられし旨を奏す。

禁關を守護し、官用を辨理するは、所司代の在るあり、今

や、守護職の新置せらるゝに及んで、世人、皆、目を注ぐ。

一七〇 京都の反響

敵を知り、己れを知るは、兵家の要道にして、彼れを知り、我れを知るも、亦、政家の要務なり。

容保、既に、京都守護職の大任を受く、先づ、彼の地の事情を、知悉するの要あり。

思慮周密の容保、先づ、此點に著眼し、家老田中土佐、及び公用人野村左兵衛、小室金吾、外島機兵衛、柴太一郎、大庭恭平、柿澤勇記、宗像直太郎等の諸士を選んで、京都に遣はし、在任の準備を整へ、兼ねて、京地の形勢を、視察せしむ。

嚮きに、京都所司代酒井若狹守忠義の處置、當を失してより、幕府の威嚴、地に墜ち、諸國の浪士、勢を得て、横行闊歩し、輦轂の地も、殆んど、無政府の状態を、現出し來る、會々容保の守護職に任せられしと聞くや、諸浪士、皆、心に畏怖を生じ、

『會津は、東方の雄藩にして、藩士、亦、勇武を以て鳴

る、其守護職の任に就くもの、無論、關東の爲めに盡すの心ならん、斯くては、我等の志を伸ばさんこと、叶ふべからず、其上京するに先だちて、之れを沮まんに、若かず』

と思惟して、頻りに、縉紳公卿の間に、遊説する所あり、公卿、亦、

『會津藩は、殺伐の氣風なりと聞けば、其上京する上は、必ず、薩長の兵と、衝突するに至らん、斯くては、大事なり』

と思惟して、是れも、恐怖の心あり、議奏正親町三條大納言實愛、或日、所司代に向ひ、

『往時、京都守護の職は、源氏に命ぜられし例ありと雖も、其制の斷絶せること、年、既に久し、徳川家の世に及びてより、井伊、藤堂に命じて、京都を守護せしめ來りしに、今回、遠き陸奥の諸侯に、任命ありしは、如何なる仔細に候ぞ、威儀言語の京様に慣れざるものを、遣はさるゝも、決して、關東の爲めに、得策なりとも存ぜず』

と告げて、暗に、之れを沮まんと試む、左れども、市民の、浪士の跋扈を憂ふるものは、

『會津は、大藩にして、是れまでの所司代の如き比にはあらず、我等も、是れより、枕を高うして、眠るを得ん』と唱へて、之れを歓迎するの色あり、此事、天聽に達するや、主上、又

『會津は、大樹の親藩なり、必ず、信賴するに足らん』と思ひて、其來任の期を待たせ給ふ。

田中土佐以下の諸士、既に來都に著して、其形勢を察し、動靜を探る、一浪士、其旅館に「會津藩」の標札を掲ぐるを見て、

『クワイヅ藩とは、何處の大名にや、一向、聞かぬ名なり』

と呟きて、首を捻くる、傍人、其會津藩なることを告ぐれば、

『扱は、是れが守護職の會津なるか、然らば、一議論致さん』

と肩を怒らし、肱を張りて、其旅館を叩く、是等の名士、

日夕、入り代り、立ち代り、來つて、開鎖の意見を質すも、土佐等、初めより、

『我等、京師に入るも、決して、國事を談ぜず、他日、主君の上京、將軍の御上洛を待つて、徐に、藩論を議定するに若かず』

と決定せるを以て、皆、堅く、相戒めて、口を開かず、獨り、大庭恭平は、年壯氣銳にして、末節に拘々たらず。

『足下等、開鎖の意見を聞かんと仰せらるゝか、好し、然らば、恭平一個の所存を述べん』

とて、盛んに、議論を闘はし、氣焰を吐く、口角、沫を飛ばし、舌端、風を生ず、諸浪士、多くは、其意氣に感じて、推重、措かず。

斯くして、仔細に、廷議の存するところ、世論の嚮ふところを探り、時々、江戸に報じて、参考に供す、其注意、等閑ならず。

一七一 京都の形勢(上)

當時、京都の形勢如何。

六月二十二日、九條左大臣尙忠の、關白職を罷められて、近衛左大臣忠熙の此れに代りてより、滿廷、復た、幕府の爲めに、盡すものあらず。

左れども、關白忠熙を始めとし、中山大納言忠能、正親町三條大納言實愛以下の議奏、傳奏の諸卿、多くは、溫和の見を持して、過激の説を悦ばず、専ら、公武の一和を主として、朝幕の衝突を避けんと欲す、其意見、粗々、島津三郎久光と同じ。

然るに、諸國浪士の、京都に集合するもの、専ら、悲歌慷慨の言説を唱へ、少壯血氣の諸卿、此れに和して、尊王攘夷の氣焰、日一日より、高まる。

中山大納言忠能の子侍從忠光、最も過激を以て聞ゆ、久我内大臣建通、岩倉中將具視、千種少將有文、及び主上の寵妃少將内侍、衛門内侍の、和宮降嫁の事に、斡旋せるを憎みて、頻りに、

『三奸斬るべし、兩嬪屠るべし』

との説を唱ふ、此議、終に、公卿堂上の一問題となり、八月十三日、廣幡大納言忠禮、正親町三條大納言實德、庭田

中納言重胤、柳原右衛門督光愛、豐岡大藏卿隨資、長谷三位信篤、阿野中將公誠、滋野井中將實在、河鐸少將公述、正親町少將公董、三條中納言實美、姉小路侍從公知、壬生修理大夫基脩等の諸卿、相俱に、連署して、建通、具視、有文の三人を、彈劾し、餘沫、飛んで、九條前關白尙忠に及ぶ。

主上、今は、止むを得させ給はず、此月二十日、梅溪少將通善を、具視の邸に、東久世少將通禧を、有文の邸に、伏見三位宣諭を、富小路中務大輔敬直の邸に、遣はして、辭官、入道、蟄居の命を傳へ、少將内侍、衛門内侍には、御暇を賜ひ、傳奏坊城大納言俊克、廣橋大納言光成には、辭職、謹慎を命じ、尙、尙忠を、一條、二條兩家に預け、建通、及び議奏中山大納言忠能、正親町三條實愛等に、差控へを、命ぜられ、外に、堂上、宮女の處罰せらるゝもの、數人に及ぶ。

三條中納言實美は、激過黨の巨擘なり、血氣に乗じて、關白に抗論すること屢次、此日、又外夷處置の事に關して、意見書を上つり、關東に命じ、諸侯に令して、軍備を整へ、

士氣を勵まし、上下一心、攘夷を斷行して、國辱を雪ぎ、武威を輝かし給はんことを奏す、其言議、漸く、廟堂に、重きを加ふ。

閏八月八日、島津三郎久光、江戸より、歸り來り、直に、近衛關白忠熙の邸に到りて、具さに關東の事情を復命す。久光、又京都の形勢、頓に、一變し、尊攘の意見、朝野を風靡して、公武一和の政策を、妨げんことを虞れ、一篇の意見書を呈して、

『幕府、既に、朝命を奉じて、後見職、總裁職を置き、漸次、弊政を釐革せんとするの意あり、宜しく、假すに、時日を以てして、徐かに、其措施を見給ふべし』

との趣旨を上言す、其中に、此上は、朝議、確乎として、動かされず、匹夫の激論、一切、御採用あらせられず、關東の處置、靜に、御觀察遊ばされたき御事と存じ奉り候。

との一節あり、匹夫とは、言ふまでもなく、京都に雲集せる諸國の浪人、志士を指す、匹夫先生、之れを聞きて、争でか、切齒せざらん、何れも、皆、久光を憎厭して、長州

と結託せんとするに至る。
此風潮を見て、獨り、莞爾として、微笑めるものあり、毛利大膳大夫慶親、即ち其人。

一七二 京都の形勢(下)

蚯蚓も、時を得れば、風雲を起し、匹夫も、勢ひを得れば、王侯を凌ぐ。

近日の廷議、多くは、激派の説に傾き、之れが主腦者たり、原動力たるものは、久光の所謂、匹夫にして、其一夕の空論も、忽ち、明日の朝命として、現はるゝことなきにあらず、志士を嫌忌する久光、此形勢を見て、心に喜ばず。會英英國軍艦、生麥の事變に關して、鹿兒島を襲撃せんとするの説あり、久光、急に、結束して、藩地に歸らんとす。二十一日、近衛關白忠熙、左大臣忠房の父子、之れを聞き、窃かに、手書を、久光に贈りて、

『天覽の外、他人に漏らすことなし、胸中に蓄ふところ、包まず、上言あるべし』

との旨を通ずれば、久光、直に、忠熙の邸に到りて、意見

書を呈し、

『今や、皇國の形勢、外には、夷賊、頻に跋扈の威を逞うし、内には、諸藩、漸く割據の形を醸す、然るに、關東、徒らに、因循に流れて、敢て、舊弊を改めず、諸國有志の徒、妄に、攘夷の説を吐き、激烈の論を唱ふ、寒に、危急存亡の秋にして、終に、國家大亂の基たるも、測るべからず』

と慨し、進んで、自家の政策を述べ、中に、

『匹夫の論は、激烈にして、己れが名利の爲めにすること多し、猥りに、御採用あるべからず。』

攝家、親王家は勿論、其餘の公卿、皆、忠誠を以て、御奉公相成り、匹夫へ、御面談の儀は、嚴密に、御取締あるべし』

との二項ありて、又も、匹夫の言は、取るべからざるを陳じ、更に、攘夷の論は、公武を疏隔し、國家を傾覆するの基なることを極論す。

尋で、歸國の儀を、願ひ出づれば、正親町三條大納言實愛を以て、

『近頃、獻言の旨は、具さに、乙夜の覽に、供し奉つる、主上、幹旋の功を嘉みし給ひて、御信賴の御心厚く、永く、聲下に留め給はんとの宸慮なりと雖も、其請ふところ、餘儀なくして、強ても、止めさせられがたし、胸底に蓄ふるところあらば、宜しく、社稷の爲めに、忌憚なく内奏すべし、主上、宸衷に留めて、錦囊の策とせさせ給ふべし』

との旨を傳へて、其歸國を許させ給ふ。

久光、乃ち島津左近を、京都に留め、二十三日を以て、歸國の途に上る。

久光の京都を去るや、朝議、益々攘夷の説に傾く、長州侯毛利大膳大夫慶親、機、乗ずべしとして、蹶起し、二十七日、一篇の奏議を呈して、攘夷の勸慮、戊午以來、確乎として、動かせられざる旨を陳べ、進んで、

五ヶ年に及び、官民御異議の趣、根柢明著、最早、列藩中、決して、勅文に泥み候儀も、之ある間數きに付、今更、會議に及ばず、斷然、獨立にて盡力、及ばずながら、皇國正氣御維持の寸補をも仕り度く、父子、決心罷在候』

と明言して、獨力、攘夷の任に當らんことを、請ひ奉つる。激派の意氣は、頓に、昂がれり、終に、廷議を歴して、攘夷の教旨を、遂行せんとするに決し、九月四日、慶親に、御沙汰書を賜ひて、上言、教念に符合す、宜しく、丹誠を抽んで、周旋すべき旨を命ぜられ、越えて八日、尾張中納言慶勝に對して、特に、

攘夷の儀、先年來の教慮、今に至るまで、更に、御變動あらせられず、柳營に於て、追々變革、新政を施行し、教旨違奉相成候條、斜ならず、教感あらせられ候、然る處、天下の人民、攘夷、一定之なく候ては、人心一致にも、至り難く、且、國亂の程如何にと、教慮を惱まされ候間、柳營に於て、彌々攘夷決定あり、速かに諸大名へ、布告之あり候様、思召され候、尤も、策略の儀は、武將の職掌に候間、早速、衆議を盡され候て、至當の公論決定、直に、醜夷拒絶の期間をも議せられ、奏聞候様、御沙汰候事。

との勅旨を下し給ひ、幕府に謀り、衆議を盡して、攘夷の期限を、定むべき旨を、命ぜられ、更に、再び、勅使を、

關東に下し賜はんとす、攘夷の氣焰、今や、京師に滿つ。

一七三 會津侯の建白

京都よりの報告書は、幾通となく、容保の手中に在り、其形勢、歴々、睹るが如し。

容保、夙に、開國の意見を懷く、嘉永六年、米艦の浦賀に來りし以來、幕府の諮詢ある毎に、開國の止むべからざる所以を建言し、今日と雖も、敢て、其説を變ぜず。

左れども、京都守護職の任務は、單に、禁闕を守護し、輦下を鎮護するに止まらず、更に、公武の一和を計るべき一大責任を有す、若し、此責任を盡す能はずんば、決して、其大任を全うせるものと言ふべからず、此事、他人に於ては、或は忍ばん、容保に於ては、斷じて、忍ぶこと能はず、『今や、朝廷、頻りに、攘夷を唱へ、幕府、偏に、開國を是とす、朝廷、幕議を斥け、幕府、亦、朝命を奉ぜずんば、兩者の間、唯、衝突あるのみ、斷絶あるのみ、終に、一和の機あるべからず、攘夷、固より、行ふべからずと雖も、開國、亦、遽かに強ふべからず、姑く、三港

の通商を許して、他港の開放を禁じ、斯くして、公武の調和を計り、更に、時機を見て、朝廷の所執を、翻へさんに若かず』

と決意し、九月、心血を凝して、一篇の建白書を草す、縷縷二千言、先づ、初めに、

『不肖容保、辱けなくも、大政に參與し、守護職に寵任せらる、何の光榮か、此れに若かん、鞠躬盡瘁、日夜、國恩の萬一に報ぜんことを思ふ、唯、恐る、淺識寡聞、終に、重寄に辜負するあらんことを。』

方今、外夷の跳梁、日に甚だしく、上は、教慮を惱まし奉つり、下は、民和を害す、容保、之れを憂ひ、家人に命じて、内外の衆議を探り、京師の情形を査する所あり、主上、堅く、鎖攘の方針を取らせ給ひ、京中の官民、關西の侯伯、一として、開國の説を唱ふるものあらず、然るに、幕府、奏聞を経ずして、和親の條約を結び、攝泉の開港を許し、府内の在留、夷官の建設を允して、夷人を優遇せらる、事、皆、教慮に副ひ奉つる所以にあらず、主上、上に逆鱗せさせ給ひ、衆民、下に怨讟す、是れ、

夷人殺害の兇變、續出する所以にあらざるなきか。

往年、堀田備中守、間部下總守等の、京師に使ひするや、情意、支吾して、疏通せず、朝廷、今や、幕府を以て、誦詐權謀となし、其信任、漸く、關東を去つて、外藩に移らんとす、是れ、固より、將軍の本志にあらず、唯、有司の事を誤まり、策を失するが爲めに、此に至れるのみ、寔に、恐悚慨嘆の至に堪へず。

若し、此上、更に、夷館を設けて、府内の常住を許し、諸港を開きて、各國の貿易を行ふに至らんか、主上は、益々逆鱗せさせ給ひ、列藩は、動搖し、衆心は、離叛して、終に、如何なる異變を、激成せんも、計るべからず、冀はくは、教旨を奉じ、民心に應じて、上下一致の御處置を、施し給はんことを』

との意を縷陳し、進んで、長崎、箱館、横濱三港のみの貿易を許し、御殿山の夷館、攝泉の開港、府内の在留、松前の互市を拒絶し、且、是れより生ずる外人の損害は、之れを賠償せんことを述べ、且、

『主上、既に、鎖國を是とせさせ給ふ、今、三港を許す

は、穀慮に戻るに似たりと雖も、長崎は、昔年より、貿易を許せる所、下田は、先年、既に、餘儀なしと聞き済ませ給へる所、開港、必ずしも、穀旨に背くものにあらず。

且つや、海外萬國、日に進み、月に開けて、互に、來往を行ひ、有無を通ず、皇國、獨り、鎖國孤立すれば、復た、彼の事情を知りて、其長所を取るに由なし、何を以てか、能く攻守の道を全うせん、現に、從來、互市したればこそ、海軍を備へ、大艦巨砲を製して、武備充實の助けともなりしなれ』

と斷言し、我れ、決戦の覺悟を以て、談判すれば、此事、必ず、成功せんことを説く、熱誠の氣、筆端に溢る。

當時、幕府の諸有司、舉つて、開國の方針を執る、容保の此建白書を提出するや、

『是れ、時務に通ぜざる迂論のみ、取るに足らず』

と一笑して、斥けんとす、此説、用ひられずんば、我任、全うすべからず、容保、憤然として、反覆、辯論すること、數次、斷乎として、辭職の決意を示す。

有司、其志の奪ふべからざるを見て、終に、此れに従ふ。

一七四 攘夷の詔勅

勅使、再び東下するに決せりと聞くや、在京の志士は、俄然として、活動を開始せり、就中、土州の志士武市半平太、小南五郎右衛門、平井收二郎等は、此機に乗じて、大に、幕府に、肉薄せんと欲し、先づ、薩州の志士を訪うて、

『此度、勅使の東下せらるゝに就ては、斷然、攘夷の勅諭を下さるゝに若かず、緩慢の手段のみを執りては、何の實効とてもあらず、此儀如何』

と説く、左れども、薩州の志士は、其主久光の意見、公武一和に在るを以て、皆、逡巡し、

『武備、未だ充實せざる今日、何を以てか、攘夷の實を舉げ得ん、姑く、手を收めて、時機を待つに若かず』

と述べて、此れに應ぜず、半平太、五郎右衛門等、飽きても、薩長の志士を説きて、三藩一致の態度を執らんと欲し、東奔西走、百方、勸説する所あり、同志の士、寢く加はる。是に於て、更に、薩藩の士藤井良節の邸に會して、談合す

るに決し、九月十六日の夜、半平太、五郎右衛門の二人、相携へて、其邸を訪ふ。

長藩よりは、前田孫右衛門、宍戸九郎兵衛、久坂義助、佐佐木男也の三人、來り會し、薩藩よりも、亦、本田彌右衛門、村山才助、高崎猪太郎の三士、其席に加はりて、盛んに、談論す、意氣の激するところ、唾壺、爲めに、碎けんとするもの屢次。

薩藩の諸士、大勢の既に定まれるを察し、且、英艦の鹿兒島を襲撃せんとするの噂ある今日、自ら孤立するの不可なるを思つて、此議を賛し、三藩の意見、此に始めて決す。男也、乃ち筆を執りて、三藩主連署の奏請書を草す、一坐、回覽して、皆、異議なしと述ぶ、即ち左の如し。

先年以來、外夷跋扈、未曾有の御國辱に付ては、神宮を始め奉つり、御代々様へ、對させられ、宸襟御惱まし遊ばせられ候御儀、今更、申上候も、恐多く存し奉つり候、然る處、追々、正邪の辨、相立ち、御有志の御方、御憤解けに相成り、且又、三藩出張、士氣奮興候千載の一時、此機、失ふべからざる事に候、元來、一橋、越前等御再

出の段、勅諭を以て、仰出され候儀、偏に、關東有司共に於て、不取扱より、穀慮貫徹仕らず、人心互解、攘夷覺束なく、思召され候事に、之あるべく、何分にも、一日の安は、千載の禍に候へば、恐多くも、夷狄擄伐の宸斷、遊ばせられ度く、勅使御東下に付ては、此度、關東へ仰出され、攘夷の御決議、早速、開召され候様、遊ばされ度く、尤も、一昨冬、七八箇年乃至十箇年、外夷拒絶在らせられ候段、關東に於て、御受之あり候に付、御猶豫の儀、御願ひ相成らせらるゝ歟に候へ共、右は、奸吏共、罷在候時の事にして、今日に相成り、決して、御異議之ある間敷くに付、斷然、攘夷の勅諭、仰出され度く、存し奉つり候。

九月

松平大膳 大夫

島津修理 大夫

松平土佐 守

是れより、杯を把つて、歡笑し、深夜に至りて、散じ去る。十八日朝、半平太、此書を携へて、青蓮院宮に詣り、尊融法親王に謁して、具さに、三藩合議の始末を陳ず、法親王、

素と、攘夷の時機、未だ到らずとの尊慮なりしも、今は、『三藩合議の上からは、仔細なし』

と思して、御嘉稱あらせ給ふ、是に於て、朝議、終に、攘夷の勅諭を下すに決し、二十一日、三條中納言實美、姉小路少將公知を召され、正副勅使として、俱に、東下すべき旨を命ぜらる。

實美は、始めより、正使に擬せられしも、年、稍々少なるを以て、老練の副使を選むの要あり、志士、皆、公知を推す、是に至りて、此命あり。

志士の、外に議して、建策するところ、公卿、乃ち内に議して、之れを採取す、當時の光景、多くは此類。

一七五 朝廷の信賴

容保、既に、外交上の意見を、建白して、幕府有志の同意を得たり、即ち、是れ、天下の方針、復た、容保一個の私見にあらず。

此建白書の寫、京都の會津藩旅館に達するや、野村左兵衛、一同に向ひて、

『諸藩の有志、日々、來つて、我藩の意見を質すも、藩一論、定せざるを以て、避けて、談ぜず、我等、爲めに、困却せること、少なしとせず、主公の建白書は、即ち我藩の精神なり、今より後は、此主意を以て、來客に答へんは、如何に』

と謀れば、田中土佐、以下、皆、之れを賛し、會津藩の旗幟、是れより、鮮明となる。

柴太一郎は、出羽上ノ山藩士金子與三郎の紹介に依りて、伊勢山田の志士山田大路親彦と訂交し、親彦の紹介に依りて、同國松坂の志士世古格太郎と相識り、更に、格太郎の斡旋に依りて、三條中納言實美に、面謁するの機を得たり、格太郎は、故内大臣實萬の時より、轉法輪家に出入して、其機務に、參畫せるもの。

太一郎、即ち容保の建白書を携へて、三條家に到り、實美に謁して、之れを呈す、越えて三日、實美、格太郎を使者として、太一郎の旅館に、遣はし、

『肥後守の建白書に就て、申談すべき儀あり、早々、參邸あるべし』

との旨を傳ふ、實美は、激派の巨擘にして、又攘夷の倡首なり、其談ぜんと欲するところ、果して何事ぞ、太一郎、左兵衛の二人、急ぎ、參向すれば、實美、親しく、延見して、威儀を正し、

『彼の建白書は、御前に呈して、乙夜の覽に供へ奉りしに、靱感、特に、淺からず、從來、建白するもの、往々、之れありと雖も、其意見、寬に過ぎざれば、即ち激に過ぐ、今、此書を見るに、公平著實にして、能く、中庸を得たり、實際に施行して、可ならんかと宣はせ、其儘、革製の御箱に藏めさせ給へり、余も、亦、同感なり、此儀、具さに、肥後守に申傳へよ』

との旨を告ぐ、事、意料の外に出づれば、太一郎等の感激、言ふばかりなし、實美、重ねて、

『余の勅旨を奉じて、東下すること、近きに在り、從來、關東の勅使を、待遇せらるること、其道を得ず、爲めに、皇室に對し奉つて、尊敬を缺くが如きこと、往々にして、之れあり、曩に、大原左衛門督の關東に下向し、歸りて、其狀況を言上するや、朝廷の御不興は、申すに及

ばず、天下有志の徒の、聞いて、憤慨するもの、少からず、此の如きは、決して、關東の爲めに、利益なりとも存ぜず、此度、余の東下するに當りて、幕府、重ねて、非禮を加へられなば、余は、斷然、勅を宣せずして、歸京せんのみ、抑々今日、幕府の守護職を、設置せられしもの、畢竟、百事を更新するが爲めならん、又實に、更新すべきの好機にあらずや、肥後守も、平生、尊奉の志、甚だ厚しと聞く、宜しく、幕府を助けて、舊習を改めんことを、力めらるべし、上京の期、爲めに、遷延するも、敢て妨げず、肥後守、此事の爲めに盡さば、余も、亦、肥後守の爲めに、一臂の勞を盡さん、禮遇の厚薄は、人心の向背に關す、決して、輕視すべきにあらず、此儀、亦、能く、肥後守に申通ずべし』

と告ぐ、容保を信賴するの心、辭色に呈はる、太一郎、謹んで、了承し、

『高論の趣、逐一、肥後守に、申通じ候べし、然るにても、萬一、過誤あらんも、計りがたし、覺書として、御下渡しあらば、幸ひ、此上も候はず』

と答ふれば、實美、

『如何にも、承知致せり、追つて、沙汰致すべし』

と述べて、之れを諾す。

數日を経て、又實美より報あり、太一郎、重ねて、其邸に到れば、實美、召し見て、覺書を與ふ、其箇條は、

- 一、是迄、中雀門外にて、下乗之あり候處、以來、書院大門(玄關前の門)内玄關下座敷にて、下乗すべき事。
- 一、是迄、馳走大名計り、式臺へ出迎之あり候處、以來、老中以下、各々式臺まで、出迎之あるべき事。

- 一、是迄、殿上の間に於て、御目錄を授くる等の節、勅使、老中、一時に、上段に昇り候處、以來、勅使、直に上段に坐し、老中、中段にて一禮、勅使目許の後、老中、上段に昇るべき(勿論對坐あるまじき)事。
- 一、對顔の節、大樹公、上段に坐せられ、勅使、上段に昇り、傍に坐し、勅命を述べて退去の節、大樹公、見送り之なく候處、以來、大樹公、出迎へ誘引せられて、中段に坐せられ、勅使、直に、上段に昇り、氣色の後、大樹公、上段に昇り、奥端對坐、勅命を

奉ぜらるべく、退去の節、大樹公前行、大廣間まで、見送り之あるべき事。

- 一、右の後、自分對顔の節も、勅命を奉じ候御使の身分の儀故、前條に準じ、厚く取扱ひ之あるべき事。

外五項にして、最後に、左の一節あり、

自餘、去夏、左衛門督下向の節、御沙汰の旨申述候通、從來、君臣の名分、相立たず、僭上不敬の廉々、以來、改革、萬事、尊崇の規矩、屹度、之あるべく、關白殿、命ぜられ候事。

太一郎、讀んで、此に至り、忽ち、屹と、首を上げつゝ、『是れ、正しく、朝命に候はずや、某の請ひ奉りし覺書とも存せず、如何なれば、先日御言葉に、違ひ給へるやらん』

と訝かり質せば、實美、

『否とよ、此文字は、唯、朝議の末、添へ置くに決したるまでの事、何も、朝命と申すべきにはあらず、唯、自分への覺書として、持参すべく、他人に示すには、及ばず、肥後守に對して、別に、朝廷よりの御内書あ

り、速かに、傳達すべし』

と告げて、左の御内沙汰書を渡す、

今度、勅使下向に付ては、勅慮貫徹候様、肥後守儀、關東に於て、丹誠を抽んで、周旋之あり候様、兼て御沙汰もあらせられ候、然る處、近々、發途の趣、相聞え候、自然、發足に相成候共、滯府致され、何れにも、盡力之あり候様、更に、御内沙汰あらせられ候間、此旨、内々、急に申入候也。

太一郎、始めて、意を安んじ、其儘、受け納めて、旅館に、歸り來る。

重大の官書、驛傳を以て、發すべくもあらず、左兵衛、太一郎の二人、特に、之れを齎らして、京都を發す。

實にや、至誠、天に通ず、容保、未だ赴任せずして、早くも、至尊の信任を辱うせるもの、偏に、外交に關する一篇の建白書に基づく。

一七六 壬戌の改革(上)

勅使待遇の改正は、幕府の一大問題なり、其威嚴の消長に

も關し、其權力の伸縮にも關す、幕府、果して、能く、之れを首肯すべきか。

曩に、徳川刑部卿慶喜の後見職となり、松平前中將春嶽の政事總裁職となりてより、天下、皆、新政の出づるを望む。

春嶽、孜孜として、弊政の釐革に力め、終に、閏八月十五日を以て、之れを斷行す。

此日、將軍家茂、恒例に依りて、先づ、諸侯の禮を受けたる後、松平總裁職以下、諸閣老を隨へて、黒木書院に出で、溜間格、其他萬石以上の諸侯を召して、

先般、申聞け候通り、變革せしめ候、就ては、參觀交替の儀も、相改むるの條、武備充實候様、心掛く可く、尤も、委細の儀は、年寄共より、演説に及ぶべく候、猶、存寄り之あり候はば、忌憚なく、申聞け可く候事

との親諭を下し、國主諸侯に對しては、特に、座所に召して、上意を賜ふ、尋で、閣老板倉周防守勝靜より、

方今、宇内の形勢、一變致候に付、外國の交通も、御指免しに相成候に付ては、全國の御政事、一致の上ならて

は、相立ち難き筋候處、御大禮等、相續き、一新の機會を失ひ、天下の人心居り合ひ兼ね、終に、時勢、此の如く切迫に及び候次第、深く、御痛心遊ばされ候に付、上下、擧て、心力を盡し、御國威、御更張遊ばされ度く思召候、尤も、環海の御國、海軍興させられず候ては、御國力、相振はず候に付、追々、御施設成さる可く候へ共、此儀は、追て、仰出されも之あるべく候、右に就ては、參觀の年割、在府の日數、御緩めの儀まで、仰出さる可く候、依りては、常々、在國在村致し、領民の撫育は、申すまでもなく、文を興し、武を振ひ、富強の術計、厚く相心得、銘々、見込を立て候様、心得罷在るべき旨、仰出され候。

との達文を口演し、此れに基づきて、變革を加ふ。

先づ、諸侯參觀の割合を、三年目毎に、大約百日と定め、特に、大廣間諸侯の内、筑前侯黒田美濃守齊博、對州侯宗對馬守義和、肥前侯鍋島肥前守齊匡に對しては、大約一ヶ月を限りて、在府すること、定め、溜詰、譜代諸侯、外様諸侯、雁之間詰、奏者番、菊之間詰、縁類、交代寄合衆に

對しては、在府中、時々、登城して、政務の理非得失を上言すべき旨を命じ、又諸侯の妻子は、嫡子の外、參府在國共に、勝手次第と定め、尙、服制の改革を行ひ、月次の御禮を止め、諸侯の供連を省き、執政への贈物を廢し、其他、二三の改革をも加ふ、要は、諸侯の負擔を輕減し、之れを移して、武備を充實せしめんと欲するに在り。

就中、諸侯參觀の期を緩めて、多年の檢制を弛め、諸侯妻子の歸國を許して、事實上の人質を廢するが如きは、幕府の爲めに、最も、不利とする所、板倉閣老等、主として、此れに反對し、一橋刑部卿、亦、之れを非認せしと雖も、獨り、松平總裁職は、此れにあらずんば、朝旨を奉じ、諸侯を服するに足らずとし、斷然、衆議を排して、之れを行ふ、板倉閣老等、皆、不平の色あり。

一七七 壬戌の改革(下)

實にも、今回の改革は、幕府の英斷に相違なしと雖も、其結果は、寧ろ、不利を醸すべき英斷なりと謂はざるべからず。

抑、諸侯の在府二ヶ月の經費は、其在國一ヶ年の費用に均しきものにして、其多く江戸に在るが爲めに、受くる所の打撃、決して、尠なりとせず。

特に、妻子を、江戸に置くの一事は、寛永年間、薩州侯島津家久の、幕府に、貳心なきを表せしに始まり、爾來、諸侯たるものは、皆、妻子を、江戸に置くの制となりて、事實上の人質となせるなり。

關ヶ原役の起らんとするや、諸侯の妻子を、大阪に置けるものは、内心、皆、東軍に屬するを躊躇するの觀なき能はず、若し、妻子にして、郷國に在りせば、皆、最初より、決然として、東軍に屬せしならん。

今や、諸侯參觀の期を緩めて、在國の期を長うせしのみならず、其妻子在府の制を解きて、人質の制を廢す、是れ、諸侯の歡心を買はんと欲して、却て、離心を懷くの機を與へたるのみ。

幕府の朝旨を奉じて、新政を施すに急なる、斯かる危險の改革をさへ、斷行せしのみならず、之れと前後して、更に、二三の賞罰をも、實行せり。

八月十六日には、前閣老安藤對馬守信睦に對し、勤役中、不正の取計ひありとの廉を以て、村替の場所一萬石を召上げ、且、隱居謹慎を命ず。

又前閣老久世大和守廣周に對しても、勤役中、不束の取計ひありし段、逐一、御聽きに達したりとて、加増の一萬石を削りて、五萬八千石となし、且、隱居謹慎を命ぜらる。

閏八月三日には、彦根侯井伊掃部頭直憲に對して、其家臣長野主膳を、嚴刑に處すべき旨を命ぜらる、之れに先だつこと數日、彦根藩、既に、國を亂るの罪を以て、主膳に、誅戮を加ふ。

此月五日には、故水戸中納言齊昭に對して、從二位大納言を贈らる。

「水戸前黃門殿贈官仰出されたき事」とは、島津三郎久光の、幕府に建白するところ、今や、幕府、之れを實行す。

「安對は、今一際重く、仰付けられたき事」とは、又久光の建策するところ、今や、幕府、信睦を懲罰せるのみならず、併せて、其建策せざる廣周をも、懲罰せり。

「故掃部頭罪科、屹度、御糺しの事」とは、又久光の建策せ

るところ、幕議、未だ其主に及ばずと雖も、既に、其臣に及ぶ、頓ては、其主にも及ばんとは、早くも、下馬の評するところ。

幕府の朝旨を奉ずるや厚く、人言を聞くや至れり、此時に方りて、勅使待遇問題、又端なくも、京都より起る、幕府、亦、果して、之れを諾するや否や。

長野主膳は、故大老直弼の耳目として、京都に在り、九條關白の家臣島田左近、及び幕吏等を願使して、専ら正議の公卿志士を陷擠するに力む、此頃、彦根に歸り、其黨を要路に推して、己れ其實權を握る、既にして、形勢一變し、藩中、又主膳の專横を憎み、八月二十四日、終に捕へて、獄中に下し、越えて二十七日、斬に處す。

一七八 勅使の待遇

容保、既に、京都の事情を究め、更に、外交の方針をも定む、今は、何時、任地に赴くも妨げず、乃ち十月に入りなば、早々、駕を發せんとす。

會々野村左兵衛、柴太一郎の二人、京都より、馳せ還りて、

朝廷の御内沙汰書を呈し、併せて、三條中納言實美よりの覺書をも呈す。

容保、平生、宗家を重んずること厚く、朝廷を重んずること、亦、厚し、勅使待遇問題を囑せらるゝに及びて、争てか、之れを閑却すべき、

『抑々朝廷を尊奉せんことは、東照宮の尊慮にして、勅使待遇の禮、亦、決して、粗かならず、君臣の分義、劃然として定まる、東福門院の入内せらるゝに及び、朝廷亦、徳川氏の外戚に當るを以て、敬意を表し給ひ、特に、大猷公の剛毅果斷にして、天下治平の功績、著名なるを以て、更に、一段の殊遇を賜ひ、勅使に對しても、尙、特に、上段に坐せしめ給ふ、爾來、自から、習慣となりて、今日に至れるものにして、決して、幕府の尊大にもあらず、僭越にもあらず、然れども、朝廷、今や、君臣の分義に顧みて、之れを改め給はんとす、是れ、固と當然の事にして、決して、異議を唱ふべきにあらず、我れ、亦、聊か微力を盡すべし』

と決意し、直に、一篇の建言書を呈して、

『從來、幕府に於ける勅使御待遇の法、往々、簡慢に失して、其宜しきを得ず、今や、朝廷御尊崇の時に際して、其名分を正しうせられんこと、誠に當然の御事に候はん、宜しく、舊來の格例を廢して、慎重の典禮に、改め給ふべし』

との議を建つ、幕府、銳意、朝旨を奉ずと雖も、此問題に對しては、兎角に、遲疑して、決せず。

十月十七日、容保の登城するや、閣老等、速に、上京せんことを促がす、容保、襟を正しつゝ、

『勅使禮遇の法、定まらざれば、公武の御一和、期すべきにあらず、勅使、下向せられ、其禮の定まるを見て、出發仕らんのみ』

と答へて、從はず、肥前唐津侯小笠原圖書頭長行、時に、閣老の班に在り、横合より、喙を挟みて、

『貴殿の職は、京都守護に候はずや、他事の爲めに、出發を延引せらるゝは、曠職の責を免かれがたし、早々、赴任ありて、然るべし』

と促がせば、容保、勃然として、色を作し、

『貴殿は、就任、日、淺くして、余が奉職の理由を、御承知なからん、出發の準備、全く成るも、尙、未だ赴任せざるは、深き仔細候ての事ぞ、唯、其地に居るばかりにて、宜しくば、守護職の任に在りとして、何かせん、今日限り、斷然、退職仕つるべし』

と言ひ捨て、決然、袂を拂うて、退城せし儘、疾と稱して、復た、出でず。

長行、大に驚きて、百方、其粗漏を謝すれば、容保、意、釋けて、復た、事務を視る。

幕府、亦、舊來の禮式を變じて、勅使の待遇を改め、諸事、鄭重の式を行ふに決す。

是に於て、容保の意見、又貫く。

一七九 勅使の東下

九月二十八日、京都に於て、正副勅使、東下の旨を發表せられ、十月十二日を以て、發途の期と定む。

正使三條實美中納言、少將より、中將に進みて、議奏に列せられ、副使姉小路侍從公知、亦、少將に進めらる。

傳奏坊城大納言俊克、特に、土州侯山内土佐守豐範の重臣を召して、

此度、關東へ、勅使差下され候に付、猶、松平土佐守にも、同時出府、猶又、叡慮貫徹の儀、周旋之あり候様、遊ばされ度く思召され候旨、御沙汰候事。

との御沙汰書を賜ふ、時に、豐範の父容堂、江戸に在り、朝廷、先に召命を下し給ふ、是に於て、更に、

松平容堂上京仰出され候へ共、勅使下向の儀、仰出され候間、出立の儀、暫く見合せ、勅使下向、差圖次第、早、上京致すべく候事。

との別紙を賜ひ、尋で、父子俱に、盡力すべき旨を命ぜらる、曩に、大原勅使の東下するや、薩州侯の父島津三郎久光、之れを護衛し、後、大赦の詔勅を下さるゝや、長州侯の世子毛利長門守定廣、之れを奉じて、東下す、今回、三條勅使の東下するに及んでは、即ち土州侯山内土佐守豐範父子、之れを護衛し、幹旋す、蓋、順序として、當さに然るべきところ。

土州の志士武市牛平太、夙に、公知の知を受く、其東下す

るに方り、特に、公知の雜掌として、扈從するに決し、姓名を變じて、柳川左門と稱し、筑後守に任ぜらる。

牛平太、又同志の士矢野川龍右衛門、久松喜代馬、三原兎彌太、島村衛吉、柏原禮吉、田邊豪次郎、山本喜三之進、小笠原保馬、中平保太郎、藤井米吉、浪越肇、楠瀬六衛の十二人を以て、實美に屬し、阿部多司馬、森田金三郎、多田鐵馬、岡田以藏、高松太郎、廣瀬健太、曾根東吉、松山源藏、森助太郎、清岡治之助の十人を以て、公知に屬す、長州の志士佐久馬佐兵衛、亦、扈從として、公知に屬す、勅使の周圍は、皆、志士なり、志士の言説、聽て、勅使の意見となりて、表はるゝも、亦、宜なり。

勅使に先だつこと一日、豐範、其家臣小南五郎右衛門、本山只一郎以下を從へて、京都を發し、宿舍の混雜を避く。十月十二日、三條正使、姉小路副使、相俱に、京都を發す、長州藩士の護衛するもの、數百人。

二十八日、品川に達す、政事總裁職松平前中將春嶽、特に、來りて郊迎す、是れ、從來に有らざるところ。

既にして、正副使、江戸に入りて、傳奏屋敷に館す、將軍

家茂、閣老水野和泉守忠精、高家肝煎土岐出羽守頼永を、御使として、勅使の安著を賀す。

春嶽、容堂、及び閣老松平豐前守信義、板倉周防守勝靜、小笠原圖書頭長行等、亦、勅使を訪うて、天機を伺ひ奉つり、且、

『將軍家、麻疹に罹り、病牀に在はし候、速に、勅使と、御對顔あらせられんこと、相叶ひがたし』

との旨を述べれば、實美、

『勅書は、親しく大樹公に附與すべきものなり、即今、御病牀に在はすに於ては、姑く、其平癒の期を待つの外なし』

と答へて、其全癒の日を待つ。

容保の意見、行はれて、勅使の待遇、頓に、其面目を改む。

一八〇 二人の守護職

曩に、島津三郎久光の、大原勅使を護衛して、江戸に到り、公武の間に、周旋して、功勞ありてより、朝廷の之れを信頼すること、最も厚く、終に、擢んで、京都守護職とな

さんと欲するの意あり、唯、長土の意向を憚りて、未だ發せず。

會々容保の京都守護職に任命せらるゝありて、端なくも、幕府の爲めに、機先を制せられしと雖も、朝廷の幕府に對するの疑念、未だ全く釋けず、公卿、亦、唯、幕府の親藩にのみ京都の守護を委するを安んぜず、更に、外藩の力を以て、之を掣肘せんとするの議起り、久光任命の事、愈々此に決す。

傳奏坊城大納言俊克、野宮宰相定功、此旨を、幕府に達すると同時に、在京都の會津藩士外島機兵衛を召して、左の一書を附與す、

公武御間柄の儀に付、段々盡力、御満足に思召され候、殊に、當御守衛相勤め候事、旁々御安心在らせられ候處、方今、人心、兎角、異議相生じ易く、親藩計り奉職にては、外藩向に於て、居合ひ難く候に付、此度、島津三郎儀、公武御一和の基本を、周旋致し、皇國の爲め、忠誠の者にて、此末、公武の御爲め、然るべく思召され、拔擢、守護職仰付けられ候に付ては、萬事申合せ、警衛之

あるべく候事。

是れ、即ち容保に賜はるべき御内沙汰にして、機兵衛、固より、其内容を、窺ひ知ること能はず。

此事、吉か、凶か、機兵衛、憂念禁ずること能はず、京都町奉行永井主水正尚志に就いて、質すところあり、初めて、其事實を聞きて、愕然、色を變じ、勿々、其書を奉じて、江戸に、馳せ歸る。

會津藩士の面々は、之れを聞きて、皆、憤慨措かず、

『三郎は、無位無官なり、我が君侯の、此れと職を同うし給はんこと、御家門の耻辱なり、寧ろ、辭職し給はんこそ、然るべけれ』

と主張するもの、少からず、容保は、忠誠一遍の人、

『苟も、京師と、關東とに、裨益あらば、太郎も、可なり、次郎も、可なり、無位無官の三郎なりとて、何か有るべき、余は、唯、此れと協力して、俱に、公武の御一和を計らんのみ』

と告げて、敢て、之れを忌嫌するの色なく、十一月十二日、公武御間柄の儀に付、私事、盡力の段、御満足に思召さ

れ、殊に、御當地御守衛相勤め候事、旁々御安心在らせられ、難有き仕合に存じ奉り候、方今、人心、兎角、異議相生じ易く候に付、此度、島津三郎儀、御守護仰付けられ候に付ては、萬事申合せ、御警衛相勤むべき勅書の趣、畏り奉り候、仍て、御請、此の如くに御座候。

との御請書を上つりて、命を奉ず。

幕府、亦、種々の異論ありしも、後、終に、朝命に従ふ。

是に於て、幕命の守護職と、朝任の守護職との二人あり、二者の關係如何、これぞ、世上の最も注目するところ。

一八一 大老以下の處罰

勅使、既に攘夷の鳳詔を啣んで、來つて、江戸に在り、幕府、天下の輿望を收め、民心の緩和を求むるの方策として、十一月二十日、故大老井伊掃部頭直弼以下、閣老、有司二十餘名の舊罪を罰す。

直弼の家督井伊掃部頭直憲に對しては、直弼の大老在職中、京都に對し奉りて、宸襟を惱ませらるべき處置を施し、公武合體の道害し、人心動搖の基を開き、賞罰、我意に任

せ、賄賂私慾の儀も、少からず、不慮の死を遂ぐるに及んでも、上聽を欺き奉つる段、重々不届なりとして、十萬石を、收公せらる。

内藤紀伊守信親に對しては、閣老在職中、同列の中に、不正の處置を行ふものもあるも、心付かざる段、不束なりとし、村替の一萬石を、召上げて、舊地を賜はり、且、溜詰格を免じて、帝鑑の間に下げらる。

間部下總守詮勝に對しては、閣老在職中、外夷取扱の件に關し、朝廷に對し奉りて、不正の處置之れあり、且、重き方々に對して、不相當の仕向に及べる段、故井伊掃部頭の意を受けしと言へ、重大の事件を、輕易に心得、公武の一和を失ひ、民心の離反を來せしこと、不束の至りなりとて、村替の一萬石を召上げ、且、隱居謹慎を命ぜらる。

酒井若狹守忠義に對しては、京都所司代在職中、如何の處置之れあり、先達、隱居仰付けられ、加増の一萬石を、召上げられしも、尙、權謀詐術の行ひ之れあり、公武の疎隔を來せし段、如何に思召さるとて、蟄居仰付けらる。

堀田備中守正睦に對しては、閣老在職中、外夷の取扱に關

して、種々、觀慮の趣も在らせらる、處、重大の事件を、輕易に心得し段、不束なりとて、蟄居仰付けらる。

久世大和守廣周、安藤對馬守信睦の二人に對しては、先達、御咎めの處、尙又、故井伊掃部頭横死の件に關して、上聽を欺き奉り、朝廷より、仰せ進ぜられし事に對し、因循遲緩の取扱をなして、朝廷を重んぜず、且、賄賂を收め、家事不取締の段、不埒なりとして、永蟄居仰付けられ、且、廣周は、一萬石、信睦は、二萬石を收公せらる。

松平和泉守乗全に對しては、閣老勤役中、戊午の大獄に關し、井伊掃部頭の意を受けて、典刑を紛亂し、其他、不束の行爲ありとして、村替の一萬石を、召上げ、舊地に復し、且、隱居仰付けらる。

松平伯耆守宗秀、石谷因幡守穆清、久貝因幡守正典、池田播磨守頼方、及び松平出雲守、駒井山城守、古谷長門守、黒川備中守に對しては、戊午の大獄に關し、不束の行爲ありとして、夫々處罰せられ、藥師寺筑前守元眞、及び水野左京大夫に對しては、井伊掃部頭に阿諛して、不正の取計ひありし段、不束なりとして、減俸、又は差控を命ぜらる。

其他、脇坂中務大輔安宅以下、夫々處罰せられしもの八人。越えて二十三日、故島津薩摩守齊彬に對し、格別の配慮を以て、從三位、權中納言を贈らせらるゝ旨を達す。

直弼以下は、條約の訂結に關し、戊午の大獄等に關して、朝廷、及び志士の爲めに、最も嫌忌せられ、指彈せらるゝもの、幕府、今や、之れを罰して、天下の人心を、慰撫せんと欲す。

然れども、滔々たる攘夷の激流、將さに千仞の長堤を決して、横流せんとす、區々たる人力の、得て制すべき所にあらず。

一八二 幕府の紛論

是れより先き、勅使東下の報、江戸に達するや、幕府の有司、攘夷の詔勅を奉すべきや否やを議す。

政事總裁職松平前中將春嶽は、自ら開國の意見を持すると雖も、此場合、攘夷の詔勅を受くるの外なきを説き、御側衆大久保越中守忠寛、之れを贊す。

後見職一橋刑部卿慶喜は、條約の破棄すべからざるを説き

て、詔勅を受けざらんことを主張し、淺野伊賀守長祚、小栗下野守正寧等、之れを贊す。

幕議、今や、兩派に岐かれて、容易に決せず、慶喜、

『既に假條約を訂結せる今日、突然、之れを拒絶するは、萬國の通義に反す、好し、此上は、我れ、上京して、親しく、諫奏し奉つらん』

と決意し、斷然、身を挺して、京都に、馳せ上らんとす。春嶽、朝野の反動を、招かんことを恐れて、切に、諫争すれども、慶喜、頑として、肯んぜず、終に、其趣を、傳奏に通告す。

幕府の形勢、亦、漸く、攘夷反對に傾き來れば、春嶽、復た、奈何ともすべからず、終に、辭意を決して、靈岸島の藩邸に、引き籠る。

山内容堂は、詔勅拜受の意見を懷く、斯くと聞きて、大に驚き、一夕、單騎、鞭を揚げて、越前邸に馳せ向ひ、途中、落馬して、足を傷つく。

容堂、意とせず、春嶽を、寢室より起して、俱に、密談すること徹宵、飽までも、辭職の不可なるを勧告す。

せんことを命じ給ふ。

長州の志士大和彌八郎、長嶺内藏太、志道聞多、久坂義助、寺島忠三郎、有吉熊次郎、高杉晋作、白井小楠、赤根幹之丞、山尾要藏、品川彌二郎の面々、幕府の因循を慨し、横濱の夷館を焼き、公使を戮して、攘夷の機を促がさんと欲し、十一月十三日の夜を以て、江戸を發す。

土州の志士武市半平太、其輕舉、事を誤まるを憂ひ、容堂を通じて、長藩に、警告する所あり、長州の世子長門守定廣、大に驚き、自ら馬を飛ばして、大森に到り、諸士を遮りて、百方、諭し止む。

此時、定廣、酒を諸士に賜ふ、周布政之助、大醉して、容堂を冷評し、爲めに、長土の間に、葛藤を生ぜんとす、定廣の陳謝に依りて、事、乃ち止む。

今や、攘夷贊否の聲、囂然として、幕府の内外に喧し。勅使、空しく滞在すること三旬、幕議、漸く決して、十一月二十七日、初めて、登營するの機に會ふ。



山内豊信（容堂）

容堂、又慶喜を訪うて、詔勅を受けんことを説く、慶喜、自信極めて固く、斷乎として、之れを斥く、容堂、力、及ばず、呼んで、剛情公と言ふに至る。

既にして、朝廷、命を下して、慶喜の上京を止め、江戸に在りて、勅使の到着を待たしむ、慶喜、快々として、樂ま

ず、亦、疾と稱して、出でず。

尋で、勅使、江戸に達す、會々將軍定茂、麻疹に罹りて、病牀に在り、其癒ゆるに及べば、慶喜、春嶽、又俱に引き籠れるが爲めに、尙、登營の機を得ず。

朝廷、民心の激昂せんことを憂ひ、御沙汰書を賜うて、一

刻も早く、

出仕せんこ

とを諭し、

容堂父子に

も、同じく

御沙汰書を

賜うて、其

間に、周旋

一八三 勅使の入城

十一月二十七日、勅使三條中納言實美、副使姉小路少將公知、勅書を奉じて、江戸城に入る、使命、山より重し。實美、時に、年二十七、銳氣、溢る、ばかり、公知と共に、衣冠儼然として、進めば、政事總裁職松平前中將春嶽、諸閣老を率ゐて、式臺に、出て迎へ、將軍家茂、亦、自ら獅子の間の廊下に、出て迎ふ、獅子の間は、玄關の上に在り。勅使、徐々と玄關を昇れば、家茂、慇懃に、會釋を施し、導きて、大廣間に到り、自ら中段の第一席に坐す。勅使、進んで、上段に坐し、家茂を招きて、勅書を受く。家茂、恭しく上段に昇りて、拜受し、中段に復して、之れを閣老に渡せば、閣老、三方臺に載せて、下段に坐す、勅書は、漢文にして、之れを和釋すれば、左の如し、

『攘夷の念、先年來、今日に至りて、絶えず、日夜、之れを思ふ、柳營に於て、各々變革、新政を施し、朕の意を慰めんと欲す、怡悅斜めならず、然れども、天下舉りて、攘夷する無きに於ては、一定、人心一致するに到り

難からんか、且、恐くは、人心一致せずして、異亂、邦内に起らんことを、早く攘夷を決して、大小名に布告せよ、其策略の如きは、武臣の職掌なり、速に衆議を盡し、良策を定めて、醜夷を拒絶すべし、是れ朕が意なり』

外に、御親兵に關する左の御沙汰書あり、
今般、攘夷の議、決定之れあり、天下に、布告にも相成候上は、外夷、何時、海岸を劫掠し、畿内に闖入の程も、測り難く候間、禁闕の御守衛、嚴重に仰付けられたく思召され候、然る所、海國は、夫々の防禦も之れあり、海岸に引離れ候諸藩は、救援の手當之れあり候事に付、邊鄙より、畿内に、警衛差出し候には、自然、不行届の筋も、出來すべく、且、自國の兵備、手薄に相成り、國力の疲弊にも至るべく候間、京師守護の儀は、御親兵とも稱すべき警衛の人數を、置かれず候ては、實以て宸襟をも安んぜられず候間、諸藩より、身材強幹、忠勇氣節の徒を、選舉せしめ、時勢に隨ひ、舊典をも、御斟酌に相り、御親兵と遊ばされ度く思召され候、右親兵置かせられ候に付ては、武器食糧等、之に准じ候間、是亦、諸藩

へ仰付けられ、石高相應、貢獻致候様、遊ばされ度く候、但し、是等の儀は、制度に相涉り候事に付、關東に於て、取計ひ、諸藩へ、傳達之あり候様、仰出され候、最も即今の急務に候間、早速、評定之れあるべく、御沙汰在らせられ候事。

攘夷の事は、三藩志士の意見に基づき、親兵設置の事、亦、三藩志士の建策に基づく、俱に、幕府の爲めに、痛棒たり。勅書の授與、終れば、實美、更に、左の口上書を渡す、

攘夷決定布告の事

此儀、早々、評決に相成候様、尤も評決の上、急速、諸大名へ、下知相成候様、思召し候事。

策略、並に拒絶の期限の事。

此儀も、早々、列藩の衆議を盡され候て、奏聞之あるべく候、併し、暫く、日數も、相掛るべく候間、勅使へ即答に及ばず候間、衆議一決次第、早速言上、叡慮伺ひ定めらるべき事。

前段、列藩衆議の上、至當の良策一決の處は、追て言上の事に候へ共、差當り、征夷府に於て、廟算見込の處、

拒絶期限の遲速緩急、大概見据の處、内々承り度き事。此れぞ、豫め、幕府の道路を塞がんと欲するもの、亦、武市半平太等の苦策に由る。

此れにて、式、全く終れば、勅使、徐々と退出す、家茂以下の奉送、亦、奉迎の時の如し、是れ、實に前代に見ざる

一八四 勅使の満足

勅使の入營、既に終る、幕府、十二月五日を以て、勅書奉答の式を行はんとす。

期に先だつこと一日、家茂、正副使を、城中に招きて、鄭重なる饗宴を張る、其式、公卿の攝家大臣の邸に臨むに

隨行の諸大夫、近習等には、柳の間に於て、饗宴を賜ひ、布衣の者、出で、接待し、小十人組、素袍を着けて、食膳を供し、三汁九菜を具ふ、青侍以下、亦、饗を賜ふこと、各々差あり。

武市半平太、亦、公知の雜掌柳川筑後守左門として、宴に

列なる、野人、禮に嫻はず、往々、措を失して、左しも隆準脩鄂、膽、斗の如き志士も、流汗、背に決ねく、心、窃に木曾殿の牛車の嘆あり。

木曾義仲、狩衣に、立烏帽を着け、牛車に、ゆがみ乗りて、参内せんとし、大に失敗せし事あり。

其翌五日、三條正使、姉小路副使、打ち揃うて入營す、將軍家茂、先づ、勅書に對して、

勅書、謹んで拜見仕候、勅諭の趣、畏り奉り候、策略の儀は、御委任成され候條、衆議を盡し、上京の上、委細申上ぐべく候、誠恐謹言。

との奉答書を呈し、次に、御親兵設置の御沙汰書に對して、今度仰出され候攘夷の勅諭、天下へ布告仕候に付ては、御親兵の儀、御沙汰の趣、拜承奉り候、就ては、家茂、征夷の重任に膺り、且、右近衛大將をも、兼任仕候上は、御守衛の儀は、職掌に候間、不肖ながら、堅固に、御守衛等の手配仕るべく、尙、不足にも思召され候はゞ、諸藩より、召登され候も、然るべく候へ共、一體、外夷を攘ひ候には、皇國全體の警衛肝要に付、列藩の儀は、國

力を養はせ、九州は誰々、奥羽は誰々と申す如く、藩鎮の任、専らに仕らせ候はゞ、然るべきやと存じ奉り候、仰ぎ願はくは、此旨、聞召させられ候様仕度く存じ奉り候、尙、明春早々、上京の上、警固の方略、具さに奏聞を經奉るべく候、恐惶謹言。

との奉答書を呈し、其紙尾に「臣家茂」と署す、是れ、家康以來、未だ會て之れあらざるところ。

實美、尋で、恩賜の花瓶を、家茂に、手焙一箱、綾五卷づつを、和宮、天璋院に授く、是れまでは、進ぜう物と呼びしを、今は乃ち賜はり物と稱す、名分、此に立ちて、朝威、亦、自から伸ぶ。

此日、幕府、諸侯、及び麾下の士に對し、左の令を發して、意見を諮ふ、

此度、勅書の通、仰出され候に付ては、銘々の策略、聞かせられ度く思召され候間、見込、巨細相認め、來亥二月、御上洛前途に、早々差出さるべく候、依ては、御國內人心一致に之なくては、相成りがたき儀に付、兼ても申達し置候へ共、尙、此上、別て入念、武備、嚴重相整

へ候様、心掛くべく候、尤も、委細の儀は、衆議の上、勅諭御伺ひに相成候間、方今、無謀の所行之れなき様、銘々家來、下々へも、屹度、申付け置くべく候事。

初め、實美の京都を發せんとするや、家族、親戚と、水盃を酌んで、訣意を表し、死を決して、關東に下る、然るに、幕府の待遇優渥、頗る意料の外に出づ、實美の歡喜、言ふべからず、

『此れぞ、松平肥後守の周旋盡力の結果に外ならず』

と思へば、容保の誠惻を感じることに、特に深く、將來、公武一和の事に關しては、互に、協心戮力せんことを約す。實美、既に、使命を全うす、最初は、横濱の攻撃を見ざる間は、斷じて、歸京せずとの意氣なりしに似ず、越えて七日、勿々、江戸を發して、歸洛の程に上る。

一八五 會津侯の出發

勅使、既に江戸を發す、容保、亦、愈々任に京都に赴かんとす。

容保の精神は、一に、公武の一和を圖るに在り、臣下の或

は事を誤まらんことを恐れ、先鋒四隊の先發するに方り、特に、邸内の調馬場に召して、親書を與へ、

『輦轂の下に於ては、別して、謹慎を加へ、外は、柔順を旨とし、内に、義勇を貯へ、血氣に馳せず、大事に臨んで、從容迫らず、諸般の有志浮浪の徒と雖も、皇國の御爲めを唱ふるものは、同志傍輩の心を以て、接すべし』との意を訓諭し、更に、將士に對して、

『此頃の寒天に際して、長途の旅行をなさんこと、其苦勞、想ふに餘りあり、各自、宜しく自愛すべし、島津三郎の、此度、勅諭を以て、京都守護職に任ぜられたること、或は、汝等の不快とする所ならん、然れども、余は、一意、公武の御合體を計るの外、他念なし、三郎、既に朝命を拜すれば、則ち余と同職なり、余は、至誠を吐露して、俱に、國家に盡さんのみ、汝等、若し、中に不快の心あれば、不滿の色、必ず、外に形はれん、事を誤まり、過を生ずるの基、實に、此に在り、能く、言語を慎み、能く、舉止を謹みて、余が意を體せよ』

と懇諭すれば、將士、皆、泣いて、命を奉ず、容保、又家

老萱野權兵衛を召して、

『汝、此書を携へて、若松に歸り、諸臣に、方針を訓諭せよ』

と命じ、左の親書を授く、

方今、容易ならざる折柄、御由緒を思召し、重き職掌を仰せ蒙り候段、武門の面目、畢竟、御祖先様の御餘慶と、難有き事に候、此上は、十分粉骨、誠忠を盡し、御代々様の御美名を穢さざる様致度き心底に候處、一身のみにて、如何様心痛候とも、衆人一致一和の上ならでは、行届きがたき儀、尤も、此度、登京候へば、國元の儀は、根本に候間、別て、勁堅に相成候様、面々、厚く心懸け、國家の爲め、精々、盡力致呉れ候様、扱又、今度、公邊に於て、追々、御改革に相成候へ共、猶更、靱慮の趣、御遵奉、武備充實、御國威更張、外夷の侮を受けず、公武御合體に相成候様にと、建白致候事に候。
是れ、又容保の精神を見るべきもの。
七日、將軍家茂、特に、容保を召して、愛馬一頭を賜ひ、和宮、天璋院、亦、各々巻物を賜ふ。

翌八日、容保、重ねて登營す、閣老板倉周防守勝靜、將軍の命を以て、

來春早々、御上洛、御警衛遊ばされ候御積りに候間、夫迄の内、彼是の議之あり候共、皇國の大事を思ひ、堪忍び、家來共居合方、精々、心を用ゐ、早々、上京致さるべく候。

との書付を與へて、注意するところあり、容保の意、固より、此に在り、

『台諭の趣、争でか、服膺仕らざらん、御心安かれ、誓うて、忍耐、邦家の爲めに、盡し候はん』

と答へ、且、京都黒谷金戒光明寺を以て、旅館となすべき旨を告げて、退出す。

是より先き、土州の志士武市牛平太、出羽の志士清川八郎等、在京都の會津藩士小室金吾に對して、

『今や、海陸の兵備を、講習すべきの時なり、肥州公御上京の際は、宜しく、海路を取らるべく、大樹御は上洛の時も、亦、然らんことを望む』

との意を述べ、金吾、此趣を具申すれば、容保、亦、之れ

を然りとし、幕府に請うて、スクエール二隻を借る、藩士等、聞いて、之れを不可とし、

『我等は、山國に成長して、航海の術をも存せず、萬一の事あらば、何を以てか、主公を守衛し奉つらん』
と唱ふるもの、少からず、容保、其誠忠の志に感じて、終に、其意に従ふ。

是に於て、十二月九日、和田倉門内の邸を發して、陸路、京都に向ふ、沿道の諸侯、皆、大に優遇せざるはなし。

一八六 國事掛の設置

幕府に於て、弊政を改革せるの時、朝廷に於ては、又其行政機關を變更して、國事掛、及び參政、客人の三職を、置かれたり。

抑々朝廷には、關白の外に、大臣あり、納言ありと雖も、其政務の局に當るものは、唯、關白、及び議奏、傳奏の兩職に過ぎず。

議奏は、朝廷の典禮、公卿の任免等を掌り、傳奏は、朝幕間の命令奏聞、及び武家に關する事を司り、關白、其上に

在りて、之れを統督す、他は、皆、榮譽の名稱に外ならず。古來、關白に任ぜらるゝものは、近衛、鷹司、一條、二條、九條の五攝家に止まり、議奏、傳奏に補せらるゝものも、亦、徳川氏の覇政以來、其門地に定まりありて、何人と雖も、自由に任用せらるゝものにあらず。
左れば、有爲有識の公卿ありと雖も、関閣あるにあらずれば、親しく、朝政に參與することを得ず、駿騫齊しく、槽檻の間に老ゆるの嘆なき能はず。

外舶入航以來、國事、漸く、多端にして、國家、亦、多難を極む、廣く人材を登用するにあらずんば、皇州の前途を奈何せんとは、諸藩志士の専ら唱道するところ、少壯過激の公卿、大に之れを贊して、盛んに、其議を唱ふ。

朝議、終に此れに決し、十二月九日、關白近衛前左大臣忠熙、議奏三條中納言實美、中山大納言忠能、正親町三條大納言實愛、飛鳥井中納言雅典、阿野宰相中將公誠、傳奏坊城大納言俊克、野宮宰相中將定功を以て、國事掛に兼補し、尚、青蓮院宮尊融法親王、一條左大臣忠香、二條右大臣齊敬、鷹司前右大臣輔熙、徳大寺内大臣公純、近衛左大將忠

房、一條大納言實良、廣幡大納言忠禮、大炊御門大納言家信、庭田中納言重胤、三條西中納言季知、德大寺中納言實則、六條宰相中將有容、大原左衛門督重德、長谷三位信篤、河鏑少將公述、裏辻侍從公愛、橋本侍從實梁、萬里小路右中辨博房、勘解由小路中務少輔資生を以て、國事掛に補し、後、姉小路少將公知をも、此れに加ふ。

是に於て、閑散の公卿、多くは、出で、朝議に參せるのみならず、久しく、脾肉の嘆ありし過激の公卿、亦、進んで、國政に與かるを得、其平生、諸藩の志士と、上下せし議論を提さげて、直ちに、之れを廟堂の上に、行はんと欲し、機會ある毎に、百方、主張して、屈せず。

朝議、是れより、動もすれば、極端に趨らんとするの傾向あり、近衛關白忠熙、夙に、現職を辭せんと欲するの意あり、薩藩の志士、長土二藩の志士と謀りて、屢々諫止するところあり、爲めに、隱忍、今日に至れりと雖も、今は、時事、多くは、其意に反するものあるを見て、心、甚だ樂まず、骸骨を乞はんとするの意、又漸く動く。

容保、此時に際して、任に京都に就く、其苦心、如何ばか

りぞ。

一八七 會津侯の著京

容保、東海道の水亭山驛を行くこと十六日、二十四日巳の上刻を以て、京都に入る、町奉行永井主水正尙志、瀧川播磨守等、屬僚を率ゐて、三條橋東に向ふ。

容保、直ちに、館舎に入らず、先づ、寺町本禪寺に入りて、旅装を改め、麻上下の禮服を著して、近衛關白忠熙の邸に到り、取次を以て、著任を報じ、天機を伺ひ奉つて後、黒谷金戒光明寺の館舎に入る、儀從、綿々として、連續すること一里餘、家老横山主税、後殿たり、其儀從、亦、數十人に達して、宛然、一諸侯の如し。

市民の路傍に并列して、其行装を見るもの、蹴上より、黒谷に至るまで、殆ど、立錫の地をも、餘さず。

曩に、京都所司代酒井若狹守忠義の、島津三郎久光の入京に際して、狼狽、措を失してより、市民、其卑怯を笑ひ、周章を嘲りて、腰拔武士と稱し、幕府譜代の諸侯、亦、皆、然りとなし、所司代、町奉行を輕侮して、之れを信賴せず、

終に、薩州、長州に對して、盛んに謳歌するに至る。

金戒光明寺

京都市上京區岡崎町黒谷に在り松平容保の京都守護職として宿營せる處



今や、容保の儀

從、盛大にして、士卒、亦、勇壯の狀あるのみならず、先づ、關白に候して、天機を伺ひ奉つる等、其天朝を尊崇するの、念厚きを見るや、皆、欣々として、守護職其人を得たるを賀せざるはなく、京童、亦、早くも、

會津肥後様、
京都守護職勤

めます、内裏繁昌で、公卿安堵、とこ世の中、ようがんと謡ひ合へりて、各々其堵に安んずるに至る。

是れより先き、近畿諸侯の兵を徴して、九門を守らしむ、是に至りて、皆、盡く、之れを罷む。

翌二十五日、容保、又近衛家に到りて、初めて、忠熙に謁し、具さに、滿腔の意見を、披瀝して餘さず、

『方今の急務は、人心の一和より、先きなるはなく、人心の一和は、公武の一和に基づく、公武、若し、睽離すれば、人心、亦、離反す、善謀良策ありと雖も、復た之れを施さんに由なし、容保、不肖なりと雖も、誓つて、公武一和の爲めに、全力を盡し候はん』

と斷言し、熱誠、言辭の表に呈はる、公武一和は、忠熙の素志なり、之れを聞きて、感嘆、止まず、盛饌を供して、懇に、款待し、且、隨從の臣小森久太郎、小野權之丞に、謁見を賜ひ、遍く、從者に、酒饌を饗す。

忠熙、時に、時事を慨して、挂冠の志あり、容保の意見を聞くに及んで、初めて、知己を得たるの想ひあり、爾後、

俱に、相倚り、相頼りて、國家の爲めに、盡さんとするの意を漏らす。

容保、既に、三條中納言實美の爲めに、信賴せらるゝ所あり、容保の家臣田中土佐、亦、山陵修築掛戸田大和守忠至を介し、正親町三條大納言實愛に謁して、意見を、交換する所あり、今や、乃ち關白忠熙と、意氣契合するに會ふ、容保、是に於てか、愈々奮うて、公武一和の爲に、心力を盡さんと欲す。

左れども、歳、茲に暮れて、年内、復た手を下すの邊もあらず、其大に活躍すべきは、當さに來るべき癸亥の新舞臺に在り。

一八八 守護職の軼掌

斗柄、一轉して、年、茲に新たなり、時局を新たにし、民心を新たにせんことは、容保の最も自ら期するところ。

文久三年癸亥正月二日、容保、初めて、參内し、傳奏野宮宰相中將定功に因りて、新正を賀し、天機を伺ひ奉つる。

定功、入つて、奏聞すれば、主上、小御所に、出御あらせ

せ給ひ、容保を召して、天盃を賜ひ、議奏正親町三條大納言實愛を以て、

『去歲、幕府に建言して、勅使待遇の禮法を改め、君臣上下の名分を、明かにせしこと、叡感、特に淺からず、其恩賞として、御衣一領を賜ふ、宜しく、戰袍、又は直垂に製すべし』

との恩詔を下して、緋の御衣を賜ふ、武臣として、御料の御衣を、賜はりしこと、實に、空前の寵恩に屬す、容保、感激措かず、拜受して、退出し、後、裁して、戰袍となす、長州藩士の禁闕を侵すの時、容保の著して、以て、禁軍を指揮せしは、實に、此恩賜の戰袍たり。

容保、尋で、親王、准后の御殿に參賀し、更に、關白、傳奏、議奏等の邸を、歴訪して、拜年の禮を行ふ。

此日、主上、親王には、會津蠟燭、御太刀、御馬代黃金十枚を獻じ、准后には、紅白縮緬十卷を獻じ、皇族、攝政、門跡、公卿等に、物品を贈ること、差あり。

四日、新年の御祝儀として、鮮魚を、宮中に獻ず、以後、毎月の恆例と定む。

容保、今や、守護職として、愈々職務を執る、其主として、盡さんと欲するところは、實に、京都の秩序回復に在り。

當時、諸藩の志士、浪士にして、京都に來り集まるもの、甚だ多く、殺伐、風を成し、跳梁、威を逞うす、苟くも、

幕府の爲めに盡し、志士の爲めに、利ならざるものは、之れを殺戮して、天誅と稱し、其首級を梟し、其罪科を榜し、

或は、富豪を脅迫して、金錢を掠奪す、九條家の諸大夫島田左近の如き、宇郷玄蕃の如き、越後の浪士本間精一郎の如き、目明文吉の如き、與力渡邊金三郎、大川原重藏、森孫六の如き、洛西金閣寺門士多田帶刀の如き、一々、搜指するに遑あらず、今は、所司代の威令も、行はれず、町奉行の制馭も、力あらず、人心、恟々として、其堵に安んぜず、輦轂の下、何の秩序もなく、紀律もあらず。

容保、此現狀を慨して、先づ、秩序を回復せんと欲し、所司代、町奉行の舊弊を、一洗すると與に、戊午の大獄を構成するに力ありし與力山田省三等を黜け、戊午の事に坐して、幽閉せられし平塚瓢齋、草間列五郎、諫川建次郎、北尾平次等を舉用して、與力となし、儒者中島永吉を始め、

有志として、罪を獲たるものは、盡く、之れを釋して、民心を綏撫せんと欲し、日夜、孜々として、怠らず、功あれば、人に歸し、過ちあれば、己れを責む、下僚、皆、悅服して、其用を爲さんことを樂しむ。

然れども、容保大に力めんと欲するところは、尙、此に止まらず。

一八九 御料増加の建議

容保の、更に、大に力を盡さんとするは、實に、禁裏の御料を、増加せんとするの一事に在り、抑々禁裏供御の費は、一ヶ年銀七百四十五貫目、即ち約金一萬兩と定め、御用品に、標準價格を設けて、之を増減するを許さず、例せば、鯛一寸に付、代銀四分一厘、蛤一箇に付、代銀二厘六毛、小鳥十羽に付、代銀一分七厘三毛、蕨一把(五十條)に付、代銀五厘二毛となせるが如き、是なり。

然るに、此標準價格は、安永三年に定めたるものにして、當時を距ること、實に、九十年の前に在り。

今は、物價、此れに倍蓰するを以て、到底、同一の品量を

納むること能はず、或は、品質を下し、或は、品量を減ずるに至るは、固より、勢ひの免かれざるところ。

加ふるに、公武の小吏、其中間に立ちて、賄賂を貪ほり、歩合を求むるのみならず、供御の費額を節するを以て、自家の功勞の如くに、思惟し、左なきだに、不足なる費額を、一層、節減するが故に、品質は、彌やが上にも下し、品量は、彌やが上にも減ずるに至る。

左れば、御酒には、水を混じ、野菜には、古物を交へ、甚だしきは、魚類の中に、食すべからざるものを用ゐて、唯、供御の御皿數に合はせ「此御品召上らせ給ふべからず」との符牒を附して、供へ奉ることさへあり。

公卿、堂上の如きも、官位こそ高けれ、多くは、一寒、洗ふが如く、或は、内職を營み、或は、金を與力に借りて、僅に、日々の烟を立つ。

朝に立つては、衣冠儼然たる公卿も、自邸にありては、汗水、垂らして、セツセと、内職の骨牌を貼らせ給ふ。

民の竈、賑ふ時も、禁裏の御竈、賑はしからず、公卿の竈、更に、益々賑はしからず。

幕吏の富裕にして、奢侈なる状態を見ては、公卿、堂上、亦、窃かに、羨望の念なきこと能はず、諸藩の志士、浪士、見て、奇貨、居くべしとし、例の論鋒を以て、頻りに、政權回復の必要を、説き立て、

『幕府を倒し、將軍を廢して、政權を、朝廷に收め給はば、朝廷の費額を増して、十倍とするも、諸公の俸祿を増して、五倍、七倍となすも、亦、唯、公等の望むところ、盡ぞ、自ら進んで、取り給はざる』

と煽動すれば、往々、之を贊して、勤王以外、攘夷以外に、幕府を嫉視する者、亦、之あり、幕府の憂は、彼よりも、寧ろ、此に在り。

容保、此に見る所あり、禁裏の御料を、増加し、公卿の窮乏を、賑給して、一つには、朝廷尊奉の實を擧げ、又一つには、浮浪煽動の道を塞がんと欲し、幕府に對して、其議を建つ。

左れども、因襲、年、久しきものは、一朝にして、改めがたく、幕府、因循して、容易に、此れに應ぜず。

容保、朝幕の爲めに、憂嘆、措かず、一日、諸臣を召して、

如何にすれば、叡慮を安んじ奉つり、台命を全うするを得べきかを諮る、公用人小森久太郎、進み出で、

『事に臨めば、自から、策略の出づるものに候、左のみ、賢慮を煩はし給ふことかは』

と述べて、慰むれば、容保、色を正して、

『策略は、正道にあらず、唯、至誠を以て、奉公の順序を、講究せんのみ、權宜を以て、一時の通過を計るが如きは、余の最も欲せざるところ、汝等、何事も、至誠に恥ぢざらんやう、心掛くべし』
と戒め、始終一貫、唯、至誠を以て、公武の爲めに、盡さんとす。

一九〇 攝海の防禦

今や、攘夷の氣焰、天下に滔れるの時、意外なる警報、突如として、天外より來る、

『外國の軍艦、大阪に來り集まり、直に、京都に出で、條約の訂結を、迫るべし』

とは、實に、外國新聞紙の掲ぐるところ、彼の地に航する

もの、之れを本邦に報じ來る、閣老板倉周防守勝靜、小笠原圖書頭長行の二人、意見書を、提出して、

『外人の虚喝に驚きて、和議を行ふは、非なりとするも、外來の風説に顧みて、海防を修するは、豪も、其不可なるを見ず、宜しく、速かに、防備を嚴にして、萬一の變に備へ給ふべし』

と上言すれば、將軍家茂、大に驚きて、相當の處置を、施すべき旨を命ず、事は、舊冬十一月二十九日に在り。

攝海の防備を、嚴施すべしとの意見、是れより、俄に、朝野に起る。

一橋中納言慶喜、攝海の警備を、視察し、併せて、攘夷の處置を、幕府に委任せられんことを請はんと欲し、舊臘十五日、急に、江戸を發して、京都に向ふ、大番頭松平因幡守、大目附岡部駿河守、目附澤勘七郎以下、隨行するもの、數百人、水戸の家老武田修理、亦、幕命を以て、此れに従ふ。

小笠原圖書頭長行、亦、慶喜の附添として、其翌十六日、江戸を發す。

朝廷、亦、聞きて、大に驚き、此日、傳奏野宮宰相中將定功をして、攝海防禦の方略を、在京の諸藩に諮詢せしむ。

時に、容保、未だ著京せず、家臣田中土佐、直に、野村左兵衛、河原善左衛門を派して、其形勢を、視察せしむ、二人、京攝の間を、巡見し來りて、

『京都の地勢、山岳、四方を繞りて、障壁の如く、眞個、山城の名に、背かず、八幡、山崎に、關門を設くれば、京都の安全、得て期すべし』

との旨を復命す、既にして、容保、京都に著し、慶喜も、亦、尋で、京師に入る。

長行、兵庫に到りて、攝海を巡見す、容保、之れを聞き、松坂三内、柴太一郎、秋月悌次郎、廣澤富次郎を遣はして、此れに、從行せしむ。

三内等、兵庫に到れば、長行の濱海を巡見するに會ふ、從者、極めて少なく、纔に、一頭の駄馬に、所用の器具を載するのみ、邑吏、諸所に、休憩所を設くれども、長行、敢て入らず、海濱に帷幕を張り、踞して、辨當を喫す、皆、其簡素に驚く、三内、太一郎等、兵庫の旅館に就て、長行

に謁し、攝海防禦の策として、

『京都の守護は、攝海に在り、攝海の守備は、紀淡と、播淡との兩海門に在り、宜しく、其地勢を按じて、堅牢の砲臺を、築造せらるべし、是れ、實に、寡君容保の意見に候』

と述べれば、長行、

『此論、最も可なり、筑前の鶴崎、長州の赤馬ヶ關の如き、亦、警備を嚴にせざるべからざるも、憾むらくは、事業、宏大にして、經費の補給し能はざることを』

と語りて、其事は、緊要なるも、其費の出所なきを嘆ず。

容保、又田中土佐、野村左兵衛に命じて、攝州神崎川、淀川、及び攝海の防禦を、講ぜしむ、二人、太一郎等と共に、詳細に、調査して、復命する所あり、容保の防禦の方略、蓋、此時に定まる。

一九一 關白の更迭

島津三郎久光、久しく、故山に歸臥すれども、其京都に於ける勢力、尙、甚だ大なり、朝廷、曩に、正親町三條大納

言實愛を以て、其意見を徴せらるゝや、久光、

『朝議の大本を立て、庶人の激論に、動搖せらるゝことあるべからず、幕府に對して、行はれがたき事を、強ひらるゝことあるべからず、幕府、之れを奉ぜずんば、朝威、爲めに、失墜し、世論、爲めに、沸騰するに至らん。』

姦人殺害の事、屢々、輦下に行はるゝもの、是れ、根本あるが如し、宜しく、其取締を、嚴にせらるべし、且、京都守護職設置の上は、諸藩の輦をして、歸國せしめらるべし、此輩の輦下に在るは、朝議混亂の源なり』

との旨を以て答ふ、是れ、時弊に的中するの言にして、公武一和の爲めには、最も適切の方策なりとす。

左れども、諸藩の志士は、又しても、久光の爲めに、庶人の激論なりと喝破せられて、不快の念に堪へず、激派の公卿と結んで、其意見を排し、其勢力を壓せんとするの心あり。

激派の公卿は、薩州の公武一和を唱ふるを悦ばず、長州の、一意、鎖港攘夷を説くを以て、此れに信頼し、其勢力を藉

りて、素論を貫徹せんとするの意あり。

長州は、薩州と、兩雄、並び起たざるの勢ひあり、久光の京都守護職を命ぜらるゝを見て、不満、言ふべからず、近衛關白忠熙の、姻戚の關係あるを以て、久光を補助するの觀あるを見ては、勢ひ、久光を悦ばず、延いて、忠熙を悦ばず、機會あらば、此兩者を、排斥せんとするの念あり。

是等の事情、相綜合し來りて、今や、計らずも、朝廷に、一波瀾を捲き起す、激派の首領三條中納言實美、一日、朝議に臨みて、突然、

『松平大膳大夫の官職を進めて、中納言に、任じ給ふべし』

との意見を提出す、是れ、實に、慶親を、久光の上に置き、其勢力を壓し、且、慶親の意見を、實行せんと欲するもの。

此意外なる提議を聞きて、一座、皆、啞然たり、青蓮院宮尊融法親王、二條右大臣齊敬、徳大寺内大臣公純、近衛左大將忠房等は、皆、

『斯かる破格越階の任敍は、輕々しく、行はるべきにあ

らず』

と述べて、之れを排斥せんとす、反対は、激派の初めより、覺悟するところ、實美等、尙、飽までも、反覆主張して、止まず。

當時、激派の議論、往々、關白を壓し、親王、大臣を壓す、正月十七日、朝廷、止むを得ず、慶親の官職一階を進めて、參議に任ぜらる。

關白忠熙、意、頗る平かならず、卒然として、辭表を呈す。二十三日、朝廷、忠熙の辭職を許し、鷹司前右大臣輔熙を以て、關白に任じ、氏の長者となす、忠熙の内覽、故の如し。

是れより、激派、益々勢ひを得、長州、亦、漸く、威を伸べんとす。

一九二 浪士の跋扈(上)

容保の著京以來、銳意、輦下の秩序を保ち、民心の綏撫を圖らんと欲す、諸藩の志士、浪士等、過激の言論を以て、公卿を、入説するを憂ひ、

『是れ、言路の雍塞より生ずるの弊なり、若し、言路を洞開すれば、彼等、進言の道を得て、此弊、自から滅せん』

との意見を懷きて、之れを一橋中納言慶喜に謀る、慶喜、『浪士の言論を、自由ならしむる時は、抗言、反論、益々多くして、其煩擾、堪へざらん、害ありて、益なし』と答へて、聽かず、既にして、天誅の舉、復た起る。

京都の儒醫池内大學、公卿の門に、出入して、聲名あり、戊午の大獄に坐して、追放に處せらる、爾來、大阪に住して、復た、時事を談ぜず、名を退藏と改めて、深く、自ら韜晦す、左れども、志士等、大學の口より、其密事の漏洩すること、多しとして、之れを憎むもの、少からず。

正月二十二日、土州老侯山内容堂、大阪通行の途次、大學を、旅館に、召して、酒食を饗し、閑談、夜半に至る。大學、頓て、輿に乗じて歸る、浪士四人、途に要撃して、其首を刳し、之れを難波橋畔に梟して、

池内大學

從來、高貴の御方々の恩顧を、蒙り乍ら、戊午年の頃は、

正義の士に従ひ、種々、周旋致し居候處、遂に反覆致し、

奸吏に相通じ、諸藩誠忠の士を斃し、苟も、自ら招く罪惡、天地に容る可からず、誅戮を加へ、梟首せしめ候也。

との貼札を掲ぐ、越えて、二十四日、其左右の耳を斷りて、兩個の箱に入れ、之れを京都に携へ來りて、議奏正親町三條大納言實愛、中山大納言忠能の邸に投じ、且、

『戊午以來、千種、岩倉兩卿に同心し、所司代酒井若狹守を輔け、賄賂を貪り、屢々内勅を下すの罪あり、三日間に、現職を退かんずんば、亦、此耳の如くなるべし』との意味の添書を附す、兩卿、見て、大に驚き、二十五日、之れを朝廷に奏す、舉朝、愕然として、色を失ひ、策の出づる所を知らず。

當時、京人の浪士を恐るゝこと、虎狼の如し、朝廷、其暴舉に及ばんことを虞れ、二十七日の夜を以て、終に、兩卿の職を罷め、且、隱居を命ぜらる。

天朝の尊を以てし、浪士の言に、制せらるゝこと、此の如し、浪士たるもの、何ぞ、天誅の名を藉りて、跳梁の威を逞うせざるべき、二十九日の夜には、更に、千種三位有文

の家臣賀川肇を、下立賣町の宅に、襲撃せる一椿事あり。

一九三 浪士の跋扈(下)

賀川肇、豫め、室内に、二重壁を作りて、不虞に備ふ。

二十九日の夜、浪士七八人、突然、門戸を蹴破りて、ばらばらと、躍り入るや、肇、忽ち、ガバと、刎ね起きて、其儘、二重壁の間に、隠れ潜む。

浪士、編く、屋内を搜索すれども、見當らず、寢室の状況を見て、肇の此處に在りしを察し、妾を執へて、其居所を問へども、唯、知らずとのみ答へて、實を告げず。

浪士、大に怒り、妾の衣を剥ぎ取りて、柱に縛り付け、刀を頸に加へて、責問すれども、尙、答へず。

浪士、益々怒り、天井に釣り下げて、百方、拷問を加ふ、妾、殆ど、死に抵れども、尙、頑として、答へず。

浪士、更に、肇の小兒を、提さげ來り、若し、言はずば、此兒を刺し殺さんと、威嚇す。

肇、壁を隔て、之れを聞き、九腸、爲めに、寸斷せんとすること數回、終に、自ら出て來りて、首を授く。

浪士、其頭と、兩手とを、切斷して、携へ去り、壁上に、其罪狀を題す、末尾に、

一、此家の下女共儀は、其節、死を以て、主人の在所を隠し候段、感心の至に候也。

一、小兒、志操ある也。

右一町内入用、一切、相懸け申間敷もの也。

と特書す、能くく、其節に感ぜしものと見ゆ。

二月朔日の夜、浪士七八人、千種三位有文の邸に到りて、片腕に、雜掌宛ての

此手は、國賊賀川の手に御座候、肇儀は、其主人千種殿と、久しく、御奸謀之あり、別て、御親しく候事故、定めて、御慕はしくも、之あるべくと存じて、進上仕候、直に、御届給はる可く候、一昨夜、踏込み詰問、實情承り届け候、且又、少將、衛門兩嬪復位の事、世間、其沙汰之あり、萬一、右様の筋、相立ち候様にては、止むを得ず、屹度、處置仕るべく候、此旨、兩嬪へも、早々、御通じ給はるべく候。

との書面を添へて、差出し、且、

『入道殿に、御傳達あるべし』

と述べ、雜掌、驚きつゝ、其姓名を問へども、告げずして去る。

此夜、岩倉少將具視の邸へも、浪士四五人、入り來り、同じく、肇の片腕と、書面とを贈る。

此夜、又一橋中納言慶喜の旅館前にも、肇の首を、白片木に載せて、恭しく、奉書紙に包み、其上に、小笠原圖書頭長行、岡部駿河守、澤勘七郎宛ての一封書を、載せて、置き去る、其文、左の如し。

今般、攘夷御違奉に、相成候上は、一日も早く、御拒絕に、相成らず候はでは、叶はざる儀に候處、兎角、姑息偷安の御廟議に渡らせられ、畢竟、御違奉は、名のみにて、御内情は、是非、開國通商に、御説得の御手段に、相違之あるまじく、天下、舉て、御疑惑申上居候事に御座候、愈々左様にては、朝命御輕蔑の處、何と申開き成さるべきや、天下有志の者、屹度、御許し申間敷候、願くは、眞實の御違奉に相成り、破攘の期限、早々、御定め成され候はゞ、天下、舉て、御疑惑申上居候事、氷解

に至り候御處置、今日の急務と存じ奉り候、此首、甚だ粗末ながら、攘夷の血祭、御祝の驗迄に、進覽奉り候、各々方より、早々、一橋殿へ、御披露下さる可く候也。堂々たる天下の後見職を視ること、殆ど、三尺の小兒の如し。

翌朝、此首と、此書とを見て、館中の驚愕、大方ならず、武田修理、聞いて、馳せ來り、慶喜に謁して、

『斯かる首級を、獻するものありとも、必ず、御心に掛けさせ給ふべからず』

と慰め、其翌日、更に、清酒を獻じて、

『攘夷決定の時、生首を獲たるこそ、此上なき吉兆に候へ』

と祝すれば、館中の人々、苦笑しつゝも、又其意を安んず。

一九四 言路の洞開

浪士の跋扈、此極に至るも、町奉行部下の與力、同心等、其暴威に恐れて、敢て、逮捕せず、其手先をなせるもの、亦、一身の危きを虞れて、引退するもの、少からず、人心

の不安、更に、前日に倍す。

容保、時に、微恙に罹りて、病牀に在り、浪士の暴行を聞きて、默止すること能はず、二月三日、病牀に、筆を執りて、一篇の建白書を草し、之れを一橋中納言慶喜の許に寄せて、重ねて、言路を洞開し、下情を貫通するの道を、開かんことを主張す。

先きに、有害無益として、反對したる慶喜、今は、全然、此れに同意し、萬端、宜しく取計はれんことを請ふとの旨を、回答し來る。

是に於て、其翌四日、容保、自ら建白書を携へて、近衛邸に到り、前關白忠熙に謁して、之れを呈す、乃ち、

此度、何者か、議奏兩卿、高貴の方々へ、奇怪の所行に及び候段、言語に絶し候次第に御座候、元來、皇國の御爲筋を存じ込み、時勢憤悶に堪へざる所よりの所行には候へ共、輦轂の下をも憚らず、猥に、殺害等の儀を始め、奇怪の所行に及び候ては、勿體なくも、天威にも相響き、人心鎮靜の期、覺束なく、恐れながら、天下の御爲めに、相成らざる儀と、存じ奉つり候、畢竟、上下の

情實、貫通仕らざる故と、甚だ以て、恐入り奉り候間、別紙の通、一統へ相觸れ、言路を開き、下情を通じ、疑惑を生ぜざる様、精々、盡力仕るべくと存じ奉り候、恐れながら、朝廷に在らせられ候ても、名分御正しの此節、匿名の書等、取上げ遊ばせられず、正大公明の御處置を以て、綱紀御張り遊ばされ候様仕り度候、誠恐謹言。と直言し、一方に於ては、言路を洞開せんことを説き、一方に於ては、處士の威嚇に、屈從せざらんことを諫む。忠懇、見て、大に此議を賛し、直に、奏聞せんことを答ふ。容保、更に、洛中洛外に諭告せんと欲して、其手續を、所司代牧野備前守忠恭に命ず、忠恭、

『此の如きの重事は、閣老の命あるにあらざれば、奉ずること能はず』

と答へて、應ぜず、容保、其浪士を、畏怖するの深きを察して、

『此事や、一に余の責任なり、敢て、所司代を煩はすを要せず』

と一笑し、直に、町奉行永井主水正尙志に命じて、

攘夷御一決の此節、御改革仰出され候に付ては、舊弊一新、人心協和候様、之なく候ては、相成らざる儀に候處、近來、輦轂の下、私に殺害等の儀、之あり、畢竟、言路壅塞、諸有司不行届の致す所と、深く恐入り候次第に付、上下の情實、貫通し、皇國の御爲、御不爲に係はり候儀は勿論、内外大小となく、善惡とも、隱匿致し居り候事共、聊か憚りなく、筋々へ、申出づべく候。

但、忌諱を憚り候儀も、之あり候へば、封書にて、直様、差出し申すべく、又自身聞届け候儀も、之あるべく候。

右の通、松平肥後守殿御沙汰に付、御武家、并に町在へ、洩れざる様、相觸れらるべく候。

との旨を諭告して、從來の繁文褥禮を、一掃し、其言はんと欲するものは、自ら、亦、之れを聞かんと欲す。

朝廷、亦、此議を嘉納し、近衛左大將忠房、坊城大納言俊克、飛鳥井中納言雅典、三條中納言實美、野宮宰相中將定功、阿野中將公誠等に、命じて、諸藩の重役を、學習院に召し、

川の橋上に、風呂敷包の一首級を載せて、此れに、左の一封書を添ふ。

唐橋村 惣 助

『近來、無名の投書をなすもの、往々、之れあり、固より、憂國の至情に出づることなるべしと雖も、亦、事體、宜しきを得たるものにあらず、自今以後、必ず、氏名を署して、責任を明かにすべし』

との旨を諭さしむ、是れより後、轟武兵衛、中島永吉、藤本津之助等の志士、時々黒谷の旅館に來りて、容保に、進言するに至る。

當時の慣例、一の訴願にも、町内組合の連署を要し、其文案は、與力同心の添削を受けるにあらざれば、上達するを得ず、訴願の意旨も、或は、枉げられ、或は、妨げられ、未だ之れを呈せずして、先づ、一喝を蒙むること、亦、往々にして、之れあり、是に至りて、士民、皆、之れを便とす。

一九五 浪士の暴舉

容保の言路洞開の諭告を發して後、兩三日、又もや、浪士の暴舉あり。

二月七日、山内容堂の止宿せる河原町土州邸の門前、高瀬

候也。

老公様とは、即ち容堂を指すもの、文體、臣下の手に成るもの、如し。

容堂、資性、卓落不羈にして、小事に拘々たらずと雖も、亦、事體を達觀するの明あり、夙に、攘夷の行ふべからざ

るを察して、専ら、公武の一和を、計らんと欲し、其江戸に在るの日、一橋中納言慶喜、松平前中將春嶽、及び宇和島の老侯伊達宗城等と與に、攘夷の朝議を、繰へさんことを謀る。

土州の志士武市平太、小南五郎右衛門、平井收二郎、土方楠右衛門等、専ら、攘夷の意見を執つて、縉紳公卿の間に、遊説する所あり、攘夷の勅諭も、其發議に基づき、御親兵設置の御沙汰も、其建策に基づく、其一派、容堂の意見を聞きて、其因循姑息を慨し、之れを激せしめんが爲めに、此暴舉に出でたる形跡あり、容堂、氣にも留めず、早、一書を、春嶽に贈りて、

今朝、僕が門下へ、首一つ、獻じ之あり候、酒の肴にもならず、無益の殺生、可憐々々。

との旨を報ず、時に、春嶽來りて、京都に在り。

容保、此事を聞きて、默止すること能はず、此日、風邪を冒して、鷹司關白輔熙の邸に到り、

『浪徒の暴舉、今に至りて、尙、止まず、其天威を恐れず、尊貴を憚からざるもの、其罪、最も輕からずと雖も、

固と、是れ、上下隔絶、情意疏通せざるに由る、今や、遍く、諭告を發して、言路を洞開せるにも拘はらず、尙、兇暴の舉を行ひ、匿名の書を投じて、人心を惑亂するに至りては、容保の職任、之れを默過すること能はず、一、逮捕して、秋毫も、假借せざるべし、公卿堂上の方、假令、是等の事ありと雖も、決して、危惧動搖せられざらんことを望む』

との旨を、極陳す、輔熙、直に、奏聞せしに、靱感、淺からずとの報あり、容保、又町奉行に命じて、當春以來、藩臣浮浪の徒、堂上家へ立入り、正義の士と唱へ、種々、入説致候より、靱慮、貫徹致さる事、往、之れあり、隨て、不心得の者共、横行致し、無事のものを、殘害し、恣まに火を放ち、家屋を毀ち、或は、張紙等致し、町方を騒がし、容易ならざる巧みに及び候聞えも、之れあり、言語道斷の儀に候、然る處、今度は、勿體なくも、宸襟より發し、右等の弊風、御改革遊ばされ、取締方、屹度、仰付られ候、御吟味も之あり候間、一同、安心致すべく候、猶又、今度、靱慮の有難きを知

らず、往々、心得違の者、之れあり、公けに申出も、之れなく、無根の説を立て、人心の迷惑を生じ候儀、甚だ如何に候、若し又、存意之れあらば、忌憚なく、申出づべき旨、兼々、守護職申付けも、之れあり候間、以來、心得違之れなき様致すべき事。

との諭告を發して、只管、人心の慰撫、秩序の回復に力む。

一九六 將軍上洛問題

將軍家茂の上洛せんことは、長州の勸むるところにして、薩州の止むるところ、二藩の意見、今に至りて、尙、渝はず。

抑々將軍の上洛は、朝廷の最も望ませ給へる所にして、和宮御降嫁後は、直に、上洛すべきの御内約あり、然るに、家茂、荏苒、日を経れども、決せず、主上、大に逆鱗あらせ給ひ、公卿、亦、憤激して、止まず。

曩に、大原左衛門督重徳の勅を奉じて、東下するや、將軍の上洛を以て、聖策三事の一に加へられ、幕府の意見、亦、終に上洛に決す。

舊臘、容保の上京するに際し、特に、明春を以て、御上洛あるべく、宜しく、其準備を爲すべしとの命あり、故に、容保の著京後は、近衛關白忠熙に頼りて、將軍の上洛、近きにあることを奏聞し、幕府の爲めに、彌縫する所、少からず。

然るに、今春に入りてより、家茂上洛の期、屢々變じて、定まらず、初めは、二月七日を以て、出發あるべしと言ひ、次で、二十一日となり、更に、二十六日となる。

會々政事總裁職松平前中將春嶽の、正月二十二日、海路、江戸を發して、上洛するとの報あるや、

『總裁職の上京を勸めて、將軍の上洛を止むるは、薩州の意見なり、今や、總裁職上京の報あり、將軍上洛の事、或は、中止とならんも、知るべからず』

との疑ひを懷くものあり、公卿の誹謗、志士の批難、復た、俄に沸騰す。

朝廷、容保に對して、内命する所あり、容保、亦、公武一和の實を擧ぐるには、偏に、將軍上洛の一事に在りとし、正月二十八日、家臣丹羽解勘由、外島機兵衛の二人を、特

使として、江戸に遣はし、書を閣老に贈りて、切に、將軍の上洛を促がす。

容保、意、尙、安んぜず、會々風邪に罹れるを以て、一書を、一橋中納言慶喜に贈りて、將軍の上洛を、促がさんことを勸む、慶喜、此れに對して、

『此儀は、自分よりも、申送るところあり、上洛中止の事は、萬、之れあるべからず』

との意を回答し來る、實にも、將軍上洛の事は、愈々確定し、二月七日、京都所司代、閣老の命を以て、

今度、御上洛の節、下々、難澁に及ばざる様との厚き御趣意に付、大阪、伏見、京都御通行筋、屋敷にて、窓蓋に及ばず、町家、其外、都て、平常の通り相心得、二條、大阪御在留中も、市中商賣等、相休み候に及ばず、御警衛筋の儀は、諸事、平常の通り相心得、御上洛に付て、屋敷々々、町々、立切り、取締がましき儀、致すまじく候。

但、御通行筋、人留等に及ばず、往來人、片寄り、下座致し居り、苦しからず候。

右御書付、江戸より到來候條、洛中洛外へ漏れざる様、早々、相觸るべきもの也。

との布達を發して、従前の如き嚴重の警衛、檢束を廢せる旨を諭す。

將軍上洛の事、既に、確定し、一橋後見職の外に、總裁職松平前中將春嶽の上京あり、尾張前大納言慶勝の上京あり、關西諸侯の入京するもの、亦、續々あり。

京都の政界、俄然として、色めき來り、終に、三志士の活躍となり、十三卿の蹶起となりて、非常の大活劇を、演出し來る。

一九七 攘夷期限問題(上)

獅子と、志士とは、能く咆哮す、諸藩の志士、將軍上洛の事、決定するを聞きて、俄かに、蹶起し、

『將軍の入京に先だちて、攘夷の期限を、決定すべし』と呼號し、頻りに、縉紳公卿の間に、入説する所あり、公卿に於ては、三條中納言實美、諸侯に於ては、毛利宰相慶親、主として、之れを鼓吹し、少壯過激の公卿、此れに和

して、攘夷の氣焰、益々高まり來る。

容保、此形勢を見て、默止せず、野村左兵衛を、實美の邸に、遣はして、

『容保、曩に、横濱、長崎、箱館の三港を存して、他の諸港を鎖し、漸次、企畫の熟するを待つて、攘夷を斷行せんことを、建言せしに、君、之れを贊して、同意なりと申さる、其言、今、尙、耳底に在り、然るに、今や、驟然、其説を變じて、攘夷の期限を定めんことを、主張せらるゝと承はる、是れ、果して、事實に候か』と詰れば、實美、

『余の前日、肥州の建議に、同意せしもの、天下の人心、未だ攘夷を切望せざりしに由るのみ、今や、然らず、天下の人心、皆、滔々として、攘夷の一點に、傾注し來り、其形勢、亦、前日の比にあらず、若し、斷然、攘夷を決定するにあらずんば、民心動搖、天下、忽ち、四分五裂するに至らん、是れ、余が、前日の所志を續へしたる所以なり』

と答へて、攘夷の可行と、不可行とに關せず、唯、民心に

聽從するものなることを明言す、容保と、實美との意見、是れより、背馳するに至る。

當時、志士と、激派の公卿とは、頻りに、遊説勸誘すれども、未だ朝議を動かすを得ず。

中山侍從忠光は、激派中の激派にして、天誅は、其最も好むところ、攘夷期限決定、言路洞開、人材登用の三事を以て、鷹司關白輔熙等に迫れども、容れられず、二月九日の夜、長州の志士久坂義助を訪ひて、

『朝議因循、憤慨に堪へず、余は、之れを振起せん爲め、岩倉、千種兩奸の首を斬つて、關白に呈せんと欲す』

と告ぐ、義助、驚きて、未だ答へず、長州の志士寺島忠三郎、肥後の志士轟武兵衛の二人、座に在り、

『一應、武市に謀り候はん』

と述べて、其期を、紆^{マダ}べんとす、忠光、

『此事、何ぞ、牛平太に謀るの要あらん』

と答へ、袂を拂うて、起たんとす、義助等、其事を誤まらんことを虞れ、

『然らば、我等、斬奸の任に、當り候はん、幸ひに、意

を安んぜよ』

と説きて、約するに、明夜、決行せんことを以てし、時事を痛論して、天明に至る。

十日、武兵衛、及び宮部鼎藏の二人、武市牛平太を訪うて、此事を語る、牛平太、

『岩倉、千種の兩卿は、既に、天譴を蒙りて、其事、既に、落著す、今、私に、天誅を加へんこと、朝廷を無視するに齊し、侍従を諫止するに若かず』

と説き、二人と俱に、義助、忠三郎の兩人を訪うて、之れを止む、義助、

『我等、既に、侍従と約す、丈夫の一言、金鐵の如し、何ぞ、妄に、之れを變ずべきや』

と答へて、肯んぜず、牛平太、

『侍従の兩奸を斬らんと欲するものは、唯、朝議を變ぜんが爲めのみ、其首を欲するものにあらず、苟も、朝議を變ずるの道あらんか、何ぞ、兩奸の首を、誅するを要せん、諸君は、昨夜、既に、死を決せるもの、宜しく、其決死の覺悟を以て、關白の邸に、推參し、飽くまでも、

侍従の意見を、貫徹せんことを、力むべし、朝議を一變せんこと、期しがたきにあらず』

と説けば、義助等、手を拍つて、賛成し、其夜、田中村なる中山家の別邸に到りて、忠光に説く所あり、忠光も、亦、之れを賛す。

是に於て、久坂義助、寺島忠三郎、轟武兵衛の三士、二月十一日の早曉、各々死を決して、鷹司關白輔熙の邸に、躍り入る。

一九八 攘夷期限問題（中）

義助、忠三郎、武兵衛の三士、玄關に突つ立ちつゝ、取次人に向ひて、

『我等、國家の大事に就て、言上すべき儀あり、殿下に、拜謁仕つたりし』

と申入るれば、輔熙の驚き、言ふべからず、所勞と稱して、面會を拒む、三士、イツカナ、聽かず、

『我等、天下の御爲めには、一命をも捧げんと存するもの、殿下に拜謁するまでは、幾日なりとも、此處にて、

待ち受け奉つらん』

と言ひ放つて、玄關に坐わり込む、輔熙、止むを得ずして、引見すれば、三士、一篇の建議書を呈す、其大要、

『第一、攘夷の朝議、一決すと雖も、幕府、之れを決行するの意なし、宜しく、確然、其期限を定めしむべし、

第二、大に言路を洞開し、草莽微賤の者と雖も、自由に、權貴の門に、出入して、進言せしめらるべし、第三、朝廷、國事掛を置かるゝと雖も、其人選、精はしからず、朝議、往々、葛藤を生ずと聞く、宜しく、速かに、之れを改選せらるべし』

と言ふに在り、三士、尙、

『若し、此儀、御採用なくんば、我等、此御場所を、汚がし奉つらん』

と言ひ放つて、イザと言はゞ、自刃すべき氣勢を示す。

輔熙、百方、慰諭すれども、頑然として、動かず、輔熙、益々窘窮し、終に、長州、肥後兩藩の重役を召して、引き渡す。

正親町三條大納言實愛、橋本宰相中將實麗、三條西中納言

季知、豐岡大藏卿隨資、東園中將基敬、滋野井中將實在、正親町少將公董、姉小路少將公知、壬生修理權大夫基修、錦小路少將頼徳、清岡少將長説、四條少將隆調、澤主水正宣嘉の十三卿、亦、三士の事を聞きて、輔熙の邸に、馳せ來り、

『攘夷の朝議、既に、一決すと雖も、幕府因循、未だ何等の處斷を施さず、勅命を輕んずるも、亦、甚だしと謂ふべし、有志の徒、悲憤慷慨、措く能はず、將さに暴發爲す所あらんとし、其機、旦夕に迫ると承はる、速かに、攘夷の期限を定めて、彼等に表示さずんば、終に、天下の一大事をも、釀し候はん、且つや、少將内侍、右衛門内侍は、曩に、永の御暇を賜はりしにも拘はらず、今、尙、百石づゝの扶助を賜はること、甚だ其當を得ず、其仔細を承はらん』

と口々に、詰責して、止まず、輔熙、既に、三士に脅かされ、更に、十三卿に迫られて、周章、策の出づる所を知らず、急に、因州侯池田相模守慶徳を召して、旨を含め、後見職一橋中納言慶喜の旅館に、遣はして、

『速かに、攘夷の期限を定めて、奏聞を遂げられるべし』との旨を通ず、慶喜、寢耳に水の命に驚き、急に、容保、及び山内容堂を、總裁職松平中將春嶽の旅館に招きて、策を議す、容保等、

『此事、重大にして、一二在京有司の決すべきものにあらず、宜しく、將軍家の上洛を待つて、決定すべし』と陳べて、此議に決し、四人、相携へて、關白の邸に到り、輔熙に謁して、答ふるに、此旨を以てす。

輔熙、深く、浪士の暴發せんことを恐れ、只管、其期限を定めんことを促がす、四人、更に、相議して、

『將軍家上洛、諸般の處置を了へて、東歸せる後、初めて、攘夷を決行すべし、故に、強て期限を定めんには、將軍家、江戸歸城の日を以てすべし』

と言ふに決し、此旨を、輔熙に答へて、各々引き取る。十三卿、此答辯を以て、甘んぜず、更に、勅使を以て、嚴命せられんことを主張す、輔熙、止むを得ず、夜を冒して、參内すれば、十三卿も、亦、續いて、參内す、事態は、更に、益々重大となり来る。

一九九 攘夷期限問題（下）

主上、夜中の參内、何事ぞと驚かせ給ひ、急ぎ、輔熙を、召させ給ふ。

輔熙、御前に拜伏して、速かに、攘夷の期限を定むべき旨を、關東に命じ給はんことを、奏上し、且、

『此儀、若し、遅々するに於ては、浮浪の徒、何時、暴發せんも、計るべからず、誠に由々しき一大事に候』

と奏聞すれば、主上、亦、大に驚かせ給ひ、

『若し、此儀を許さずんば、事變、忽ち、目前に起らん、

此上は、餘儀なし』

と思し給ひ、三條中納言實美を以て、勅使となし、橋本宰相實履、野宮宰相中將定功、阿野中將公誠、豐岡大藏卿隨資、滋野井中將實在、正親町少將公董、姉小路少將公知の七人を、副使として、慶喜の旅館に遣はし給ふ。

實美以下の八卿、其夜、直ちに、慶喜の旅館に、臨みて、

『攘夷の廟議、既に、一決すと雖も、幕府因循、敢て奉行せず、急ぎ、總裁、守護の兩職を會し、攘夷の期限を

確定して、奏聞すべしとの内勅なり、違背せらるゝに於ては、罪科、輕からざるべし』

との旨を傳ふ、時に、夜、正に二更。

慶喜、暫時の猶豫を請ひ、急駑を飛ばして、春嶽、容保、容堂の三人を招く。

容保、馳せて、慶喜の旅館に到れば、門前、人衆、群集して、形勢、尋常ならず、容保、直に、奥に入れば、春嶽、容堂、先づ在り、憂色、面に溢る、慶喜、眉を擡めて、勅使來駕の旨を語れば、容保、

『唯、關白殿下に答ふる所を以て、奉答するの外は候はず』

と述べて、此議に決し、四人、打ち揃うて、勅使の前に出づ、慶喜、

『攘夷の期限は、我等の隨意に決すべき事には候はず、然れども、強て、期限を定めんとすれば、將軍家上洛、諸般の要務を決定し、其東歸、江戸に入るの日を以て、決行するの外は候はず』

と答ふれば、實美、

『將軍家歸城の日を以て、期限となすと言ふも、漠然として、其何の日に在るやを知るべからず、何月何日と、明答あるべし』

と迫る、慶喜、

『時日を確定せんことは、後見職、總裁職、守護職等のみにて、計ひ得べきことに候はず、且、將軍家歸城の期は、其上洛して、朝旨を請ひ、諸般の處置、決了の後なるを以て、是又、豫め、時日を確定仕つりがたし、此邊の事情は、篤と、御諒知あらんことを請ふの外なし』と陳ずれば、實美、強ふること能はず、

『然らば、將軍家、在京して、諸事を決了する間を、十日と定め、海路、歸東するまでを、又十日と定め、將軍家上洛より、二十日を期して、攘夷を行はるべし』と述ぶ、慶喜、

『將軍家の在京を、十日と限るも、萬一、其日を延べざるを得ざる事情、出來する時は、欺罔の罪、免かるべからず、此儀、平に、御容赦を請ふ』

と答ふれば、實美、色を正して、

『攘夷の期限を、定めんことは、勅命なり、此れに背かれん所存なるか』

と詰り掛かり、一にも勅命、二にも勅命と稱して、辯解の餘地を與へず、慶喜、止むを得ず、

『然らば、餘儀なし、將軍家上洛後、二十日を以て、攘夷の期限と仕つらん』

との旨を述べれば、實美以下の諸卿、此れに満足して、初めて、退出す、時に、東天、既に白し。

二〇〇 國事掛の更任

抑々攘夷期限の設定、言路の洞開、國事掛の改選は、中山侍從忠光、先づ、之れを唱へて、諸藩の志士、及び激派の公卿、此れに和せるもの。

今や、三事の中、既に、其一に成功す、更に、他の二事にも、亦、成功せざるべからず、其運動、頗る烈し。

曩に、近衛前左大臣忠熙の關白たるや、其姻戚の關係上、多く薩州の意見に、聽從するの傾きあり、故に、世人、呼んで、薩州關白と曰ふ。

鷹司前左大臣輔熙の代つて關白たるに及び、諸藩の志士を引見して、衆議を採ると雖も、就中、最も多く、長州藩士の意見に従ふ、故に、又長州關白の稱あり。

輔熙、既に、長州藩士の意見に従ふ、是れ、長人、及び激派公卿得意の時なるに似たりと雖も、其實は、然らず。

輔熙、資性、溫厚にして、他人の強硬に主張する所は、之れを排斥すること能はず、爲めに、往々、反覆の處置あり。

特に、薩人、亦、近衛前關白忠熙、及び青蓮院宮尊融法親王に依りて、進言する所あり、亦、多く採用せらる。

激派の公卿、及び諸藩の志士等、主として、之れを拒まんが爲めに、言路の洞開を、要請するに至れるなり、左れども、其最も熱望せる所は、此一事よりも、更に、國事掛の改選に在り。

國事掛を設置せんことは、實に、激派公卿の、熾んに、主張する所にして、近衛前關白忠熙、及び議奏、傳奏の兩職に、肉薄して、止まず、終に、舊冬を以て、其設置を見るに至れり。

左れども、其選任せられたるものは、關白、大臣、兩職、

及び故參の公卿にして、壯年有爲の堂上に至りては、僅かに、三條中納言實美、徳大寺中納言實則、姉小路少將公知等二三の人々、其選に入りたるに過ぎず、殆ど、他人の爲めに、席を設けたるの觀なき能はず、激派の公卿、其目的、全く、齟齬して、胸中の不平、禁ずること能はず、終に、

中山侍從忠光の主張となり、十三卿の要請となり、爾來、極力、論争して、止まず。

是に於て、朝廷、二月十八日を以て、國事掛を、更迭せられ、橋本宰相中將實麗、豐岡大藏卿隨資、東久世少將通禧、姉小路少將公知を以て、國事參政に補し、三條西中納言季知、庭田中納言重胤、徳大寺中納言實則、六條宰相中將有容、柳原右衛門督光愛、河鐸少將公述、橋本侍從實梁、萬里小路辨博房、勘解由小路中務少輔資生を以て、國事御用掛となし、正親町三條大納言實愛、滋野井中將實在、正親町少將公董、壬生修理權大夫基修、中山侍從忠光、四條侍從隆訶、錦小路右馬頭頼徳、澤主水正宣嘉を以て、國事掛客人となす、是れより、國事掛は、全く、激派公卿の専有となり、諸藩の志士と、志を合はせて、關白を壓し、朝權

を専らにし、諸事、殆ど、其意の如くならざるはなし、京都の形勢、復た、是れより、變ぜんとす。

二〇一 志士の處分(上)

攘夷の期限、一たび、志士の活動に依りて、決定するや、其跋扈跳梁、益々甚だしく、幕府の因循姑息を罵りて、公然、暴發せんことを口にして、憚からず。

二月十三日の夜、政事總裁職松平前中將春嶽、特に、容保、及び宇和島老侯伊達宗城、土州老侯山内容堂を、其旅館に招きて、志士の處分を議す、一橋中納言慶喜、亦、其議に與かり、

『彼等の暴行、憎むべしと雖も、亦、一片國を憂ふるの至情に出づ、若し、其罪を赦して、其志を賞せば、終に、恩に感じて、行を悛めん』

との意見を述べ、容保、之れを不可とし、
『浪士の跋扈するもの、必ず、由來する所あり、其根本に溯りて、匡濟の道を講ぜず、徒に、其志を賞して、歡心を買はんと欲せば、却て、其輕侮を招かん、若かず、

舊に依りて、之れを包容せんには』

と説きて、反對し、議論、曉に徹して、決せず、十四日、更に、二條城に會して、議す。

慶喜、時に、久坂義助、寺島忠三郎、轟武兵衛の三士、鷹司邸に到りて、關白を脅迫せしことを聞き、其亡狀を憤ること、甚だしく、

『彼等、微賤の軀を以て、殿下を、脅迫するに至りては、其無禮、亦、太甚し、之れを除去するにあらずんば、終に、天下の亂階を生ぜん』

と説き、春嶽、亦、浪士數十人の名を列記したる名簿を示し、

『浪士の氏名を知り得たるもの、此の如し、宜しく、探索して、盡く、捕縛すべし』

と述べ、町奉行を召して、命令せんとす、容保、其名簿を熟視するに、二三の徒を除くの外は、浮浪と目すべからざるもの、亦、少からず、乃ち、又、

『此名簿中には、過激の徒あり、過激ならざる者あり、其過激の徒と目するもの、中にも、罪狀、明確ならざる

もの、亦、之れあり、玉石、俱に焚き、薰蕕、齊しく除かば、恐らくは、戊午の大獄を、再演せんことを、今、姑らく、之れを包容し、根本を治めて、枝葉に及ばんに若かず』

と唱へて、反對すれば、容堂、之を賛成す、左れども、春嶽は、飽までも、捕縛説を執り、容保、亦、固く、前議を主張し、且、

『浪士の處分は、守護職の本分なり、宜しく、我れに、一任せらるべし』

と論じて、動かず、容堂、宗城等、間に居りて、和解し、『昨年来、君父を捨て、故國を辭して、國事に、奔走するものは、説諭を加へて、舊主に歸らしめ、其行くべき所なきものは、幕府に於て、扶助すべし、違ふものは、嚴重に處分せん』

と言ふに決す、是に於て、双方、互に、胸襟を披きて、懇談し、春嶽、先づ、

すめらぎの御稜威は比叡の山嵐

吹きしづむべき鳩の海ばら

との一首を詠ずれば、容保、亦、

おのづから雲は麓に收まりて

朝日のどけき花を見るかな

と口吟む、是れぞ、當日の光景を言ひ顯はせるもの、誠に、風收まり、雲散じて、熙々たる春光に接するの想あり。

IIIII 志士の處分(下)

當時、浪士を嫌厭せるものは、舊に、後見職、總裁職のみならず、公卿中にも、亦、之れを畏怖するもの、少からず、二月十六日、傳奏坊城大納言俊克、野宮宰相中將定功より、容保に對して、

近來輦轂の下をも憚らず、猥りに、切害等の儀を始め、奇怪の所行に及び候ては、天威にも相響き、人心鎮靜の期、覺束なく、天下の爲め、相成らざる儀と存候に付、一同へ、觸れ置かれ候趣に候へ共、今以て、亂妨の所業、相止まざる風聞、頻に、之あり候間、早々、吟味せられ、右様の儀、之れなき様、屹度、取計はるべく候、自然、其許一手に、行届き兼ね候へば、何れの藩へ、仰付けら

れ、然るべき、存付きも、之れあり候はゞ、早々、申出でらるべく候、以上。

との命を傳ふ、容保は、浪士を包容して、漸次に、其處置を施さんと欲するもの、此朝命に接して、憂苦措かず、即夜、鷹司關白輔熙の邸に抵りて、其素志を陳述し、且、

『浪士の處分に關しては、容保、聊か存ずるところ、之れあり、敢て、之れを不問に附するものにあらず、願はくは、便宜の處置に、任されんことを』

との旨を述べれば、輔熙、之れを首肯し、

『余の意と雖も、唯、浪士を鎮撫するに在り、敢て、苛嚴の處置を施さんと欲するものにあらず、此儀、守護職に委任せんこと、敢て、仔細あらず』

と答へ、且、

『一橋、春嶽に謀りて、來られしや』

と問ふ、容保、

『否な、未だ示し候はず』

と答ふれば、輔熙、

『然らば、速かに、公文を改め、單に、鎮撫の事に止む

べし』

と告ぐ、容保、重ねて、

『下文に「其許一手にて、行届き兼ね候へば云々」との文字、之れあり、我が固陋の家臣、之れを聞かば、朝廷、倚頼するに足らずとなし給ふものと、思ひ僻め、爲めに、苦慮するものなしとも存ぜず、此儀、如何候べきか』

と言へば、輔熙、

『雄藩の士風、左もあらん、是れも、除去すべし』

と答へて、盡く、容保の意見に従ふ。

翌十七日、輔熙、内書を、容保に贈りて、一旦、下されたる公文を、變更せんこと、却て、穩當ならずとの意を通じ、且、

『朝廷の主意は、決して、浪士の處分を、嚴重にするの意味にあらず』

との別紙を添ふ、容保、再び、關白の邸に到りて、厚意を謝し、且、

『浪士の鎮撫に關しては、緩急、俱に、守護職に、一任されんことを請ふ』

と述べて、其許諾を得、浪士逮捕の事、終に止む。

容保、是れより、日夜、三隊の藩兵を派して、洛中洛外を、巡邏せしむ、甲士七人、與力七人、足輕五人、小頭一人を以て、一隊とし、組頭、若くは、物頭一人、之れを監し、町奉行の與力、同心、其先導たり、容保、令を下して、

『法度を犯すものは、捕縛すべし、抵抗するものは、便宜、處分すべし』

との旨を命ず、市民、是れより、其堵に安んじて、宵々、復た露店を張り、市街の雜沓、美觀、初めて、舊に復す。

IIIII 尾州家の疎外

容保、常に、幕府の委任重く、且、自家の職責、大なるを思ひて、一意専心、公武の一和を計るの外に、餘念なく、苟くも、朝廷の御爲め、宗家の爲めに、不利なりと思惟することは、何事も、之れを勸告して、敢て憚かる所なし。此頃、一橋中納言慶喜、松平前中將春嶽等、兎角に、尾張前大納言慶勝を、疎外するの形跡あり、慶勝、時に、京都に在れども、重要な國事を處するに方りて、更に、協議を

行はず、慶勝、心に、不平を懷き、尾州藩士、亦、深く憤慨するもの多し。

慶勝は、實に、容保の實兄にして、慶勝の養子となれる茂徳も、亦、容保の實兄なり、容保、我が懿親を庇護するにあらずと雖も、宗家の利害を思ひては、空しく、袖手傍觀すること能はず、家臣秋月悌次郎に、旨を含めて、越前の藩士中江靱負に勸告せしむ、悌次郎、直に、靱負を、越前の藩邸に訪うて、來意を述べ、

『國事多難の今日、外藩と雖も、尙、且、其意見を徵せらるゝに候はずや、然るに、尾州の老公には、何事も、御協議なきは、何故に候ぞ』

と問へば、靱負、眉を顰めつゝ、

『是れには、仔細のある事なり、實は、國事を、尾州家に謀る時は、忽ち、浪士に漏るゝの虞あり、特に、尾州の田宮など來りて、時事を談ずるも、兎角に、事情に適せざること多く、其れ此れの爲め、自然、御協議も、相成らざる次第、此儀を、圓滿に納めんこと、所詮、容易の事には候はず』

と答ふ、悌次郎、

『其は、以ての外なる御考へところ存ずれ、尾州家は、御三家の隨一にして、宗家と、利害の關係、最も深し、宗家の御爲めを存するもの、孰れか、其右に出づるもの候はん、尾州家を、他人視して、幕府の不利を來さざるの道理あるべしとも存ぜず、仄かに承はれば、幕府、近日、尾州家を、疎外せらるゝが爲めに、一藩、自から、不滿の狀ありとも、風評仕つる、假令、六十萬石の浪士を生ぜざるとも、若し、尾州家單獨の意見を發表して、周旋する所あらば、幕府は、如何にして、之れを制馭せらるゝ、御所存に候ぞ、國事、多難にして、民心、亦、動搖するの今日、外藩と雖も、尙、之れを懷けざるの時なるに、親藩を疎外して、不平の心を懷かしめ、所謂、自ら汝が萬里の長城を破るが如きは、決して、幕府の御爲めなりとも存ぜず、此邊の御所存、如何に候ぞ』

と詰れば、靱負、
『如何にも、御道理とこそ存ずれ、我れ、誓うて、盡力候はん』

と答ふ、梯次郎、尙、呉れくも、宗家の爲めに、盡力あらんことを説きて、辭し去り、水戸家の老臣武田修理を訪うて、此事を語れば、修理、亦、

『實にも、近頃、密事を隠さるゝの傾向あれば、昨夜も、一橋公に謁して、陳辯し置けり、今一應、意見書を提出しては、如何』

と語り、二人、相謀りて、一篇の意見書を、慶喜に呈す。時事、日に非にして、幕府を思ふもの、少なし、容保、獨り陰になり、日向になりて、心を盡す。

二〇四 公卿の忌憚

容保の守護職として、京都に在るは、激派の公卿、及び諸藩の浪士に取りては、實に、眼上の瘤なり、如何にもして、之を除かんことは、實に、其苦心慘澹として、經營せるところ。

會々裏辻侍従公愛、浪徒等の頭目たるべき舉動ありて、朝廷の爲に、譴責せらる、浪士等の不平、言ふべからず、二月十七日の夜、二十人ばかり、打揃うて、傳奏野宮宰相中

將定功の邸に、押し寄せ、口々に、

『我等は、浪士に候、所用ありて、推參仕つる、中將殿に、拜謁仕つりたし』

と述べ、取次の人、入つて申せば、定功、大に怖れ、

『何事の在りて、在せられしぞ、其由、御申し候へ』

と答へしめて、敢て、面せず、浪士の面々、

『我等は、重大の事件あるに依りて、推參仕つれるもの、拜謁の上、直々、言上仕つらん』

と述べて、切に、面謁を請ふ、定功、止むを得ずして、延見すれば、總代として、只、三人のみ、入り來り、其餘は、皆、玄關の外に於て待つ。

三人の總代、定功の前に出で、三ヶ條の建議を陳ぶ、

『我等、今日、推參仕つれるもの、餘の儀に非ず、是非に、朝廷に願ひ奉つらんと欲すること、三ヶ條あり、將軍の上洛、近きに在り、其著京するを待つて、名分を正すこと、是れ第一、將軍の上洛は、千載の好機なり、此時に際して、政權を復せしめられんこと、是れ第二、裏辻侍従は、正義の稱あり、其職を復せられんこと、是れ

第三に候、宜しく、此場に於て、可否を確答せらるべし』と迫る、定功、

『此事、余の一存を以て、採否を決すべきにあらず、他日、朝議を決して、返答すべし』

と答ふれば、三人、

『然らば、何日、御返答あるべきや』

と詰る、定功、

『其日時は、只今、確答すべからず、其事、決定せば、我れより、通知せん、其居所を告げよ』

と言へば、固より、一定の居所なき浪士共、

『然らば、何れ、重ねて、參上仕つらん、其時、御返答を承はらん』

と述べ、居所を告げずして去る、此間、玄關前に待てるもの、刀を抜きて、庭樹を斫るなど、頻りに、示威を事とす。此夜、四條侍従隆謨の邸に至りても、亦、同様の事を陳ず。公卿、是れより、戒心あり、十九日、傳奏、書を容保の許に贈り、兵を出だして、學習院を警衛せんことを求む、其主旨、

『學習院を開きて、草莽微賤の者と雖も、進言獻策する

ことを許せるを以て、或は、狂暴の徒、來院するやも、亦、計るべからず、宜しく、藩兵を出だして、警衛あるべし』

と言ふに在り、容保、異議なく、之れを諾す、近衛前關白忠熙、密に、書を容保に贈りて、

『今度、會津の藩兵を以て、學習院を、警衛せしむるもの、容易ならざる陰謀あり、中山侍従忠光等、若し、會津兵をして、學習院を警衛せしめなば、必ず、諸浪士を壓抑し、或は、其言論を、抑制せん、其實跡を擧げて、其罪を正し、因りて、守護職を罷免せんと、企圖せるもの、如し、宜しく、深く注意せらるべし』

と警告し來る、容保の、激派の公卿、及び諸藩の浪士等の爲めに、忌憚せらるること、實に、意料の外に在り。

二〇五 將軍待遇問題(上)

久しく、決せんとして、決せざりし將軍家茂上洛の期は、愈々二月二十一日を以て、海路、出發するに決す。

朝廷、特に、其滞京の期を限るに、十日を以てし給ふ、滞
在の期、一日を長うすれば、攘夷の期、一日を緩うするに
由る、是れぞ、激派公卿の謀れるところ。

是に於て、二月十六日、一橋中納言慶喜、松平前中將春嶽
の二人、容保、及び山内容堂との連署を以て、

『二月二十一日、大樹公出帆、海上の往返、滞りなきに
於ては、四月中旬の内、攘夷の期限と、相成り申すべく、
尤も、歸著より、二十日、御猶豫あらんことを請ふ』

との書面を呈す、攘夷の期限、兎も、角も、決定すれば、
其翌十七日、朝廷、盡く、堂上を召して、其趣を公示し、
續いて十八日、慶喜、容保、及び尾張前大納言慶勝、尾張
攝津守茂徳、筑前侯黒田美濃守齊博、肥後侯細川右京大夫
慶順、松江侯松平出羽守定安、米澤侯上杉彈正大弼齊憲等、
在京二十一藩の諸侯、世子を、小御所に召して、謁を賜は
り、鷹司關白輔熙、及び傳奏より、教旨を傳へて、攘夷の
御趣意を示し、併せて、各目の意見を、建白せしめ給ふ。
既にして、將軍の旅程、又變更せられ、二月二十一日、陸
路、出發すべしとの報あり、容保、乃ち慶喜、春嶽と與に、

鷹司關白輔熙、近衛前關白忠熙、中川宮に就て、此旨を奏
し、且、

『大樹公、上洛参内の日、戊午以來の失政の責を引き、
官位一等を、降し給はんことを、奏し奉つるべし、朝廷
も、亦、舊の如く、萬機を委任あらせ給ふべし』

と稟請すれば、主上、御嘉納あらせ給ひ、且、官位降下の
事は、其儀に及ばずとの恩詔を降し給ふ。

事あれかしと待ち構へ居たる激派の公卿、之れを聞きて、
遺憾に堪へず、百方、協議を凝らして、

『此上は、大樹上洛参内の日、舊來の待遇を一變し、現
官位の等級に應じて、接待すべし』

と決定し、傳奏坊城大納言俊克を以て、其旨を慶喜に傳ふ。
抑々將軍家の主職は、言ふまでもなく、征夷大將軍にして、
其太政大臣たり、内大臣たるが爲めに、其職權に、輕重の
別あることなし、往時、將軍秀忠、家光の上洛するや、朝
廷、特に、關白の上席に置きて、優遇の實を示させ給ふ。
今回、將軍家茂の参内するに當り、此先例に依らるゝ時は、
無論、鷹司關白輔熙、近衛前關白忠熙の上位に坐すべし。

若し、現官位の等級に由らんか、其官は、内大臣兼右大將
にして、兩關白は勿論、二條右大臣齊敬、一條右大臣忠香
の下位に、坐せざるべからず。

將軍の威嚴を下し、關東の權力を殺がんには、此れに過ぎ
たる問題なし、是れぞ、激派公卿の、此問題を提さげて、
幕府に肉薄せんと欲するもの。

慶喜は、傳奏よりの通知に接して、驚駭、言はん方なし、
直に、春嶽、容保、及び山内容堂を招きて、其意見を問ひ
しに、左しもの春嶽も、忽ち、佛然として、色を作し、終
に、一波瀾を捲き起さんとするに至る。

二〇六 將軍待遇問題 (下)

幕府の勅使待遇の法を改めしは、固と、尊奉の大義に出づ、
朝廷の將軍待遇の式を改めんとするは、何の趣意、何の精
神に基づくべきか、唯、幕府を壓せんが爲め、將軍を辱か
しめんが爲めなりと言ふの外、他に、理由ありとしも覺え
ず、事、此に至りては、公武一和の實、果して、何處に在
るべきや。

春嶽の總裁職を奉じてより、日夜、苦心せしところ、今や、
盡く、水泡に歸し去らんとす、春嶽の不快、言ふべからず、
『將軍家失政の責を引き、官位降等の儀を、内願せさ
せ給へども、主上、敢て、許させ給はず、今に及んで、
更に、將軍待遇の式を改めんとせらるゝもの、固より、
主上の御思召なりとも、存じ奉つらず、左れども、事、
此に及びては、何の術か、公武一和の實を擧ぐるを得ん、
將軍家上洛せらるゝとも、今は、其甲斐あるべしとも存
ぜず、若かず、中途より、大禍を、江戸に遺し給はんに
は、臣として、争かて、君の辱かしめらるゝを見るに忍
ぶべきや』

と論じて、言辭、常にもなく、激越に渉る、左れども、將
軍家、若し、中途より、江戸に歸らば、公武一和の道は、
忽ちに斷えん、山内容堂、それと聞くより、大に驚き、
『越前殿の御論、一應、御道理とこそは存ずれ、大樹公
の中途より、江戸に引還へし給はんこと、餘りに、早計
には候まじきか、先づ、以て、舊典に復し給はんやう、
朝廷に奏請せんこそ、穩當に候へ、此儀、納れられずん

ば、今日限り、手を引くの外は候はず』

と論じて、其再考を促がす、左れども、春嶽、固く執つて、肯かず、容堂も、亦、一步も譲らず、兩々、相争うて、議論、殆ど破裂せんとす、容保、其間に立ちて、百方、調停を試み、

『朝廷、將軍家待遇の式を、改めんとするに決せしと言ふと雖も、其復舊を請ひ奉つるべき餘地、尙、之れあり、今一應、奏請し奉つて、言、若し聽かれずんば、其時、兎も、角も、致し候はん、越前殿にも、先づ、其れまでは、御忍び候へ』

と説きて、春嶽を和め、俱に、中川宮に詣りて、懇請するところあり、宮、

『申さるゝところ、固より、道理なり、去りながら、朝廷の事は、余、一己の力に及ばざるものあり、宜しく、兩關白に請ふところあるべし』

と宣はせ給ふ、二人、直に、近衛前關白忠熙、鷹司關白輔熙の兩卿に謁して、

『將軍家失政の責を引きて、官位降下を請ひ奉つりしと

雖も、天恩優渥、敢て、此儀を許させ給はず、願はくは、

此御趣意を擴めて、將軍家上洛の日、其待遇の式をも、復舊し、且、萬機御委任の實をも、明示し給はんことを、左なくば、幕威、地に墜ちて、諸侯を統馭すること能はず、天下、終に、四分五裂するに至り候はん、是れ、由しき國家の一大事に候べし』

と陳情すれば、兩關白、之れを然りとして、其議、終に止む。

左しも、重大なりし將軍待遇問題、漸く、決著して、ホツと、息を吐く間もあらず、又も、一事件の遽然として、突發するあり、天下、多事又多事。

二〇七 木像梟首事件(一)

將軍上洛の期、愈々近づきて、志士浪士の活動、愈々加はり來れり、市民、今に、何事か起らんと思ひ居たるに、果然、一椿事は、湧き來れり。

二月二十三日の夜、三條橋下に、梟木を建て、其上に、木像三個の首を梟し、其下には「初代等持院殿尊氏」二

代寶篋院殿義詮」「三代鹿苑院殿義滿」と署せる木牌を掛け、尙、其傍に、

逆賊 足利 尊氏

同 義詮

同 義滿

名分を正すの今日に當り、鎌倉以來の逆臣、一々、吟味を遂げ、誅戮すべきの處、此三賊、巨魁たるに依りて、先づ、醜像へ、天誅を加ふる者也。

と認めし板札を建つるものあり、天、明けて、行人、群がり立ち、

『這是、等持院に在る足利三代の木像なるか、如何に、天誅流行の世の中なりとは言へ、木像にまで、天誅を加ふるとは、聊か風變りなり、必定、仔細あらん』

と訝かりつゝ、其處此處を、見廻はせば、三條橋詰の制札場に、

逆賊 足利 十五代

此者共の惡逆は、既に、先哲の辯駁する所、萬人の能く知る所にして、今更、申すに及ばずと雖も、此度、此影

像共を、斬戮せしむるに付ては、贅言ながら、聊か罪狀

を示すべし、抑々此大皇國の大道たるや、忠義の二字を

以て、其大本とするは、神代以來の御風習なるを、賊魁

鎌倉頼朝、世に出で、朝廷を惱まし奉りて、不臣の手始

を致し、尋で、北條、足利に至りては、其罪惡、實に、

天地に容る可からず、神人共に、誅する所なり、然りと

雖も、當時、天下錯亂、名分紛擾の世、朝廷、御微力に

して、其罪を正し給ふ事能はず、遺憾、豈悲泣せざる可

けんや、今、彼の遺物を、見るに至りても、眞に、奮激

に堪へず、我々、不敏なりと雖も、五百年前の世に出で

たらんには、生首引拔かんのをと、握拳切齒、片時も、

止む事能はず、遂に、不臣の奴原の罪科を正すべきの機

會也、故に、我々、申合せ、先づ、其巨魁の大罪を罰し、

大義名分を明さんが爲め、昨夜、等持院に在る處の尊氏

始め、其子孫の奴原の醜像を取出し、是を梟首し、首を

刎ね、聊か舊來の蓄憤を散ずる者也。

亥二月二十三日

大將軍織田公に至り、右の賊統斷滅し、些は、愉快と云

ふべし、然るに、夫より、爾來今世に至り、此奸賊に超過し候者あり、其黨、許多にして、其罪惡、足利氏の右に出づ、若し、夫等の輩、直に舊惡を悔い、忠節を抽で、鎌倉以來の惡弊を掃除し、朝廷を輔佐し奉り、古昔に復し、積惡を償ふの處置なくんば、滿天下の有志、追々、大舉して、罪科を糾す可き者也。

右は三日の間、晒し置く者也、若し、捨て候者は、屹度、罪科に行ふべきもの也。

との一書を、貼り付けあり、是れぞ、足利氏を以て、幕府に擬し、尊氏以下三代を以て、將軍に比するもの、將軍にして、倭むる所なくんば、當に、此の如くになすべしとの意味、躍々として、文字の上に顯はる。



氏尊

『奇想、奇想、好』

くこそ、想ひ付きけれ』
志士、浪士の來り觀るもの、皆、手を拍つて、快哉を叫ぶ。抑、何者か、之れを企て、何者か、之れを爲せる、此事、容保の耳に入ると齊しく、忽ち、一大問題となりて、京都の天地を、震駭せしめんとす。

二〇八 木像梟首事件(二)

抑、足利三代の木像を、梟首せしは、何者なるぞ。

容保、浪士を包容して、秩序を回復せんと、苦慮せる折柄、又も此事あり、爾かも、幕府を呪ひ、將軍を脅かさんとすること、此の如きに至りては、斷じて、寛假すること能はず、此上は、其犯人を物色して、處罰せんと、決意せしも、未だ其手掛りを得ず。

二十五日、容保の家臣大庭恭平、黒谷に來りて、容保に謁し、

『某、此度、大罪を犯し候ひぬ、願はくば、誅罰に伏し候はん』

と述べて、其場に平伏す、容保、



義詮

『シテ、大罪とは』
と問へば、恭平、

『今は、何をか包み候はん、足利將軍の木首を、梟せしものは、某の相識れる面々にして、某も、亦、實に、其一人に候』

と答ふ、容保、心に驚きつゝも、

『然らば、先づ、其仔細を申せ』

と糾せば、恭平、具に、其實を供述す。抑、恭平は、京都に來りてより、常に諸國浮浪の徒と、交は



義滿

りて、其動靜を探る。

江戸の人、諸岡節齋、伊豫の人三輪田綱一郎、下總の人宮和田勇太郎、青柳健之助、信濃の人高松趙之助、因州の人仙石佐多男、石川一、陸奥の人長澤眞古登等、平田篤胤の門人と稱して、最も、過激の説を唱ふ。

常陸の人建部健一郎、信濃の人角田由三郎、備前の人野呂久左衛門、岡元太郎、阿波の人中島永吉、丹後の人小室利喜藏、京都の人長尾郁三郎、江州の人西川善六等、此れと交游して、議論を上下す。

恭平は、悲歌慷慨の士、此れと交りを訂して、最も、信服する所となる。

二十一日、眞古登、何心なく、趙之助の許を訪へば、今しも、筆を執つて、何事かを認めつゝあり、眞古登、

『何を認めらるゝぞ』

と問へば、趙之助、聲を潜めつゝ、

『君臣の大義を正し、天下の名分を明かにせんことは我等同志の、最も、主張する所にあらずや、我等は、其手段として、足利三代の首を、梟せんと存じ立ちたる』

なり、抑々尊氏、義詮の非義は、言はずもがな、義満に至つては、朝廷の諡號を受け、或は、太上天皇と僭稱す、其不臣も、亦、極まらずや、衣笠村の等持院は、義詮の創立にして、足利氏十三代の木像を、安置せること、君も知る所ならん、我れ、尊氏以下三代の首を抜き、梟木に掛け、平素の論旨を、表白して、大に大義名分を正さんと存じ、只今、漸く、草案を認め了る所なり、これ見られよ』

と言ひつゝ、其草案を、出だし示す、眞古登、一讀して、『愉快、愉快、眞に天下の大快事なり、我輩、奮つて、賛成すべし』

と述べて、直に、之れを賛し、且、

『我等も、大に同志を募らん、此草案を貸し給へ』

と請ひ、草案を借り受けて、歸宿せる所へ、一客、忽ち、意氣軒昂として、

『長澤、在宅か』

と大呼しつゝ、入り来る、是れぞ、餘人にあらぬ恭平其人。眞古登は、待ち設けたるところ、直に迎へ入れて、趙之助

の密計を告ぐれば、恭平、今更、躊躇すること能はず。『快舉、快舉、誰れか、賛成せざらん、宜しく、速かに遣つ付くべし』

と勇んで、贊助し、且、

『去りながら、此草案は、文意、餘りに、激烈に過ぐ、寧ろ、改作せんこそ、好けれ』

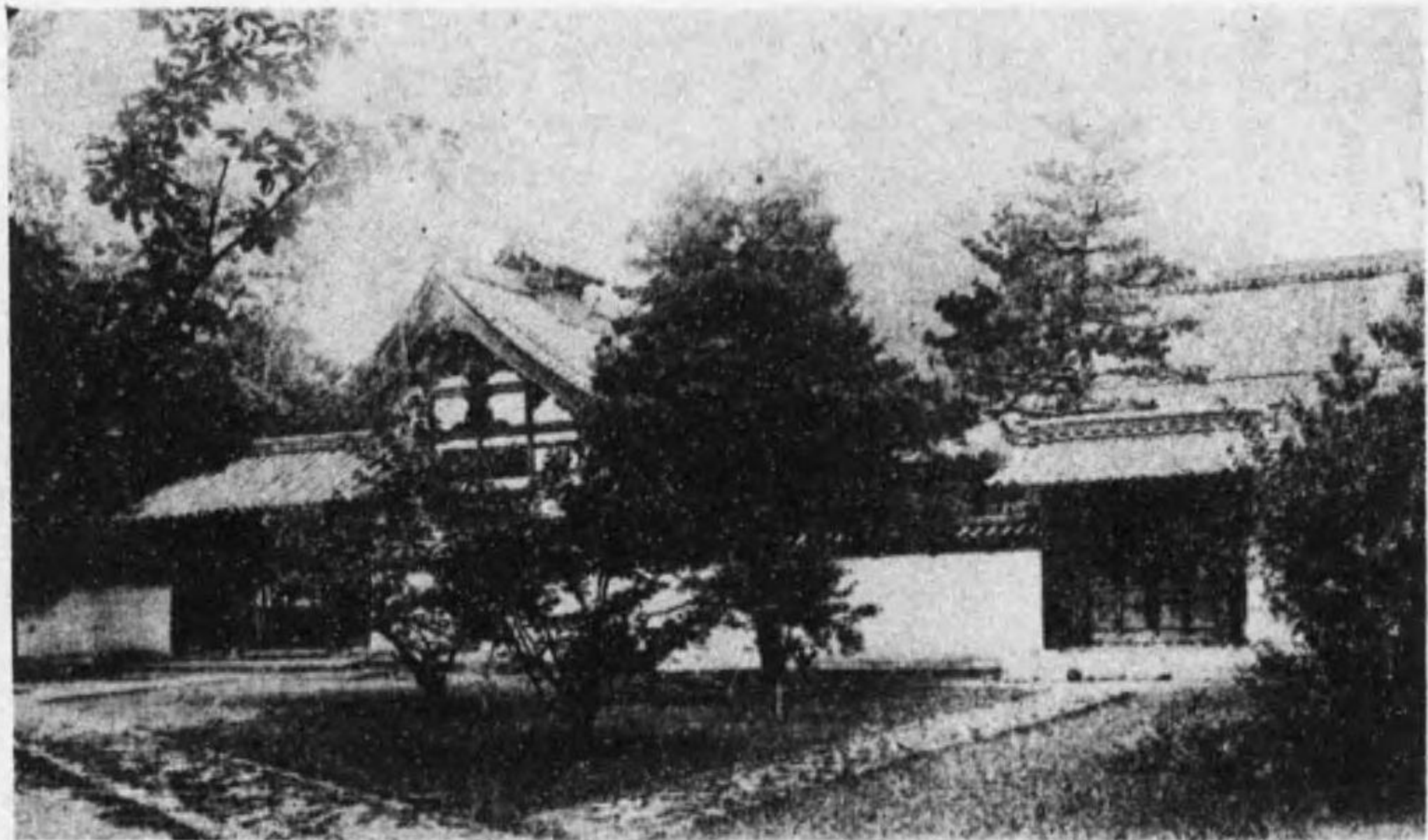
と言へば、眞古登も、此れに同意し、俱に、同志を募らんことを約す。

二十三日、恭平、別に、建札の草案を認めて、角田由三郎と與に、野呂久左衛門を訪へば、岡元太郎、中島永吉、西川善六の三人、先づ在り、恭平、木像梟首の計畫を語り、且、

『高松の草案は、餘りに、過激なれば、試みに、改作せり、此方を建てんこそ、然るべけれ』

と言へば、衆、之れを賛して、此日、直に斷行するに決す。是に於て、恭平、由三郎は、綱一郎を誘ひ、趙之助は、節齋、健之助、佐多男を誘ひ、郁三郎は、利喜藏を誘ひて、久左衛門、元太郎、永吉、善六等と與に、葛野郡衣笠村の

等持院
等持院は京都市上京區等持院町に在り足利尊氏の開基にして寺中に其墓及び足利將軍異代の木像あり



等持院に到り、本堂に入りて、尊氏、義詮、義満の木首を、引き抜き、其木牌を取りて、門外に立ち出で、

『大逆無道の

賊臣足利三代の首を、抜き

取つたり』

と大呼しつゝ、久左衛門方に、引き上ぐ、江戸の人山田總夫も、亦、來りて、俱に、梟架、及び建札を作り、夜

陰に乗じて、三條河原に到り、小石を集めて、之れを建て、建札には、恭平草する所の文を認む。

趙之助は、獨り三條橋詰の制札場に到り、亦、其草せる文を、張り付けて、引き上ぐ。

木像梟首の事實、右の如し、恭平、審かに、自白すれば、容保、默然として、沈思すること暫し、頓て、

『汝の罪は、今日、直に糺すべからず、暫く、汝の所爲に任すべし』

と告げて、密かに、一封の金を與ふれば、恭平、其意を察し、感泣して退く。

恭平、馳せて、同志の許に到れば、今しも、膝を接して、何事かを議するところ、恭平を見るより、

『如何にして、歸り來られしぞ、君の黒谷に入りし儘、久しく、出でざれば、若しやと思ひて、何れも、心痛せる所なり』

と語れば、恭平、

『如何にも、彼の事、愈々露顯したれば、早々、藩藉を脱して、遁げ來りしなり、此儘、此地に居るは、危険な

り、何處にか、身を隠さんに若かず』と告ぐ、衆、皆、憂色あり、

『我等も、會津侯は、非常の立腹なりと聞き、因州、長州等に頼みて、罪を赦されんことを請はんと、協議せる所なり、兎に角、君の無事に、歸り來りしは、何よりの幸ひなり』

と告げて、其無事を、祝し合ふ。

是れより、衆、皆、互に來往して、密に、後事を議す、恭平、亦、此れに與かり、時々、其動靜を、黒谷に報ず。

然れども、恭平、固より、苟免の心なし、其自ら期する所は、衆と與に、死せんと欲するに在り。

二〇九 木像梟首事件 (三)

初めは、處女の如く、終りは、脱兎の如く、今まで、浪士の包容を主とせる容保、是に至つて、忽ち、斷乎たる處置を、執らんと欲し、一橋中納言慶喜、松平前中將春嶽等にも謀らず、二十五日、俄かに、町奉行の吏員を召して、

『抑、足利尊氏等の行爲は、世に、議論多しと雖も、苟

くも、朝廷の顯職を辱うして、天下の政權を執る、其功、亦、少なしと謂ふべからず、彼等、跋扈跳梁、敢て、死

屍を鞭うつが如きの所業をなせるのみならず、斯かる尊貴を辱かしむるは、即ち朝廷を辱かしむるに同じく、其罪、決して、恕すべからず、若し、之れを寛假せば、國家の典刑、何を以て、立つべきや、疾く、捕縛すべし』

との命令を下して、其氏名をも示す。

浮浪の徒、幕府の寛容に乗じて、此舉動に及びしと雖も、容保の大に憤懣せる由を、聞くに及んで、何れも、大に狼狽し、百万、之れを防止せんと欲して、復た從容、刑に就かんとするものあらず。

連累者の一人中島永吉、相識れる町奉行の與力平塚飄齋に對して、

『守護職は、木首を抜くものを、捕縛せんとするの意ありと聞く、左れども、其黨與四五百人の多きに及びて、其勢力、亦、侮るべからず、若し、一人を逮捕せば、全黨、盡く、蜂起すべく、守護職の力を以てするも、亦、

情を告ぐ、尙志、浪士の恫喝なりとも知らねば、忽ち、眉を蹙めて、

『其は、捨て置きがたし、何とか、工風せん』

と答へ、直に、使を黒谷に馳せて、

『今夜の捕縛は、御猶豫あるべし、明朝參館、委曲、申述べ候はん』

と請へば、容保、兎も、角も、之れを許す。

飄齋、又此事を伊勢の志士世古格太郎に語れば、是れも、亦、大に驚き、直に馳せて、三條中納言實美に告ぐ。

實美は、諸藩の志士、浪士と、氣脈を通ずるもの、之れを聞きて、憂慮措かず、格太郎を、黒谷に遣はして、

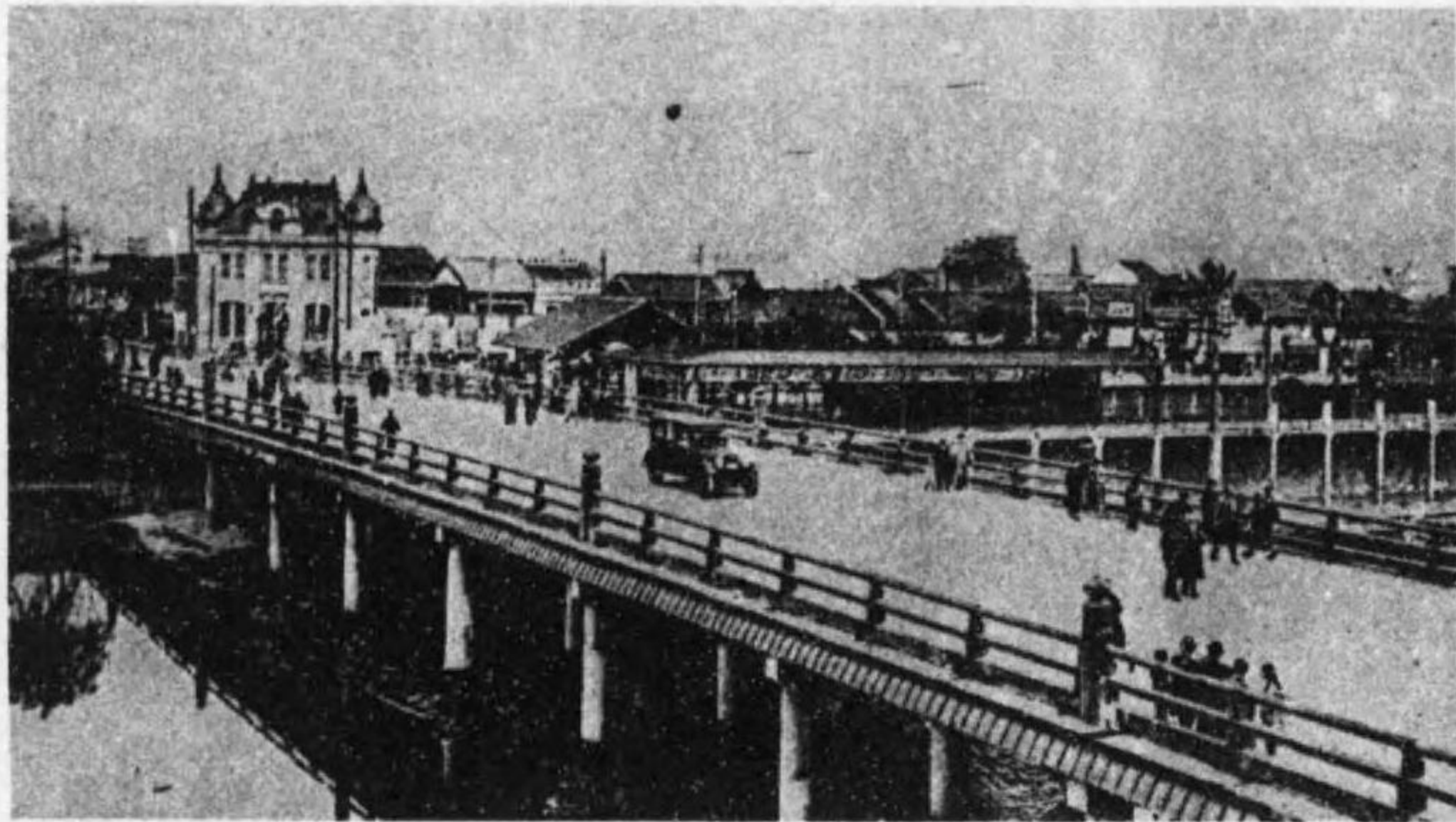
『守護職に於て、木首を抜くものを、捕縛せんとせらるるは、當然なり、左れども、其黨與、頗る多しと聞けば、或は、意外の騷擾を、惹起さんも、知るべからず、御注意ありて、然るべし』

と告げて、中止せしめんとす、容保、溫厚、婦人に似たりと雖も、一たび、意を決すれば、水火も、尙、且、辭せず、『我れは、唯、暴惡の所爲を罰して、國家の典刑を正さ

之れを鎮壓せんこと、難からん、平生の御懇意に任せて、

三條大橋

京都市三條通の賀茂川に架す足利三代の木像の首を梟せしは此橋畔なり



内々、御注意申すなり』

と告げて、威嚇すれば、飄齋、大に驚き、直に、町奉行永井主水正尙志の許に到り、

『木首を抜くものを、逮捕するは、藪をついて、蛇を出だすに異ならず、斷然、見合はせ給はんこそ、然るべけれ』

と述べて、具さに、永吉より聞ける事

んと存ずるのみ、浮浪の徒、幾千人ありとも、更に、顧みる所なし、萬一、不穩の振舞あらば、容保、斷じて、鎮定すべし、幸ひに、貴意を勞せらるゝこと勿れ』と答へて、之れを拒む、斷乎たる意氣、抜くべくも見えず。實美、聞いて、益々憂ひ、志士、聞いて、益々震駭す。

二一〇 木像梟首事件(四)

二十六日、町奉行永井主水正尙志、黒谷に來りて、容保に面し、

『浪士捕縛の事は、輕々に、著手すべきに候はず、假令、彼等十四五人を捕ふるも、尙、二三百人の徒黨あり、萬一、蜂起すれば、一大事に候はん、一橋殿、越前殿に、御相談の上ならでは、假令、嚴譴を蒙むるとも、仰せに従ひがたし』

との旨を述ぶ、容保、其浪士を恐るゝの深きを察し、

『好し、然らば、一應、協議を遂げん』

と答へて、直に、一橋中納言慶喜、松平前中將春嶽の二人に謀る、二人は、初めより、浪士の跋扈を憎めるもの、

『此儀、最も然るべし』と述べて、其逮捕の議を贊す、尙志、今は、命を奉ずるの外なし。

容保、與力、同心の浪士を怖れて、事を誤まらんことを虞れ、犯人一人毎に、上士二人、下士二人、卒三人づゝを派して、之れを援けしむ、小池繁次郎、白井新次郎の二人、監督の命を受け、公用人河原善左衛門、大野英馬、松坂三内、柴太一郎、廣澤富次郎の五人、先導の任に當る。

浪士の居所は、祇園新地、満足稻荷、二條衣の棚、室町の四ヶ所に在り、因りて、各々其部所を定め、此日の夜半を期して、各所、一齊に、逮捕せんとし、其居所を秘して、時刻の來るを待つ。

此夜、浪士の一人長澤眞古登、密に、黒谷に來りて、其動靜を探る、金戒光明寺の境内、閑然として、聲なく、唯、松嶺の寂寞を破るあるのみ、眞古登、

『此容子にては、所詮、捕縛に向ふ事はなからん』

と思ひて、大に意を安んじ、直に宿所に歸りて、同志に報ず、何ぞ知らん、捕手、既に、其跡を尾せんとは。

時刻、既に來れば、各隊の捕手、順次、黒谷を發す、容保、自ら出で、之れを犒ふ。

祇園新地向へるものは、妓樓奈良屋に、闖入して、難なく、三輪田綱一郎、建部健一郎、宮和田勇太郎、長澤眞古登、大庭恭平の五人を捕ふ。

満足稻荷に向へるものは、其祠前の野呂久左衛門方に到りて、久左衛門、及び岡元太郎を索めしも、獲ず、直に去つて、二條衣の棚に向ひ、三輪田綱一郎の宿所に、押入りて、師岡節齋、高松趙之助、青柳健之助の三人を捕ふ、仙石佐多男は、捕手の向へるを知つて、逸早く、屠腹す。

室町に向へるものは、長尾郁三郎方に、到りて、之れを捕ふ、中島永吉は、何れにか潛みて、獲ず、後、久左衛門と、西川善六とを、江州に捕ふ。

既にして、天、ほのくと明く、乃ち浪士を駕籠に乗せて、黒谷に、連れ還る。

尙志、黒谷に在り、浪士を受取りて、町奉行所に歸らんとす、會々諸浪士、之れを途中に要して、奪はんとするとの説あり、容保、乃ち物頭安藤九左衛門、高橋權太輔の二人

に命じ、部下の歩卒を率ゐて、護衛せしむ。恭平は、固く、一死を分とす、發するに臨みて、紙筆を乞ひ、

心なき野邊の花さへあはれなり

今年かぎりの春と思へば

との和歌、及び五言絶句一首を賦して、其懷を述ぶ。

黒谷より、町奉行所に到るの間、觀者、齎集して、立錫の餘地なし、京中、是が爲めに、肅然たり。

長州の志士久坂義助、諸浪士を、其藩邸に置いて、庇護せんとす、未だ告ぐるに及ばずして、早くも、逮捕せらる、義助、深く、其後れたるを悔ゆ。

二二一 木像梟首事件(五)

容保、既に、浪士の捕縛を行ふ、固より、其旨趣を明かにせざるべからず、乃ち其翌二十七日、傳奏に就て、一篇の奏聞書を呈す、其大要、

『此頃、言を尊王の大義に託し、足利三將軍の木首を梟せるもの、之れあり、其兇暴の所行、墓を發き、尸を鞭

うつに等し、抑々尊氏は、贈従一位太政大臣、義詮は、正二位大納言、義満は、贈従二位太政大臣にして、官位、俱に貴し、若し、言議すべきものあらば、言路洞開の今日、宜しく、朝廷に、獻言すべきに、事、此に出でずして、不法の舉動を行ひ、亡狀の惡言を列ねて、當世を誹謗し、諸人を誑惑せること、誠に、天朝を蔑し、幕府を侮るものにして、其罪、恕すべきにあらず、因りて、斷然、逮捕に及び候』

と言ふに在り、尙、町奉行に命じて、

『當月二十二日の夜、尊王攘夷の名義を冒して、足利三將軍の木首を、梟せるものあり、天朝を輕んじ、幕府を蔑するの所爲、恕すべからず、應に、其罪狀を糺して、典刑を正うする所あるべし、但し、眞に、尊攘を志さずものは、朝廷、之れを嘉稱し、幕府、亦、之れを採用せらるべし、聊か疑心なく、忠義を勵みて、心得違ひの事あるべからず』

との旨を、洛中洛外に、觸れ示す、市民の、浪士包容の政略を見て、危惧の念を懷けるもの、初めて、信頼の念を起

すに至る。

激派の公卿、及び諸藩の志士は、此疑獄の起るに及んで、憂慮、措かず、如何にもして、之れを救解せんと欲す、機を見るに敏なる長州人は、奇貨、居くべしとし、三月朔日、世子長門守定廣の名を以て、

『足利氏の木像を、梟首せるもの、此頃、逮捕入牢せられ候段、承はり及び候、畢竟、勇憤の餘り、足利氏の大逆を憎み、天下の名分を、明かにせんと欲して、此に至り候へるもの、聊かも私心を懷き候儀にては、之れなくと愚察仕り候、何卒、大赦、仰出され候様、願ひ奉つり候』

との書を、朝廷に奉つりて、其罪を赦されんことを請ひ、且、

『若し、官位あるものを、斬首せること、朝廷を輕蔑せるものとして、大赦を行はれず候はば、井伊掃部頭を討取るものも、朝廷を輕蔑するものと申すべきか、然るに、彼等は、皆、精忠にして、聊かも、朝廷を輕蔑するの心なく、朝廷、亦、其心術を諒として、大赦を行はせられ

候儀と存じ奉つり候、此度の浪士も、亦、之れと同様と存じ候』

と述べて、掃部頭の頭を斬れるもの、大赦せられし上は、足利氏の木首を梟せるもの、亦、大赦せらるべしとの旨を辯ず、諸藩の志士、聞いて、皆、長州を德とせざるはなし。中山侍從忠光、四條少將隆調、豊岡大藏卿隨資、姉小路少將公知等の激派、亦、密に謀議する所あり、廷議、是が爲めに動かされ、四日、傳奏坊城大納言俊克、野宮宰相中將定功の二人を以て、

去月、召捕り候浪士の輩、正義の聞え之あり候處、其儘に相成り候ては、人心騷擾致候今日、早々、出牢致させ候様、仰出され候事。

との朝命を、政事職總裁松平前中將春嶽に傳ふ、春嶽、未だ命を奉ぜず、會津の志士、猛然として、蹶起する者、四十餘人、皆、死を決して、争はんとす。

二二二 木像梟首事件(六)

島津三郎久光は、伏見寺田屋事件に死せるものを、廟祀せ

らるゝを憚らず、終に、勅書改削の事あり、殺さるゝもの、精忠ならば、殺すもの、不忠に當ればなり。

前に島津に擬せらるゝの事、今は、乃ち會津に擬せられんとす、會津藩士たるもの、争でか、黙して、止むべき。

『若し、足利三將軍の木首を梟せるもの、正義ならんか、之れを捕へしものは、自から、不正たらん、名分の繋かるところ、死を以て、争はざるべからず、言路洞開の今日、何の躊躇する所かある、來れや、同志の人々』

三本木の藩邸に在りし柴太一郎、河原善左衛門、廣澤富次郎、秋月悌次郎、沖津庄之助等四十餘人、何れも、麻上下を、著用して、傳奏野宮宰相中將定功の邸に到り、

『我等、親しく、卑見を開陳せんと存じて、推參仕つる、幸ひに、面謁を許し給へ』

と述ぶ、色、溫にして、禮、恭し、敢て、激越の體なし。定功、時に、病牀に臥して、久しく、參朝せず、雜掌木下右衛門尉、出で、對面す、太一郎等、具さに、木像梟首者を、赦免せらるべき謂はれなき旨を、陳辯して、定功の意見を叩けば、定功、乃ち右衛門尉を以て、